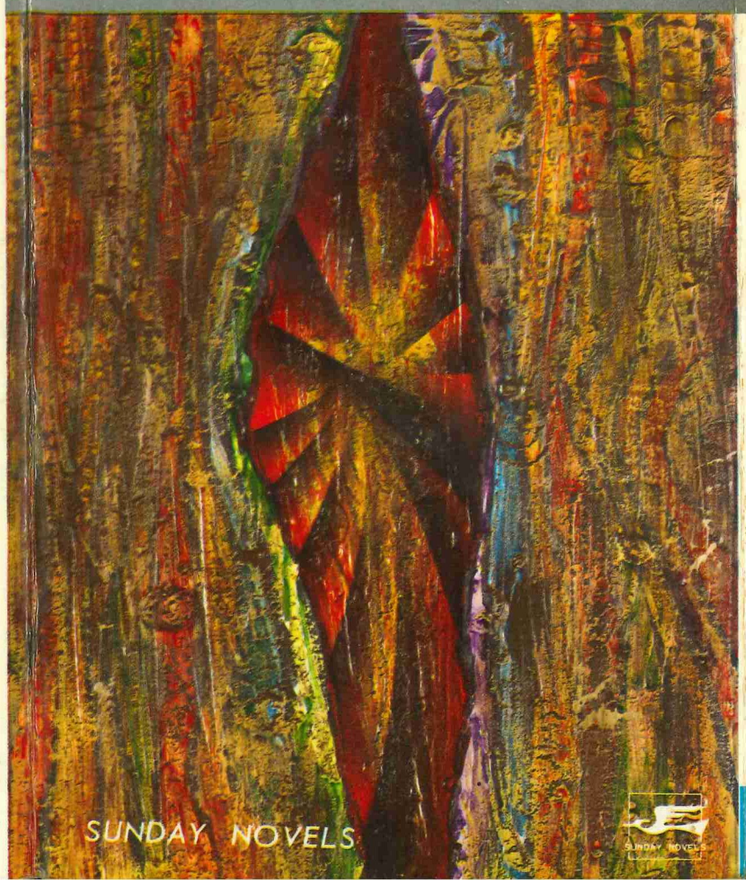
# 乱世武者列伝

八切止夫

# 乱世武者列伝

八切止夫




八切止夫

乱世武者列伝

秋田書店

八切止夫

¥390

乱世武者列伝

(分)0293(製)102022(出)0028

著者近影

1916年（大正5年）、神奈川・横浜に生まれる。本名は耶止説夫。日大文科を卒業、終戦後は日大、明大の文科講師となる。
「寸法武者」によって小説現代新人賞を受けその後も数多くの武者物を発表。戦国時代を中心とした旺盛な創作活動に専念する。代表作として「信長殺し、光秀ではない」「戦国意外史」「切腹論考」「八切日本史」等があり、幅広い年令層の愛読者をかち得ている。

既刊絶賛発売中

八切止夫

## 戦国武者列伝

サンデー・ノベルス
¥390 〒60

**戦国武者を描いた八切止夫武者シリーズ第一弾！**

武者物にかけては定評のある著者が、独自の史眼を駆使して描いた武者群像！ 勇ましくも哀れな戦国武者傑作小説集！

## 切腹の美学

四六判
¥480 〒80

**美化された怪異な世界、切腹の美学、血の美学！**

最近の三島由紀夫をはじめ、千利休、乃木希典など、歴史に名をとどめる切腹事件を通して、切腹の世界の虚妄をつく！

**乱世を逞しく生き抜いた武者たちの栄光と悲哀！**

好評に応えて放つ八切止夫武者シリーズの第二弾

カサカサと草がなっていると思ったら、それが不意に、その音がガバガバときこえてきた。だから、はっとして顔をあげると、半蔵が近よったのか、向うが押しかけてきたのか互いに目鼻が見えるくらい、もう敵が迫っていた。
だから恰好よく死に花を咲かせようと、
「われこそは、徳川家にて、その人ありと云われたる渡辺の半蔵なり」てなことを大口あけ、できるだけ声が轟くよう、青空の鰯雲に向って叫んだ。真似して背中の赤児も「アキャアキャ」と名のりをあげた。
ぐっと、しごいて槍を構えた。
どうせ殺されるなら、二、三人は突き倒さにゃ損こくと、思ったからである。すると、「なにをッ」
とばかり、馬のりの武者が、大身の槍を両手で握って突きこんできた。

——「子守唄武者」より——

八切止夫武者シリーズ

# 乱世武者列伝

八切止夫

SUNDAY NOVELS

SUNDAY NOVELS

八切止夫

# 乱世武者列伝

八切止夫武者シリーズ

SUNDAY NOVELS

秋田書店

秋 田 書 店 (分)0293(製)102022(出)0028

# 乱世武者列伝

八切止夫

秋田書店版

## ■■■乱世武者列伝・目次■■■


寸法武者……5
子守唄武者……43
だるま武者……65
びとう武者……87
続・びとう武者……111
生肌武者……131
猫飼武者……151
続・猫飼武者……173
さいころ武者……195
戦国女武者……217
流れ流れて女武者……239



カバーデザイン　安彦　勝博

# 寸法武者

〈鳥居強右衛門〉

# 1

「わしゃ死んだがええ。早よう、そうせないかんわ」

いつ頃となく、ひとりごとの、口ぐせがついた。こっちがブツブツいっとるのに、それに追従するように虻までぶんぶん、うるさく、つきまとっている。手で追ったくらいでは逃げもしない。

藪へ行って、篠でも切ってくればよいが、脚が不自由なので、それも億却である。

三河市田村市場の在に、僅かだが田畑の二三枚と、ばばと幼ない伜がいた。だが、戦さにつかれたように、あちこちの合戦について行ったり、砦に入って侍ぼけしてる間に、だんだん市田へは足が遠いので、ここ何年も帰っていない。うっかり、在所へ戻っていて、その間に、大事な戦さでもおっ始まったら、間に合わぬ。

それで、おりゃ精だして陣屋勤めしとるうちに災難におうた。暴れ馬に蹴とばされ、びっこ曳きになった。ひとの噎いもんになるのは厭じゃから陣場を抜けた。といって在所へ、ぶざまな恰好で戻るのも辛いから、あっちこっち、ほうつき廻っとるうちに、この丸淵在で厄に傭われた。

朝は、稗と黒米のかゆ。夕方は粟がゆに生味噌。飢えはしのげるが、一年もたつと、うとましうなって、すべて厭になってしまう。

毎月、五の日は、近くの本源寺で、お集りがある。他にどこへ行く所もないし、この日は半分休みじゃから、近在の、美濃や飛騨からの流れこんできた衆たちと一緒に、お寺の山門へ集ってしまう。

前の月にお陀仏になった者がありゃ、その回向からはじまって、いつも二人ずつのお坊さまが、奇麗な法衣をきて講座につく。

だが話は、いつも決ってる。

よく働き精だして主人に仕えれば、あの世へ召されてから、み仏の加護によって極楽浄土。ねはんへゆけて楽ができる。もし怠けたり悪い事をすすれば、地獄へおちて苦しみ続ける。この世で、いま毎日、苦労して働き通すことは、死んでから成仏するための貢みたいなものゆえ、あの世へ行ってからは、楽したいと思うなら、いま精根つめて死ぬまで働けという。





三月ほど前。なみと呼ぶ十五六の小女が、盗み喰いの疑をうけ、丸裸にされて吊された。

手足がきかぬをいい事にして、男どもがみんなで、悪さをした。あんまり泣き喚めくので、見かねて繩といてやると、裸のまま川へはまって死んだ。それを坊さまはえろう憤られて説教された。

「馬や牛でせえ、働くために生れてきとるこの世の中で、どこの馬が、恥しい思いしたから、働くのはいやだと川へ飛びこんだ。そんな畜生でもしねえような、あさはかな真似を、おまえらの仲間がするとは、わしは、どういって、仏さまにお詫びしてええか判らねえ。働ける身体を持っとる者は、どんな辛い目苦しい事にあっても、忍んで、骨惜しまず精出せば、なんでも忘れてしまう。それが、そちたちを使って下さる主人殿への恩返し、み仏の御心にも叶うというものじゃ。勝手に自分で死ぬという事は、仏さまは絶対にお許しにならん。そやつは殺生戒を自ら犯すことになるゆえ、血の池と針の地獄につながれて、未来永劫くるしみ、のたうつのじゃ」

たとえ粟や稗でも喰わせれば、もとがかってる。勝手気儘に死なれては、働き人の数が減って主人が迷惑すると、長ったらしくつけ加えて、いつ迄もその日は説教が続いた。法話のすんだあと、近在の者同士で、茶のみ噺をするのが、月一っぺんの愉しみである。それなのに、せっかくの時間が長説法のためになくなってしまったのでは、死んだ娘のためゆえみんな、口々に罵りながら引揚げて行った。

合戦場では死んだ人間を、おりゃあ今まで何百とみしっている。死ぬとは、ただ動かなくなることだ。冬なら五六日。夏だと一日で蛆が湧く。虫に喰われて一月もすると骨だけになる。

蛆がわいたり、半分、骨になってるのは、薄気味わるくていやなもんだ。死ぬと、ああなると思うと、誰だって死にたくない。もし坊さんのいうみたいに、死ぬのが、天国の音曲がきこえて、きれいな恰好なものなら、つまり死んだほうが身ぎれいになるなら、みんな誰がなんと云おうと、早く死んじゃうだろう。

だが、おりゃ脚がびっこだし、顔もむさい。どこにも取得なんか、もうありゃしない。今のままじゃ、生きた儘で蛆わかしてるようなもんで、死んで、みっと

もなくなったって、これ以上、たいして変りばえもしなかろう。血の池、針の山といったって、肉や骨があれば辛かろうし苦しかろうが、そんな物はすぐ、腐ってなくなってしまうから、あとは風みたいなもの。眼にもみえない物が痒ゆくも痛くもなかろう。

勝手に死ぬ事のお咎めが、そんなものなら早ようお死ぬべい。その方が徳じゃと、坊さんの訓しをきいて、あべこべに、おりゃ考えた。

だいいち死ぬてえのは、ありていに言いや、ただ居なくなる事。それだけじゃ。

本人の身になってみりゃ、まあ、ぐっすり眠りこけても、陽がさしてくりゃ眼がさめちまう、あの阿呆な習慣が横着できるというもんだ。うまくもねえ粟粥くうために起きて、したくもねえ働きに、精だすこともねえ。

こうやって息してりゃこそ、えれえ人はうめえ物喰らい、顔のめんこい女ごも抱けるが、地下のものは、あくせくしたって、牛や馬と同じだが、死んじまやぁひとつことだ。

去年の四月の事じゃった。美濃へうち入って明智城を攻め落した甲斐の軍勢が、帰り途へ三河へ入って、足助城をとり囲み、城主鈴木越後守さまが降人されると、浅賀井、阿須利、八桑、大沼、田代などのお城の衆は、とてもかなわぬと皆逃げられた。われがいた寒狭川蛇尾城道寿陣屋の者は、おん大将武田勝頼さま、じきじきのお声がかりで、野田攻めの先手。つまり、土地案内を仰せつかった。そこで、功名の正念場ぞ、とおだてられ、みな振舞の濁酒にすっかり喰べ酔って威勢をあげたものじゃ。

野田の根小屋の城は一昨年、信玄勢に攻められてこわされているので、いまは大野田の城跡。浄古斎屋敷が砦になっている。土地の者なのでよく攻め口もわかっている故、城主の菅沼新八郎さまの首はむりでも、ご一門のえらい人でも巧く突き殺して、知行とりの武者に取立てて貰おうと、小笠原掃部大夫さまの甲州方を先導した。熊笹の叢をこじあけて傷だらけになって、ようやく、夜あけに辿りついた。うまくいった。処がさて手柄をと、おっかなびっくりに飛込んだら、もう敵はひきあげていた。

運なしは仕様がないもので、誰もいない砦に残されて、かたづけや分捕物の甲州送りの荷作りをさせられた。玄米を釜一杯たいて腹がさけそうに、干魚やいて喰うただけが、せめてもの慰めじゃった。二十八日と思うが、二連木城で合戦になるから、と、呼戻しがきたので、それっと、砦の中で探しだした具足をつけ、長巻に砥石をかけて二連木へ出陣した。

だが、着到した時は合戦はもう終って、城には敵や味方の屍体だけで、勝頼さまの甲州勢は吉田城へ攻めかかり、おりゃ達は又、城のあとかたづけ。死人の葬いをさせられた。

すえたように大気が澱んで、むんむんする暑さに、兜首も、頬当の雑兵も、てんでに塩吹いたように蛆わかしとる。死んじまうと身分の距てもなにもない。

屍臭を嗅ぎつけて山犬でも群がってきてはこっちが物騒なので、屍体をみな集めて具足や布子をはいでから、穴掘りは厄介なのでできるだけ巧く積んで、上から土をかぶせることにする。

まっ裸に積み重ねてゆくと、えらい奴も雑兵も一緒くたである。いくら、えろう働いて出世しても、死んだら皆おんなじや。

古布買いの商買。武具買いの荷卓。ごたごた押し掛けてきて、勝手に銭つんで、どんどん、はがした物を運びだしてしまうと、あとは酒売りと団子売り、それに被衣をかむった辻姫までが、その銭目当てに群ってくる。

死人くさい手も洗わんで、餅かって喰い、壺から酒をのんでるところを、何処から、つ走ってきたか、矢傷をうけた暴れ馬がとび込んできた。蹴られたか、つき倒されたか、起き上ろうとしたら脚の筋がつれてしまって、おりゃ、それから右足がすこし、びっこになってしもうた。

酒くさい息していたので組頭にどやされ、面白くもないから、銭をひとつかみ摑んでそのまま陣屋をとびだし、蛇尾の砦へ戻らず流れ歩いて、この丸淵在まできて、他に働きもないので、奴みたいに厩番になってしもうたのだ。

## 2

「大変じゃ、とんでもない大ごとよ」

口々に騒ぎが弘まってきて仕事どころではなくなった。なんでも、ひとの噂話によると、武田勝頼さま

が、また甲州勢を沢山ひきつれて、高天神城を攻め落された帰り途。橋尾の用水堤を軍兵共に切らせてしまったというのである。

合戦ごとに青田を苅取ったり、稲束に火をつける話はきいたが、用水切りというのは、古今例のない話だと、村方の者は青ざめて語りあっていた。

「橋尾の用水を止められては三河一帯は、今年は田植はしても、取入れはできんだろ…」

「この分では、武田さまは、いつ何時こっちへ押しかけてきて、こっちの用水堤も切られるかしれん。そうなりゃ田作りなど仕様にも方法がないから、作男や作女は今のうちに追出さねば穀つぶしになる」

もし田畑がだめになれば、いまの手持ちで向う一年喰い延ばさねばならんから、余分な人間は口べらしを計らねばならんというのである。

そこで三十すぎの他所者は、男女を問わずみな村から欠落ときまった。厄介払いである。

お情けに塩ひと塊りと粟一升ずつ貰って、村を出されたのが男五人に女が三人。

美濃者が多かったが、岩村の城、明智の城みな武田方に落されているので、恐しがって戻りたがらない。といって、在方で、いま時、働かせて喰わしてくれる所もない。

「ひねもんさん」

わりゃ、ひねくれとるから、ひねえもんじゃと、本源寺の坊さんに名をつけられてから、みんなが、そう呼んどる。

「おまえさまは、武田方の武者だったおひとじゃ。すこし脚がお悪うても、戦さ場へ行きゃ、なんとか粥ぐれえ啜れるじゃろ。この粟のある裡に、わしらも連れてって下さらぬか。そうでねえと、生粟かじってしのいでも、三日もすりゃ野垂れ死じゃに」

蒼い薄の葉さきを、唇でひっぱりつつ茂平が思いつめたように言った。

「おらたちも女の役はもう年だで、しねえかもわからんが、やれってことは、なんでもする。戦さ場へゆきゃ、死びとの布子一枚はいでも十日はすごせるというじゃねえか。つれてって喰わしてくれねえか」

かねとかいう四十女が、黄色い歯なみを、皓っぽい陽ざしの中に覗かせた。





「ここに女が、これでも三人いる。みんな、おまえのええようにしてもええ。いま、したけりゃしてもええ。男はみんな、奴になって、喰わして貰うだけで、なんでも用はするから、なあ、さあ連れてけやぁ」

うつむいているせんは、まだ三十前だそうだが、働いてた農家のおやじの夜伽ぎを十年越し続けさせられ、お嬶がやきもちで、ええ機会とばかりつき出してよこしたとかで、まあ、陽やけはしてるが、ええ女ごで見てくれがええ。銭だして買ってもええような器量だ。だが、

「おりゃ、女ごとは縁がねえ」

むっつりした口ぶりで、おりゃ首をふった。

元亀元年姉川合戦の時、おりゃたちの山家衆も、江州の朝倉勢と戦った。そん時おりゃは、敵方に供奉してきた侍女をひとり助けてやった。まっ裸にされて、みんなに盥まわしにされ、鎧の金具に傷つけられ、乳房まで血だらけになってた女だ。男ものの布子をかぶせ、櫟林の中へ隠してやり、そっと連れだして、作手の在所へ背負っていった。京の生れだといったが、とても、そんな遠国まで伴ってゆけぬし、一人で旅立して戻してもやれぬので、おらのばばさまの許へ留めて置いた。

「こりゃ、おめえ、ええ嫁ごじゃ」

伜めが、戦さ場稼ぎの足を洗って、嫁とって田畑でも耕すのかと、ばばさまはすっかり喜んでしもうた。半病人みてえになってた女はすっかりひでえ目にあったあとなので、ろくに口もきけぬ。

「こんなむさい所じゃて、都の方には辛抱できんじゃろが、まあ伜はええ男だに」

訳を知らぬばばさまは、気落ちして腑抜けになってる娘を、吾が家の貧しさに驚いて、それで、ものもいわぬのかと、おろおろして、慰めようと機嫌ばかりとっていた。

それをみると、今さら、おりゃも本当のこともいえぬので、その儘、女を嫁にしてしもうて、親孝行のつもりで過した。すこし落ちついて、女が田へでも出て、ばばさまの手助けをしてくれたら、また直ぐ蛇尾の城へ戻るつもりでいたが、女は、とんと土いじりをする気はなかった。お城向うの鞍掛山や棚山が、白く雪化粧する頃には、腹のせりあがりが目立ってきた。

「おう大事な体じゃ。無理するでねえ」

ばばが、田畑仕事から飯たきまでして喰わせた。女は一日中、囲炉裏場に、しゃがみこんで、枯枝を燃しつづけてすごした。春になると、男の児をうんだ。だが乳房をふくませる時のほかは、ばばが背負って野良にでていた。

暮に武田勢と戦って敗れた山家衆は、武田信玄の命で秋山信友の輩下に編入され、四月の駿河攻めには、悉くかり出された。おりゃも呼びだされて、今度だけで身をひかして貰う約定で、陣屋の法螺貝にあつまった。

「こんな可愛い孫もできたし、嫁女もいる。三人じゃからな、もう、ばば淋しゅうないぞ。だから手柄なんかもうええから、早よう帰って来いよ」

白髪の多くなった、こめかみのあたりを震わして、ばばは送ってくれたが、子供を産んで、かえって色白に、垢ぬけしたような女は、門口の奥の方でじっと瞶めているだけだった。

ほんの一二カ月のつもりが、ようやく解きほぐしにあえて在所へ戻れたのは、暮の三方ヶ原合戦がすんでからだった。武田家大勝利で、褒美に玄米五升ずつ貰って帰ったら、ばばと子はいたが、女はもう半年も前から行方をくらましていた。おりゃも、恰好つかずで、その儘とびだして、それっきり在所へは帰らずじまいである。

子供は六つになる。姉川合戦が六月で産れたのが三月。ばばさまは孫だと思って、可愛がっているが、あの色の白い餓鬼をみると、むんむん草いきれのする叢の中で、他の男共に抱かれたり、ねじり廻されていた、女の皓い体が眩しい陽射しと共に、蘇ってくる。丁度、こんな暑い日照りで、草っ葉の色も光っていた。それを憶いだすと、うずうずしたものが、こみあげてきた。だから、女に縁がないとはいったものの、

「脱げ」

乾いた声で噛みつくように、女を抱えようとした。ぎらぎらする青草の中へ、裸の女を転がしたくなった。

「えっ」怖えたように、せんは後ずさりをした。

「なにも、おめえ、そんなに、あわてるこったあ、あんめえ」

土色の歯ぐきまで覗かせて、かねが、見かねたように中へ、わって入ろうとした。

「うるせえ」

四十女を左手で薙ぐように、はね返した。

「いやならいやでええ。おりゃ一人でゆく。おめえらは、この先の小川へでも行って、ゆっくり水を呑みながら、ぐずぐず粟でも噛むんだ。なくなったら、草でもしゃぶってろ」

「……待ってけれ」

権蔵がとびだしてきた。

いきなり、放心したように蹲ってるせんの横つらを、ひっぱたいた。女は仰向けにのけぞった。

いいなご、みてえに別の女が飛びかかった。そしてせんの腰から、紐がわりの藁縄をむしりとって、前をはだけさせ、追従するように、にやっと笑った。

おりゃ無言のまま、せんの髪毛の根もとをつかむと叢の中を羊歯の茂っている草蔭へ曳きずっていった。

死ぬ前に、こんな事が一っぺんしてみたかた。

眩しさの中で、てれくさくなるのを、ぐっと堪え、太陽を下から仰ぐように睨みつけた。

## 3

汗がぐっしょり背から、わきの下までたれてきた。裸になると、ごろりと草の茂みにひっくり返って、狗ころみたいに背中をこすりつけた。地虫に刺されたのが、心地よかった。

「このほうが気分がええ」

聞えよがしに、ほざいて振向くと、女は、まるで小娘みたいに両手で顔を掩ってる。

その肘についた青草の切れ端が動いてる。

「……おおげさな」

舌うちすると、裸の腹のところへ、いま脱いだ布子を投げてやった。汗でべたついた女の体が、なまぐさく、うっとうしかったからである。

下帯ひとつの裸で、ぼりぼり背を掻きながら、叢からはいだすと、女も、のろのろ起きだして、あとをついて来た。

うとましくなって駆けて逃げだしたいような、情けない想いだった。脚を曳きずりぎみに歩くので、わざ

と胸を張っていたが、つまらん事をしてしもうたと、後味の悪さでおくびがでた。

せんが、かしずくようにうしろについて来るのが、堪らなくなって、わざと、おおきな欠伸をして、

「二連木へでて勘考しょう」

いい放つと先に立った。うずくまっていた連中が、のろのろとついて来た。

むかし、馬に蹴とばされた陣屋である。あすこ迄ゆけば、布子や武具を安くわけてやった市人もいるから、この七人を頼めるかも知れんと、ようやく考えついた。山道を東へ向って歩くので、午下りからは凌ぎやすくなったが、羽虫がついて歩くように、頸すじやふくらはぎを刺しつづけた。

黄昏近くなって、本宮山のなつかしい山頂が、山峡から覗けてきた。いつの間にか、せんが側によりそって歩いていた。まるで脚の不自由なのを補うように、くっついて居られるのが、耐らなくいやな気がした。

「ぬしゃ、かかきどりか」

喰らいつくように怒鳴りつけるのに、女は、にこりと歯をみせる。

二人の仲は、みんなが見知ってる。そんな心やすさで、岩角へさしかかると、甘えるようにぶら下がる。

叢を、裸にして曳ずって行ったまでは、好え気持で、こんな好か事は、又とあろうかと思ったが、あとがいけない。こんな筈じゃなかったがと、今になって臍を噛んでも始まらんが、こんな女のために、飯乞いみたいなのを、ぞろぞろ連れて陣屋のある所へ行く。もし訝った頭や、昔の同輩に見つかったら、どうしょうと、冷や汗がだらだら流れてくる。なるべく人眼につかぬよう、夜のあけぬ裡についてしまおうと、途中休ませずに、足早やにあるいてゆく。平な途なら、脚の悪さもひびくが、こうした山道では苦にならないもので、もう一息で豊川の河原まで出られる所まできて、なんということもなしに、てまえの牛久保へ曲る気になった。

運というものは、たまには、巡りあう事もある。

矢叫びや、鉄砲玉の音がきこえるのは空耳かと考えながら近づくと、砦は、たった今しがた小ぜり合いをしたばかりらしく、硝煙がぶんときな臭く漂って、切り死したり、玉で撃ち殺された屍骸がいくつも転って





いた。

しめた、と有頂天になった。

早よう自分でおっ死んで居れば、こんな、いまいましい目に逢わんでも済んだ。山の中を、ぶつぶつ、ひとりごとしながら歩いてきた疲れも、いまいましさも吹っとんだ。戦といっても、矢合せぐらいでの引揚げが多い。

斬り合いまでゆくのは、よくよくの事で、そんな時は、すぐ勝敗がついてしまうので、野伏せりや土地の者が、身体を隠して待ちかまえている。そして一方が退くと、わっと躍りだして、まだ息のある身体から身ぐるみはがしてゆく。よほどの不意討ちでない限り、こんなに物具つけた儘の屍体が転ってる事は、滅多にない。

おりゃ屍体なれしとるから、鎧装束の好さそうな奴の内懐へ、片っ端から手を入れて探しまわった。話にきいた砂金袋は見つからなんだが、銀粒三袋と、銭は片手で重いくらい集められた。

砦の者は、生残りは逃散とみえて誰れも出て来ぬし、寄手は吉田城（豊橋）へでも駆引いているか、人っ子一人現れぬ。欲がでてきて、黒革威しの腹巻をはずした。どうせ取換えるなら、ついでだから結紐も、みなといて、まっ白い下帯をも解きにかかったが、せつな糞をたれているので、これはやめたが、茂平や権蔵たちにも見計って着換えさせた。

女共は、初めは屍体を無気味がって尻ごみしていたが、さわっても怖くないと判ると、片っ端からむきに掛った。

頭の鉢にあう南蛮鉄の兜をみつけて、冠った時、おりゃ、思わず武者ぶるいした。

「よう調べて、刃こぼれしとらん獲物を選べ。指で撫ぜて怪我するな。月にかざして、よくく見ろ」

雑兵姿の茂平たちに、念いりに指図した。

兜をつけ、上から下まで身なりの寸法（恰好）のとれたのを、寸法武者という。この上は、旗指物を許されて背につける指物武者があるが、ひとかどの者といえば、寸法武者である。

「いま戦は始まったばっかしじゃ。これからうぬら連れて、戦稼ぎにゆく。いやなら、女共と何処ぞへゆけ」

武者姿になると、言う事もりりしくなる。
「お約束でやす。飯さえ貰えば、ついてめえりやす」
権蔵の声に、五人とも膝をついた。
「じゃ女共。うぬら集めた布子や刀はみな呉れてやる。川へもってって、血を洗って売れ。かまえて湯につけるな。いそいで洗おうと湯づけすると、血はとれぬぞ。ええか、わかったら、いね」
背負いきれぬくらい持って、すまとかねは、嬉しそうに二人で肩をならべて暗闇に消えてしまったが、せんだけは、もそもそと、まだ残っていた。
「なにを持ってゆく。そりゃ、なんじゃ」
声をかけると、女はうれしそうに近よってきて鍋の蓋をとった。
ぷーんとうまそうな汁の匂いがした。
いつの間に砦の糒庫から持出して炊いたか、めずらしい固い握飯に、塩づけ大根の切干しまであった。
「うめえ。おらあ、こんな馳走は初めてじゃ」
のっぽがうめくと、ちびの次介が、
「おらあも、生きとる裡に一っぺん、くらいたいと思うとった固飯じゃ」
有難そうに拝んだ。
おりゃも、つるつる咽喉へ通り、口の果報は、やっとかめだで、なんだか、えれえさまになったみたいで、鍋の汁を、まわし呑みしながら、息もつかぬげに、握飯をほおばった。
疲れと、けだるさが、腹がくちくなると、いっぺんに襲ってきた。睡うなった。亀が甲羅にもぐるように、鎧の中へ身体を落して、そのまま、曳きずりこまれるよう寝てしもうた。
幕でもはらったみたいに、陽が昇って、明るうなって眼をさますと、女はまだ飯炊きをしていた。
「いり米は、もうこさえたるで、わけてちょう」
年かさの茂平が、もう起きていて、次介たちに手伝わせて、布に包ませていた。
朝飯をまた、たらふく堪能すると、おりゃ、せんを呼んで、
「えろう厄介になった。米はもてるだけ持ってゆけ。布子はかさばるで着られるだけ掛けてゆけ。銭も礼にやる。いいだけ、つかんでゆけ」
女は首をふった。



「おりゃついてく。おめえの嬶さになった。どこ迄も一緒だに」にやっと笑った。

## 4

「こんな、巧え目にあえるは、まあ一生にないことだべ……」
「うんだ、もってけるだけ運ぶが、ええ」
米俵ひとつずつ担ぎだした他に、干魚の束を腰にぶら提げた。
「これじゃ戦さにゃ行けねえ」
せっかくの武者姿が、まるで恰好つかなくなってしまった。
「この儘で歩いてるとを、お巡りの侍衆にでも捉って、首うちもんじゃろ」
「何処ぞに孔ほって埋めて、匿すわけにはゆかんじゃろか」
茂平が当惑したように、相談をぶちにきた。
「穴ほりするの訳けねえが、うめたらみんな、腐ってしまうでねえか。勿体ねえぞ、そんな話」
せんが、かついだ米俵の横から首をだして、狗みてえに赤いべろを出した。
「せっかく重いもん持出して、放ってゆくてはねえ」
肩の米俵に齧りつくように、ちびの次介が唸った。
「……山こえるべえ」
おりゃ仕方がねえから、皆を振返って、本宮山の頂きを指さした。
お山は、三河一ノ宮砥鹿神社の奥宮で、山越しは険しいが、頂上から作手までは道がある。南の市場へ出るには抜け道もある。善福寺の裏山のばばの家までは、誰にも見つからんで行きつける。
「おらがばばさまのところへ米かついでゆけ。預ってやるが、半分は出せ。それがいやなら、勝手にどこえでも行きさらせ」
「行く。どこへでも行く。明日からも喰わせてくれりゃ。半分どころか、みんな、そのばばさまに進ぜる」
権蔵が、みんなの代りに神妙に答えた。
なにしろ土地不案内。初めて連れて来られた所である。俵を背負って、どこへ逃げてよいか。隠れ場所も判らない。捕まって殴られ蹴られ、打首になるよりは、おとなしく言いなりに、ついてゆくのが勘考とい

うものだ。
「済まねえでやすな」
汗を逆に拭いあげながら、茂平が、おそるおそる、おりゃの顔を覗きこみに来た。
「気をつけるべえ。ここの山家衆は気が荒れえ。おりゃ此処の土地者だが、おめえらは他所もの。変に勘ぐられると、杉の木立に、首ぶら下げられるぞ」
山の落枝や枯木は、雪ぶかい山底の部落には、冬を越す大切な命だね。他所土地の者が拾いにきたら、見せしめに捉えて縄で首くくり樹に吊して、鳥につつかせるのが慣しである。奥宮院の裏山になってるこの辺りは、社務所の気の荒い番衆が二三人くんで、いつも見廻りしているところなのだ。
「静かに、早く歩るくべ。音たてるでねえ」
いうその場から、
「ひえーっ」と、のっぽが甲高いわめきをあげた。
折れた小技に、肩の米俵をつき刺してしまったのである。
細い滝水みたいに、米がこぼれて流れだした。
仁蔵とよぶ無口な男が腹ばいになって、権蔵がそれを足場に、俵をようやく抱え降した。せんは、かがみこんで落ちた米粒を掬っていた。
「孔ほって埋めるか。上に落葉かけろ」
落米を見つかっては、あとがまずかろうと、おりゃ周章て指図した。
なにしろ、喰うことしか、才覚とてない連中である。世話をやくのに大ごとである。
早よう死んどりゃ、こんな難儀はせなんだと、しゃくにさわるが、この寸法武者のええ恰好を、ばばさに見せてやろうと思うと、足が速よなるような気がする。
つたや蔓草が、はびこるだけ延びきって、足許を掬いそうに、おい茂っている。黙々と下を見ながら登ってゆかねば、爪さきが危ない難儀な山峡である。
また誰かが古株に蹴つまずいて俵を破ったか、時雨みたいに米粒の流れる音がした。
みな足をとめて、始末に手をかしている。
先にどんどん進むわけにもゆかないから、肩の俵を下して、ひと息いれる。
檜林は、葉の茂みで薄暗いが、仰ぎあげると、ちか



ちか針で刺すみたい、眩ゆい陽ざしが拝める。狸がよく出る所だが、まだ明るいので、地虫が、樹皮を這いまわってるだけで、しーんと静まりかえっている。
「おめえさまの家な」
側へ女が近よってきて声をかけた。
「おばばの他に、誰がいやあす」
気になるとみえて、心配そうに尋ねる。
「六つになる、男のわらしが一人いるぞ」
「その児のおふくろは」おりゃ、うるさいから、また俵を担ぎあげ歩きだした。

この女の頬げたを思いきり、ぶん殴った権蔵も、他の茂平たちも、生臭い草いきれがむんむんする叢で、喘ぐように異様な目を、あの時ぎらつかせていた。おりゃの次に、わーっと男共が、とび掛ってきて、みんなで手ごめにするかと思ったのに、誰も側へも来なかった。
あの時のことを憶いだすと、いまいましさで胸がむかついてくる。
他の男どもが見向きもしねえような女を、好い気になって、まっ先に抱いたとは情けない。
ひとりで、ぶつぶつ憤りながら、脚を曳きずって登ってゆく。山頂の奥宮さまの鳥居まで出ては、人目につくから、二の沢の柊林の中をぬけて廻って出る。
おばばの、かや葺の屋根をみつけると、ひとりで先に駆けおりてゆく。
「誰だべ」
目ざとく子供がみつけて飛んでくる。
陽やけしてるが、頸のくくれなんか真っ白で、俺に似たところのない小伜だ。
「おう、どうした。生きとったかや」
水気が乾あがって、ひとまわり縮んだような、おばばの姿が野良から手をふって戻ってくる。
「何年ぶりだべ。まだ、このわらしが、嬰児だったぞ」
「うんだ」
えろうばばが、めっきり老いこんでるんで口もきけん。
「ええ鎧きて、出世したか」
恨めしそうな老母の目に、周章て、銭の袋をつきだ

すと、
「穴ほって埋めろ。すこしずつ使って、楽するんじゃ」
ひとつかみ、中から出してみせた。
「へえっ、こりゃ、どうした。この穴あき一枚で、粟が五升も購えるぞ」
はじかれたように、おばばが呻いた。
木鋤をとって、手早く縁板の下を、掬いあげるように掘起すと、銭袋をひとに盗られぬ用心にしまいこんだ。
「おばば、米俵も持ってきた」
「えっ、こりゃ、どうしたちゅうことだ。どこに隠すべ」
「うん、七俵あるで、つむときめろ」
いい残して、待たせてある連中を呼びに戻った。
「大丈夫か。大事ないか」
せんが、曲り角の岩尾根まで先に出ばっていた。
「おばばも元気で、変りはなかった。さあ早よう俵をしまいこませろ」
また前のところまで戻るのが大儀なので、顎をしゃくって、眼下にみえる屋根を教えるとひき返した。
「連れがある。男五人と女じゃ。疲れとるから休ませてやってけれ」
納屋の片づけをしてきたばばは、うなずきながら、
「女ちゅうと……」
気ぜわしげに側へよって来た時、どたどたと、俵を背負った連中が入ってきた。おばばが納屋へ案内して、ひと目につかぬよう隅の方へ積んで、米俵は乾藁ですっかり掩った。
「ご厄介になりやすで、よろしゅう」
戻ってきた男たちが、膝をついて挨拶すると、
「こりゃ、みんな、われのご家来衆かい」
銭や米よりも、もっとびっくらした顔で、歯のへった口許をもごもごさせた。
「こちら……せん、ちゅう女ごで、百姓仕事には、よう馴れとりんさる」
途中で頼まれてきたのか、茂平が女をひきあわせた。
「……ほう」
ばばが妙な顔して覗きこむと、ぴょこんと、せんは





頭をさげてから、子供を手まねきして、いり米の残りを手渡して、抱きかかえた。
「われが嫁か。よしよし」
子をあやしてる女を、へっついのところへ呼ぶと、ばばは、にこにこしながら飯ごしらえを手伝わせた。
また、嫁に逃げだされたらと、心配して気をつかってるのが、ありあり見える。
うちへ、連れこんできたのは、間違いだったと、顔色をしぶくしたが、母親は、だしぬけに女を連れてきた伜のてれかくしと想って、にやにやしている。
戦さ場へ連れていっても、どうせ役立ちそうもない連中。米があるんだから当座は喰えるから、ばばの田畑を手伝わせたり、この辺りの荒地でも耕させて、それで凌がせようとも思ってはいたが、女が嫁になる気でいるんじゃ、とても、此処にはいられない。ばばさは嫁のつもりで女を労り、女は、己れが子のつもりで、これ見よがしに可愛がる。そんな嘘っぱちな暮しなんか耐ったもんじゃねえ。
生きてると、とんでもねえ阿呆な事になる。

## 5

小笠原掃部大夫さまは、昔、野田攻めの時に、道案内して、お顔を見知っている間柄である。
いまさら山家衆の陣屋へ行って、昔みたいに雑兵扱いされては、せっかく寸法武者の恰好が泣く。
それに、自分だけが抜けてくる気でいたのに、ぞろぞろ皆がついて来たので、昔馴染のところへ気易うはゆけんので、ひと想いに、じかに武田さまのご軍勢へと駆けこんだ。
合戦の最中なので、明るい裡はさけて、陽がくれてから、大通寺の畑を山へ登って、搦手門へ入らず、瓢丸をくぐりぬけて、三の丸の巴曲輪へ入った。
ここから、本丸へゆくか、野手曲輪へ入れて貰うか、二の丸の帯曲輪のところで迷ってる所を、見咎めをうけ、初めて声をかけられた。
それまでは、勝手知った城内なので、ぞろぞろ連中をつれて歩いて居ても怪しまれなかったが、本丸へ近づくにつれて見張りもきびしくなった。
「どこの衆じゃ」

うろん臭さそうに、長巻きを抱えこんだ髭武者が近よってきた。

「お味方に、はせ参じやした」

「なに、どこから来たと」

「へえ、作手の在家から、めえりやした」

「在家の衆か」

言葉のなまりを気にして、聞いていたらしく、作手ときくと、納得したように、立ち去りかけた。丁度、行先を迷っていたところなので、

「小笠原さまの衆は、何処詰めでおじゃる」

事のついでに、後から追いすがるように、声かけて尋ねてみた。

「小笠原ちゅうと」

怪訝そうに髭武者は足をとめて聞き返した。おりゃ、どきっとした。なんぼなんでも、ご城主さまの名を知らんことはない。前は間違いなく、小笠原掃部大夫さまがお城を治めていられたが、あれから月日がたった間に、誰かに換ったとしか考えられん。それもだ。小笠原ちゅう名を知らんとなると、こりゃ武田方ではない。同じ甲斐衆なら城の主は換っても、前のお方さまの名ぐれえは覚えとる筈だ。

どこの誰さまが城守りしてるか知らんが、おりゃ、とんでもねえ事をした。

小笠原さまの城のつもりで、もう敵に乗取られた処へ、のこのこと入って来てしもうた。本当のこと喋舌ったら、どえらい事になる。どんな目に逢わされるか判らん。おれ身ひとつなら、ぶち殺されても構わんし、それもええと思うが、つれてきた連中の、おろおろするのは見て居れん。

作手といった時、ぜんぜん相手が気をゆるしていたのを憶いだして、作手本城か、亀山城の衆が、ここに詰めているのだと思った。

「亀山の清岳陣屋の、物頭衆でおじゃりまするが」

小腰をかがめて、とっさに思いつきの会釈すると、

「石筒金坂坂あたりの衆は、あべこべじゃ。寒狭川ぞいの弾正曲輪につめて居られるわ。俺は服部曲輪へゆく用がある。つれてってやろうかい」

髭武者は、虫に刺された襟首をぽりぽりかきながら先に立った。

ここを抜け出せても、何処へ行く当てねえんだから、ままよとそのあとについていった。

「わしゃ佐右衛門ちゅうが、うぬはなんて名じゃ」

「ひねくれもんと呼ばれて居ります」

まさかと思ったが、事によったら、いまいましい喧嘩相手の組頭がいるかも知れん。銭をくすねて黒酒呑んで、馬に蹴られた話なんか、あんまり他人に知られとうない。だから、わざと名前は隠して、丸淵在で呼ばれていた渾名をなのった。

「ひね呉右衛門か。変った名じゃが、五六人も連れところをみると、ひとかどの衆らしいのう」

ひとのよい大男に気をもたせてはいかんと、あわてて、

「なに、こうついて来とりますが、みんな在の百姓共で、戦さ場で打物とって働いた事なんかねえ輩ばかりでやして」

「いやいや、たとえなんであれ、才覚して人数つれて来ると、上のほうの思召も違うし、合戦の時でも、ひとに功名とられんで済む。時によっては、うまく他人の手柄の横取りもできる」

せっかく名ある侍を打ちとったが、郎党つれた味方の者に、盗首されたことがある。とでも言いたいような口ぶりである。

うかつな事はしゃべれないので、おりゃ、もっぱら聞き役にまわって、あとを、てくてくついて行く。

小笠原掃部大夫、室賀信敏、菅沼正貞、ら武田方の守将は、信玄さまが歿ったときいて、この城を出られて甲斐へ戻られた。徳川家康さまは、御油領主の松平景忠、松平伊忠を、この城へ入れ占領させ、自分は浜松へ引揚げられた。

その後は城番で治めていたが、この天正三年の二月の末に、奥平貞能さまのお子、九八郎貞昌君を城主として本丸へいれ、二の丸には見張りと加勢に、景忠、伊忠の手の者を詰めさせているという。

小笠原ちゅう名でまごついたのは、この先の高天神城の城主が小笠原与八郎長忠という名前。そこには、林平吉、伊達与兵衛、吉原又兵衛、小池左近、渡辺金太夫といった世にも名の高い旗本衆の、指物武者がそろっていから、そちらと間違えたという話もした。

この城も六月十九日にお味方のものになったが、小笠原というと、掃部大夫さまなんかより、与八郎の方

が、同じ敵の武田方でも、ぐんと聞えが違う。えらいというのじゃ。どっちにしろ、小笠原という名乗りは敵方のものゆえ、まぎれこんできた怪しい者と、誰何したついでに、ひっ捉えようとしたが、作手衆とわかって、手柄にならず、がっかり胆をなくしたようじゃ……

などと、話しながら、弾正門までくると、顔見知りらしい門番に声をかけて、

「石筒からきた作手衆じゃ。通してやれ」

手をあげて合図してくれた。

「こりゃ、えろう難渋するところを助けて貰うて、済まんことで」

佐右衛門の髭だらけのあばた面に、よう礼をゆうて門の中へ入れて貰うた。

奥平さまといえば、昔は、高里の城山から清岳市場の亀山城のご領主さま。今はここの城主さまだときく、徳川家でも、満更、縁のねえ事もねえと、おりゃ安心した。

前に奉公していた山家衆の菅沼さまとは、たえず堺争いしていた敵味方の仲じゃが、おりゃの生れは作手ゆえ、いわば、ところの屋形さま。同じ土地者ゆえ、そう滅多な沙汰もなかろうと、たかをくくったような気やすさで、曲輪の侍よせ場の方へ、のこのこと入っていった。

## 6

五月十一日。三州吉田攻めをやめて、引揚げてきた勝頼さまの大軍が、いきなり城の正面に現れ、息もつかずに攻め掛ってきた。

なにしろ、川股の渡合門は、川幅が三十間ずつもある寒狭川と三輪川が、東西からぶっつかって、凄じい飛沫をあげ、噛みつきあって渦を噴きあげ、奔流する難所。そこへ対岸から、太い竹束を集めて、筏代りにして攻めこんでくるんだから、ご門口へとっつく前に、半分は急流に押し捲られて流されてゆく。

鎧武者は、水にはまったら、重味が掛るので、浮かんでもこない。それを見ると、溺れた時に泳ぎよいよう、楯をならべて、武田方はしまいには裸で押しよせてくる。

「ありゃ誘いじゃ、本気で攻め込んで来られる切所じゃねえ。そのうちに敗けたふりして引揚げるが、追うじゃねえ。船だして後追いして生捕られるな」

ご本丸から、お使番の衆がきて、声をからして怒鳴ってゆく。

攻め込んでくるのは、本気でないという御指図だが、城壁から見下す限りでは、竹筏に乗ってる者も、泳いで渡ってくる衆も、みんな決死の面だましい。顔や肩に箭じりを喰いこませ、血だらけになって向ってくる。

門下の河原まで迫りついた連中は、筏を立たして、竹の節のところに通した横木を梯子代りにして、城壁へ迫りつこうと、鹿の爪に繩をかけたのや、鉄の熊手をふるって登ってくる。濡れ鼠の背が光るので、昆虫が這ってくるみたいだが。うかうかして居ると、よじ登ってくるから、城兵たちも、拳下がりに狙い射ちしたり、石ころを転して防ぐ。

二た刻近く、せりあったが、陽が沈みだすと、寄手は、這い登るのを諦め、門板に火が移るよう攻め道具を重ねて点火。その黒煙に隠れ竹筏で引返しだした。

「やーおー。やーおー」

城兵たちは煙にむせながら勝名乗りをあげ、防ぎ止め、敵を追払った昂奮に、われ先に河原へ駆け降りた。矢合せばかりでは手柄にならぬ。目ぼしい敵の首を、後追いかけて、一つでも獲ろうと、城壁の中に隠しておいた小舟を、かつぎだしたり、繩でおろしかけた。

「待て、待て、追ってはいかん。矢留じゃ。矢留じゃ」

はやる兵たちを押しとどめようと布令が、茜色の夕空を、烈しく切りまくって響いていった。

「矢留か」

兵たちは、がっかりしたように、くすぶった敵の燃さしの筏や梯子に川水をかけ、屍骸を曳ずって重ねながら、兜や物具を脱がせていた。

矢留とは休戦。つまり矢をとめ、戦をしかけぬことである。

武田方も攻め手の評定を続けているのか。次の日も、その次の十三日も矢留。

烈しく白い飛沫を奔流させる川をはさんで、睨みあいのまま、息づまりそうな時がすぎていった。

だが夜半、ま夜中の子の刻すぎ。

「瓢丸に来襲、瓢丸に来襲」

けたたましい伝騎が、曲輪の中を喚めき駛った。火薬にはねられたように、みな飛び起きた。

三輪川岸の三の丸よりは土居が築きあげられていたが、肝腎な外側は、まだ俄か作りの塀囲み。

曇りがちで月も見えない暗夜を利用し、塀際まで忍びよっていた武田勢が、わーっと不意に取り掛って来た。だが塀の陰には一跨ぎ置きに柱があって、幾重にも縄掛けしてあった。用心はしていたのである。

鹿角に柄をつけた引かけ棒や、鉤縄で、引き倒しに手間くってる所を、城方は、櫓から一斉に横矢を射かけて防いだ。暗くても塀際にとりついているから、射る狙いは狂わなかった。それに塀は岩場にはりめぐらしてある。矢傷より、転げ落ちる怪我人も多いらしく、悲鳴や呻きが、まっ暗な谷底から、こだましてきた。だが一刻の余は支えられもしたが、塀の一個所を破られたら、それまでだった。突破口から、わーっと雪崩をうって、武田勢は口々に喚めき、罵りながら、とび込んで来た。

今まで散々射捲られた肚いせに、甲斐の弓勢思い知ったか、とばかりに矢つぎ早やに射込んでくるので、急いで畳をもちだして楯にしたが、射すくめられて、たちまち占領された。

瓢丸をつき破った勢いで、敵は服部曲輪まで押しよせた。外廓をぐるっと押えられてしまっては、詰めてる味方の兵どもが見殺しになる。周章て、弾正曲輪を通して、本丸へみな引揚げの布令がでた。

おりゃも、このどさくさで本丸へ移ってしまった。

弾正の方にいては、矢叫びと馬のいななきしか聞えなんだが、ご本丸の城壁に登ると、闇夜とはいえ、あちこちで、かがり火は燃してるか、瓢丸の方も、敵が岩塀に火付けしたので、よう、いろんな物が照らし出された。

武田方が、組立式の木枠をもちこんできて、これをつないで長い櫓にこさえた。その上に竹束の囲いをつけて小舎に作り上げ、よいしょ、よいしょと押し立てだした。ご本丸よりも高い井楼。こんな、ばかでっかい見張塔みてえな物を、おっ立てられちゃ事だと、早速鉄砲放ちの衆が狙われたが、どこを撃っても、木の枠に竹束で、らちゃあかん。

「大鉄砲でうちこわせえ」

えれえ騒ぎになって、四人がかりで十倍もある鉄砲が運びこまれると、太い火縄がないで、五本分をよって、太くねじって火を移した。

「どぎゃあ、がーがん」

すげえ音。雷が眼の前に落っこちたより、凄じい響きで、みんな耳つんぼになってしもうた。組立て櫓もふっとんだか、見えのうなった。織田信長さまが、三百俵の兵糧米を、この城へ入れられる時に、貸して下さったもんじゃそうだが、えれえ大きな鉄砲もあるもんだと、てんでに、たまげてしもうた。

夜があけると十四日。

川股の渡合の門を、また攻めて来おった。ここは、本丸の前に野牛曲輪があるで、野牛門とも呼ぶくらい、ちょっと力攻めでけん所じゃが、昨夜の勢で、むりやりに攻めこむつもり、今日は、どこぞで手に入れたか、舟も三十ぐらい並べ、楯板を前と上に掛けて、鎧をきた儘、攻めよせてくる。

腹背に敵をうけられて、おん大将貞昌さま、じきじきに本丸を出られ、野牛曲輪の一の櫓へ出て来られたのである。

鍬形の金びか兜をかむっていらっしゃるで、お顔はよう拝めんが、まだ二十四じゃげなに、りりしい若殿ぶりで、緋威したらいう赤糸つづりの鎧がよう似合われた。

正面の野牛門はかためて一兵も入れておらんが、うしろは、わやくちゃになった。瓢丸、服部曲輪と外廓を奪った敵は、三の丸から弾正曲輪まで占領しおって、本丸との堺になっとるお堀を、大石や岩塊で埋めにかかっとる。

それを遠矢で邪魔しつ、どうせいつかわ埋めつくされるに決っとるから、その時の備えに、もう一段手前の内側へと、新しい堀切りを始められた。茂平や権蔵たちは、その二重堀の工事へ狩り出されとる。

武者衆は斬込み隊。

武田方名代の豪傑今泉内記を討取ったも、おりゃ達武者の手柄じゃが、敵も討取られて減ったろうが、城内の者も、武者衆は斬込みにゆけば戻って来ないから、やはり減る一方で心細うなる。

武田勝頼ご本陣医王山三千人。城の北大通寺山に、武田信豊、馬場信春、小山田昌行二千人。城の西天神山に一条信竜、真田信綱、土屋昌続二千五百人。城の南、武田信廉、穴山梅雪、原昌胤、菅沼貞直千五百人。寒狭川左岸内藤昌豊、小幡信貞二千人。右岸山県昌景、高坂弾正一千人。後詰として、小山田信茂、跡部勝資、甘利信康、武田信実ら三千人。

二十倍以上の敵方の人数をきくと、こりゃ、あかぬと心細うなる。

「城ぬけ出て、寄手の武田の方へまわらねえと、こりゃ恩賞なんぞ、ありつけねえぞ」

譜代の郎党衆と違って、よせ集めの駆込み武者は、勝つ側につかねえと、あとで何も貰えん。ただ働きになるので、それを案じて騒ぎだした。

国境の城なので、武田方に攻められりゃ、そっちにつき、徳川勢に囲まれたら、そちらへ城を明渡しと、今まで何度も繰返してきた。だが今度ばっかりは、そうはゆかん訳が、あるそうな。

貞昌さまは、家康の娘婿になり、この辺り一帯の領土の他に、三千貫増やして貰う約束で、武田を裏切り、弟君の仙千代さまは磔刑にされとる。だから城方としては今迄みたいに、たやすく降人できぬ。寄手にしても裏切者ゆえ、気やすう許すわけにはいかぬから、大掛りに、烈しい城攻めになっとるんじゃという。まあ、この分では、みな殺しにされて、他への見せしめになるじゃろというんだ。

## 7

「こりゃ、とんでもねえとこに入って来て、しもうたわ……」

おりゃ、びっくらこいて、口の中でひとりごとしながら、なるべく顔あげねえようにして、その場に坐りこんだ。

おん大将、貞昌さまを囲んで、五六十名の主だった衆が、なにやら評議しとられる、そのまっさい中。

さっきから斬込み隊の武者揃えが始まったので、おりゃ、見つからんよう逃げだしてきて、ここへ迷いこんでしもうたのじゃ。

本丸だけになって、ぐるっと敵に取巻かれてしもうとるで、二十人組、三十人組の武者が、寄手に向って





斬込んで気勢をあげとるが、目ぼしい衆がいのうなったので、おりゃみてえな駆込み者も、物色されるようになった。獲物とっての働きに覚えがありゃ、なにも死ぬことなんて怖しゅうないで、まっ先にでも駆けだしたいが、それがようでけんのは辛かった。敵方に走りつくまでに、うまく矢でも咽喉ぶえにつき刺って、くたばってしまえばよいが、そうでもなかったら、獲物業に馴れとらんおりゃは、どう戦さすべえかわからねえ。

せっかく寸法武者の恰好しとるのに、雑兵みたいに。やーやーと長巻つきだしても進めんし、どう渡り合って斬りあうか、てんでしまた事がねえだけに心許なかった。おっ死ぬのは構わねえが、死に恥はかきとうねえ。ぶざまに、うろたえて、ひっくり返って死ぬ図なんて、思うだけで堪らねえ。

敵が押込んできて、そこで、ぶっ殺される分にゃ、どんな死にかたしてもわからねえが、斬込み衆は、敵も味方も、よう見とる所、華々しゅうやるんじゃから、足がすくんでしもう。

なにも、おりゃ弱虫じゃねえ。ただ産れた時はなにも知らんこったが、死ぬ時だけは、せめて恰好よい、しめくくりをしたいもんだ。もの笑いの種になってから、蛆虫わかすなんてまっぴらじゃ。

「武田四郎が憎いは余じゃ。余さえ腹かっさばけば、城内の者の命乞いはできよう」

若いだけに、城主さまのお声は、きんきんと鉄のやじりみてえに、よく透って聴えてくる。

徳川家よりつけられた御油の松平さまは、あくまで籠城して戦うとの意見だが、城主さま側の奥平衆は、今迄も何度も武田勢に降参したり、寝返りをうち、その繰返しをしてきたので、なにも今度だけ、命がけであくまで守ることはねえ。との言い争いじゃ。

吉田城にいる家康や、岐阜を出発してきた信長勢が、二三日中に加勢にきて、武田勢を追払うなら、この儘籠城をつづけ、本丸ひとつを、死力をつくしても守るべきだが、武田の大軍に恐れをなして、応援が遅れるのなら、それ迄は耐えきれんから、城主に腹切らせても仕様がねえから、早いとこ和議して仕舞おうとの評議。盛んにそれを家老衆が言いはってござる。

「誰ぞ。城をぬけだして、いったい何時くるか、来んのか、それを調べてこい」
すっくと立ち上って、城主さまは、大きな声で怒ったようにいわれた。
加勢がくるならよいが、もし、来んとなると、その、ひと言で、ご城主さまは腹切りじゃ。そんな切ない、恨まれそうな役目を買って出る者はおらんから、誰も返事をせん。
「次左衛門。そちゃ音にきく水練の達者。川をわたって吉田へゆけ」
耐りかねたように、側近のひとりを名ざして言いつけた。
「とんでもございません。ここ二三日が切所というに、わたくしめが脱けだしたあと落城ともなれば、ひとは、次左衛門は命惜しゅうて逃げだした不所存者よと、笑い草になります」
首ふって、蟹みてえに平つくばりになったので、
「井上善右衛門。そちゃ使い番だ。うぬがゆけ」
城主がまた指名すると、
「滅相もござりませぬ。手前、今夜、組下の者ひきいて弾正曲輪の敵に、斬込隊をかける手筈。それを打棄てては、卑怯者になり、誰さまにも逢わせる顔とてござりません」
これは憤ったように、そり反って睨み返した。
「甚兵衛。そちゃ昨日、矢傷をうけて片目になった。奉公ついでに行ってくれ」
困惑しきったように、元服したばかりらしい若衆に声をかけられた。
「殿。片目は、城にいても使いものにならんと仰せられるか」
泣きだしそうな声で喚めいて、ことわりをいった。
見かねたように、御油領主松平景忠さまが、黒皮威しの、ぴかぴか油光りする胴丸を撫ぜつ立あがると、
「この儘じゃ評議が終らぬ。いつ総攻撃が掛ってくるかも知れんに、長談議は無用じゃ。誰でもええから立ってくれ。わしの手紙を吉田城の家康さまに、お届けするだけの仕事じゃ。恩賞をつかわす」
恩賞ときいて、ちょっと、ざわめいたが、誰もが嫌がることを、あえて受ける者も出て来なかった。
「恩賞は望み次第じゃ」とまだ声を大きくされた。





「もし行けば、旗指物、許されるんでしょうかな」
おりゃ、恰好だけは寸法とれたが、本物の武者になりてえと思っとった。旗指物を許されて、背におっ立てる指物武者になってみたかった。そんで、ついふらっと立ち上って、口にだしてしもうた。
「よし、使いをはたせば、特に旗指物を許し、取立て旗本衆に加え、知行も増してやる。近う出てこい」
話はきまった。
斬込みと違うから、何処で殺されても、これなら恰好もええし、もし巧く帰って来られたら、本物の武者衆になれる。そしたらそれ迄に、獲物業。槍使いを鍛練すべえ。
「脚がすこし悪いようだが、大事ないか」
「へえ、作手生れで山になれ、水もぐりも餓鬼の時からやっとりますだ」
「うん、地下言葉がうまい。下人のなりして忍び出れば、よも怪しまれまい。それに脚なえの者を使者とも思うまいから、こりゃ適役じゃ。名はなんと申すか」
本当の名をいう気にはなれんし、といって、ひねくれもんと、お茶らけた名乗りもでけん。揃えた両膝をなぜながら、おりゃ思案にくれた。
「どうした。早うぬかせ」
怒鳴りつけられたので、びくっとして、しびれた脛が、ぐーんと痛うなって、思わず、
「脛右衛門」と名乗りをあげた。

8

松平さまからは家康公。ご城主さまからは、やはり吉田城へ詰めていなさる父の貞能ぎみへの密書。小さく畳んで油紙包みになってるのを頂き、下腹にはって膏薬紙を上からはりつけた。いり米は水をすうから、乾魚の焼いたのを貰った。
権蔵や茂平たちは、城のたき出し米で喰うには事かいてないし、話をすれば厄介なので、黙って城を出ることにした。真夜中だが、松平さまの手の衆が、不浄口まで出張ってきて、岩壁を伝って降りる縄を、五人掛りでおろし、すけてくれた。
烽火をあげるために持たされた火打石が、下帯に結えつけたので、尻べたがくすぐったくて耐まらなんだが、川の中へ入ると、冷てえので、忘れてしもうた。

水面に顔だして泳ぐわけにゃゆかんから、息つめては、潜り潜りして、長走まで出た。教った通り、ここからは一町置きに水中に繩がはってあった。触れたら判るように、板切れに竹がつけてあって繩が揺れると、その鳴子が、がらがらやかましく音をたてる仕組みになっとる。

仕様がねえで、繩が動かんように押さえて、刃物で切りはずして進んだ。見廻りが厳しゅうねえ早滝の壺下から、鯉みてえに逆のぼりして、広瀬の河原へはいあがると、まだ夜あけ前で、滅法身体が冷えきっていた。指図された雁峰山は眼の前だから、ひた駛しりにかけ登って、枯草や木の根を集めて火を燃やし、凍りついたような身体を温くめると、濡れた焼魚をまた焙って、むしって喰った。

この煙が、約束の烽火になるのじゃから、燃やしっ放しにしてゆこうと思ったが、敵方に後を追いかけられては困るから、孔ほって土をかけ、わからぬように消して、本宮山と作手のまん中、牧原から宮崎へ、男川にそって樫山を望んで走った。この田原坂よりは、岩山が多く渓がせまって難所だが、おりゃみてえな土地者には、馴れた山境なので兎みてえにとんで歩けた。

大平まで出て、出逢いの衆にきくと、徳川家康さまは、三州吉田の城から岡崎へ今朝移られたということだで、そのまま矢作の方角へふっとんだ。

「こりゃ、うろんな奴め」

見廻りの雑兵共に、おりゃ咎められた。

街道すじへ出たので、見透しがよくきく。山から一と息に駆け降りてきたのを、気づいて、馳せつけて来たのである。

「うぬら、どこの手の者じゃ」

おりゃ横柄に、かまえた。お味方の衆と知れとるから、気やすう睨みつけてやった。

「石川数正さまを寄親となす西三河衆。鳥居彦右衛門元忠が手の者でござる」

と会釈してから、つぎはぎの短い布子一枚の下人姿を、訝かしげに、うち眺めるのに、おりゃ肚をたてて、

「御油城主松平景忠並びに長篠城主奥平貞昌が名代。指物武者の分際じゃぞ」

大声で怒鳴りつけた。びっくりして槍を倒して膝を





つき見廻り共は叮嚀に頭を下げた。

昨夜から寝ずに泳ぎ、走ってきた疲れが、いっぺんに吹っ飛んでしもうた。ええ気持じゃ。すっかり気がゆるんで、

「案内せえ」

といいつけると、地べたに坐りこんでしもうた。がっくりきてしもうた。

「馬を、ひいてめえりやしょう」

忠義顔でひとりでいった。おりゃ周章て首ふって、はね起きた。指物武者なら馬にのる身分じゃが、おりゃまだ口取りしたことはあったが、乗ったことはねえ。それに蹴られてから、厩番はしとったが、馬はあまり好かん。徒歩でついていった。

「鳥居が手の者でござる」

要所、要所の見張りに声をかけて案内されたので、城門をくぐって、三の丸の奥平貞能の面前へひき出された時、鳥居という苗字が、何度も繰返しざまに頭に入ってしまってたので、ついうっかり、

「作手の住人。鳥居脛右衛門」

と名乗ってしまった。

松平景忠さまの封じ文は、西三河衆筆頭の石川数正へ取次がれた。

湯づけを振舞うて貰うて、うとうと坐った儘、居睡りしとると、貞能さまが、じかに呼びに来られた。

手招きされて、なんぞ用かなと、欠伸を噛みしめながらついてゆくと、本丸の二階へ連れてゆかれた。みんな、はいつくばって居るから、おりゃも、その真似して平伏しとると、

「使の者、大儀であった。織田殿も十三日に岐阜を出られ、昨夜からは当岡崎に居られる。携えて軍馬を並べ、明日の夜か、明後日には、きっと合力にまいるであろう。それまで休息して、道案内でもせい」

「へえー」

おそるおそる顔をあげると、もう声の主はいなかった。家康さまらしいと思った。

貞能の大殿は、また顎でしゃくって、もとへ連れ戻すと、

「恩賞は、われからも呉れてやる。上様はあない仰言るが、この一日、二日が、城の者らは気がかりじゃろ。そちの脛なら、今から立てば、朝までにつくじゃ

ろ。行って、みんな喜ばせてやれ」

今夜はぐっすり寝る気でいたので、又、すぐ行ってこいは酷いと思ったが、恩賞を別に呉れるというんなら、行ってもええと考えた。ご城主の九八郎貞昌さまとは親子の仲だし、一刻も早う後詰の知らせしてやらんと、腹切りかもしれんで、お気持が急ぐのは、無理からねえとも思った。

「向うから出る恩賞の外に、われからも百貫文くれてやる」

「へえー」

おりゃびっくりして、さっきみたいに平伏して、すぐおうけをした。百貫の身代ちゅうと、家来が十名抱えられる。茂平たちみてえな喰わすだけの奉公人なら、五十名も養える位の大身代。手強い家の子郎党さえ揃えれば、自分が業物とって無理働きせんでも、みんなが按配よう手柄はこしらえて、恰好はつけてくれるというもの。こんな滅法な話はない。

すっかり喜んで、渡された封じ文は肌、握飯を首にくくりつけ、また夜道をとって返すことにした。疲れをへらすために、乗り棄てでよいからと馬を貸してくれたが、お味方の陣地内でも、人目につくはまずいからと、ていよくうまく断わったところ、とても感心されて、

「九八郎に、あのような剛な者がいるとは知らなんだ」

と大殿様の貞能さまが、いたく賞められたと、送りにきた衆がいって居った。

夜あけ前に、雁峰山へついた。後詰がくるなら烽火三つと、云い渡された通り、おりゃ枯草あつめて火をつけ、消しては、又つけ繰返してから、山を降りた。

来る時にゃ、広瀬の河原へ、滝壺からはい上ったが、鳴子の綱をみな切ってあるので、もう見張りはきびしくて、水もぐりは出来ん。船着山のほうへ川を泳ぎわたると、篠場野まで、おりゃ畑の中の木鋤を盗みだして、百姓みてえな恰好で歩いていった。

水潜りして脱けだした時にゃ、皆目なにも判らなんだが、こうやって明るうなって河原へ近づくと、柵は三段にうち込んであるわ。鹿垣はずっと、はりめぐらしてあるわ。砂まいて、足跡の向きで見分けつくよう段取りもしてあるわで、とてもじゃねえが、城へ戻れそうもねえ。こりゃ、どうすべえと迷っとると、





「こりゃ、われじゃねえか」

いきなり、頭ごなしに、どやされた。

馬で蹴られた時、言い争って、つき倒して逃げたあの時の二連木の組頭である。とんだ奴に見つけられたもんだ。この篠場野に、旧主菅沼貞直の手の者が陣取っとるとは、おりゃ、びっくりこいた。

「下郎、来い」

昔の意趣返しする気か、近づくと、いきなり槍の柄でうちのめして来た。

「なにが下郎じゃ。こんな、むさい身なりしとるが、これでも、おりゃ」

いってはいけない。口外してはならん。ここは今では敵陣じゃ。うかつに、ものを言うたら、取返しつかん事になる。よう判っとったが、

「なにを、ほざく。この小盗っと野郎」

昔の雑兵の時みたいに、足蹴にされると、もう我慢ができのうなってしまった。

「ばかするな。おりゃ見すぼらしい身なりしとるが、岡崎さま御目見得、百貫取りの指物武者、鳥居脇右衛門ぞ」

いきなり、その脚をつかんで引っぱった。

「こけぬかすな、この、あほんだらめ」

物頭は、辛じて踏み止まると、あざ嗤いながら、まっ赤な顔して、槍の柄をまた振り上げた。

「待て、待て。乱暴すんな。大切に扱え。われは、穴山梅雪入道さま同心衆川原弥太郎」

駆けよって名乗りでた男が、物頭をつきのけた。そして、立たせてくれると、砂まみれの肩を払ってくれた。

## 9

おりゃにも意地がある。

あんな胸くそ悪い組頭に、下人扱いされて、足蹴にされるよりは　えらい大物になって殺されたほうが、ずんとましじゃと性根をすえた。殴られた、あちこちが、ひりひり痛んだ。組頭のやつが無性にしゃくにきた。

「人違いして乱暴したさっきの奴。ここで成敗しくさったら、おりゃも有てい話しもうそ」

身のあかしを立てるため、おりゃ自分から腹の膏薬

紙むしって、岡崎からの密書をつきだしてやった。

川原弥太郎は、うなずいて、それを受取ると、すぐ組頭をねじ倒して縄をかけ、柵に縛りつけた。穴山梅雪の陣屋へおりゃ伴われたが　小半刻もすると、今度は武田逍遙軒の陣屋から呼出された。

行ってみると、あの組頭がもう首になって据えられていた。それを見ると、約束だで、城をぬけだして使に行った一切を残らず喋舌ってやった。

「神妙な男じゃ。して恩賞は如何ほどじゃ」

「旗指物のお許しと、貞能さまより百貫文」

「よし、作手の生れじゃろ。あの辺くれてやろう。二百貫の身代じゃ」

作手の城は、奥平九八郎貞昌さまの物。この城が落ちれば、作手の方も持主がなくなって、向うも空城になるゆえ、まんざら辻つまの合わぬ話でもねえが、二百貫の大身代とは、まるっきり夢みてえな話である。

「ど、どこへ使えに行きゃ、ええんで……」

うわずった声で、おりゃ聞き返した。

「もう陽が暮れかかっとるから、明日の朝。城へ向って……、家康も信長も来られん。九八郎は腹切って、残りの者を助けてやれ。開城して、ひとまず和睦せいの言づけじゃ――と、ただそれだけ、おのれが、まことしやかに、ぬかせばよい」

「なんだ、それだけの働きで」

おりゃ首かしげた。あんまり話がうますぎる。

「うん。憎いのは、裏切者の九八郎貞昌だけ、他の者はみな殺しにせいでもよいとの御諚じゃ。そちさえ巧くやれば、城の者の命も助かるし。寄手もこれ以上、死人を出さんですむ。おのれが身の果報。出世を考えるより、まあ、朋輩どもの、人助けと思ってやってみい」といわれた。

どうせ出世するなら、見ず知らずの徳川方で引き揚げられるより、生れ故郷の作手で立身し二百貫を貰いみんなに見せびらかせるほうが、嬉しいにきまっとる。肚はきまった。

死ぬべえと思っても、あんまり、みじめったらしい時は、とても自分から死ねるもんでねえ。あの組頭の目を逃げて、厩番しとった頃は、毎日、死にてえ、死にてえと念じながら、よう死ねなんだが、死に損ったおかげで、こんなどえらい出世ができるとは、やっぱし生きとった事がよかったらしい。おりゃ、湯づけの菜に、生のよい鰺のあぶり身をそえられて、口の極楽にうきうきと、箸うごかしながら考えた。

腹一杯くらってからは、ぐっすり三日ぶりによく寝てしもた。

天正三年五月十六日。

まだいい気持で熟睡中を起こされた。外へ連れ出されると、まだ夜があけたばっかりとみえ、柿色の雲が翳って、あたりは、うす白くぼやけていた。

有海原まで連れだされると、

「あの磔柱にのっかってくれ。下から槍を交互に刺すふりをする。そこで昨夜の件を、あんべえよう喋舌って、死んだふりしろ。そうでもしねえと、唯ひっぱって行って、いくら喚めいても、合図の烽火をあげた後だで、向うも迷って、本当にせんじゃろ」

うちあけられて磔柱に寝かされると、上の横棒に両手。下の横棒に両足を、大の字にひろげて縛りつけられた。

「こりゃ困る。裸ん坊にして、こんな、ぶざまな恰好は、おりゃ厭じゃ」

喚めきあげたが、容赦なく、くくりつけてしまい、柱を、よいしょよいしょと立てた。

「たかが、半刻の辛抱じゃ。我慢せい」

頭ごなしに、下からどやしつけられた。

二百貫の知行までくれるというから、おりゃ華々しい鎧でも着せられ、ちゃんとした旗指物でもつけて、それで威風堂々と、昨夜の一件を喋舌るんだと思いこんでいたのに、これじゃ、あべこべである。

鹿皮の野郎兜をかぶった武者に、

「おぬしじゃ判らんで、お陣屋へいって、昨夜のえれえさまを呼んで来い。ちゃんとした恰好で云えば、向うも信用するが、こんな赤裸のふんどしひとつで、何いったって、城方が本気にするわけはねえ」

むきになって怒鳴った。

「屋形さまの御指図まで仰いで、ちゃんと取りきめられた事じゃ。文句いわんと、おとなしゅうせい」

と、取りあおうともしない。

「なに、ぬかす。こんな素っ裸にむけと、えれえさま

が……本当にいったか……」

くやしくって、声が震へた。

「命が惜しけりゃ、神妙に、いわれた通りにせい」

もて余して睨みつけていたが、槍先で、おりゃの脚を叩きくさった。

「まだ睡いのを、ひきずり起しくさって、朝飯もくわせんじゃろが」

口さきだけしか自由にならんで、あくたい並べて、おりゃ鹿皮兜に唾をひっかけてやった。

「こけするな。磔柱に飯もって来られっか。ぐずぐずほざかずに、さあ言われた通りを城方へ喚めけ。ぐずぐずしとると、本当に、この槍ぶっ刺すぞ」

威嚇するように、槍先をぐっと延ばして、咽喉仏を軽くつきおった。

おりゃ我慢できのうなって、誰ぞに訴えたくて、首ふって見廻したが、なにしろ城へ向って、つき出したように立てられた磔柱なので、前にみえるは、櫓の城兵ばかりである。

「命惜しくば、早よ喚めけ。そんで死んだふりしたら、すぐ縄といて、腹一杯、飯でも粥でも振舞ってやろう……ええか、わかるな」

低い声で、たしなめるように、また下から睨みつける。

もともと、おりゃ武田方でも徳川方でもねえ。ただ恩賞くれて出世させるちゅうから、話にのっとる迄だ。それなのに、この鹿皮兜の奴は、どうも、勘違して、おりゃを城方の裏切者と思っとるらしい。ばかにしくさって居る。武田軍勢のやつばらが、みんな、こいつみてえな考え方をしていやがるなら、いくら二百貫取りに出世しても、裏切りもんと、蔭口をしょっちゅうきかれ、莫迦にされるだろう。しんどいこった。おりゃ、やめたと肚をきめた。だから、

「縄とけ。やめにする。気に喰わねえ」叫んだ。

「駄目だ……喚めかぬうちは、おろせん」

狼狽したように槍をしごいて、おりゃの腋をついた。しゃくにさわって力が入ったか、ちくっと鈍痛がした。びっくりして槍はひいたが、下を覗きこむと血がだらだら垂れてきた。縛られるとで、よう視えんだけ、いらいらしておりゃ、気が狂いそうに、肝にこたえた。





それに、いらいらしていると、瞼にへらへらしている、せんの貌まで想出され浮かんできた。そこであんな女につきまとわれるなら、死んだがましじゃと思えてきだした。

「ようも、つきやがった。おりゃ命惜しみなんかしねえもんだ。みてろ。やい。今から喚めいてやるから、よう聞いとけや。おりゃを憤らした咎で、うぬらは、きっと磔刑か打首じゃ」

声を殺して、下を睨みつけると、鹿皮兜はびっくりしたように、おろおろした眼で、何か言いたそうに、とまどって居る。ええ気持じゃ。おりゃ朝から、はじめて鼻いっぺえに空気をすった。

「お城の衆。岡崎へ使いにいったわしでござりまするが……」

大声で呼びかけて、下をうつむくと、気にしていたらしい、鹿皮兜のやつ、ほっとしたように、城方の反応に気をとられとる。

「よう皆の衆。わしが言うことを、おききなせえ。帰りは山道を通ってきて、岸からお城へ忍びこもうとして捕まり、このぶざまな恰好でござりやすが、貞能の大殿様より百貫文いたでえた旗指物が武者でやす。そのつもりで、まる裸じゃと、ばかにせんで、おききなせえ」

下を覗くと鹿皮兜の奴、やっぱし命惜しさに神妙になり居ったと冷笑していやがる。畜生、いまに吠えづらかくな。おりゃ、うずうずしてきた。ええ気分でひと息いれた。

「みんなが当にしとる家康さま、信長さまのご軍勢はな、ここへは来ん……と言いやあ、こっちで二百貫下さる約束じゃ。どえらい出世じゃが、おりゃ、ひねくれもんだで、本当の事ぶったる。信長さまは岡崎、信忠さまは八幡。家康さまはつい鼻さきの野田で、先手衆は、もう一ノ宮、本野ヶ原と進んできとる。明日か明後日にゃ、武田勢はみな殺し……」

周章ふためいた鹿皮兜が、他の野郎兜の衆と一緒に、めちゃくちゃに槍をつきあげ、こねまわすみたいに突く。あっちにこっちにも槍先が喰いこんでくるんで、痛がってる隙もねえ。

（ざまあみろ）と、おりゃ血まみれの儘、酒でも喰べ酔ったみてえに、ふわあっとしてきた。（ええ死に場

所だ）と思った。なにしろ櫓の城兵たちが、伏し拝んだり、合掌してるのが見えて満足したからである。

「ええか。城をあんべえよう、守るだよ」

もう舌がもつれて、声にならなかった。こんなに孔だらけにされたら、蛆虫が、いっぺえ、一刻にわくでねえだかと、そんな事が気になった。

織田徳川勢は五日後、設楽原で決戦し、武田方の重だった武者を殆んど鉄砲で撃ちとり、武田四郎勝頼を敗走させた。

翌五月二十二日、織田信長は、貞昌を召出し、籠城の武功を褒め、信の字を与えて信昌と改名させ、

「この度の大勝利は、そちの家臣、鳥居とか申す男の働きがもと。神妙至極。武功第一じゃ」

過分な言葉を賜わった。

作手の家来の中に、鳥居という姓はひとりもないので、誰の事だろうと評定して居ると、徳川家康からも、

「岡崎へ使いにきた鳥居胙右衛門、当代まれにみる武辺の鑑み、ねんごろに葬ってやれ」

父貞能が、わざわざ言伝えをもってきた。

あの男のことかと、ようやく気づく者がいて、有海原で、磔刑にかけられっぱなしの遺体をおろせた。

八日も放ってあったので、蛆虫だらけ。もうどこも、腐れきって崩れかけていた。臭くて手がつけられぬから、胴体はそのばの河原の新昌寺へ埋めさせ、鳥に啄まれ眼玉もなく、頬骨がのぞくと首だけを、奥平家の菩提寺、作手村鴨谷の甘泉寺へ運んだ。

胙右衛門ではおかしかろうと、尤もらしく強の字と入れかえた。

「智海常通居士覚位」

大きな位牌をまつって、城主信昌以下、奥平一族の久兵衛、修理、但馬、周防、次左衛門、与兵衛、土佐定友の七人衆の他、信昌に腹切らせて開城したがっていた家老職の山崎善兵衛、生田四郎兵衛、兵藤進左衛門、黒屋甚右衛門らまでが、一同うち揃って詰めかけ、盛大な供養がいとなまれた。

さてその席へ有海原の磔柱に放って置かれた強右衛門の死にざまを、武田方だが徳川へ降人したお旗本で、長坂血槍九郎と並ぶ朱槍衆、落合佐平次が、その儘写し絵とって、おのが旗指物にしたと伝ってきた。そこで、これまたすごい評判になった。

「当代、もののふの鑑なり」と信長公が賞められたので、奥平の家中ばかりでなく、尾三遠の諸方から、馬を駆けて参拝者が集まったが、さて城主をはじめ誰も、城内の強右衛門をろくに覚えている者とて、居なかった。

「子か弟か、身よりを重く取立てよ」と家康からも命ぜられていたが、探しようもなかった。

だが、お声がかりの法要ゆえ、餅三十俵、粟百俵の施餓鬼がふれ出た。

とんでもない大盤振舞いに、近在の者は籠や布をもって集まり、長い人垣をつくった。

「えれえお方さまの法事じゃ。粗相するでねえぞ」

警固にかりだされた雑兵どもが、集まった百姓どもに、大声で怒鳴っていた。

「だれが死んだとな……」

子供が袖をひくのを、うっちゃって置いて、

「あんまり、聞いたこともねえ武者じゃが、鳥居強右衛門ちゅうお方の、葬れんだげな。きかんお侍じゃなあ……」

ばばの耳もとに口をつけ、せんは大きな声をだして、おしえてやった。

「へえー、聞かん名の武者さまだが、よっぽど、えれえさまだべ」

ぎょうぎょうしい葬列に、肝つぶしたような嗄れ声で、ばばは眼をしょぼつかせた。

# 子守唄武者

〈槍の半蔵〉

# 1

「泣くな」といったら、ワアッとやられた。だから「よし、よし、寝んねしな」といってやった。それなのに、てんで此方の話をきこうともせず、せっかく泣きだしかけたものを、なんで途中で止められるかと、ウオッと吼えるみたいな哭き方をされた。

「頼む。こらえてくれ」

と頭を下げた。それでも猿のような相手は、四肢を突っぱり知らぬ顔である。

そして、まるで二百十日の暴風雨が、孟宗竹を藪ごと揺さぶっているようにオウオウ喚めかれた。あやしてもきかない。

だから、半蔵は悲鳴をあげて、

「よしてくれ」と、負けない位いい返えした。

すると脅かされたとでも思ったのか、向うも対抗上、ワンワン挑むように声を高くしてきた。これでは、とてもじゃないが、手のつけようもない。居た堪れなくなった。

もう逃げ出すしか、他にしようもない。

「ええッままよ」と立ち上って土間へとび降り、爪先で藁草履を探して足に引掛けると、

「勝手にさらせ」

とばかり、駈けだした。もう、こうなっては、唐天竺の涯までも、ひと息につっ走ってしまいたい心地だった。

それなのに、ものの半丁と走っていないところで半蔵は、

「……血相かえて、どないしたと」

呼び止められた。相手は、久世平四郎だった。だから半蔵は、たたらを踏むように、

「どうも、こうも、ないわえ」

と立ち止ったが、まだ地面に錐もみするように片足は尖らせ、身体を揺さぶったまま、

「女房めに逃げられたんじゃえ」

いまいましそうに打ちあけた。

「そうか。それで追っかけて行くところか」

丸い鼻をつきだし平四郎も尻端折した。

「……逃げたのは昨日じゃ。なんで今から追っかけて





捕えられるぞ」半蔵はブリブリした。

「そうか。そりゃア、いけんのう」

一緒に走りかけた平四郎も、がっかりしたように口を噤んだ。だが半蔵は、そう云われると慰められるみたいで余計に癪にさわり、

「困りゃあせん。逃げた女房に未練など、ないわい」と、胸をはって首を左右に揺った。しかし、そうは云っても、おうむ返しに、

「困っとらんのなら、ええ」と平四郎に、相槌をうたれると、その癖すっかり狼狽し、

「あの方はええが、童が云うことをきかんと、困るんじゃえ」と口の中で、もぞもぞ訴えた。

「そりゃ可訝しいのう……半蔵というは、なんでも他人の云うことを素直によく聞く、まっとうな青竹みたいな男じゃ。その児が、なんで、むずかる……云うこと聞かんで手古ずらせるとは、半蔵の種とは……そりゃ違うのじゃなかろうか」お節介によけいな口出しをした。

「そない云われても、俺が腹から産んだのとは違う。俺の女房がもうけた児ゆえ、まあ、俺が児じゃろのう……なんせ産れた時、よう似とる。生き写しじゃと云われたもんな」

「まこと、そない思うとるのかや」

絡まれると、しどろもどろになってしまい、

「……俺の種と想えばこそ、女房は置き去りにして、逃げたのと違うか」と聞き返した。すると、

「なにも機嫌よう出て行ったんではあるまいが、おおかたは、喧嘩しての挙句じゃろ。だったら、他の男の種を、わざと置いてったのかも知れんぞよ……なんせ喧嘩すると、これでもか、これでもかと、女ごは意地悪するでのう……」と平四郎が、気張っていったときである。

「何を、こいとるね」

凄い権幕で、平四郎の嬶が喚めいた。いつ側へよってきていたのか、今にも引っ掻きそうに、腕を熊手みたいに延ばしかけていた。

「なにも、おりゃアお前の蔭口を云うとったんじゃ、ないわえ。半蔵んとこの嬰児が、てんで云うことを聞かんで、泣きづめじゃ云うから、はて、半蔵の種にしては変じゃないかと云うとった迄よ……まあよう聞い

てから憤るなら怒れ」

びっくりした平四郎が早口に弁解すると、お嬶は、それより半蔵に向って、

「ほう、逃げられたとね」

気の毒そうでもあり、満足気でもある顔を見せていたが、「時に、赤児に何をやっとらっせる」と、うがった眼つきで訊いてきた。

「……何をやると云うても、いくら吸わせたとて、ちいとも汁は出てこんのじゃ」

半蔵が、胸毛のもじゃもじゃした襟もとを片手で拡げ、見せようとしたところを、

「あほんだら」と嬶は、半蔵へも、自分の亭主同様な口のききかたをして、「なら昨日から嬰児に空乳しか吸わせておらんのではないかえ……ギャアギャア哭くのは、当たり前のこっちゃ。乾ぼしに干殺す気か」と睨みつけてから、くるっと尻を向け半蔵の家の方へとっとこ駈けていった。だから、

「なんせ、この七月の一揆の後は、女共が、みんな強うなったのう」と平四郎は自分の嬶を庇うつもりか、そんな口のきき方をした。

## 2

もともと三河の国は、室町御所の血脈に当たる吉良さまの領地である。

「一に吉良立ち、二に今川立ち」

とまで云われ、足利将軍に世つぎが絶えたときは、吉良から入って跡目をつぎ、その吉良に嗣子のない時は、駿河の今川家から迎えられる定めだった。ところが吉良家が兄弟争いをして戦ばかりしている内に、今川の方が勢力を伸ばしてしまい、三河一国まるまる今川義元の領地のようにされてしまった。そこで……

吉良家に代って三河で勢力をはりだした松平家も、一昨年の桶狭間合戦までは当主の元康が人質に駿府にまわされていた。

だから松平の郎党は扶持離れして喰ってゆけぬ。といって土民となって百姓もできない。

そこで、この辺りの地侍の家は、何処もかしこも三河木綿の機織りで喰いつないできた。今川義元が倒されて二年たち、やっと三河は解放されたが、やはり機織りは続いていた。





ところが綿の木の種を海外から入れたという権利が寺にはあった。だから白く綿の実がなって糸に紡いで反物にすると、これを寺の庫裡へ運ぶ。すると一反いくらと手間賃がでる。それが生計の料になっていた。だから、この三河から木曽川べりの一宮、津島あたりまで、ガチャガチャ機織りする女房のことを「がちゃまん」とよんでいる。そして、なにしろ寺方の支配を受けているから、どうしても仏さまの教えをきく者が多い。

そこで、このあたりの者は、「三河門徒」とよばれ、木曽川の方の「長島門徒」と共に、東海地方の浄土真宗の本場になっている。処がである。遠州浜松の家康の殿が神信心の武者どもを重用し、あろう事か碧海郡の本証寺の一向門徒を、酒井雅楽助に征伐させた。

だから、ここに国内が二つに割れてしまった。

土呂、針崎、野寺の門徒は、釣鐘を乱打して近在の者を集め、みな弓鉄砲を山門に並べ楯籠った。

この時、半蔵や平四郎も、蜂屋半之丞の徒党に加って、勝鬘寺へ入った。

そして家康の命令で討伐にきた大久保党と激戦をしたのである。その挙句が、二人は武辺を見こまれ、佐崎の上宮寺を委され、五十人程ひきつれて陣取った。

すると家康の殿の縁辺にあたる刈屋城主の水野信元が押しよせてきたのである。

そして、「どうじゃ」と談合の使者がきた。

丁度七月十五日の盂蘭盆に当っていた。

そこで「お盆休戦」で三日の休みにした。

ところが四日目になると、気抜けしてしまった。戦意がなくなった。相手も同じか、また使者が、水野方からやってきた。そして、

「死んでから先は、どうなるか、こりゃ判らん事じゃが、生きとる内は……坊主に指図されて、云いなりになって働くより、馬にのった殿さまの采配で武者らしゅう駈け廻る方が、なんぼか恰好が良かろうに」

と、まず訓された。

「そりゃア、その方が見た目もええ」

と半蔵が、差入れに持ってきてくれた稗酒の礼の手前もあって、使いにきた者へ同感をしめしたところ、

「話によると……寺方では一揆に入っとる者には坊主

が、『手柄をたてたら来世で功徳を授けたる』と云うとるそうじゃが、家康の殿は、手柄次第で、その場で米や銭を下さる。来世で褒美を貰うが良いか、現世ですぐ渡されるがええか」と云われた。そこで平四郎が、「貰う物なら早い方がええ……なんせ明日の百文より今日の三文と云う位じゃ。当節のように諸式が次第に高値になって行っては、行く先には銭の値打ちも下ろう。なんでも今の内に、とっと早く頂く方が、これぞ御利益というもの」

と返答したところ、ここぞと向うは頷いて、

「なら今の内に寺方に一味するのを止めれ。すりゃ水野の殿が、うぬらに銭の一つかみずつを引出物に下さるそうな」といった。

「なんにもせんで褒美が出るとは果報なことじゃ」と平四郎は、すぐ乗り気になった。

しかし一存で決める訳にもゆかぬ。そこで上宮寺に集った他の者にも半蔵と共に相談した。

「そうじゃ。抹香臭い寺にこもって、墓場で戦するのは、死んだときは手っ取り早くて便利かも知れんが、あんまりパッとせんな」

半蔵は、平四郎の加勢する為に、まず大声でいいだして賛成すると、他の者もみな同意した。

だから上宮寺に籠っていた武者は、水野方より、銭を渡されて陣をとき、

「転向第一号」として、家康の殿から帰り新参を許され、米一升ずつの褒美を貰い、意気揚々と戻ってきたのである。

ところが、世の中のことは、良い事の後には、かならず悪い事があるもので、

「なんたるこっちゃね」

まず半蔵は、家の敷居を跨ぐなり女房に怒鳴りつけられた。恐る恐る米の藁苞を差出したら、

「なんだね。こんなもの」と叩きつけられてしまった。そして、

「門徒の身でお寺を守りにいった者が、宗旨を棄て、放って戻ってくるとは何たる事だろう。これでは、わしは極楽へ行けても、お前は地獄へゆくのは間違ない。よし、この儘で連れ添うたにしても、これでは来世は先き行きの望みもない話……なんせ夫婦は二世の





縁というて、現世が前半戦、来世が後半戦なのに、お前とくっついて居たのでは、わしゃ尻切れ蜻蛉になってしまうわ」という事になってしまったのである。

もちろん半蔵も狼狽して、己れの妻女に向い、

「そりゃ困る。平四郎の所のお嬶にしても、亭主が門徒をやめて、家康さま家来として奉公するなら、もはや自分も名号は称えまいと数珠まで放ったと云うではないか」と意見した。なのに、

「平四郎は男前じゃから、口ではガミガミ云うても、あの嬶どのは惚れとりんさる。そこで御仏の冷たいお賓頭盧さまを撫でるより、ぬくうて熱いのが夜ごとに御利益もあろうと宗旨がえの鞍替えにさしたんじゃろまいか」と、きわどいことを、ぬけぬけ臆面もなく言い放った。だから、

「わしらは子まである仲ではないか、そない云うのは薄情だぞ……なんせ俺たちは夫婦の仲じゃろに」

と責めてみたところ、その半蔵を睨みつけ、

「薄情どころか、お前がような男には、てんで情などないわえ……心が繋がらんものどうしが、なんで躰だけを繋げる事もなかろうに」と青白い顔を引き吊らせ、それっきり知らぬ間に妻はいなくなってしまったのである。

3

「おのれ家康め。岡崎へ戻ってから今川方の砦に火をつけ、西郡の城まで横領するとは怪しからん。わが父今川義元の思を忘れたるか」

と今川氏真が、牛久保の城へ、遠江駿河衆一万を率いてのりこんできた。そして山越えに別働隊五千が、宝飯郡一宮まで押し寄せてきた。まったく寝耳に水の進攻だった。

三河の徳川方は、一向宗門徒との戦いに、すっかり疲労困憊しきっていた処である。

まだ一揆の後始末が、すっかり片づいてもいない所へ、思いがけぬ今川方一万五千を迎えて周章狼狽した。そこで一向宗の寺から戦利品として奪ってきた吊鐘を、ここを先途と、ゴオンゴオンと叩き鳴らして人集めをした。

半蔵は、槍を片手に、赤児を抱えて平四郎の家へ走った。そして大音声で、

「お嬶どの。この児を預って下され」
と呼ばわった。ところがある。平四郎が出てきて、無言で手をふった。だから、
「おぬしの所も、お嬶に逃げられてか」
と半蔵はきいた。別に皮肉ったのではない。同病相憐れむ、といった男どうしだけに通ずる劬りの瞳を向けたのだ。
「なら良いのだが、違う」
平四郎は、虚勢をはりながら首を振った。
「荷駄方の人夫集めがあったからな、そんで日当稼ぎに、お嬶の方がもう先に女人夫に出てしまい、留守なんじゃ」といった。
「えッ居らんのか」
当てがはずれて半蔵は当惑した。だが平四郎は、親切に荒縄をもってきて、
「まさか捨て子みたいに放ってもゆけまい」
と半蔵の背にくくりつけた。おわれた赤児は、きょとんと空を仰いでいた。
鐘だけでなく陣太鼓までがドオンドオンと轟き渡ってくるから、気ぜわしくて勘考などしてる隙もない。だから赤児を背負ったまま、
「さあ行くべし」と半蔵が先に走った。
なにしろ不意の来襲なので、陣拵えしている暇もない。てんでに戦場へ駈けつけたのである。
ところが、本野ケ原まで駈けてきて、ギョッとした。今川勢が輪を画いて攻めこんでくる丁度まん中へ、平四郎と二人で自分から飛びこんでしまったのに半蔵は気づいたからである。
「隠れにゃいかん」ということになった。
まさか二人で黒山のような敵に、突きこむわけにもゆかなかったからである。
もちの樹の茂みに、二人でこそこそ這いこんだ。姿を見られぬように、今川勢の通りすぎるのを隠れて待とうと算段したのである。
しかし砂塵をまいて今川方の騎馬隊が近よってくると、馬沓の音の凄じさに、半蔵の背中の赤児は魂消たらしい。小さな足を突張って反り身になりながら、おのれいまいましやと、
「ウエイッ」「ウオオッ」と哭きだした。
「しいっ」と狼狽して平四郎が口を押さえる、すると





赤児は、ますます、無茶すんなとばかりヒイヒイ喚めきだした。だから持て余し、
「こりゃア、お前が種にしちゃあ、ちいと、うるさすぎんかのう」と、また平四郎は半蔵に文句をつけた。だが、それを耳にして赤児が、また肚を立て、ここを先途と泣き声を張りあげかけた。そこで、これはしまった、このままでは敵に見つかって難儀すると、
「ああ、よし、よし、良い子だ」と心にもない、お追従をいって平四郎があやしだした。
それを聴いている内に半蔵は、
(俺も幼ない時、こないな事を、よう云われたな)と、平四郎がいなしているのは背の赤児と弁えながらも、半蔵はまるで自分に囁やかれているみたいに、目をとじた。
……半蔵が七つのとき二度目の母がきた。すると、
「この子は、俺が児か、どうか判らん」
父は引合せるときに新しい母にいった。いま思えば、新しい女に気兼ねしたのか、それとも死んだ母を愛していなかった、という、言い訳だったのかも知れぬ。しかし聞いていて、その弁解じみた口のきき方には、すっかりびっくりした。
とても七歳の半蔵は、その言葉に脅えた。今でも(阿袋は、死んだあの女だった)と朧気に覚えている貌が浮べられるが、
「さて、誰が、まことの父親じゃろ」となると、これればっかりは皆目なにも判りはせぬ。それなのに父にこう云われてしまった後は、
「良い子じゃ」と、いくら頭を撫ぜられても、これまでのように素直に、「良い親じゃ」ともう父親を思うこともできなくなった。
そして、こんなムサい男が己の父であるよりは、(いっそ何処ぞの殿様の落し種であって欲しい)とそれからと云うものは、いつも自分では思いつめていたものである。
それなのに今また、自分の背にくくられた児が、めぐる因果のおぐるまか、
「どうも種違いらしい」などと平四郎から指摘されると、
(こりゃ、どうなっとるんじゃろ判らん)すっかり

半蔵としては混乱してしまう。
「おりゃ、この背の子供諸共に討死したるぞ」
面倒くさくなって半蔵はすっぱり決心した。
「男手で、子を育ててゆくは難儀じゃものな」
判ってくれて、平四郎もすぐ同意はしたが、
「巻き添えにされ俺も死ぬのは、どうもならん」
暫く考えてから、渋い顔をしてみせた。
「なにも、一緒にと誘うとりゃあせん」
半蔵も、むうっとしてそれに云い返しはした。
「なら、俺は、ここで隠れとるで、半蔵だけ勝手に出てゆくがいい。後で骨は拾ったる」と尻を突つかれ半蔵は、迫ってくる今川方の前へ、いきなり押しだされてしまった。

4

白い女郎花。俗に男郎花とよばれる花が、まるで砂浜の小石を撒いたように、散らばって咲いていた。前を見ては気おくれし、足がすくむから、うつむき加減に半蔵は進んだ。
カサカサと草がなっていると思ったら、それが不意に、その音がガバガバきこえてきた。だから、はっとして顔をあげると、半蔵が近よったのか。向うが押しかけてきたのか。互いに目鼻が見えるくらい、もう敵が迫っていた。
だから恰好よく死に花を咲かせようと、
「われこそは、徳川家にて、その人ありと云われたる渡辺の半蔵なり」てなことを大口あけ、できるだけ声が轟くよう、青空の鰯雲に向って叫んだ。真似して背中の赤児も、
「アキャアキャ」と名のりをあげた。
ぐっと、しごいて槍を構えた。
どうせ殺されるなら、二三人は突き倒さにゃ損こくと、思ったからである。すると、
「なにをッ」
とばかり、馬のりの武者が、大身の槍を両手で握って突きこんできた。が、周章てて、
「なんじゃえ、その恰好は……」
面喰ったように、片手で馬の手綱をひき、
「子供をしょって、武者する奴があるかい」
竿立ちになった鞍の上から、振り落されまいと、も





がきながら忌々しげに叫んだ。
徒歩で迫ってきた敵武者も、
「背中の児をおろして、尋常に勝負せい」
と、槍も構えずに、まず喚いてきた。
「赤児に構わんと、突いて来なせえ」
遠慮は無用とばかり、半蔵は答えたが、ぐるっと周囲を取り巻いてきた敵武者は、
「そうは、ゆかんわい」とみな首を振った。
だから半蔵も途方にくれてしまい、
「この児を下へおろしたら……俺を仕止めた者が、後で拾うていって育ててくれるのかや」
と、前もって交渉してみた。すると、
「無茶こくでねえ」
まっ先に槍の穂先を突きだしていたのが、首をふって後戻りした。
仕方がないから半蔵は、朱塗の槍を構えた具足も良い武者を捉えて、
「お前さまなら身分がありそうじゃから、この赤児の一人ぐらいは、引取らしても喰わせるのは、たやすかろ」と相談をぶってみた。
しかしである。
「……連れ戻ってみい。儂が他所の女ごに拵えさせた隠し子と、間違われるではないか」
急いで朱槍をたて迷惑そうに尻ごみした。
「ほれ、ようく見なせえ、顔が似とらん者を、隠し子と間違われる筈もなかろ」
腰の下へ手をやって押し上げ、赤児の顔を見せてやったが、相手は手をふって、
「それ位のことで、己れの嫁女が、納得などするものかや」と、顔をそむけてしまった。
「待て。待て。それより、其方の首をよこしたら、駄賃代りに、その赤児を、そなたの女房の許へ届けてやろう。なら差支えなかろうが……」
頭成冑をかむった武者が、赤児と半蔵の顔を、等分に見比べながら鞍の上からいった。
「ほう。するって云うと、この半蔵の女房が逃げて行った先は駿河か。知っていなさるんか……のう居場所を……」
耳よりな話とばかり、今度は、半蔵の方が槍を立てて近よった。

「えッ、われが女房は逃げて居らんのか」
呆れた顔でその武者は目の玉をむいた。
「当り前じゃ。いくらなんでも、女房が居ったら、ここ迄おぶってはこんわい」
「それも、そうじゃが、その女房は母親の癖して、その子が可愛ゆうはなかったのか」
「こっちが、……それなら聞きたいわい」
半蔵は槍を両手で振りまわして喚いた。
そして「えい……もう、こうなっては仕様がないわえ。この児も一緒に首にせんかい。おまけつきじゃ」と囲んだ敵武者を睨みつけた。
「そんな赤ん坊の首など、届けたところで一文の褒美も出んわい。それより殺生なことを云わんと、その児の送り先など云うがよい」と、今川方の武者も持て余した。
「知らぬ」面倒くさいから半蔵は怒鳴った。
「はて、では、その子は誰が児じゃ……」
うるさく、また馬上から頭成冑が訊いてきた。いやしくも武者が背負っているからには、事によったら粗衣はきせてあるがもしや、殿様の子種かも知れぬと、怪しんで居るようだった。そこで、
「俺が女房だった女ごが、自分で、産み落したのじゃから、おおかた俺が仕込みじゃろに……」
と半蔵が口をへの字に曲げ、気張ったところ、馬上の武者は、
「……その背の赤児は娘じゃろ」と指さされた。だから半蔵が、
「如何にも」と頷いてやったところ、
「よめた。よめた。おのしに似た娘っ子では所詮、成人しても嫁の貰い手もないじゃろと、そちの女房は前途を悲観して逃げくさったのよ……」年かさの徒歩武者が囃したてた。
すると赤児とはいえ女の子ゆえ、面相のことを、とやかく云われては我慢もならぬと、「ヒイ」「ヒイ」いきなり泣き喚き、紅葉のような両手をつきだし背中で子供は暴れだした。
「なんで、子供を泣かせるような事をいう」
半蔵は、とびこみざまに、大口あけて笑っている徒歩武者の顎の下へ、もろに大身の槍をグサリと突きたて、片足あげて胸板を蹴ると、抉ってからサッと手前へ引き抜いた。





「おのれ、やったな」
と、血をみては笑っても居られぬから、
「くそッ、突き殺してくれよう」と口々に罵って、今川方の武者は槍襖を作った。
「さあ来い。殺せ」と半蔵も向った。だが、
「よせ。よせ。うっかり刺し殺し、誰の子か判らぬ背中の赤児を引取りなど出来るものか……」
と馬上の頭成冑がいましめた。
「そうか。こやつを倒すと、殺した者が赤児を背負わにゃあならんのか。ならやめた」と、せっかく意気ごんだ連中も、敬遠して後戻りをしだした。
「逃げるとは卑怯。返せ。返せ」
血飛沫を浴びた半蔵がやけくそになって、大声をはり上げ追駈けているところへ、
「ワアッ」と関の声をあげ、樅林の彼方から味方の徳川勢が一団となって殺到してきた。
「よくぞ半蔵、喰い止めたり」と口々に、三河武者は賞めながら八幡野を駈けて行った。

5

「槍一本で今川の大軍を釘づけにした」
と、半蔵はすっかり大評判をとった。そこで、
「槍の半蔵」と誰いうとはなしに高名になった。
あまり噂が広まったから放って置けなくなったのか、それとも他への奨励の為か、咎で知られた徳川家康の殿も、放ってはおけず、
「八幡野の武辺は格別なり」と、お言葉を出されたそうで、組頭から呼び出しがきて、
「五十貫に加増」と、とんでもない夢みたいなことになった。すると、である。
「五十貫も実入りがあるのなら、コブ付きでも、こちゃイトやせぬ」
と次から次へと色んな話がきたり、時には馴々しく体当りせんばかりに近よってくるのもいた。なにしろ女は嫁入りに真剣である。
半蔵だって、モテるのは悪い気もしない。
だから（ヘッヘ）とやに下ってはいたが、
「さて貰う」となると心配になってきた。
また口喧嘩などして、児ができてから逃げられたら（如何しようか）と想うと、やはり半蔵は気おくれし

てしまった。

なにしろ赤児は一人でさえ、米の粉をといて重湯を作ったり、何から何まで世話がやけるのに、これが二人に増え男手で抱えるとなっては、まったく身の毛もよだってくる。

それに一人なら、背にくくりつけも出来るが、二人になると、一人は腹掛けのよう、前へもブラ提げて歩かねばならぬ。だから、それを防ぐには、もし嫁とりをしても、まあ子の出来るようなことは慎しむしか途がない。

しかし、それでは、なんの為に嫁を貰うか、まるで画にかいた餅で、てんで味気なしである。

「止めにしとこう」と半蔵は決心をした。

だが、そう心を決めたところで、まさか門口に張り札をしたり、背に旗を立てて歩けるものではない。だから相い変らずボッサリして居ると、前と違って今度は、うるさいこと夥しい。

なにしろ八幡野合戦の前までは、半蔵が貰い乳のため長屋を廻って歩くと、

「女房どのに見限られて逃げられるとは、よくせき駄目な男じゃろ」と指をさされたり、

「……男として、あのほうが役立ずではなかろうか」などと蔭口をたたかれたものだが、当節は、女共の態度がてんで違ってしまった。

いつも乳を赤児に呑ませてくれる女などは勿論、歴きとした人妻なのに、

「お前さまも不自由しとられるのなら、お貸ししてもええ。なんせ、こないに乳袋を拡げて、お前さまには見せとるで情が移り、まんざら他人のような気はせぬで」などと親切にいってくれる。

そこで、せっかく使わしてくれるものを断わっては、後で恨まれもしようと、すすめられる儘に一度だけ、赤児同様に世話になったところ、

「もはや二人は他人ではないわえ。もし、うちの亭主めが討死しおって、この身が後家になったら、そのあとは、責任をとってお前が後添いにしてくれろよ」と云われてしまった。

だから、うっかり裏を返して二度目を借りたら、

(とても亭主が討死するまで待ち切れんで、すぐにも、去り状とって離縁する。ちゃんとお前の嫁にしてくれ





ろ)と云われそうである。なにしろ向うは三十貫、こっちは五十貫どりである。女は計算高いから、うっかり恐くて寄りつけもしない。用心して後はよりつかないことにした。

城内の曲輪長屋に住っている娘達も、最近の若いのは勘定高い。以前は、子持ちの半蔵をつかまえ「小父さん」などと呼んで、さも、むさくるしい中年男と鼻もひっかけなかったのが、近頃は、すっかり改心したのか、

「五十貫に出世される程なら、末は百貫武者にもなられましょうな」

などと近よってきてニコリとしてみせる。齢などいくら違っても構わんというのである。

そして触れなば落ちなんという風情を、これでもかと判らせたがる目つきや素振りである。

それでも、女に懲りた半蔵が知らん振りをしていると、中には家へまで押しかけてくるのまで現れた。そして、

(将を射んと欲すれば、その乗馬を狙え)とでも勘考してやってくるのか。

「おう、なんと可愛らしい」と頬ずりをしながら、赤児を抱きあげてくれるのは良いが、

「まあ、半蔵どのに生き写しでござりまするな」と、お世辞のつもりで喋舌るのも居る。

だから半蔵も臍をまげる。そこで、

「なんで、俺に似とるんかや」と云えば、

「父子ゆえ、似るが当たり前」と返答する。

「そうか。それでは、そなたも今は美しい顔をしとるが、その内に、そなたの阿袋どの同様にあない塩からそうな梅干婆になるんか」

まさか、(この児は俺のかどうか判らん)とも云えず、そう云う口のきき方で娘たちを片っ端から追払って、せいせいしていると、見かねて平四郎が、

「いい加減にさらせ」と意見をしにくる。

「……いやなこった」と半蔵が断わると、

「人間には汐時がある。今なら見どり選りどりじゃろが」と羨ましそうに云い、「持つものは、ちゃんと持ったらええ」と平四郎に説教された。

「……なんで嬶を持たな、あかんのじゃ」

癪にさわって、話の途中で半蔵が口を挟むと、
「身を固めて居らん事には、世間で信用されぬじゃろが……」判りきった事をきくと、平四郎は鼻の脇をかきながら教えたものだ。
「へえ、そうか……殿様は、竹藪も家来も同じに想うてござるで……弓の矢竹にしたり、喰うために竹の子を掘りだしても、雄雌さえ揃うとりゃあ、種切れせんと、なんぼでも出来てくると思うとりんさる。よって家来共も嫁さえ居りゃあ、いくら合戦で棄て殺しになされても、後から子供が次々と育って、又すぐ役だつと思うとりなさる。だが竹の芽は土ん中でひとり育つが、人間の餓鬼はそうはゆかん。もう俺はこりとるで、いかんわな」
相手が平四郎なので逆に半蔵が応酬した。
「だで、女房というものが入用だ。違うか」
「違う、違う。女房持ちなら世間が信用するというは……何んぞ、その男から迷惑を蒙っても、その損害の弁償を、男だけではなく女房の里の方にもさせられ、つまり二人分の安心が、何んぞあった時にはあるからじゃ。……が、他人の物を損させたり、よその銭を使い込んで迷惑をかけぬ限り、いずれは口やかましゅうなる女房など当人には必要ないわえ」
むきになって半蔵は唾をとばしたものである。
「そうか。おりゃ、うちの女房の妹を、お前に取持つよう、云いつかってきたんじゃがのう……やっぱし、あかんか」
平四郎は、がっかりしたよう引揚げた。
（あの分では、戻ったら、さぞ、あの嬶に叱られよう。不憫である）とは後姿を眺めながら想ったが、といって、一度や二度借りるなら、いざ知らず、ずうっと借りっ放しにする女房を、また改めて、もつ気などしない。そこで追っていって、何か云ってやりたかったが、半蔵は、平四郎よりわが身可愛さに止めにしてしまった。

6

八幡野と佐脇の合戦で敗退したものの、三年前までは東海道随一の太守であった今川勢は、そうやすやすと閉口たれはしなかった。
三河に睨みをきかしているのは、今川方の重臣小原





備後の守る三州吉田城。いまの豊橋の要塞であった。だから徳川方は一挙にここを屠ることにした。そこで出陣となった。
「其方は、八幡野に於て、槍一本を振り、味方の殿軍をば仕り、数十名の三河武者の命を助けたは奇特のことであった。ついては、このたびの吉田攻めにも、手柄をたてたら、更に重く、御褒美も頂けようと、いうものぞ……分かるな」
半蔵は酒井忠次から直接に言葉を掛けられた。もちろん当人は、
（どうも話が喰い違う。あの時、別に殿軍などしたのではない）と口から出かけたが、（迷いこんで一人で暴れ廻った）というより恰好も良かったし、（おおかた味方が追われ崩れ去った後へ、ひょっこり出てしまったから、そういう巡り合せになったのじゃろ）と半蔵は頭を下げた。
そして己れの溜場へ戻ってくるなり、今の話を手短かにしてから、
「俺がまた出世すると、女共がうるさいで、替りに、汝に手柄をさせてやろうわい」
と預けてあった赤児を受取りながら、平四郎に耳うちした。だから昂奮して、
「えッ本当か」と目の色をかえ喜んだ。
ところがである。
「……俺にも手柄をさせよらぬか。一揆以来とんと芽が出んと、難渋しとる」
げじげじ眉毛を蜂屋半之丞が突きだした。
針崎の勝鬘寺へ一向一揆のとき共に楯籠って、かつては家康の殿に敵対した仲間である。
「汝も、この際、目ざましい働きを見せんと恰好がつかんのう」
一緒に降服して帰り新参で奉公している間柄だから、半蔵も同情して口をきいた。
「よっしゃ」
と半蔵は赤児を、身体が動かしやすいようにいちびの樹皮で縒った木縄で背にくくりつけ、
「では攻めかかるべし」と、味方の陣貝が、
「ボオウ」「ボオウ」と響き渡るのを合図に、
「ウオ、ウオ」と槍を掴んで駈けだした。

敵将小原備後守は、かねて鉄砲を沢山に備えていたから、徳川勢が押寄せると見るや、

「近づけておいてから、一人残らず撃ちとってしまえ」とばかり、狭間口に揃えた銃口から、

「ドドドンドドドン」と一斉に釣瓶打ちをした。

「何んともならぬ。これでは近寄れぬ」

むかつく硝煙の匂いと、烈しい銃声に辟易して、平四郎が、まず悲鳴をあげた。

半蔵の背の赤児も、ビンビン飛んでくる銃弾に（これは難儀）とばかりワンワン哭きだした。

そのとき、横殴りの雨のような矢玉の中を、味方の本多平八郎が、馬をのり入れてきて、

「敵の鉄砲隊は表狭間だけぞ。裏へ廻れ」と大音声で呼ばわってきた。

「そうか。尻から突くか」

半之丞は周章てて駈け出して行ったが、

「此方が裏へ廻れば、敵の鉄砲も裏手へ移ろう。なら表大手が手すきになる。それまで待つべし」と平四郎は半蔵の肘を押えた。

「そうか」と動かずに居ると、案の定、銃声は、すこしずつ、こやみに途切れてきた。

今まで、ひっきりなしに飛んできて、立木の樹皮を裂き、木の葉を散らして降らせていた弾丸も、あまり響かなくなってきた。

「よっしゃ」と、黄ばんだ蔦かずらを引きずりながら、平四郎が、まず這いだした。

「よし、よし」と背中の赤児をあやしながら半蔵も、四つ這いになって叢へのり出した。

ずっと姿をひそめていて、気付かずだったが、城門の大手には、鉄砲で撃ちとられた味方の武者の屍体が、ごろごろ散乱していた。

「……あれが、ええ」

平四郎が伸び上って品さだめをしてから、馬のりらしい味方の武者の遺骸を指さした。

「何がじゃ」と半蔵が訊こうとした時は、もう蛙みたいな恰好をして、野小豆の小さな黄花が散らばった叢を平四郎は四つばいで進んでいた。

（子供に花を摘んできてくれるのか。それとも、味方の武者の巾着袋を黙って貰ってくるんか）





と、半蔵も腰を浮かし眺めていると、

「ありゃ」と思わず声が出てしまった。

平四郎は武者の肩にくくりつけてある赤い木綿の母衣を、背鎧の環から外していたからだ。

（ほう、うちの赤児が女だで、衣裳にせよと、剝いできてくれるのか。あの男は女房に散々仕込まれとるで、よう気がつくわ）

と半蔵は感心した。だが、そのくせ、

（この猿のような赤児に、あない真っ赤な物をきせたら似合うじゃろか）とも心配した。

そこで、赤布の母衣を丸めて口に咥え、時々はブスブス刺ってくる矢や、ビンビン弾ける鉄砲玉の間隙を縫って、やっと戻ってきた平四郎をつかまえ、

「いくら女の子でも、うちの娘は色黒じゃから、そない赤い衣裳は、どんなものじゃろ」

と、せっかくの好意を無にしては悪いと思ったが、遠慮して辞退してみた。すると、

「赤児じゃないわえ……半蔵が着るのよ」

と平四郎は憤ったように云い返した。

「……この俺が」

あまりのことに呆気にとられて口を噤むと、

「わりゃア児を背負うとるから都合がええ。この赤布を頭から冠って城門まで行くのよ。さすれば、まさか武者とは気づかず、（おおかた戦に追われてきた女子じゃろ）と番兵共は想い、不憫がって耳門などあけよう。そこへ俺がつけこみ入りをなし一番のりをするのだわ……」

平四郎はいってのけ半蔵はすっぽり頭から赤い布をかけられた。顔を出すと、

「達磨みてえでないか」と平四郎に叱られた。

なにしろ（手柄を立てさせる）と約束してしまった手前がある。諦めて半蔵は、女装したつもりで赤い母衣布をスッポリ冠り、

「泣けよ、哭けよ」と赤児を揺ぶりながら、平四郎の指図通りに城門めがけ、コラサコラサと走り寄った。

## 7

裏手へ廻った蜂屋半之丞は、城方の河井正徳に鉄砲をうちかけられ、ついに討ちとられ首を失ったが、表門から訳なく入れた久世平四郎は一番のり。半蔵も附

合いで、なんなく二番のりの功名をたてられた。
だから酒井忠次が、落城させた三州吉田城の城代に、家康の殿から任命されると、すぐさま二人に加増をしてくれた。そうなると、
「お前さまも、今では歴とした百貫武者じゃ。お住いとて、昔のような荒れ小屋ではのうて、こない冠木門もあるお屋敷じゃ」
と平四郎の嬶が、妹だという後家女をつれてきて、後添に貰えと、半蔵に直接に強談しにきた。
「なんせ、男の一人暮しは不潔なもの」
と、のっけから、昔からの馴染ゆえ、遠慮会釈もなく極めつけて掛ってきた。
だが、半蔵は（この嬶どのの血をひいた妹では、さぞかしロうるさい女ごじゃろ。それで前の亭主殿も嫌気がさし、死んだが増しと諦めて、それで討死したのと違うか）と思案したから、どう断ろうかと迷った挙句、まさか当人にけちもつけられないまま、
「この子が不憫で、二度目の嫁とりは出来申さぬ」とうつむいたきりで、返事をした。すると、
「……まあ、なんと、お優しい気持にござりましょう……決して私は継母などにはならず実の子と思うて、育てまする」
後家女は、せっかくの百貫どりの後添えの口を遁してなるものかとばかり、身体よじって人聞きのよいことを云った。姉の方も、
「これは昔から子供好きでな、今でも他所の童などと、遊んで居りまするがな」
と、つけたしを云って半蔵を覗きこんだ。
（よい齢をして子供が好きだとか、子供と遊んで居るというのは、大人のくせに頭の中が子供なみで無邪気なんじゃろ。なら意地悪したり、憤って出てゆく事もなかろう）
すこし心は動いた。だが内容は良さそうでも、外見が、あまりパッとしなかった。
（腹がへった時にまずい物なしと云うから、初めは我慢するにしても、ずうっと共に暮して、夜は暗いから良いが、なんでもない時でも顔を合せるには、この面相では如何であろう）
半蔵はちょっと尻ごみした。そこで、
「もうすこし、暇を下され」と、ていよく平四郎の嬶





と妹を、うまく帰らせた。
（どうせ貰い直すなら、若くて器量良しがいいが、それでは家事も委されまい。と云って家の中が仕切れるようなのは、もう可愛いげも失せたような女ばかり。ああ忠ならんと欲すれば孝ならず、孝をたてれば忠にならず、サテサテ嫁とりとは帯に短かく襷に長しだ）
と、また、その儘で一人暮しを続けると、
「逃げた女房に未練をだし、まんだ後添いを貰わんとは、余程、前の嬶どのに惚れとりんさるらしい」
とか、「焼野の雉夜の鶴。子供を思うてのやもめ暮しとは情のあつい男よ」いろんな取り沙汰をされた。
ところが、天正三年五月、半蔵が長篠合戦に出陣したとき、今度は背に児を背負って行かなかったから、敵の武田方の武者は誰も遠慮をしてくれなかった。そこで、馬の脚先で蹴り倒され、転げた所をザクリ、ひと突き刺されてしまった。
幸い命には別条なかったが、戻ってきて当座は、寝たきりで身動きもできなかった。
なにしろ厠にも立ってはゆけないから、その方の始末もあって、どうも他人では具合が悪い。
そこで半蔵は、かねて話のあった儘、放りっぱなしの平四郎の義妹を迎えた。
だが、器量のよくない女を、自分だけが貰うのは、片手落ちと思ったから、己れが育てた娘を、久世平四郎の跡取り息子の嫁に、行末はするよう交換条件をつけてみた。
「よかろう」と、平四郎は、自分が貰うのではないから、即座に承知した。嬶の方も、やっと妹の始末がつくのだから、
「こうなれば、一つの家のようなものじゃから、やったり貰ったりも内輪で済ませられて、手軽でよいわい」と賛成をした。だから二年たって娘が十五になると、久世の家へ嫁入りをして行った。
もう、その頃には、半蔵も、すこし跛はひいたが歩けるようになっていた。だから、小田原征伐のときも、どうにか馬にのって出陣した。
家康の殿が関東へ入国すると、
「槍の半蔵」として今迄の勤めを認められ、「武蔵比企郡三千石」いまの埼玉県吉見、滑川、川島の三村と小川町を所預に与えられ、「関ケ原合戦」のあとは、

遠江榛原郡で倍額の六千石。

のち家康の子の義直が尾張領主になると、家康から呼ばれて、

「……半蔵は三河の頃から、子守唄がうまく、合戦の折りでさえも、子を背負うて武者をした男じゃ。まだ義直は幼年である。うぬが子守唄をきかせて、お守りをしてやり、もしも逆敵でも押しよせようなら、確かり半蔵が背負って、関東へつれてくるのだぞ」

と云いつけられ、一万四千石に取立てられ、尾張へと移った。

さて、それから年移り変って寛文四年。

「夜ふけに通るは何者か、加賀爪甲斐か泥棒か。さては坂部の三十か」と江戸市中で怖れられた旗本白柄組の連中が一斉に捕えられて、党主水野十郎左衛門は切腹。加賀爪甲斐守は一万石の知行没収の上、配流処分。

その他近藤登之助、諏訪藤石ら一味の者は厳重に取調べをうけ、みな断罪をうけた。

ところが、その中の久世三四郎だけは、特に処分保留の沙汰がでて、身柄を尾張藩へ預けられた。助命の沙汰がでたからである。と云うのは、

「てまえの祖父渡辺守綱は『槍の半蔵』と異名をとりし若年のみぎり、祖母に出奔をされ、残されし一女を、何人の種か分明せぬ儘にて成長をさせ、これを、てまえの父の久世平三郎へと嫁せましたるところ、その間に、もうけられたるてまえをば、あろうことか父の平三郎が『畑が畑ゆえ、其方は、真実、わしが蒔いた種かどうかは判然とせぬ』旨を日夜申し居り、てまえとて、産れ落ちたる後は物覚えも有りまするが、なんせ腹の中へ仕込まれました時までは、自分の事とは云いながら、てんで毛頭なんの記憶もなく、まことに迷惑に存じ、ついに非行の途に走りたる次第にてござりまするが……お咎めは、今は亡き槍の半蔵めに下されませ」と、あく迄も久世三四郎が主張したからだった。

「槍の半蔵」と云えば徳川家の基礎を守った名誉の家柄である。その男が、女房に逃げられ、苦労して育てた娘の産んだ児では、いくら三四郎が非行少年になったからといって、罰するわけにもゆくまいと、時の大老榊原忠次が、特に助命の裁断を下し尾張へ預けることにしたのである。



# だるま武者

〈横浜一庵〉

# 1

関東者は気が荒いと云うが、夫の彦八は、また格別だった。

何かすると、すぐ「この莫迦が」とか、「莫迦ったれめが」と、罵倒する。しょっちゅうの事ではあるし、まあ口癖なんじゃろとは、想いもする。だが、頭ごなしに、そう浴びせかけられて、心地が良い筈はない。だから咲は、いつも怒鳴られるたびに厭やだと想った。

つまり嫁にきて一年もたつと、

「こらっ」とか、「おい」という呼びかけの声を聴いただけで、ぞっとしてしまい、返事さえもできずになった。そこで黙りこくっていると、

「これ咲、何度よんだら聴えるんか」

夫は、又しても癇癪を起してしまい、自分の方から側へよってくるなり、

「この莫迦め」

と云うなり平手打ちがピシリと頬にとんでくる。そのとき、うかつに顔をあげようものなら、返す掌で、またひっぱたかれる。

だから咲は、いつとはなしに夫が近よってくると、無意識に肘をあげて手で顔を庇い、袂で防ぐ仕草を覚えてしまった。

すると彦八も負けずに対抗するごとくに、平手打ちは止めにして、栄螺の殻のような拳固で、頭の上からぶん撲るようになった。

散々に、打擲したり蹴倒して、自分の方が疲れてきて手を休めると、彦八は、いつも、

「可愛げのない女じゃ」と口を尖らせた。そして

「俺が呼んだのは、袂の綻びかけを見つけたゆえ、縫わせようと思ったまでよ」

と始めに話を戻し、改めて袂の貝口に目をやって、乱暴して自分で綻びを大きくしたのを見つけようものなら、それをも咲の所為にして、

「呼ばれたとき、すぐハイと返事をせなんだゆえ、見てみい、こないになったぞ。どうしてくれるか」と突きつけては、また憤りだし、

「はい」と咲が、うっかり首を伸ばそうものなら、むき出しにした頬っぺたを、見逃して堪るものかと、発





止とばかり殴り直す。

あまりの口惜しさに、咲は、しまいには、いつもヨヨと声をあげて泣き崩れてしまう。すると彦八は、きまって鼻白んだ声で、

「俺だとて撲りとうて殴っとりゃあせん。もそっと真っすぐになれと、曲った根性を叩きのめし、直そうとしとるのよ」という。

(地べたへ打ちこんだ杭ではあるまいし、曲りを直そうと木槌のような拳固で殴るとは、なんじゃえ)と、咲は、ますます癪に触る。

といって、口返答をしようものなら、又しても、殴られるは目にみえている。なのに何も好きこのんで痛い目をみる事もない。

だから、つい、口先だけではあるが、

「済みませぬ」と尤もらしく云ってしまう。

すると彦八は、まるで一番乗りをした武者のような、勝ち誇った声を響かせて、

「判ったらええんじゃ。これからは心を入れかえろや」と他人事だと思って、勝手な口をきく。

だが人間の心なんてものは、鍋底を灰で磨いて洗い落し、さっぱりさせるようには入れ換えられるもんじゃないわえ。と咲は想う。

が、そない事を口にしたら、せっかく治まりかけたのが、又ぶり返して撲られるだけ損である。だから逃げをうちたい一心で、ものはついでと、

「改心しまする」と手をついて咲は謝まる。

すると夫は待っていたように横柄な口で、

「今おのれの口から申したこと、忘れまい」と、言質をとって、やれ肩をもめの、足腰をさすれと、それから言いたい放題の注文をつける。

それに対して、何んでも「ハイハイ」と、こまめに云いなりになって居れば、機嫌が佳いのだが、すこしでも顔を硬わばらせると、

「仏頂面をすんな」とポカリとやられる。だから咲は、厩に繋がれている駒の方が、頭や顔でなく尻を叩かれるだけだから、まだ増しとも考えていた。

天正四年の桜が敢って、菜の花が黄色く咲きだした頃。

陽気が急に汗ばむようになって、咲は何かしらカツ

カと血の道が頭へ昇っていたようにも想うが、不意にボカンと夫に撲られたとき、つい、

「何を、なされまする。理不尽な……」

と、嫁いできて三年目。虫の居所が悪かったから、初めて武者ぶりついてしまった。

夫の胸倉に取りついてから、咲は、

「しまった」と後悔した。だが、もう後にも引けず、夫の襟をひっぱって太い猪首を押さえつけた。

「苦しい、よせ」と、不意をつかれた夫は狼狽して叫んだ。

だが手をゆるめたら、あべこべに自分が扼殺されるとばかり、咲は必死になって、息の根も止まれと力任せにグイグイ締めあげた。すると、

「いい加減にせぬか。この莫迦が……」夫は、と云いざま立ち上るなり、まるで毟りとるよう咲の躰を突き放し投げつけた。

「やられましたな」と改めて組みついて行ったところ、今度は、あべこべに襟首を摑まれ、二三度振り回されて放り出されてしまった。

腕力では、背丈の違う夫に、とても叶わぬと思い知らされた。咲は癪にさわってオンオン哭きながら、面当てに咽喉でも突いて死ぬ真似をしようかと思った。

そうでもしなくては、恰好もとれなかったし、又、今の事で、ぶん殴られ直すのは厭やだったからである。

こばしりに用箪笥に駈けよった。引出しから短刀を取りだした。掌が汗ばんでいた。

だから袂で払って鞘を抜いた。初めは狂言のつもりだった。が、青白い刃先をみると、思いきり咽喉へ咲は突き立てたくなった。

あけくれ夫に莫迦呼ばわりされて、お寺の木魚みたいにポコポコ打たれているより、死んだ方が増しだと、そんな気持に誘われたのである。

「さらば……」

と自分で、自分に云ってきかせた。屈みこむように背をまげた。頸へ見当をつけた。

グサリと上へ突きあげた。が、その時、

「待てえ」と周章た声で、夫が喚いた。

羽がい締めに背中から抱きしめられた。

と思ったら、短刀をもぎ取られていた。





夫は抜身の刃をもった儘で震えだした。

拳固で撲られるなら痣だけで旧に戻る。

だが刃物で叩かれては貌に傷痕が残る。

咲は今、死のうとしていた事も忘れた。

狼狽して顔を護ろうと袂を重ね庇った。

用心して顔を跨倉へ隠すように伏せた。

しかし準備してるのに撲ってはこない。

今か今かと待ちわび張り合いが抜けた。

そこで咲は首をひねり袂の隙で覗いた。

すると意外にも、夫は頭を下げていた。

「如何されましたえ」と、仰天する咲に、

「出陣のふれがあったに仕度をせぬから、つい撲ったところ、其方は、これ迄の俺の腑甲斐なさを諫めようと武者ぶりつき、拳句のはては、死んでまで俺を励まそうとする。……いやまことに済まん。今度こそ手柄をたてる……それで、量見してくれろや」と夫は誓ったのである。

「へえ」咲はただ呆気にとられてしまった。

## 2

天正四年五月七日の大坂合戦は凄じい激戦だった。

石山本願寺の門徒衆一万五千に対して、お味方は僅か三千。そこで御大将の織田信長さまも馬をすて、槍をふるって先手の足軽衆の中にまじって突入され、肩や肘に矢傷、刀傷。脚には鉄砲傷まで受けられ、血みどろになって、乱髪のまま、天王寺砦に、ご自身で一番のりをなされたという。

夫の横浜彦八も、やはり、ここを先途と働いたとみえ、六月七日に安土へ戻ってきた時は、頬の肉を槍で削がれたと黒い膏薬をべったり貼りつけ、二の腕に矢傷の痕があった。

もともと織田さま御家中というのは、尾張衆、次に伊勢、近江衆、その下に美濃衆、摂津河内衆という区別がある。それなのに夫は、武蔵の国に近い相模神奈川在の横浜村の出である。

だから本来なら小田原の北条家へ仕えるべき筋目なのに、海路堺へ流れこんできて、そこから奉公にあがった新参者。故に云わば他所者で、あまり親しい友達もない。だから、これまでは出陣しても、認めてくれる者もいないから、碌に手柄も立てなかったらしい。

しかし今度は、おん大将の信長さまが自分から先頭にたって、石山の大坂城の戸口まで敵を追いこみ、二千七百も首とりした戦だったから、夫の武功も文句なしに認められた。

「喜べ。一躍、六百貫どりに昇進じゃぞ」

と勇んで、加増の差紙を頂戴してきた。

働いて、それが賞められたとなると、嬉しいものらしい。夫の彦八は張りきった顔で、

「住吉浜手に新しく作られた砦へと差図じゃったが…彼処より、もっと稼ぎの出来そうな中国攻めの羽柴筑前さまの寄騎を、わしゃ願ってきたぞ」と、すっかり意気ごんだ。

「そりゃ、よろしゅうございましたな」

咲も、この分なら、もう前のようには、打擲する癖も、さぞなくなるだろう、と吻っとして歓んだものである。

しかし人間の性分などというものは、多少の出世をしたからといって、どう変るものでもないらしい。六百貫になって、武者長屋も弁天崖に近い方の住居に移ったから、男女の奉公人を傭入れたところ、夫の彦八は、直接には叱言をいわず、何かあるたび、

「うぬが莫迦じゃから」とか、「教えようが悪いからじゃ」と、奉公人の失敗をみんな咲の所為にし、頭ごなしに怒鳴りつける。

勿論、口より手の早い男なので、文句をつける前に、二つ三つは先に撲られていた。

口惜しいから殴り返すなり、取っ組んでやろうとは、そのつど想うが、前に振り回され投げ飛ばされているから、咲はそれに懲りて手出しもできかねた。

だから年が変って二月。夫の彦八が羽柴筑前の播磨衆に加わって、紀州雑賀攻めに出陣するとき、かねての思案を実行してみた。

合戦に送り出す際、矢玉よけの呪いに火打石で、背中から浄める慣しがある。

咲は、いつもは頭の先から両肩へかけ、指までカチカチと火花を掛けてやるのだが、わざと右手だけは知らぬ顔して省略した。

なにしろ、すぐぶん撲ってくる憎ったらしい右手である。矢でも鉄砲玉でも当ってしまうがよいわえと、常日頃から怨んでいたからだった。もちろん夫の彦八はそれと気づかず、

「留守中は、火の用心など、しかとせいや」

と相い変らず、ふんぞり返ったものの云い方で、自慢の鹿毛の二歳駒に、よいしょと跨がると、咲に一晩中磨かせた兜の銀の前立を輝やかせ、得意げに出陣していった。

二月十三日に淀川を押し渡った織田勢は、八幡から若江まで進み、羽柴勢は十八日から志立の山より雑賀へ攻めこみ、小雑賀川の岸に柵を急造して迎える敵と、遭遇して大激戦をした。

が川岸が高くて昇れず、ひとまず引きあげて裏手へ廻り、紀の川口から突入したと、伝わってきた。なにしろ雑賀衆というのは、鉄砲を多く揃えていて、石山本願寺から火薬を補給され、双方銃撃戦で、お味方の損害も、かなり夥しいと、咲の耳にも入ってきた。

「大丈夫じゃろか」と、やはり夫の身が案じられてきた。すぐ撲りつける右手は憎かったが、嫁いで三年もたつと、女夫の仲として、やはり夫の身体の中には好もしい感じの所もあったせいである。

右手を失うてしもうたら、左手だけでは槍も振りまわせまい。そしたら、命までとられて、今頃は首をなくし、もう戻って来られぬかも知れぬと気にした。そうなって、思いつめると、

「とんだ虻蜂とらずを、してしもうたわえ……」

咲は歎き悲しんだ。こんな事なら、たとえ撲られても、やはり生きていて欲しいと、そんな神頼みする心地にもなった。

三月二十七日になって、信長さまは安土へ戻ってこられたが、羽柴勢は、丹羽、明智勢と共に、まだ向うに在陣とかで、瓢の馬印を立てた秀吉さま軍勢が、ようやく帰ってきたのは、もう椿の花さく五月の半ばだった。

「ご無事じゃ。うちの旦那さまも戻られた」

と、大手口へ見にやった婢女の口から、夫の息災をきかされると、咲は、身体中が疼くように熱くなった。そのくせ、眼からは冷たいものが噴いて出てきた。

だから（なにも女だとて泣けてくるのは、口惜し泪ばかりとは限らないもの え）と、自分でも変な気持になりながら、眼を赤くして咽び哭きをしていると、

「おう。戻ったぞ」と、塩辛声が聴いてきた。

咲は急いで出迎えに表へかけよると、夫は丁度、馬から降りるところだった。

だが、いつもの彦八なら「こらしょ」と掛け声をかけ、鐙の足を突張って鞍から飛びおりる筈なのに、脇武者に助けられ抱えて降されている有様だった。そこで咲は、

（やはり、右手を失ってきたのか）と想った。

しかし、やっと地面へ降りた彦八には手は二本ともついていた。その換り、右脚が股の付け根からなく、空胴になった枯れた幹木が、義足に嵌められてくくりつけられていた。

「鉄砲傷が膿みおって、ばっさり切ってしもうたわい」と近よる咲の肩に掴まりながら、彦八は、手短に怪我の模様を口にした。

（はて面妖な、なんで右手の代りに、右脚が亡くなったのじゃろ）と、咲は夫を抱えるように運びながら、そればかりを不審がった。だが、暫くして、やっと思い当った。

（出陣のきよめ火をカチカチやった時……踏みだしかけた彦八は、武者草鞋の緒が指股に痛かったのか、右足の爪先を直そうと手を伸ばしていた……だから背後の咲は、右手の浄めを省くため、うっかり右脚も、ついでに抜かしてしまったようである）

そうだったのかと、気づいたその拍子に、

「ああ」と咲は、思わず呻めきをあげた。

すると彦八は、何かに咲が蹴躓いた、とでも勘違いをしたのらしく、大声で、

「こらっ、ぼやぼやすんな。気つけろ」

いきなり怒鳴りつけ左手で拳固を作り、ゴキンと一発力任せにぶん撲ってきた。

「またやられたえ」と火花の散った眼で、咲は今度は口惜し泪をボロボロ流した。

3

片脚を失った埋め合せか、四百貫の加増が貰えて千貫武者になったから、身の周りを堅めさせる脇武者も十四人。足軽小者三十人と、思いきって人集めをした。

すこし人数が多すぎ扶持も嵩んだが、身体の不自由な夫に、もしもの事があってはと、咲が気遣って召し抱えたのである。

しかし、安扶持で集めた家来共ゆえ、大半は住込みで、食事つきである。だから咲は、昼日夜あけに起きだして、婢女共に雑炊をたかせ、菜魚の買出しにも自分が出むいた。

なにしろ何十人という賄ゆえ、漁師や百姓から、じかに値切って纏めて、購入しなくては、とてもやりくりがつくものではなかった。

すると、夫の彦八は機嫌を悪くして、

「なんで、そないに家をあける。買出しなどは、奉公人にさせたらよい」と叱りつける。

が他人委せでは、五日分の惣菜代が二日位で使われてしまう。とても算段が出来ない。

仕方がないから、夫の身の廻りをみさせるように、渋皮のむけた小女を一人つけておき、自分は、せっせと、買出しと飯拵えにあけくれしていた。

ところが翌天正七年。播州三木城攻めに、羽柴勢が出陣すると、夫の彦八も組下の一人として、出動する事になった。

だが夫は、なにしろ片脚がない身体である。

もし馬の背から転げてはと咲は心配した。

そこで鞍の背に連雀板を立てさせ、それに夫の身体を、落ちないように確かと結えつけ、

「みな、よう庇って守るのじゃぞえ」

と家来どもに云いつけた。だが出陣の打火は自分では縁起が悪いと気がさし、小女を、

「……これ、竹や」と呼んで火打石を持たせた。

さて五十人からの男共を一度に送り出してしまうと、まるで屋敷の中は、がらん洞である。散らかしっ放しの後片づけが済むと、

「やれ、やれ」と咲は、まるで自分の身体を投げ出すように、濡れ縁に腰かけた。

そして、見るともなしに八ツ手の葉の茂みに眼をやると、竹がうずくまっていた。鈴かけの樹蔭に邪魔され、背中だけが視えた。

叢に散らかしていった芥でも拾っているのか。それとも雑草でも引き抜いて居るのかと想った。だが、それにしては、すこしも身体が動かないのが変だった。

だから咲は、気になって腰をもちあげた。つるつる

する八ツ手の葉を掻き分けるようにして近よった。すると気配に面喰って、竹はこそこそ逃げ出そうとしたが、中腰の儘、口を両手で覆って、又うずくまってしまった。

「どうしたのじゃえ」

と、咲が側へよってゆくと、竹は叢にうつ伏さって、今度はヒイヒイ哭きだしてしまった。だから声をかけた咲の方が狼狽して、

「泣かんでもええ」と訳も判らずただ慰めた。

年が変ると竹の下腹は目にみえて大きくなってきた。胸許を拡げさせると、薄っぺらな胸板に、樹の瘤のように乳袋が瘤っていた。

「出来たものは仕様がないが、誰が児じゃ」

咲は、やさしく聞いてやったつもりだが、小女は、白い眼をむいて睨み返し、ただ首を振るきりだった。いくら問い詰めても、口をあこうとはしなかった。

(男共は残らず三木城攻めに出かけている事ゆえ、まあ戻ってくれば相手も判ろう。誰かは知らぬが、子まで出来たことゆえ、屋敷内に小屋でも建てさせてやり一緒に娶せよう)

と咲は祝言の取持ちをしてやるつもりで、

「あの気難しやの旦那さまの世話を、ずうっとさせて気骨を折らせ、そなたには、厄介をかけている。その埋め合せに子供の父者が戻ってきたら、われらが仲人になって盃事をさせて遣す。すこしも案ずるでないぞ……」

励ってやって、咲は自分の布子の中で、派手になった物を選りだし、竹の嫁入り衣裳に呉れてやったりした。

ところが、三木城に立て籠った別所一族は、仲々に手剛く防戦し、いくら待っても落城の模様は見えなかった。だから待ち切れんことになって、竹の子供はとうとう外へ出てきてしまった。

男の子であった。咲は、仕方がないから、形ばかりでも、お七夜を祝ってやり、

「もう、こうなっては、包み隠す事もなかろう。子供の名づけにも困るゆえ、そっと、父親の名を教えたがよい」と、竹をさとした。

だが竹は、相い変らず怨めしそうな顔をして、首を





左右にふるきりだった。

そこで仕方なく咲は、住込みで置いている三十人余りの若者どもの顔を、一人ずつ瞼に浮かべて、赤児の顔と首実検をしてみた。

だが産れて七日目では、まだ人間よりも野猿のような面魂である。次々と、扶持高の順で男共の面相を並べていっても、ぴったり該当するようなのはなく、しいてこじつけて考えれば、これまた似たようなのが何人もいすぎた。

それで咲は、血気盛りの若者を数多く住まわせていたゆえ、竹に係り合ったのは一人ではなく、こりゃあ寄り合い世帯かも知れぬと考えた。そこで竹も、どの男の種か判らなくなって、云えといっても困惑して黙っているのだろうと、ようやく納得をした。そこで、

「……女ごの身体というは受身のもの。一人の赤児に、心当りの男が何人もいては、どれがどれやら、そりゃ今さら品定めもしにくかろ」

すっかり同情して、

「なんなら、この屋敷内で産れた児ゆえ、わしが子にしてもよい」とまで云いきり、良い所をみせてやった。

すると竹は、その話を真に受けたのか、自分の身体が本復して働けるようになると、赤児を残したまま、さっさと何処かへ行ってしまった。

(竹は多分、何人もの男の中から、一人だけ選んで夫にするのは、不公平で心苦しいのじゃろ)

と咲は想った。そこで、同情して自分で育てることにした。

だから年が変って天正八年。ようやく三木城が落ちて一年ぶりに凱旋してきた夫に、

「……竹が産みました子供、私が引取りました」と、乳人に抱かせたのを見せたところ、

「勝手な真似をすんな」

とばかり、又しても久しぶりに鉄拳をゴインと見舞れた。

出陣中は撲られていなかったから、一年ぶりである。痛かった。おのれと癪に触った。

だが夫の留守中に、父なし児を屋敷内で産ませ、しかも、その母に逃散されたとあっては、叱られても仕様のない自分の落度だと、思い直した。そこで咲は赤児は下げさせ、

「てまえの家事不取締で、なんとも申訳ありませぬ」と両手をついて詫びを入れた。

すると夫の彦八は義足を投げだし、柱に背を凭せかけたまま、陽やけした顔から、

「こっちゃ来い」と大きな口をあけた。

「はい」恐縮しきった咲が膝寄ると、

ポカンと、いきなりまた拳固がきた。

そして、続けざまに、打擲した後で、

「この、やきもちやきめ。なんで子供をとりあげ、可哀そうに竹を追い出したぞ」

肩で息を切らしながら夫は叱え喚めいた。

咲も初めは何んの事か、訳が判らない儘、

「申訳ありませぬ」と謝っていたが、やっと、どうやら話の筋がのみこめてくると、

(なあんだ。ならば何も撲られる事はない)と、横飛びに逃げだしてしまった。

## 4

彦八が、自分で、己れの不運を託ちだしたのは、天正十一年の峯合戦の後である。

その前年の六月に本能寺の変があってから、羽柴秀吉は、信長の第三子に当る信孝を滅ぼすべく、兵を近江に入れ、伊勢へと進めた。

亀山には滝川一益の家老佐治新助、峯城には滝川一益の甥の儀太夫が立て籠っていた。

峯城を羽柴方は、秀吉の弟の秀長が大将で正月から攻めたが、四月になっても落ちなかった。

そして、この合戦で彦八は城門の近くまで進みすぎ、とびだしてきた城兵に囲まれ、ついに薙刀で、一本しか残っていない左脚まで掬うように、バサリと落されてしまった。

幸い鞍壺に胴が縛りつけてあった。そこで落馬はしなかった。が、気は失ってしまった。

すうっと吸い込まれるように昏迷してゆき、次第に何も彼も覚えなくなった。しかし、

「死ぬんじゃ」「死んでゆく」とは、自分で最後まで、よく判っていたような気もした。

ところが何日かたって目がさめると、生きていた。家来の者が手綱を曳っぱって味方の陣へ連れ戻り、脚の切口を上へ釣りあげ、雪の下草の揉んだのを一杯の





せて、血止めをして縛りつけたところ、手当が早かったせいか、もう死んだ筈なのが蘇生したのである。

戦況は芳しくなく、敵方は落城しないから、金掘り人足を集め、地下から坑道を掘って、峯城の石垣を崩す攻城中だったが、それでも彦八には、

「ひとまず引揚げて静養するよう」と、在荘の賜暇がでたので、たち戻ることになった。

しかし、帰るといっても、去年の六月十五日に安土が焼けてからは、今では寄騎の身分から羽柴家の家臣になっている彦八の屋敷は、姫路の曲輪内にあった。

家来共は板切れを集めてきて担ぎ輿を作った。そして、もう馬にも跨がれなくなった彦八を、そっと置物のように載せて運んだ。

伊勢から姫路へ出るには、鈴鹿峠の坂下から大津へで、賑やかな京、大坂を通らねばならぬ。だから道中、脚なしを覗かれぬよう、布を腹から腰巻のように捲かせ、彦八は胸をそらせ、輿の木枠の左右に摑まっていた。

そこで、すっかり気疲れで、背と腰を痛くしてしまい、姫路へ戻るなり、どっと寝ついてしまった。

が、幸い戦は、伊勢路もかたづき、四月二十一日の賤ヶ岳合戦も味方の大勝利となり、柴田勝家も、織田信孝も滅すことができた。

「勝戦祝い」というので秀吉側に奉公の者は、みな大盤振舞の加増をうけた。

横浜彦八も大和木津で五千石を拝領した。

だが両脚をなくしている事ゆえ、安気に引退して暮すようにという、指図も貰った。だが、

「とんでもない。ご加増を賜ったのに、そない事はできませぬ」と、彦八は鎧をきて輿にのると、大和郡山城へおもむき、主君に当る大和大納言羽柴秀長の前にでて、

「まだ、まだご奉公ができまする」

と、意気込んで談じこむように言上した。

だが、ずうっと寝ついていた彦八は、顔中が熊笹のように髭だらけだった。そこで、大納言は、しみじみ顔を眺めながら、

「うん。髭達磨じゃ」と感心され、「そないに申すなら、殊勝な心掛への褒美として、あと二千石をふやしてやろう」と又しても加増された。

まるで五千石が不足で、面当てに顔出しをしたような恰好になり、有難くは、お受けしたものの、彦八としては、何か不本意な心地で戻ってきた。だから、帰ってくるなり、

「ご加増を頂いた分だけは、これ迄の家来共に、みな分ち与えてやってしまえ」

と咲に云いつけた。すると、滅相もないといった顔を、咲は露骨に見せながら、

「これからも、どんどん、お高が増えてゆくのなら…家来共によく致し励みを与えるも、そりゃ、よろしゅうございましょうが、両脚のない今のお前さまに、もはや、そのような斟酌は要りますまい」と首をふった。

そして「ああ……お前さまが片脚なくし、千貫取りになられたとき、どうしてでもお前さまの身を護って進ぜようと、わたしゃ自分の着る物、喰う物まで詰めて、五十人からの者を召し抱え……その、やりくり算段に自分で暗い内から百姓家を廻り、買出しに歩きましたんえ。それなのにお前さまは、その留守中、わたしと云う女ごに苦労させながら、有ろうことか小女に手をつけられ、子まで作られました……」

と、また、いつもの愚痴を始めだした。

「同じ事を繰返し、そう度々申すな。聞きあきたわ。それより……それとこれとが、何んの関係がある」と彦八が覗み返したところ、

「……散々もう骨折りはしましたゆえ、これからは私も自分の後生楽をと想いまする。よって御加増の二千石分は、ひとには呉れてやらず、この私が、うまい物を喰べ、手ざわりのよい唐絹や綾の練布など求め、身心ともに保養を仕りまする。よもや、ご異存ございますまい」

と喰いつきそうに云った。

堪りかねて彦八が、

「こっちへ来う」と云ったところ、

「誰が、撲られに側へ寄って行きまする……口惜しかったら、ここまで這ってきなされ」

と憎まれ口を叩き、彦八が、握り固めた拳固のやり場がなく、顔を真っ赤にして、

「おのれ……」と、りきんで肩震わせれば、

「ここまで来なされ、甘酒進上」





と三十女が舌をべろりと出し逃げてゆく。

(昔は、あないあざとい事はせなんだ。女というは、年をとるに従って、顔ばかりでのうて心までが、可愛気を失うものじゃろか……)

と忌々しさに、彦八に歯ぎしりをした。

さて興にのって外へ出る時は、あっちこっちと指図をすれば、家来共が云いなりに担いで行ってくれるが、家の中では、そうはゆかない。一人で放って置かれては、彦八は蛙のように、前肢に当たる手で動かねばならぬ。

しかし蛙とは違って飛べはしない。なにしろ胴を曳きずって歩くのだから、肩に全身の重味が掛ってくる。だからしてめりこむように肩が凝る。

すこし這い廻ると、すぐ吐き気さえしてくる。

それに困った事に、何かのはずみで仰向けに転倒すると、一人ではとても起き上れない。

往生して「咲、咲」とよぶのだが、なにしろ昔から返事をしたがらない女なので、いくら彦八が声をかけても、知らぬ顔をされる。

ひどい時は、引っくり返った儘、亀の子みたいに半日も放って置かれる。とても堪らぬから、妻の咲が顔を見せてくれたとき、

「なんとか、身の廻りの世話をする者を、よこしてくれぬか」と、頼みこんだところ、

「また性懲りもなく小女に手をつけられる御存念か…もう、その手は喰いませぬえ」

と、にべもなく拒絶されてしまった。

しかし、それでは不自由で何んともならない。だから折を見ては、また頭を下げ、

「なんとか、年寄りの者でもよいから……」

と懇願してみたが、咲は顔を横向けた儘、

「小女でも婆でも、女に変りがあるものか」

と嘯き、挙句のはては、隙をみて彦八の胴体をひっくり返し、小娘のように手を叩き、

「立ちなされ。立ってみなされ」と毒づいて、さっさと行ってしまうような事さえあった。

## 5

しめきった儘の黴臭い部屋は饐えていた。

彦八は、その中に閉じこめられて暮した。
何年も陽の目など仰いだ事とてなかった。
見っともない故、外へは出なさいますな。
奉公人も他人ゆえ、姿を見せられますな。
と、きつく咲から申渡されたのである。
それでも初めの内は彦八は這出してみた。
すると咲は怒って青竹の長いので叩いた。
遠くからやられるのでは抵抗もできない。
それにもっと困るのは咲の仕置きである。
投縄をかけ引っかけると宙釣りにされた。
納戸の梁にぶら下げられては手も出ない。
ヒイヒイ哭いて謝るしか、手段とてない。
だから何んでこない苛めるかとも訊いた。
すると咲が、せせら笑って云うことには、
おとなしいおぼこの私をこないしたのは、
そりゃ、みんなお前が所為じゃ。と罵る。
俺が手が早く散々打擲した仕返しなのか。
と彦八が聞き返せば、咲は首をふりふり、
撲られた痛みなどは一時のもんじゃがと、
怖い顔をして穴のあく程に見詰めてくる。
そう云えば三木攻めの頃迄は優しかった。
と彦八も、昔の咲のことを沁々と考える。
……なにしろ、女房などというものは、
嫁いできた当座は、夫に尽す気でいる。
なにも喧嘩しようと一緒にはならない。
そこで初めは良かれと想い心もくばる。
せい一杯に仕えようと気構えもみせる。
咲とて同様、初めの内は良い女だった。
あの儘だったら死ぬ迄味方の筈だった。
ところが人が変ったように変化した。
あれからは、まるっきり敵でしかない。
世の中で何が不運といっても限がある。
己が女房を敵に廻す程不仕合せはない。
どうして、あないに変ったか判る。
他の女に手出しをしたのが原因らしい。
男にすれば軽い気持の浮気沙汰だった。
咲も当座は過ぎた事と憤りもせなんだ。
だから彦八も格別気にも止めなかった。
しかし咲は内心すこしも忘れはしない。
どうもあの時から復讐を誓ったらしい。





達磨姿で戻った日から責め折檻である。
こない非道い目に逢うと判って居れば、
あないちょっかいは出さなんだものを、
と今さら悔いた処で、取返しはきかぬ。
情けなさに舌でも噛もうかと決心した。
そんな矢先、朝鮮征伐の噂が伝わった。
出陣させてくれぬかと彦八は懇願した。
初めは咲は鼻で嗤い相手にしなかった。
だが数日たつと、宜しいと承諾をした。
どうせ征っても役立たずに決ってるが、
また心根を賞められて加増かも知れぬ。
と胸算用し、承知してくれたのらしい。
久しぶりに陽ざしを浴びた彦八は、目まいがして、
まるで蛞蝓のように身体を竦めた。
だが、怖ろしい咲の許から脱出できて、蘇えったような心地になれた。吻っとした。
長年にわたって納戸部屋に閉じこめられ、頭に湿疹がひろがっていたから、薬を塗るため坊主頭になった。ついでに名前も、彦八を改め「横浜一庵」と換えた。
しかし大和の本陣へゆくと、一庵が引籠中に、主君の羽柴秀長は亡なっていて、その養子の豊臣秀保の代になっていた。だから、
「せっかくじゃが、その体で奉公はなるまい……まあ戻るがよい」と素気なく訓された。
「とんでも有りませぬ」
家来の肩に背負われた儘、一庵は血を吐くような声で叫んだ。そして、
「槍をふるって武者働きは、出来ませいでも、輿に鉄砲を四方に結えつけてござれば、撃って撃って撃ちまくり、武辺を海外に輝やかせまする」と、泪まで浮べた。必死に頼んだ。
一庵にすれば家へ戻されると、その昔の浮気の咎が祟って、納戸へまた放りこまれると、思わず泣いたのだが、それとは気付かぬ秀保は、
「その体で渡海して戦をしようとは健気ではある…」
と、すっかり感心をしてしまい、
「武者たるものは、たとえ、そのように両脚をなくしても、それだけの心得がなくては叶うまい」と自分まで泪ぐんで話された。

しかし傍に控えていた側用人頭が、
「これ、これ一庵。よく聞けよ。われらが太閤さまの御命令で近く九州へ発足するのは、戦をしにゆくのではない。名護屋浦に太閤さま御在所の城を普請に行くのじゃ」といった。
「えッ」と一庵は仰天したが、それでも家へ送り戻されては、これまた難儀であると、
「……城普請の土運びは出来ませぬが、帳面付け位ならば、この両手で出来まする」
殿の御前ゆえ、辛じて一人坐りさせられた一庵は、双方の手を大きく振り廻した。ところが、拡げすぎて、はずみでどてんころりと転倒した。
しかし居並ぶ大和郡山城の武者共の中で、誰一人として、仰向けに転がってバタバタ手をふり、藻掻く一庵を笑う者はなかった。
「戦する武者の身は、明日はわがことか」と両脚のない姿に自分もなぞらえ堪りかね、男哭きに嗚咽を洩らす者もいた。

## 6

文禄三年正月から、京の伏見に城作りが始まった。
九州から引揚げてきた横浜一庵は、暇をとって家へ帰るようにと命令されたが、
「ようやく覚え馴れました仕事ゆえ、是非とも……」
と、あく迄も、願い出て伏見に残った。
「五体揃った人間でも、骨休めしに自分の邸へ戻りたがるは、これは人情。それなのに両脚欠けたる達磨武者は、なみの者に比べれば、何かと人一倍不自由でもあろうに、家へは戻ろうともせず、引き続きの御奉公……」
と、すっかり評判者になってしまった。
だから、その年の四月十六日。主君の豊臣秀保が、吉野の十津川を水馬で渡り切ろうとして、激流に押し流されて溺死。跡目がないため大和郡山城が断絶したときも、まっ先に太閤さまの直臣にして貰えたのである。
そして伏見城落成のとき、
「其方が噂に高い、だるま武者であるか」
検分にみえた太閤殿下は、気さくに一庵の姿を見かけると近よって来られ、





「不自由な身体にして出精したとは、まこと天っ晴れ。何んなりと望め。聞いてつかわそう」
と、お言葉まで賜ったのである。
輿の中におさまって木枠に手と頭をすりつけていた一庵は、そのお声をきくなり、
「……お願いがございまする」
と思わず絶叫してしまった。なにしろ、こうして伏見城が竣工してしまったからには、もはや用なしの身の上である。明日にでも、「引揚げろ」と命令されたら、もう居残る口実とてない有様だった。しかし戻るとなると瞼に浮かぶは、妻の咲の面差しである。
とは云えまさか他人の太閤殿下に、
(帰ればまた納戸へ放りこまれて、また難渋しますると)とも、打ち明けかねた。
それに、ここ数日というもの、気もそぞろ、木津の納戸部屋の天井から梁の縄のぶら下った儘の陰鬱な暗い光景を想い浮かべては、戻ったら咲に、また青竹で突き廻されるのかやと、一庵は、内心びくついていたところである。
「……何卒、この伏見の城にお置き下され」
ここぞとばかり、一庵は、両手を合せた。
「ほう。そないに、この城が気に入ったか。作事した者が、それ程までに惚れこむのならば、わしも醍醐や大坂城を引払って、こっちへ住もうかい……そちゃも城番代にしてとらす。遠慮のう入って住むがよいぞ」
至極満足げに太閤殿下は、合掌する一庵に許可を与えられた。
そこで一庵は、坐ったままできる仕事をというので、伏見城の記帳方を拝した。書き物奉行に任命された。住居も、曲輪内では不便であろうと、本丸二層の書庫に続いている三部屋をあてがわれることになった。
「身の廻りに、ご不自由でござろう」
と、太閤さまのお声がかりの一庵の機嫌をとっておこうと、奥向きの役人が、近くの鳥羽在から奉公にあがっている娘を、二人ばかり召し連れてきたが、
「……女ごは、まあ無用にして下されや」
一庵は驚いたように手をふってそれを断わった。
だから奥向きの役人は、気の毒そうな顔をして、しげしげ腰のあたりに目をやり、

「お前さまはそこも切られてござるのか」
と低い声で尋ねかけた。すると不服げに、
「大丈夫でござる」と、一庵はひろげて覗かせはしたが、「男にとって、ここは災のもとでござる」と、すぐに蔵いこんでしまった。そして
「わしは御奉公専一にするため、この伏見城へ仕えているもの。女人などは禁制でござります」
と、咲の怖い顔を想い浮べたのか、身の毛もよだつように、早々に娘たちを追い返した。
奥向きの役人共は、一庵のこれ迄の事は知らないから、すっかり感心してしまい、
「あの不自由な体では、他に娯しみもなかろうに、女色まで絶って、ご奉公しようとは、こりゃ、まこと見上げた関東武者ではあるまいかの」
とロ々に噂をしあって賞めたから、そこで、
「せめて喰物なりと吟味して差上げたい」
と大膳部の賄係の侍共は、一庵の口に合う物を見つくろって食事を運んできた。
だから一庵は、
「人間万事塞翁が馬の譬があるが、両脚をなくしたお庇で、毎日こない馳走にありつけるとは、こりゃ夢のような果報じゃ」
と咲には碌な物しか喰わせて貰っていなかっただけに、すっかり大喜びしていた。
それに、木津の屋敷にいた時と違って、家来共が側につききりで、すぐ背負ったり、抱えたり、いろいろ用はたさせてくれるから、格別の不自由もない。
妻の咲に放りっぱなしにされ、蛙のように挑ね廻っていた頃と比べると、まるで雲泥の差である。一庵は満足しきって暮していた。
日々これ好日と、ちょこなんと坐って、
「書き役の者ども、しっかり励めや」
などと、身体の支えに前に置いてある文机に、肘をついて、近頃流行しだしてきた煙草を、長い煙管でスパスパふかしている内に、文禄四年が五年になった。
この年は、のち十一月二十七日から慶長元年に改元されるのだが、神ならぬ身の一庵の知る由もなかった。
六月八日。観世、金春、喜多の諸流を一堂に集め散楽興行が、伏見城で催された。
「見物の儀、何人も勝手たるべし」





と御触れが出たから、京大坂の町人までが拝観に集まり、てんやわんやの賑いだった。
その騒ぎも、やっと落着した七月十二日。
丁度、いまの時間でいえば午前零時。
グラグラ、グラアッと烈しく揺れだした。
「……地震でござる」
驚いて、はね起きてきた家来の者共は、
「早よう、避難なされましょう」と駈けよりざま、横になっている一庵を抱え上げ、
「さあ、さあ」と背負い出そうとした。
すると一庵は「何処へ行く」といった。
家来共は、判りきった事を尋ねられると、
「ひとまず、大和木津のお屋敷へ引揚げましょう」とそれぞれ口にして急かした。
「うん」一庵は黙りこんでしまった。そして家来共の手を払いのけると、「先に、あれなる書櫃でもまず運び出せや」と代りに指さし差図した。
なにしろガラガラ物は倒れ、振り回わされるようにグルグル城ごと震動している最中である。
家来共も、早く外へ逃げだしたい一心なので、云われる儘に木箱や長持を担ぎだすと、
「ワアッ」と悲鳴をあげて城外へ遁れた。
そのあとで、ダーンと揺れ返しがきた。
烈しい上下動で伏見城は持ち上げられ、そのままでドシンとばかり叩きつけられた。
木の葉が舞うように、屋根瓦が乱舞するのをよけながら、家来共は振返ってハッとした。
「伏見城大地震の際、逃げ遅れて圧死したのは、奥殿の上臈衆十二名に、おつきの者たちばかり。みな婦女子であって、男子にて亡くなったは横浜一庵ひとりのみ。何分にも進退勝手のきかぬ者ゆえ、不憫や、逃げ損ねたものと思われていたところ。その後の調べで……一庵は己が身に換えて、天下の宝ともいうべき諸国検地の指出帳の書櫃を家来に持ち出させていた事があい判った」
と、奉行の増田長盛も眼頭を押さえ思わず鼻を啜り、そして、
「よって太閤殿下も落涙せられ『けなげなり一庵』と仰せあって一万石の加増を下されたぞ。そこで大和の

# びとう武者

〈尾藤甚右〉

内で計一万七千石の跡目をつぐ者を、至急に申し出よ」と言い渡した。

咲は、その沙汰をうけると、他に子供とてないから、仕方なく、昔、竹とよぶ女が産み放しで置いて行った男子を長屋から召し寄せ、直ちに跡目をたて、これを増田長盛には届け出た。

だが、当人の茂八改め、茂勝には、

「……わしの腹を痛めた子ではない。そちゃ、いわば敵の子じゃ。そのつもりでいや」と咲は、青竹をビシビシ鳴らしながら、厳しく宣言した。

だから横浜茂勝は継母の咲を恐れて、云われる儘に、禄高を増やすためにと働かされた。

二年後に秀吉が亡なった時は、その忠勤ぶりを認められて、形見分けに、太閤殿下の遺物として兼吉の名刀まで下賜された。

そこまではよかったが、そのすぐ後の関ヶ原合戦のとき、茂勝は初めは大坂天王寺口の警備をしていただけだが、大坂へ出てきた咲から、はったと睨みつけられ、

「天下分け目の合戦である。確かり稼げや」

と、また脅かされ、鍋島勝茂と共に関東方の大和高取城の本多利久を攻め落し、

「この際じゃ。もっと働け」と咲に唆されると、徳川秀忠の姉婿に当たる大津城の京極高次まで攻めた。

だから徳川方の東軍が勝利を収めると、西軍の横浜茂勝は、所領没収断罪にされた。

慶長六年の四月のこと。

駿府城の松下常慶を頼って徳川家康に拝謁を願い出にきた老婆がいた。

青竹を杖にして東下りしてきた老婆が、横浜一庵の後家と判ると、「だるま武者」の名は、かねて知れ渡っていたから面会は許された。だがである。

「ありゃあ喰いつきそうに、ものを云う、おっかない、おばばじゃ。女ごは恐しい喃—」

と家康も呆れ返ったが、一庵の生国の神奈川在の横浜村八十四石を隠居分にと与えた。

咲の隠棲していた所が、今は横浜市中区花咲町になっている。かくいう筆者の生れた地点でもある。

# 1

トントントン砧で藁を叩き、柔らかく手でもみほぐして、それをまるめ上げると、

「下馬をこさえてやった、こっちへこう。阿母が跨がせてやる」と、土間の隅で蒼ざめている娘をよんで屈みこませて手当をすませてやってから、

「病気じゃねえから心配すんな。これからはこりゃ毎月あるんじゃ……まあ、これが一人前の女ごになった印というもんだ。だで、これから、ええ婿でも今から心掛けろや」と阿袋は娘の尻を叩いた。さすがに娘は気まり悪がって、

「いやあだ」と身体をよじらせながらも、やはり気になるとみえて

「婿にはなあ、やさしい男がええのう」ときいた。

「そらいかん。考え間違いじゃ。やさしい男ちゅうのは、生れつき臆病者の意気地なしか、そうでなけりゃ、女をものにしようと企むやつの、下心を隠しての仏づらと覚えとけ……いかんぞ用心せいや」と首をふった。

「なら、どんな男が、お婿にええじゃろな……」

娘はまた恥かしそうに身をくねらせた儘で、顔を斜めにさせてきいた。

「そりゃあ当節は、武者に限る。出世してみい、城もちにもなれる。だが、その代り強うて、手柄をたてられるような男でないと、いかんぞ……」

「そんなのは、戦に行って早よ討死してしまうじゃろ」

不安そうに、娘は、阿袋に抗議をした。

「死んだら、そこの銭を集めて、またすぐ他へ、嫁のゆき直しをしたらええ……どうせ男は、珍しい内だけ嫁を可愛がっても、鼻につきだすと、背を向けて寝たり、もう碌にものも云わん……だから取換えのきく内に片っ端から、何人にも当ってみて、男の良いのを選ばんことには、なんせ受身の女ごは損をする」と阿袋は教えた。

「……男って、そんなもんか」心細そうに娘は、瞳の色をしっとりとさせた。

「当り前よ。こうみえても、この阿母はなあ、まんだお前が産れん前から、もう、ちゃんと男を知っとるがね」と、当たり前のことをむきになっていった。

「そうか……」娘はうなずき、暫く考えこんでいたけれど、

「だがよお……普通は一度嫁入りしたら、そんなに出たり入ったりしたら、いかんのだろ」

と、小さな頭を傾げて、そっと聞いた。

「それは嫁入り仕度を沢山、拵える家の事じゃ。何度も嫁の行き直しをされては、仕度や祝言の費用に銭が掛るから、そんで親が損をこくまいの一心で、なんとか、もの入りは一遍こっきりで止めようと娘を戒めて出すが、その点、この阿母はお前に何んの仕度もしてやれんからな……気安う何度もやってけれ」と眼を細くしてみせた。

「うん。そうか。だったら嫁に行っても悪かったら…わしゃ気儘に何んぼでも、やり直しがきいて、こりゃ仕合せというものじゃね」と娘の安子は、まだ子供っぽい十四歳の貌で無心に歓んだ。天正三年の春のことである。

さて、安子と阿袋が暮している、若狭街道と石田川に挟まれた新保部落から、琵琶湖の竹生島こしの対岸に、八木浜の白砂が続いている。

そこに、小谷城の浅井家が滅亡して、扶持を離れた甚右父子が、漁師の手伝いなどして、細々とした日々をすごしていた。

「主取りをする時は、よほど先を考えないかん。うかつに、つぶれる所へ勤めてみい……いざとなると路頭に迷うだけじゃ」

と、あけくれ父は、おのれの体験を伜の甚右に云い暮した。

「どのような殿なら、先ゆきが安心じゃろ」

まさか漁師になって一生を過ごす気もない甚右も、行末の事を案じて父にきいてみた。

「まあ何をするも資本の元手が肝要ゆえ、殿も資本金の多い大禄の御家中がよかろう。次は筋目の正しい、由緒ある家門の殿を選ぶが肝心じゃ。まあ成上りの新興大名などは長続きせんもんだから、奉公など、かまえてするでないぞ」

網の繕いをしながら、懇々と父親は、伜の甚右に云いきかせたものである。

ところが浜木綿の花が薄白く砂丘に咲きかけた頃。

急に、その父は唇を紫色にして、身体を、かたかたさせて、

「寒い、凍りつきそうに冷えてくる」

と家の中へ這いこんで土間で倒れた。

周章てて甚右が、父親を抱えあげて床に寝かしつけると、当人は寒がって震えてはいるものの、額に手を当てると、

「こりゃ、えらい高熱じゃ」と伜の甚右は仰天した。

熱さましのおおばこの薬を煎じて呑ませたり、若葉を塩もみして貼りつけたが、高熱ですぐかさかさに乾いてしまった。

「……さては、去年の小谷合戦の時にうけた古傷に、鉄気の毒が残って居って、それが身体中に疼き廻るのじゃ」と父親は気息奄々と苦しみながらも、

「これ伜よ、悪い主取りをすると、こない病になっても一文の補償もでない。いいか、取返しがつかぬぞ」とうわごとを繰返していた。

そして、いくら手当しても熱はとれなかった。

「こりゃあひどい。舟で運んであげるから、京まで連れてって、よい医師にみて貰わにゃあなるまい」と浜の漁師も見舞いにやってきては心配してくれた。

だが、先立つ入用の銭が父子になかった。

「……だったら、今度、長浜城主さまになられた木下藤吉郎様に、奉公をしたらどうだ」

と見かねて勧めてくれる者がいた。なんでも城門の櫓下に立て札が出ていて、武者集めの求人を広告していて、仕度銭も沢山でるという話だった。しかし若い甚右は首をふり、

「銭も欲しいが、木下さまでは厭やだ。この親爺さまの病気とて、去年の八月に横山城から攻めよせてきた木下勢のために、小谷城で蒙られた深手がもとで、この難儀……なんで敵にうけた傷を直すに、敵から銭を頂く事がある。おりゃ、そんな働き口なら、まっぴら御免じゃ」と、目の色をかえて断わった。

すると、漁師仲間の年より衆が云うには、

「向うにうけた傷だからこそ、その治療代を出させるのよ。まんまと仕度金をせしめたら親爺さまと、京へ駈落ちしてしまえば……それで良えではないか」と入れ智恵をされた。





## 2

陸からなら、姉川をこえ京街道へ出るのだが、舟なら、中浜の岬の向うが長浜である。

八木浜から、漁師のわかさぎ舟で甚右は城まで送られ、外曲輪へ連れてゆかれた。奉公を願い出ると、人手不足らしく、すぐにも採用された。だが、なかなか仕度金は出なかった。もう止めて戻ろうとしたところ七月八日になって、やっと銭束が貰えた。

が、その換り、ついでに、

「砥いでこい」と錆びた槍を手渡された。

銭を貰った手前、仕方なく磨き上げて、返しに甚右が担いで行くと、違った武者から、

「表門の馬出曲輪へもってゆけ」と、またもや指図をされた。そこで槍を担ぎ直して甚右が返却のつもりで表の方へ持参すると、

「一緒に並べ」槍を受取ってくれずに、そのまま勢揃いした隊列へ甚右も放り込まれた。

「ブオ」「ブオ」と法螺貝が吹かれ、鉦と陣鼓が、やかましく鳴りだしたと思ったら、隊列は、

「ワア」「ワア」武者押しをしながら、門に近いところから先登になって外へと出ていった。

だから銭束を抱えたまま行列に押しこまれて身動きできなくなった甚右は、湖水の水うち際まで出ると、泡をくって、

「おうい」と通掛りの漁舟をよんで、八木浜の父の許へ届けてくれるように、急いで、その銭をことづけたものである。

本当は自分も、その舟にのり移って逃げだしたかったが、なにしろ甚右のすぐ後は、この長浜の国友村で拵えている鉄砲隊が、ずらりと隊伍を組んでいた。ドカンと撃たれそうでとても脱走はできなかった。

だから甚右は怨めしそうに、青い鏡みたいな湖面を、くり返し何度も振返ってその時、未練たっぷりに、眺めたものである。

美濃街道を関ケ原から、伊勢街道へ曲って七月十二日、木下勢は、伊勢長島へつくと、門徒構えの砦を次次と攻めだした。

なにしろ甚右は父と浅井家へ奉公していたが、初陣

の姉川合戦このかた連戦連敗で、戦とは逃げるもの、追い詰められたら、殺されるものとしか、覚えていなかった。

ところが、初めから優勢な軍勢で敵を追い廻す木下勢の戦法は、あまり此方がやられる気遣いがないだけに、甚右には面白くてしようがなかった。

そこで、いやいやついてきた癖して終には逃惑う敵を追かけ串刺しに仕止め、まるで狩りでもするように、甚右は若いだけに面白半分に戦場を縦横無尽に暴れ回った。

「先般、見習いに採用した者の中で、このたびの長島合戦に於て、目ざましい働きをした二十一名。特に士分にとりたて、留守武者を命ずる」と長浜へ引揚げてくると沙汰が出た。甚右もその一人に加えられていた。

「留守武者とは、なにをする武者だろうか」

と、役目が判らず甚右が訊いてみると、

「殿さまの御旗や、金瓢箪の馬じるしが本陣に残された際、いかなる敵の強襲をうけようとも、踏み留まって守る敢死の武者で……奥州の伊達では、たった一人で守り抜き『留守武者の誉れ』といわれ、それを苗字に貰い、大谷城主に出世している〈留守政景〉とよぶ豪傑も居る……」

と武者奉行から教えられた。いわゆる旗本武者のことかと、甚右もやっと納得した。

配属は、御旗奉行さま組下で二十貫扶持。

如何ようにも、あとは手柄次第で、どんどん昇給させると、判をおした紙を一枚ずつ貰った。つまり辞令である。

「銭が、やっと届いたから、親爺さまを京の医師さまの許へ運ぼうとしたら『一人でゆくは、いやじゃ』と心細がられる。そこで湖向うの熊川の方で、奉公に出たいと云う小娘がいたから、それを向うの漁師に届けて貰って、それに看病させて置いたら、京へゆかんとも済むように、古傷の溜った膿も、今ではみな出切ったとみえ、どうやら熱もひき、だいぶ具合は良さそうじゃ」

甚右が、やっと休みをとって、八木浜へ駈けつけると、浜の入り口で網をほしていた漁師の一人が、其後





の模様をかいつまんで、教えてくれた。病状の経過が良好ときかされ、吻っとして家へ戻ってくると、すっかり頬もこけ白毛がめだつが、話にきいた通りに熱はとれたらしく、父親は眼を細め、身体を起こすと、

「おう甚右か」と懐しそうに呼んでくれた。

「よかったなあ、すこし楽になれて……」

と草鞋もとかずに、甚右が板の間によじ登ってゆくと、父は、泪ぐんで、

「拐わかし同然に戦へもって行かれたとき、生きて戻れるかと、それればかりを、ずうっと案じて居ったぞよ」と、しみの浮いた腕をのばして、甚右の膝を嬉しそうに撫ぜていたが、

「それで、もう逃げてきたか。長浜から巧く暇をとってきたか」と気遣って尋ねかけた。

「……それがなあ、お武者に取りたてられたのよ」

おずおずと、二十貫扶持の判物をだすと、甚右は、

「この、馬鹿ったれめ」

病人とも思えぬ大声で頭ごなしに罵られた。

「先祖代々ご奉公してきた重恩ある浅井家を、攻め滅した敵の木下藤吉郎めに、わりゃあ、なんで仕える気になった……ええか、あやつは下倶戴天の仇ではないか」と父は怒鳴りつけた。

「と云うて、漁師よりは増しじゃろが……」

おずおず甚右は、父親に云いわけをした。

「何を申す。それが尾井戸家の侍のいう事か。まして木下は、たった五万貫の吹けば飛ぶような小大名で、そんな所へ奉公したところで、先々の見込みがあるものか」と気色ばんだ。

「そう云うが噂では、信長さまの草履とりから、あすこ迄も出世された方、今後も立身されると、云うぞ」

と、甚右も、がをはってしまった。

「もうし、そうなら、木下藤吉郎めはますますの悪人じゃ。なみの者なら、いくら運がようても努力をしても、そないにまで出世はできぬが、世の中というものだ……そんな男に奉公してみい。今にきっと非道い目に逢わされるに、きまっとるぞ」父も負けずに大声をしぼって喚めきたてた。なにしろ頑固である。

甚右も若いから、かっとした。するとその時、

「病人相手に、喧嘩されては困りますがね」

と、やにわに背後から咎めだてされ、

「草鞋を脱いできて下され、まず……」と甚右は膜を足蹴にされたように、ぐんと突かれた。

振返ると十四五の小娘が、おっかない貌をして睨みつけていた。

「誰なのか」と甚右がきくと、小娘は、

「安子」と己れの名をつっ立った儘でいった。

「おかしな名だ」といえば、

「子供の頃、『あのね』がいえず、『あんね』と訛ったゆえ、阿袋がつけました。いけませぬか」と、あべこべに甚右のほうがその小娘に、やりこめられてしまった。

3

翌年四月、堺の新堀城攻めに木下勢はかり出された。甚右も加わって出陣した。

城の堀に木や草を放りこんで埋草にし、火矢をいかけて、それから大軍でワアッと押しこんだから、敵将十河一族を、わけなく退治できた。

この戦で、甚右は兜をかむった手負いの武者を倒して、どうにか首をとった。それが敵の武者奉行だと、後になって判明したから、秀吉は早速、気前よく加増してくれた。

甚右は一足とびに、百五十貫ふえたから、百七十貫取りの黄母衣衆に出世した。

そこで、これまでは大部屋で、他の者たちと一緒に、ごろごろ寝起きしていたのが、俄かに個室どころか、三部屋もある官舎を貰えた。

一人住いでは広すぎて、鼠にひかれてしまいそうである。そこで早速、八木浜へ赴むき、まだ寝たり起きたりの老父を引取ろうと、迎えに行ったところ、喜んでくれるどころか、

「いやなものは厭じゃ」頭ごなしに父に断わられてしまった。そして難しい顔をして、

「親代々の重恩のある浅井家を滅した木下ずれの城へ、誰が死んでも行ってやるものか」

と、相変らずの権幕で、怒鳴りつけられた。

しかし小娘の方は、すっかり眼をいきいきとさせ、甚右の角ばった顔を仰ぎ、

「そんなに豪いお武者に出世なされましたのか、へえ……」と鼻息をはずませた。





だから甚右は相手にされぬ父親の方は諦め、まあ仕方なしに小娘をつかまえ、

「ここらあたりの魚くさい浜と違うて、長浜のお城下は、京から歌舞音曲の者も小屋掛けにくる程の繁昌だ」と話しこんだ。すると、

「そんな賑やかな所なら、行ってみたい」

小娘は、わくわくしたように弾んだ声をたてるなり、あたふた病床の父の所へにじりよって行き、いきいきした顔で、

「ここを、お暇下せえ……長浜へついてって、こちらの伜さまの許で奉公します」

両手をついて挨拶をしてしまった。これには父も、びっくりしたらしく、

「……お前に去られては、病気の儂を誰が看護して、介抱する。法外な事をいうな」

と、今度は小娘を相手に喚めきたてた。

あまりの怒鳴りつけようなので、ワアッと小娘は泣き伏すのかと思うと、まったくけろりとしたもので、眼を円くしたまま、

「法外と云わっしゃるが……これまで、この伜さまが長浜から送ってこられた銭は、これは取りも直さず木下様から頂いたもの……それで養生をしとった癖して、今さら長浜は好かん、嫌いだと云いなさる大旦那さまこそ、てんで法外ではありませぬか」と、父の顔を覗きこんでしゃべった。小娘の方が弁口がよくたった。

だから、二の句がつけず父が眼を瞑って寝たふりをすると、小娘は、にこにこして裏手の藪へかけだしてゆき、夾竹桃の薄紅色の花をつんで、髪の横へさしてきた。

「これこれ、その花の枝の折れ口の汁は、地肌につくとかぶれるから棄ててしまえ、長浜へ行ったら、なんぼでも髪飾りは売って居るから、よいのを買うてとらせる」

見咎めて甚右がいうと、小娘は嬉しがってしまって、寝ている父に頓着もせず、とっとと納戸から孤包みの自分の荷物をだしてきて、それを背負えるように縄がけをした。

荷拵えがすむと脚絆をつけだした。その小娘の動作を、父は時々うす眼をあけて覗いていたらしい。とう

とう堪りかねて、
「わしも連れてゆけ」と我を折ってしまい、
「一人で取り残されては、どうもならんわい」
と、父としては珍しく弱音を吐いた。

越前攻めの大軍を率いた織田信長が、八月十三日に長浜城へたち寄って泊った。
すると病床の父親は起き上って、弓幹に弦をはり、矢尻を木賊でこすりあげながら、
「おのれ憎っくき信長め、ここへきたのが百年目。亡主のために一矢むくい、目に物みせん」
と、物騒なことを云いだした。愕いた甚右が、
「そんな乱暴されたら、迷惑千万」と押し止めたが、父は、あくまでも意気ごんで、
「止めだてすると、伜とて容赦はせぬ」
嚙みつきそうに睨みつける始末だった。
「よしなされ」「よさぬ」と父子で弓と矢を引張り合いをしている最中に、
「何をしとられます」と小娘が戻ってきた。
「うるさい……」と振返った父親は、「げえっ」と面喰ったように驚きの表情をみせた。
―(何か)と顔を向けた甚右もびっくりした。
すると、
「……城中お泊りの衆を接待のため、女手が入用につき、城中の婦女は誰かれと云わず、十五歳以上の娘は給仕に出るよう、とのお達しで、隣家の女房どのに着物をかして貰い、ついでに顔も、いじって頂きました」と二人の表情に、小娘の方が、面喰ってしまい、そこで、おどおど自分で愕いて弁解をした。
「……女ごとは、化けると変るもんじゃなあ」
(亡君の怨み、いかにはらさで置くべきか)とついさっきまで無念がっていた父の唇から呆然とした声がでた。
「まったく美しい、別人のようだ」すかさず父の気を変えようと甚右も賞めた。だから、小娘は、ますます上気して、
「そない綺麗にみえまするのか」
嬉しがってしまってケタケタ喜びだした。そこで、
「……止めにする。これでは気分がこわれた」
父は弓と矢を投げだしてしまった。





翌日、木下藤吉郎の名を羽柴秀吉と改めた殿さまについて、甚右ら長浜勢も、信長さまの後について敦賀へ出陣した。
加賀、越前の門徒や一揆が立て籠っている鉢伏、火打、木目、虎杖の城々を攻めたてた十五日の府中合戦で、秀吉勢だけでも千余の敵を屠る戦果をあげた。
なにしろ三万余の信長方の大軍で包囲する、初めから勝算のみえすいた戦だけに、甚右も気やすく敗敵を追いかけ廻した。突いては転がし、倒しては、よい敵だけの首をとった。ところがその中に兜をつけた、〈もつけ首〉とよばれる殊勲首が二個まじっていたから、一個四十貫の割りで査定され、とうとう二百五十貫に昇進した。
別に臨時賞与として、府中龍門寺砦の敵から奪った銀粒を、ひとつかみ下賜された。
もち帰って甚右が、それを見せびらかしたところ、小娘は、息をはずませ、
「うへえっ……これが、しろがね」
眩ゆいように瞠目し、素直にたまげた声を張りあげたが、父親の方は相変らずぶつくさと、半白になった唇の廻りを動かし、落ち窪んだ眼玉を、わざと見ぬようにそむけ、
「気前が、良い殿じゃのう」
まるで当てこすりのような厭味をいったものだ。
「もう好い加減になされ。いくら親爺さまの重恩のある浅井の殿がうたれ、仲のよかった朋輩衆や親類縁者が、落城の時に死んだにせよ、討つ討たれるのは、これ戦国の世のならわし」
二百五十貫どりに立身した貫禄をみせ、伜の口から、あべこべに意見したところ、
「人間誰しも慾はある。吝な殿なら肚も読めるし、信頼もできるが、己れの我慾を隠して、気前よく大盤振舞いをされるような、そないに気前のよい殿は、きっと何か腹に一物ある恐しい殿さまじゃ。うっかり馬鹿正直に、安心して奉公していてみい、今に、どんな目に逢うか判らぬぞ」
と負惜しみのへらず口を、父親はたたいてみせた。

## 4

信長さま命令で、安土を天正五年十月二十三日に出

陣し、播磨へ攻めこんだ秀吉は、佐用、上月の敵城を次々と落し、福岡野まで進んでいた。

緒戦の連勝に気をよくした秀吉が、本陣をその儘に残し、自分から物見に先発したところ、本隊の武者どもも、その後から、

「遅れては、功名をしそこなう」と、われ先について出払ってしまった。だから金色瓢箪の馬印や真紅の吹流しが立っている本陣には、旗奉行以下留守武者が数十人しか残っていなかった。それなのに突如として、

「ワアッ」と、いきなり奇襲をかけられた。

敵の加勢に岡山から駆けつけてきた宇喜多勢が、樹間にきらめく金色の瓢箪を望見し、

「さては秀吉の本陣は、ここにあったか」

と勇躍して馳せ向い、小人数とみてとると、秀吉も、てっきり居るものと思いこみ、

「天与の好機」と勢いこんで喚声をあげ、

「吾こそ、羽柴秀吉殿の御首級頂戴」

口々に叫んで殺到してきたのである。

まことに迷惑千万な、ないものねだりで、いくら攻め込まれても、いない筈の秀吉が姿をみせる訳はない。それをまた岡山勢は勘違いして、ますます調子づき、

「われらの勇猛ぶりに恐れをなし、秀吉ともあろう者が隠れ給うは卑怯なり、いざ尋常に、勝負々々」

と息もつかせずに、陣幕を包囲して雨あられのごとく、備前篠竹の太い征矢を、びしびし所狭しと射ちかけてくる。

「これは容易ならぬ事になった。こうして周囲を、ぐるぐる廻って包みこまれては、ここを脱出して、お味方に知らせる事もできぬ……といって、ここに火の手でも上れば、お味方も気づいて駈け戻って下さるじゃろが、さてすぐに火を放てば、金色瓢箪の御馬印や殿の御旗もそれでは、まっさきに灰塵になってしまう」

御旗奉行が悲壮な顔色をみせ、防ぎ矢をしている留守武者共を見渡していった。

「われら一名なりとも、息のある内は、かねてのお役目ゆえ、金瓢箪や御旗は、あく迄ここに踏み止って守りはしますが、といって、総員玉砕した後でもしも、馬印や旗が敵の手に渡ってしまっては、殿に対し奉って面目もない……」と古参の者も声を震わせた。





すると、

「……それならば、地面に穴をあけ、馬印御旗の竿を一カ所に纏めて立て、それに、この甚右を縛りつけなされ、背に火薬の煙硝包を背負い、もはや最期というときにはてまえが発火させ、この身諸共、粉々にうち砕いてしまいまする」

とまことと壮絶な役割を自分から云いだして、しかも、その上甚右は自分から買って出た。

――というのは、甚右は今度の出陣では、

(面倒くさいから、死んでしまったが良い)と思い悩むような家庭の事情が、もち上っていたから、である。つまりは、やけくそになっていて、その肚いせのせいでもある。

なにしろ女というは、まだ小娘であっても化粧などし、それで、

「綺麗だ」などと云われると、まるで自分を新しく見つけ直したようにむきになってしまい、せっせと、それに生き甲斐をもち、化粧するのが病みつきになるらしい。

隣家の女房に顔を作って貰って、それを賞められてからというもの、安子は京白粉や小町紅を、そっと買いこんできて、髪には山崎男八幡の香油をなすりこみ、小娘のくせに、毎日あけくれ化粧をしだすようになった。

「脂粉の香とは、こういうものか」

と甚右も初めの内は、急に家の中へ漂いだした甘酸っぱい香りに、満更でもなく鼻をひくひくさせていた。しかし次第に女っぽい匂いが、その中から嗅ぎわけられるよう敏感になってきた。

そうなると、甚右も若い男である。これまで煮たき洗濯をさせていた奉公人の小娘に、俄かに女を感じだしてしまった。

考えてみれば、八木浜の頃に、父の看病に雇われてきたのだから、もう三年もたっていた。早い娘なら、もう嫁入りして児をもっている年頃である。甚右は、そこに気づくと、むっちりしてきた安子の腰のふくらみや、胸のもち上りが、目についてならなかった。だから、つい今度の出陣の前の晩に、なにかしら心が、あらあらしく、

「戦場へゆくのだ……」という昂ぶった気持にかられ、とうとう、えいと、その気にならされて、しまったのである。すると、

「お武者でも、貴方さまのように強うて、どんどん出世してゆかれる方は、ご城内でも珍しい……とみな云うて居られる。嫁にして下さるのなら」

という事に、いざと云う段になって、小娘からしむけられてしまった。

もし断わって力ずくで事を運ぼうものなら、寝ている父を起すぐらいに大声をあげるぞ。とも、その時、小娘から脅かされた。

契ったあと安子の方は、はしゃぎ切って嬉しがった。しかし甚右は時がたつにつれて、ますます憂欝になった。と云うのは、いつも父親が口癖に、

「男ちゅうものは嫁とりで運がきまる。第二の父をもつことになるからじゃ。儂をみてみい、よしなき家の女をめとった為に、御家が滅亡すれば、引き立て役の縁故もなく、かく落ちぶれて漁師の手伝い……もし立派な大名の家中から、死んだお前の母がきていてみい。向うの縁者が吾らを放って置かず、仕官の世話もしてくれたろう。なあ伴や、つまらぬ育ちの女で身を誤るでないぞ。必ず良家の子女を妻に迎えよ……いいか、男というは万一の際に備えねばならんぞ」

生活の智恵というか、男の生きてゆく道標を、耳にたこができる程きかされてきた。

――それなのに、奉公人の下女に手をだしてしまい、止むにやまれぬ、その場のはずみで、ついに夫婦約束までしてしまったのである。

「男が立身する為には貞操を守り、詰らぬ女に見向かずに、よい嫁とりをしろ」

と、あけくれ云われてきた教えを破ってしまった甚右は、とても父に合わせる顔もなく、こそこそと夜あけ前に出陣してきたのである。

気の弱い娘なら、あれは過失であったと詫びを入れ、銭でも持たせて、田舎へ送り返す手段もあろうが、あの安子が、とても、そんな事で引き下るとは思えなかった。今頃は、長浜で、

「ここの嫁女になった」と誇らしげに、隣近所の武者長屋へ、自分で吹聴して廻っているのは、眼にみえていた。たった一度の間違いではあったが、甚右は、情けない顔をしている父の表情を思い浮べると、とてもじゃないが羞恥と悔恨で、生きて長浜へ戻りたくはなかった。

だから面倒くさい死んじまえと火薬で自分を吹き飛ばす決心をつけ、進んで縛りつけられたのである。

やがて烈しい岡山勢の猛攻で、本陣の幔幕は切り裂かれ、金色瓢箪の馬印を背負って立った甚右の姿は、敵にまる見えにさらされた。

「猪口才なやつ」と、動かぬ目標に、ビシビシ四方から、太い征矢がとんできた。

初めの内は、甚右も矢筒を股倉に挟みこんで、返し矢を次々に射返していたが、終には肩を射抜かれ、二の腕を背後の竿に縫い付けられ、全身これ竹藪を横にしたようになり、

「これはいかん。これでは万一の時に身動きできん。背の火薬に点火できそうもない」

と狼狽しながら、すうっと気が遠くなって行った。もう後は何も覚えがなくなってしまった。

## 5

甚右は、自分では死んだつもりだったが、何日目か判らぬが、まず片目だけあいた。

その次の日には視力が戻ってきて、身体中繃帯だらけの自分が、まだ生きていることが判った。五、六日たつと、無性に腹がすいて、もりもり喰うと、十日すぎには、どうにか、つかまりながら起きられた。

「……あのとき、急を知って駈け戻ってござった秀吉さまが、寄手の岡山兵を追払い、ご自分で貴殿の縛をといて下されたのだぞ」

と附添の者から耳にしたとき甚右は、杖をついて秀吉の陣所へ、その時の礼をいいに行った。

すると、

「よう助かった、命運があって良かったな。なにしろ『弁慶の立ち往生』も、かくやと思うばかりに全身が栗のいがだった。急所をみな外れていてよかった。よかった」

まるで吾が事のように喜んでくれたから、

(この秀吉の殿のために、この助かった命を捧げ、誠

心誠意奉公をしよう）と、甚右もそのとき、泪をこぼして感激した。

しかしなんと云ってもまだ武者が勤まる程には、身体が回復してないから、板に寝かされて、甚右だけが、ひとまず先に長浜へ戻された。

ところが迎えにくると想ったのに、安子の姿が見当らぬ。そこで、

（はて、どうしたものか）と気になって、見舞にきた隣家の女房に、てれくさかったが、吃りながら、そっと尋ねたところ、

「お前さまが討死されたと、知らせが入ってきてな、そんで『せっかく嫁女にして貰おうと思ったに、せんなきこと……では他の口を急いで探さねば』といわれ、舟に荷物をつんで里へ戻られたようでしたえ」と教えられた。父親も、やはり難儀したように、

「なんで、あんな小娘に冗談などいう。ここの嫁になると云い張っていた矢先、討死の通知がきたから、それを教え、欲しがる道具も、銭も、みなくれて追い帰したぞ」

と甚右は、はったと睨み据えられた。

「それは何かの間違い……年頃の娘ゆえ、軽口をいって、からかった事はありまするが、まさか……手を握った事もありませぬ」

当人が消えて居なくなっているのを幸いに、甚右は、ここぞとばかり、しらをきった。これも親を安心させるための親孝行である。そうすると、

「やはり、そうであったか、かねてよく云い聞かせておいた倅が、間違いをしでかすとは、この父も思わなんだぞ」

吻っと安堵してくれたが、それで気が緩んだのか、風邪をひき、こじらせてしまった。

「おのれを万一のとき守ってくれるは、嫁や、その縁につながる一族しかない。いいか。必ずや力のある所から……連れあいは貰えや」と、云い残して父は亡くなってしまった。

その翌年、長浜から姫路へ秀吉は移った。

やっと武者が勤まるよう本復した甚右に、

「留守武者として金色瓢箪を守った殊勲抜群なり」と、五千貫を播州で知行され、小牧長久手合戦のあとは、但馬豊岡城を貰った。一城の主である。





官位を賜る時、今迄の尾井戸を尾藤とつめ、「尾藤甚右衛門尉」と名のるようになった。

なにしろ二十貫どりの端武者の身分から、たった十年で、三万石の主にまでなったのは、

「当代の出世頭」と評判され、人々は、

「尾藤留守武者」と、その名を喧伝した。

「もう嫁とりせにゃあ、いかぬな」

と秀吉も気にしてくれ、美濃の頃からの生え抜きの家人の一柳の妹を貰うことになった。

「……一柳も今では美濃浮見城六万石の大名、これなら、亡き父上もご異存あるまい」

と甚右も、そのつもりになって嫁迎えの仕度をしていると、一柳家から俄かに破談を申込んできた。続いて二、三の話もあったが、暫くすると、みな先方から断わってきた。

不審に想って甚右が、その訳を調べさせると、〈甚右と二世を契ったという女〉から、

「もし祝言などあげたら、仇をして呪い殺して、恨みをはらす」と、物騒な投げ文がそのつど、相手の屋敷の門内へ投げこまれ、だから何処も薄気味悪がって、縁談話は次々と見合せにしていることが判明した。

「……はて、俺に、そんな心当りはないが、何者の悪戯だろう」と甚右が不審がっているうちに四国征伐が始まり、阿波木津城を攻めた手柄で、今度は讃岐半国五万石の大名にまで出世した。

だから男の武者共は口を揃え、

「手本は……尾藤留守武者」と評判したが、女の方には、てんで不人気で、何処からも嫁のきてがなく、とうとう甚右は三十歳になった。

もちろん自分の城にも伏見屋敷にも、侍女や腰元の綺麗なのはいた。だが、その昔奉公人の小娘に手を出して、苦い想いをした若い頃の失敗があるから、甚右は眼をとじて、辛いところを我慢した。

そんな矢先、九州征伐の打ち合わせに伏見城へ出仕しての戻り道で、甚右は、

「もうし、畏れながら……」と、紅葉ちらしの被衣をかむった女に橘の袂で呼止められた。

（はて、俺に声をかける女とは、珍しい）

甚右は道端で話もできぬからと、その女を、屋敷ま

でつれ戻ってきて、

（さて、どのような娘か）と胸をときめかして逢ってみたところ、まだ二十四五の豊満な躰つきで、爛熟しきった女の香りがぷうんとむせ返えってきた。思わず甚右が、唾をぐっとのみ、眩しそうに眼をさけた時、

「嬉しや」と女は、がばっと身を投げかけ、いきなり甚右に抱きついてきた。

「何をする」と放そうとしたが、絡みついた女の躰は、まつわりついて離れなかった。

意馬心猿のたとえのように、甚右は、

「のけ」「放せ」と叱りつけながら、手ではまさぐるように求めていた。すると女は、身体をつぼめて、すり抜けそうに捩りながら、

「嫁女にして下されますか」と、いきなり喘えぐように念を押してきた。

「ええ、しようがないわい」

と、前にもこんなことを、云われたなと想い出しはしたが、とうとう、また甚右は、女の申出を承諾してしまった。

## 6

いまは関白殿下と呼ばれる秀吉の弟で、大和大納言と名のる秀長を、日向口の総大将に仰ぎ、甚右は黒田官兵衛と共に、先手の大将を命ぜられ、九州征伐に出陣してきていた。

薩摩の伊集院勢の立籠る高鍋の砦が、まず最初の攻撃目標になった。だが甚右は、戦のことよりも、あの女のことで、ぶりぶり肚をたてていた。

（同じ女に、二度も同じ手を使われるとは、なんたる事であろうか）どう考えても、いまいましくてしようがなかった。

なにしろ、その時なんとも自分で押えがきかなくなって、つい承諾してしまったが、やっと落着きを取り戻してから、

「して、そなたさまは、何処の女性じゃ」と、絹物をきているから、さぞかし、しかるべき家の娘であろうと思って尋ねたところ、女は笑って、

「……安子で、ござりまする」と答えた。

「……えっ」とその時の自分の仰天した間抜けづらを





想いだすと、甚右は情けないやら、阿呆らしいやらで、癪にさわってならなかった。

しかも、それからの安子は八年間も勝手に行方を晦ましていた癖して、さも前からの古女房のような顔をしくさって、八木浜時代の貧乏話などを、わざと侍女や家来にきかせ、さも、得意そうに威張っては、

「……奥方さま」と呼ばれて悦にいっている。

居直り強盗というのがあるが、安子のやり口は居直り女房のおもむきがあった。だから、

——考えまいとしても、白粉を厚塗りした安子の顔が、すぐ眼に浮かんできて、まるで牝狐に化かされたように甚右としては、あまりにも浅間しくせつなくて、口惜しくてならない。

むしゃくしゃして甚右が、苦が虫を噛んだような顔をしながら馬を進めてゆくと、丸に尾の字の旗で、これが有名な甚右と敵は気づいたらしく、砦の狭間口から一斉に、

「尾藤留守武者、ヤアイ、ヤアイ」

と声を揃えて囃したててきた。それを耳にすると甚右は、いらすかしている矢先なので肚だちまぎれに、かんにさわってきた。

「えい、者共かかれ」と、率いる讃岐兵に号令し、鬱憤ばらしに先頭になって突入した。

激戦三時間余りで、ようやく砦を占領。

甚右も、すこしは腹の虫が納った。だから吻っとしていると、いきなり総大将の本陣から呼び出しがあった。

（さては戦功を賞められるのだろう）と意気揚々と出頭したところ、甚右は案に相違し、

「……汝一人で、戦をしているのではない」

秀長に頭ごなしに叱りつけられた。高鍋砦は、黒田官兵衛が、その伜と二手に分かれ、挟み討ちにする陣立で進んでいたのを、甚右が横合いから唐突に攻撃し、作戦をめちゃめちゃにしてしまったのであると、厳重に説諭され、

「今後は、いかなる場合でも他人の陣場へ己れの兵を入れぬ」と誓紙まで書かされてしまった。

ところが四月十六日の夜半。薩摩勢は星もない暗夜

を幸いに、味方の宮部部隊の陣所へ斬込みをかけてきた。

なにしろ真暗なので、味方の藤堂隊の鉄砲組百人が駆けつけたが、二連射ぐらいはしたものの、もし、味方を誤射してはと引きあげてしまった。甚右の讃岐隊も、暗さは暗い闇夜だし、それに秀長に叱られ、他の陣場へは、兵を入れない誓紙を差出している手前、止むを得ず傍観してしまった。

だが関白の秀吉は、そこの経緯を知らないから、朝になって駈けつけてくると、

「尾藤留守武者として、その名も高い甚右が、宮部部隊の脇にいながら、なんで薩摩勢の暴れ廻るのを、知らぬ顔をしていた……こりゃ、いったい何んじゃ。さては、うぬは敵から銭でも貰うて裏切りしくさったか」

と厳しく叱りつけられた。甚右は困って、

「誓紙を秀長さまに入れてありまして……」

事の次第を詳しく言上してみたが、当人の秀長は、思わぬ敗戦で兄の秀吉に面罵された後らしく、動転した青い顔色で「知らぬ」と首を振った。

「この嘘こきめ。長浜からの主人の儂を、瞞くらかそうとは、なんたる不届き者ぞ」

関白から激怒された甚右は、その場で所領没取。追放処分にされてしまった。

しかし、甚右は、それに対して悪びれもせずに、かしこまって手をつくと、

「ハアッ」と素直にうけてしまった。

(どうせ後になれば、事実はすぐ判る事だし、秀長さまさえ今は忘れて居られても、思い出して下されば、万事解決。きっと関白さまのほうが、後になったら恐縮されて、済まんかったと云って下さるだろう)と甚右は秀吉への長年の信頼感もあったから、すっかり安心しきっていた。

それにもう一つ。

(昔、おれが討死したと伝わったら、銭と荷物をもって逃げだした安子だから、今度も素寒貧の牢人になったと聴こえたら、すぐさま有金さらって居なくなるだろう。そうすりゃ、あの女を厄介払いするには、これ勿怪の幸い。これで俺は救われもしようぞ)と考えたからである。





## 7

「滅相もない。いくら代わりに稼ぎに出て下さるとは仰せられても、讃岐五万石の殿様だったおひとに、土掘り人足はさせられませぬ。どうせ夫婦の仲。どちらが働いても、よろしいではありませぬか。そのかわり、また乳がほしいと赤児がせがみましたら、ご厄介でも明日も背負うて、作業場へ連れてきて下され」

空畚を担いで、頭から泥飛沫を浴びて戻ってきた安子は、甚右が済まながって、

(明日は代りに働きに出よう)と云いだすのに手をふってなだめ、その代り、甚右と寝ている赤児に、微笑をみせながら、

「ブルブル、バア」と挨拶してから、裏の小川へ、手足を洗いに行った。

母親の姿を見かけ、甘えて泣きだした赤児を、甚右が、旗指物のように背へくくりつけ、晩景の雑炊の大根を刻んでいると、あたふたと、

「とんでもない。私が致しまする」

顔から雫をたらしたまま、まだ拭きもせずに、安子が急いで川からとんできた。

「そなたは一日、力仕事をして戻ってきたところ、これ位は俺にやらせろ」と拒んでも、

「勿体ない。旦那さまに煮たきの世話などさせては、女ごとして罰が当ります」

と甚右の腰を抱えるように土間から上へ押しあげてしまった。手もちぶたさの甚右が、

「あれから三年もたつに、まだ何んのお沙汰もない。こんな遠い関東の古河まで流れてきたゆえ、もはや関白さまに忘れられたらしい」

心細そうに、つい愚痴ると、安子は、

「なんの、なんのお前さまのような良い人を、天道さまが見棄ててておく筈はない。きっと今に、良いことがありましょう」と慰めた。

「俺のような男、どこが良いというか……」

自嘲する甚右に、火をおこしつつ安子は、

「……九州征伐にゆかれた後で、古い侍女や家来に聞きましたら、貴方さまという方は、長浜で只一度だけ契られた私めに操をたてられ……あれから、八年間もの長い歳月、牝犬さえも側へよせなかったそうな」と

泪ぐんでしゃべった。

「俺は、他の女は知らん」甚右も頷いた。

「それに比べて、この私は『女の盛りは短かいもの』と、矢つぎ早やに、あちこち嫁入しては、出て戻り、結局最後になって『本木にまさる末木なし』と、貴方の許へ戻って参った多情もの。操を守り通された貴方さまに比べほんに恥しや……」声をつまらせて嬉し泣きをした。

「それで……俺が牢人したときいても、今度は逃げんと、帰りを待っておったのか」

甚右は、人が変ったように、まめまめしく仕えてくる女の気持の変り方が初めて納得できて、かえって情けない顔をした。そして

（ああ、亡なった父が口癖に、力になる所から嫁とりしろといったのに、俺は、この女で身を誤った為に執念深く、後まで邪魔をされ、そのため縁故のつけられそうな大名から嫁とりができず、今こうして牢人しても秀吉さまに取持ちしてくれる縁辺もない）と胸を締めつけられる想いで、ぽたぽた泪をたらした。

すると、それに気づいて安子は駈け上ってきて、

「私のために泣いて下されましたか」と甚右の頬を拭い「身を粉にしても貴方の為に尽しまする。子まで出来た夫婦の仲、いつ迄も愛して下されませ」

と、甘えるように凭れかかった。てんで男と女というものは、こんな土壇場へきてもまったく話は、ちぐはぐである。

天正十八年七月、十二日に小田原落城してから、鎌倉、江戸を廻って関白さまが、この古河へも、十八日は御通行と噂がたった。

「是非とも、お目見得したい」という甚右を、安子は虫が知らせたのか、

「よしなされ」と止め「細々でも親子三人が飢えを凌げれば、今の儘でよろしゅうございましょう。もし寝酒がたらねば、夜業をしてでも、私が稼ぎまする」と頼んでみた。

「いや今のままでは、お前ら母子が哀れよ」

甚右は、そんな云いかたをした。他に云いようがなかったからである。もちろん内心は、この女との腐れ縁をきりたかった。しかるべき所から嫁の貰い直しをしたかった。それには何千石でもよいから、もとの武者に戻らねば、他人が相手にしてくれぬゆえ、そこのところを訴えて、太閤さまに、また使って貰おうと考えていた。だがしかし、そこまで気づかない安子は、

「これで仕合せで、ございまするのに……」といった。

だが、それどころではない甚右は、佐野の方角から大沼べりにそって関白さまの行列が近づくと駆けだして行った。安子も赤児を抱いて後を追った。

関白さまの黄金の駕籠が近づくと、狗ころが主人を見つけたように、尻っぽを振らんばかりに甚右は、懐しそうに走りよった。

駕籠の戸があいて、関白さまが何かを云われると、甚右は喜び勇んで行列について行ってしまった。安子は伸びあがって見送ったが、甚右は、すっかり夢中らしく振返りもしなかった。

そして、その次の日。

大利根の流れに掛った栗橋の袂に、

「関白殿下へ害をせんと企てし謀反人」

と黒田官兵衛の名入りの立札が掲げられ、その下の台に、甚右の首がちょこんとさらされていると、近在の百姓から知らされ、びっくりして髪ふりみだした安子は、とんで行った。

十何年かたって、古河で生まれた赤児が成人して娘になった日。母親として安子は、その娘のために藁をもんで、下馬を初めて拵えてやった。そして、

「もう女になったで婿探しじゃが、男は次々と換えんがいい。一人でええ」としんみりいった。

「……わしら母子の為に死なした阿父のようなそないな婿をとったら、良いね」と娘がいうと、

「うん、あの尾藤留守武者の甚右さまは、この阿母一人だけを愛され、仕合せにして下さろうと、太閤さまに駆けこみ訴えまでされ、そんで間違われなさって、身に寸鉄もおびておらんのに、あわれや、憎んでいなされた黒田官兵衛さまに殺され……命まで落されたのよ」

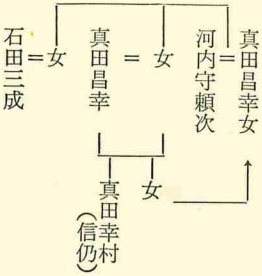
安子は娘をひしと抱きしめ、おいおい声をたてて泣き崩れた。

# 続・びとう武者

さて……この物語は―「川角太閤記」や「豊鑑」の一五九〇年七月の条に、

（下野那須の椿事）として殺害された当時有名だった、尾藤留守武者こと、尾藤甚右衛門のことである。

ところがテレビ放映で「真田幸村」が始まる事になって、そのもっとも信頼できる史料として「日本の武将真田幸村」があげられだした。この歴史家には前に、「真田史料集」の出版もある。だから、知らない人は、これを好史料と扱っているらしいが、（上杉謙信の姉の亀の夫である長尾政景の住っていた信州上田城）つまり越後三家の内の上田長尾家を、この歴史家は知らぬとみえ――上田城を真田昌幸が築城したことにもしているが、それは良いとしても、その二十九頁に、上のような系図が、堂々とのっている。そして、「この宇田下野は、もと尾藤甚右衛門といい、初めは秀吉の異母弟秀長に仕え、のち秀吉に仕え一万三千石を与えられ、関ヶ原合戦に佐和山城で戦死」などと堂々と説明されている。




大変な記述である。十年前に死んだ男が、真田幸村の祖父になり、妹が外叔父の妻になり、娘の一人は石田三成の妻である。こんなデタラメを歴史家に平気で書かれては、（前後を女のモノローグ型式でまとめてある、びとう武者）は、あべこべに変な目で見られる惧れがある。だから、義憤を感じて書き直しをする。しかし材料は同じでも構成が違うと、まったく違ったものに、なってしまうだろう。しかし、といって、前の「びとう武者」に次のを比べて、どちらが巧いかというのではない。あまりにも好い加減な歴史的、史料的なものが堂々と出版される現代への、次の物語は悲しい一つの抗議である。

# 1

## 京所司代　板倉勝重申上書

出雲阿国なる女が、五条河原にて始めました念仏踊は、今様くずしのものでございまするが、勧進舞、歌舞伎とも申しまする。

「有難やの、有難や」という歌を、琵琶法師のバチの音色にあわせ、阿国が、打ち鉦をカーンカン叩いて仕舞いをするのが、詰めかけた群集に、「ヤンヤ」と喝采を受けまして、摂津や伊丹からも、弁当もちで見物が詰めかけて居る盛況にござります。

〈大坂表の繁昌を取りつぶし、早く京へ移せ。大坂の人気を失わすよう、よくぞ取計え〉とかねて、御通達の思召によりまして、なるべく洛中の景気をよくし、見物人を集め、大坂よりも賑やかになるよう心掛けて居りますれば、まあ興行の取締は大目にみておりますので、北野の辻で、近頃は、〈天の岩戸おどり〉とかいうて、巫女の姿をした白衣赤袴の踊子が、楽の音につれて、一枚ずつ着ている物を踊りながらはいでゆき、しまいには生まれたままの姿になって、仰向けに横たわり、尾籠ながら己れの岩戸を、ひろげてこれを見せるような仕草まで、致しておるげに有ります。

とかく下民と申しますものは、上の口と下の口さえ喜ばせておけば、ご政道に、とかく楯つくものではありませぬ。なにしろ三年前の関ヶ原合戦にて主家を失いました牢人共が、この京にも沢山入りこみまして、三三五々、諸々を野良犬のように、うろついて居りまするが、女の裸踊りを見物して、目くじらをたてる輩も居りませぬゆえ、御威徳あまねき、洛中洛外とも、京の町々は天下泰平にござります。ご休心下さりませ。

さて、今月の目新しい出来ごとと申しまするのは、阿国歌舞伎の繁昌ぶりに目をつけました六条三筋の辻の遊里の年寄り共から、

「人よせのための仮舞台をぜひ、設備したく」

と、かねて願いが出ていましたのを、先月すえに許してやりましたところ、早速、長廊下のような大舞台をこしらえ、ここに二三十人もの遊女を一列、二列に並べ、手ぶり可笑しく踊らせ、その大掛りな派手な振舞いに、本家本元の出雲阿国の勧進舞よりも、評判に





なり申して、大坂、堺よりも遊客が集まり、

「六条おどり」とか「三すじ踊り」

などと騒ぎ申し、洛中の人気を今やひとりじめの有様。まこと、もの凄い人気でありまする。

さて、そこまでなれば、これは色気だけの事ゆえ（別に放っておいても、よろしゅう）とは手前も思いまするが、まこと風変りな見世物が、踊りの合間に入るのがこれが前代未聞の由。

町奉行の方よりもこちらへ（如何か）と伺いをたててきて居りまする次第。

と申しまするは、ふつう踊りの囃し方、下座といいます類は、誇張りの物蔭か、幕のたれ蔭にて演奏するのが定法でありまするのに、この（六条おどり）では野天舞台ゆえ、大きな引幕とてありませぬ。

それに幕間といいますか、踊りと踊りの合間が、多人数ゆえ暇が掛ります。その間、だだっ広い板張りの舞台を、そのまま、むきだしに放り出して置くわけにも、ゆきかねるとみえ申し、下座の男ども四人ほどが、幕つなぎにとその度びに舞台に現われまする。

引き鉦、横笛、太鼓　薩摩三味線の四人編成で、騒がしく、時には、もの悲しく、囃子の音色をきかせ、歌も口を揃えて唱いまする。

もともと遊郭のだしものゆえ、売物はきれいに化粧した女どもでござりますゆえ、この四人の男は、まあ、その遊女共の引き立て役のためでござりましょうか法界坊のような蓬頭。

まだ、みな年若な男共で、前髪などつけて居りますれば、色子としても通り、袴姿に小刀を帯びさせれば、ご大身の脇小姓としても見られる容姿なのに、むしゃくしゃな髪毛の坊主頭にて、熱狂的に歌をがなりたて、ビンビン三味の絃をならし、ピイピイ笛をふきドンドン太鼓を叩いては、カンカン鉦を叩きまくっては薄紅の吹貫の下で唄うのでござりまする。

本来ならば遊郭ゆえ、男の瓢客どもが、さんざめき蝟集するわけにござりまするが、この四人の蓬髪坊主共が舞台へ現れますと、

「キイッ」「キャッ」と　若い娘どもが、歯をむきだし、野猿のように黄色い叫喚をあげ、わあっと、何処からともなく群って参り、

「一べえ」「一べえ」

と坊主共の名をよびあげ、大騒ぎを仕まつり、中には感きわまって、あかね染の腰紐や、萠黄染の名古屋帯をといて、それを舞台へ放りだし、前をはだけたままで、板張りの台へ駆け上り、むしゃぶりつく娘などもこれあり、

「見える、見える……」と客共が野卑な声をあげ、

「お裾がわれて良う見えるで」と、すっかり見物の飄客共は、やんやと手をうって喜びまする。

「……思わぬ眼の保養じゃ」

とみな、四人の蓬髪坊主に拍手してやり、遊び心をひきだされた者は、そのまま郭内へしけこんで登楼しますゆえ、今や六条踊りの人気は、この浮かれ坊主どもが大半を占めて居りまする。

と申しまして、何も私はじめ町奉行の者共も、それらの若い蓬髪坊主が、女ごにもてるからと、それをやっかんで、やきもちやいて、とやかく申すのではありませぬ。

いくら京の女ごが美しいとは申せ、関ヶ原合戦このかた、日の出の勢いにて、この二月十二日には征夷大将軍の宣下をうけられました家康さまという、大旦那をもった奉公人は、徳川さまご威光をもちまして、女ごの不自由などは、その気さえ出せば、毛頭、困る道理とてありませぬ。決して年甲斐もなく、若衆共と張り合うと申すのではこれなく、唯その歌が異様にて、それが口から口へとひろまり、流行しだす心配があればこそ、些細な事とは存じ候えども、ここに書き送らせて頂くような始末にござりまする。

その唄なるものを、披露しまするとと、

「尾藤るず武者」と申す外題のものは、

ナゴヤ、ナゴヤと、出てきた武者は
槍さ担いで何処サゆくサンザサンザ
旦那のお供じゃ奉公じゃコラサッサ
ご馬前に、命なげだし武篇をたてて
忠義尽すは、コリャア良けれえども
ご用なくなりや美濃尾張ナゴヤだぜ

「尾藤るず武者」が良い、鑑であり申す

「尾張るず武者」めは、殺されてござる

ナゴヤとかサンザとか申しますは囃しの合言葉。





これは阿国歌舞伎でも用いていますゆえ、名護屋御陣の征韓の役のときの歌とも想えませぬ。なにしろ(御馬前に武者が奉公するのは良いが、用ずみになると棄て殺しにされる)と云うのでは、まこと武者共への聞えも如何かと存じよりまする。かかる不所存な流行唄が、弘まりましては、いざ合戦と申す折りにも、士道人心を悪化させるものでは有るまいかと、臣勝重は、まこと憂慮し、如何かと愚考する所存にござりまする。

なにしろ私めは、江戸町奉行、小田原差配の兼役をして居りました千石どりの身分から、二年前に、一足とびに山城にて六千六百石も、ご加増を賜わりまして尊き身の娘婿にも当たられる奥平信昌さまの後をつぎ、今回は特に、この京の所司代という大役を、拝命した者にござりまする。

ただ毎月このような、とりとめもない京雀のたわごとのごとき見聞書を、上さま(家康)の乙夜の御覧に供し奉り申し上げ、御興をそえて居るだけでござりまするに、計らずもこのたびは従五位下伊賀守に私めは任官させて頂き、新たに寄騎三十騎、徒歩同心百人をも御預け下され、この面目を、いかにしたら大過なく上さまのお目鑑に叶い奉るよう忠勤申しあげられるか。唯そればかりに、私は心をくだき居る次第にござります。

それなのに、てまえが頭を悩まして居る矢先と申しまするに、まこと賑やかと云うより喧しすぎる、この「尾藤武者騒ぎ」では、まったく閉口頓首の外とてござりませぬ。如何しましたら、よろしいものでありましょうや。御伺い申しあげ、上さまの御指図を仰ぎたく、頓口平首　謹言。

## 2

### 側衆　松下常慶返書

さきに上さまのお言葉よりいい聞かせる。

「江戸中納言(徳川秀忠)の意向はよくは判らぬが、まあ良いではないか」と思われる趣。のようである。

関ヶ原合戦にて、天下の事は、すでに決ったようなものであるが、秀頼がまだ大坂城にあって、再三の督促にも係わらず色代に関東へ下向せぬのは、謀反の逆心ありと見るべきである。

そうなると、京大坂に群っている牢人共は、いずれ

大坂方に組して、吾らに刃を向けるしれもの輩である。そういう武者達が、そうした流行唄によって厭戦気分になるのは、まこと願ってもないこと、と思われて居られるという次第。

「その四人の若党共に、本来なら褒美をとらせたいくらいではある」とまで仰せ出されている程だから、よって、そこもとも、たとえ、うるさかろうと京の方では、早やまって取締などせず、おおいに唄わせ、表むきに銀など届けてやれぬゆえ、贔屓客のふりをして纏頭を渡すごとく、扶持して取らせるようにしてほしいものである。

それから、上さまのお耳に達し、満足を遊されている者に万一の事があっては、ならない。

豊臣方の廻し者が、四人の生命を狙って潜入するやも知れぬから、所司代に於ては、武功な兵法者をよりすぐって、秘かに観客に変装させ、

（舞台へ刃をもった者が駈け上らぬよう）身辺護衛をしかとされたい。

——以上は、役むきの固い話のうけ答えであったが、さて京は如何であるか。

こちらの駿府のご城内は、日々暖かな陽ざしに恵まれて、まことに結構であるが、京はとうに、比叡おろしに見舞われて底冷えする日が続いていよう。儂は久能城一万二千石を、太閤が死んだあと、まるまる上さまに進上もうし、今では隠居分として切米三百俵の台所方という閑職で、のんきに日々を、上さまのお相手で過しておられる気楽さだが、其方は、敵中へ打ちこまれた楔のような大役。さぞかし日々とも気骨がおれて大変なことであろう。と同情をして居る。

なにしろ其方は天正九年までは、三河中岡の永安寺で坊主をしていたのを、高天神合戦で兄の板倉定重が討死したあと、上さまが家名のたえるのを気づかわれ、還俗するよう云いつけ奉公を命じ弟の其方を逆縁ながら跡目につがせ、この儂と親しくなったのも、その天正十四年に、「坊主上りの者に、槍さきの奉公もさせられまい」

と、上さまが、其方を駿河町奉行になされた時からゆえ、すでに、かれこれ十と八年の長い附き合いとなって居る。

互いに、よる年なみゆえ、まあ身体だけはいとえ。





大坂を片づける迄は、上さまの天下は、まだ成らずと考え、女の裸踊りでも、そない、うるさい坊主共の囃子とて、どんどん京坂にひろめ、上方武者共を骨抜きにしておく事こそ、所司代としての隠れた仕事だと其方は考えるがよい。

二伸。

さて、びどうるず武者のこと。調べがついたゆえ書き加える……太閤が木下藤吉郎と名のっていた頃、尾藤十二兵衛と名のって、江州長浜にて、二百五十貫どりで奉公していた寸法武者のことと知れた。

天文元亀の頃までは、今でいう遊撃隊を、

「浮き武者」とよび、

当今で申す、旗本武者のことを、

「留守武者」とよんだものである。

本営の馬印や旗立物を飽くまで死守し、いかなる強敵に攻めこまれても、一歩も退かず、文字通りに踏み留って守る武者のことだが、奥州伊達政宗の臣で、やはり留守武者の功名をあげ、それを苗字に貰って「留守政景」と名のり、大谷城主になっている者もある。

さて秀吉の旗本にも、敢死の覚悟の留守武者の者が、数十名はいたであろうが、

「尾藤留守者」として、その男だけ有名になったのは、天正五年十月二十三日に安土を出陣して信長公の命令で、播磨攻めに向った秀吉が、佐用城を攻め落して上月城を下し、矢つぎ早やに福岡野へ押しよせたとき、敵の救援にきた岡山の宇喜多直家に、不意に横合から突かれた。このとき、宇喜多名代の豪傑岡平内の率いる決死隊に、秀吉の本陣が背後から奇襲をうけ、旗本の歴戦の留守武者も、ばったばったと倒された中で、尾藤は唯一人、抜刀術というのか、居合抜きというのか知らぬが、三尺の打ち刀を振舞わして、おしよせる敵兵をことごとく斬り倒したはよいが、全身に、針鼠のように、しし矢を射かけられて、仁王立ち。

「弁慶の立往生」

も、かくやという有様で、敵も味方も、眼を見はって呆れ、ただ仰天したそうだ。

なにしろ、立った儘で絶息しているから、

「もはや落命しているもの」

と誰もが思っていたところ、戦が終って、宇喜多勢

も退却。福岡野も落城して、陣幕をはらって、さて本陣が移動しかけると、死びとの筈の尾藤が、ひょろひょろと、後をついて歩きだしてきた。という。

「げえっ」と、さすが荒武者も、幽霊を眼のあたりに見る想いで、びっくり仰天。

秀吉も、さすがに感きわまって近よると、その身体を抱えるようにして、

「尾藤、留守武者の誉れなれ」

と絶叫して泪ぐんでみせたそうである。

とりあえず、矢よけの楯板を並べて寝かせ、姫路城へ後送させて看護したところ、二十数創の怪我をしていたが、急所をはずれていたのか、尾藤の身体が頑丈なのか、だいぶ高熱をだして十日程は苦しんだらしいが、本復すると元気になった。

秀吉は、

「その働きぶり古今無双なり」賞めそやして、二百五十貫どりにすぎない黄母衣の徒歩武者の尾藤へ、その二十倍にあたる五千貫という、目の玉が、とびでるような大加増をしてやり、武功抜群の大母衣武者に昇格させ、物頭役の武者奉行に任命した。〔武者事紀〕

このため、

「尾藤留守武者」の勇名が世上に取り沙汰され、敵陣の方にまで、

お武者なら、お武者なら
びとーるず武者み習えや
一足とびに五千貫五千貫

と、当時は唄にまでなって、その勇猛と栄進が謳われたものである。

その後、但馬豊岡城主だった木下秀定が、小牧長久手合戦で討死すると、留守武者は、尾藤甚右衛門と名のりを改め、尉の官位まで貰って、その跡目となり一城の主に出世した。〔谷森文書〕

翌年六月の四国征伐のときには、阿波木津城を攻め手柄をたて、ついに甚右は、讃岐半国五万石にまで立身しとる。〔土佐物語〕

――なにしろ秀吉というは、藤吉郎になる前、頭陀寺城のわが兄松下加兵衛の許でやっこをしていた事がある。当時は儂と鮹もおつかつで、その頃は、こっちが大将。あれは手下であった。童の頃から弁口はよくたつが、からっきし非力の男で、棒をもったり竿を振って（武者ごっこ）をすると、彼奴めは、いつも突き倒されたり撲られて、おいおい泣いてばかり居った。そして口惜し泪をため、

「大きくなったら出世して、俺が殴られんよう、守ってくれる強い手下を召抱えたる」

と、生意気な口ばかり、べそをかきつ愚痴って居った。そこで藤吉郎となって近江長浜五万石の殿様になったときは、何をおいても力の強い武辺者をば、用心棒として留守武者に、たんと集めたのであろう。

そして、その護衛役の中で、ぬきんでて懸命に働いたのが尾藤甚右で、その褒美に五万石にまで、秀吉は出世させてやった訳けなのであろう。

だが、それにしても判らぬのは、何故、その蓬髪の四人の若者が、

「びどーるず」を唄ったり演奏したりするのか。

そこを、今度は其方のほうで調べあげ、儂にだけでも教えて寄こすよう、取計ってほしい。

## 3

### 尾藤甚右前妻　りく覚え書き

所司代さまお手掛りのお調べとのことにつき、ありてい包み隠さず申あげる次第でござりまする。

六条三筋上る仮小屋にて、歌舞音曲の興行に出演して居ります、「びどーるず」と呼ばれる四人組の若者は、お恥しながら、かつては五万石拝領の尾藤甚右の伴どもに、まったく相違とてござりませぬ。

あれらは、なにしろ剃髪を条件にて死罪を許されました者共ゆえ、髪毛をのばして髷にはゆえず、みな坊主頭にござりまする。それも年頃ゆえ、青頭はいやとみえ、むさくるしゆう山嵐のような、ぼさぼさ頭をしているようでありまする。

さて、申し遅れましたが、四人の内の長男の二十歳になりまする跡目の一べえは、この私めが腹を痛めましたる伴。あとは、同じ父をもつとは申せ、素状知れぬ卑しき女ごの腹から出ましたもの。なにとぞ、そこを汲みとりなされ、武功の誉れ高き尾藤の家をば、また御憐情にて世に出して頂けるものなら、是非とも、総領の一べえに跡目相続の儀を、願わしゅう存じあげます。それでは……お尋ねの、甚右が牢人しましたる節の模様を、申上げるでござりましょう。

それは、天正十五年の春と覚え居りまする。
太閤さま弟君の大和大納言秀長さまが、九州征伐の日向口の総大将でござりました。尾藤甚右は、黒田官兵衛さまと共に先手を命ぜられ、まず高鍋の砦をめがけ、ひたむきに押しよせ、
「われこそは尾藤留守武者として、歌にまで唱われている甚右なり」と讃岐衆千名を率い、
「者共つづけ」と呼ばわりつつ、当るを幸い突いては斬り、斬っては突き倒して進みますと、薩摩方の伊集院勢も、初めの内こそ、
「ひょろひょろの上方勢、何程の事やある」
と高をくくって矢を射かけ、石を投げて防戦はしましたなれど、
「やんや」「押しこめ」
とロ々に喚めいて殺到する尾藤勢には、すっかり肝をつぶしてしまい、薩摩兵は、
「音にきく、あれが針鼠になっても、留まり守った尾藤るず武者か」
と怖毛をふるってしまい、小豆色からお納戸色に夕やけ空が翳ってきたのを、これ幸いとばかり、叢にかくれ、樹の茂みに身をひそめ、こそこそと、島津中書頭のこもる薩摩方の高城へと逃げこんでしまったのでござりまする。
「そうは、させじ。引返せ。引返せ」
とばかり甚右が、紫紺胴の厚重ねに朱丸をつけた鎧の胸を、ぐっとそらせて馬をすすめ、まっ先かけて突進し、いまにも讃岐の武者だけで一団となり、城門うち破り、怒濤のごとく、なだれこもうとしかけたとき、遥か後方から、
「……尾藤、待った」
と、総大将羽柴秀長さまよりの御使番が、泡ふく馬を駈けとばし、近よるなり鞍の上から、
「ひとまず、ひきあげるよう」との沙汰。
すでに陽はくれ、四月十三日の新月は、まるで柑橘の実を、透けるほどに薄切にした位の明るさで、云われてみると、夜討ちをかけるには、やや暗すぎましたゆえ、甚右も合点し、
「もっともな御下知」と心得て戻ってきたところ、秀長さま本陣へと呼び出されたので、
(さては本日の一番のり、一番がけを賞めて下さるのだろう)と、意気揚々と出頭したところ、あんに相違して、
「……汝一人が、戦にきているのではない」
と、きつい叱られかたをしたのでござります。
(高鍋砦は、黒田官兵衛が、伜の筑前と、挟み討ちにする手筈で攻めかけの予定を、脇から甚右が割りこんでいって、独力で落してしまい、敵兵は、包囲されて居らぬを幸いに、高城へ逃げこんで籠城してしまったから、今後の作戦に支障をきたす事となった。これは誠に、けしからん次第である)と、秀長や黒田のお二人から散々に甚右は油を搾られ、そのあげく、
「今後は、いかなる事があっても、よその陣場へ入りこんで、功名手柄を横取りするような真似はしない」
と、一札かかされたそうでござります。
さて、ところが、その三日後の十六日の夜半。
突如として薩摩勢は斬込隊をもって、宮部継潤の陣場へ夜討ちをかけ、折からの月も星も出ていない闇夜を、これ幸いとばかり打ちこんできましたから、物凄い戦場になりましたけど、なにしろ救援したくても、真っ暗で手がつけられません。味方の藤堂和泉の陣場からは、鉄砲隊が百人ほど駈けつけ、すぐさま、
「ドドンパンパン」「ドンパンパン」
と、二斉射ぐらいはいたしましたが、もしも誤って味方を撃っては大変と、それで引揚げた由にござります。
同じように、味方の小早川隆景の陣所でも、
「うっかり加勢にかけこんで、宮部の兵と同士討ちでもしたら、後から、お咎めになるだろう。それより、きっと宮部勢は腹をすかせているに違いないから、喰べ物の方で助力しよう」と、すぐさま大釜で、粥をこしらえたり、飯をつくって、これを握って孤にくるみ、夜があけて、やっと空が白っぽくなってくると、蘇香円、至宝丹といった医薬品と共に、一緒に見舞にもって行きましたと聞いて居りまする。
さて、甚右の家来にも小早川の老臣のような、心きいた者が居ればよかったと思いまするが、なにしろ悲しいかな二百五十貫どりから、五万石になり上った尾藤の家中には、敵中へ脇目もふらずに突きこんで功名争いに熱をあげる武骨者はいても、才覚のまわる智恵者はいなかったのでござりましょう。

後で聞いても、隙あらば宮部の陣場へかけこんで、夜討ちにきた薩摩の斬込隊を突き伏せ、手柄にしようと、はやりたつ猪武者ばかりだった由。

「……これ鎮まれ、勝手によそへ戦しに行ってはならんと、おりゃ誓紙まで書かされとる。なあ、落着け、早やまってはいかんぞ」

と甚右は彼らを慰撫するだけが精一杯で、宮部の陣場へ見舞品をもってゆくどころでは有りませなんだ。

ところが後になりこれが問題になったのです。

太閤さまは、弟の秀長さまの許へこられて、

「油断して、夜討ちをされるとは、なんたる事だ」と激怒され、「宮部の陣場近くにいたのは、何処の軍勢だ」と、絵図面を拡げて調べられると、すぐ脇にあるのが尾藤の陣場。

そこで、すぐさま呼びつけられ、太閤さまは、

「わりゃびどーるず武者と、唄にさえなっとる高名な武功者。それが、なんで、みすみす薩摩勢の暴れ廻るのを指をくわえて見逃したか。島津の敵軍から銭でも貰って、さては裏切りしくさったのか。腑に落ちんぞ」

と、きついご折檻。さすがに甚右も堪りかね、眼の前の床机に腰かけている秀長さまの方へ顔をむけ、哀願するように、

「先日かきましたる誓紙のことを、上さまに言上くだされえ」と必死に頼みましたなれど、

「さあ」と、秀長さまも、太閤に叱りとばされ動転されて居られたのか、思い出して下さりませぬ。

「……役たたずは、飼っておけぬ」

と、その場で所領没収。太閤さまから甚右は永の暇頂戴という事になったのでござります。

## 4

### 尾藤一兵衛 覚え書

当時、私めは、まんだ幼年のことですので、あまり詳しくは覚えとりません。

九州日向攻めで、せっかく五万石の所領を、お取上げという羽目になり、私共親子は四国の讃岐を引きあげ大坂表へでてくると、久法寺町の空家を買とり、そこへ、ひとまず落着きました。

「……秀長さまさえ、儂のかいた誓紙を太閤さまに、お見せなされたら『そうであったか、さもあろう』と





納得され『早やまった処置をして、済まなんだのう』ときっと昔のような、やさしいお声をかけて下され呼び戻しをなされる筈だ。まあ、それまでの辛抱よ」

繰返し、あけくれ父は、そんな事ばかり云っとりましたが、いくら待っても、なかなか勘気ご赦免の沙汰はなく、堪りかねて母が、

「坐って喰べて居れば、宝の山も空しというのに、一文の銭も入らないでは、やってゆけませぬ……何処へ仕官なされるがよい」

と家の中で、髯ばかり毛抜でむしっている父をせかしまった。しよう事なく、父は、あちらこちらと顔を出し、頼んで廻ったようでは有りますが、前に五万石の殿さまだった身状では、頼まれた側も扱いにくいとみえ、何処も相手にしてくれません。それで、毎日がっかりして戻してくると、「……『びどーるず武者』などと呼ばれた昔の、華やかな名前に、まんだこだわっていなさるから、いけませぬ。もうこうなっては、また徒歩武者から出直しなされ」と母はいいおりました。

「そりゃあ、むごい……若い時なら名をかえての出直しもきくが、今さら…」と父が拒めば、

「ではどないなされます」母はすぐ憤りました。

「いいではないか。どうしても生計が立ちゆかぬようになったら、美濃へ戻って田でも打とう。親子三人で畑でも耕せば、稗粥ぐらいは、まあ啜れもしようが……」

「情けなや……そない不甲斐ないご心底か」

「時よ時節よ。まあ、しようがなかろうが……」

「それでは伜めを百姓にでもなさる、ご所存かえ」

「俺が子に生れたが不運と諦めさせえい…もし伜めに運さえあれば、また花さく季節も、いつかは巡ってこようというものぞ」

「なりませぬ。とんでもない話にござりまする。父親さえ武者の端くれなら、跡目をつげば、伜とて、お武者になれよう。そこからならば、あとは槍一筋の功名で、どのように出世できんもんでもない。しかし、親が百姓になってしもうたら、伜めは、どないするのでありましょう」

「……と云うても、そなた」と当惑する父に、

「できぬ相談をぶっても始まらぬこと……いっそ、こ

うなされませ」と母は切り出しました。
「どないすると、云うのかや」
「どないも、こないも、今日限り、たった今から、わたしら母子とは無縁になられませ」
「縁きって、なんとする」と父がなじれば、
「別れた後の身のふりかた迄、きかっしゃるは無用の詮議と心得まする」と母はつきはね、
「云わいで離別ができるか」と父が叱れば、
「なら申します。この一兵衛を連れ子にして、わたしゃ何処ぞの武者衆の後添えの口を、探して入りこみまする」と、そっくり反って云いました。
「それが伴の仕合せか」
「他に途とてありますまい」
「なら、この家もろとも諸道具とも、みなくれてやろうかい」
「すりや、おまえは、どうなさる」
「でてゆく。この儘手ぶらでゆく、健固に葺せ」
と、父母のやりとりのあと、私に近よって父は手を伸ばしかけましたが、そのまま引っこめて、すたすた出てゆきました。（頭を撫ぜかけてくれたのを何故やめたのだろう）と、追いかけて見送っていましたが、父は振向きもしませなんだ。
——私が父甚右を見たのは、それが最後で、それっきりになりまして、もう逢うて居りません。
その後、母が口入屋の世話で再婚した武者は百貫どりの端武者で、酒ぐせが悪く、酔うとすぐ手をあげて母を打擲する乱暴者。それゆえ、二月ほどで別れ、次ぎは、左手を戦でなくした武者の許へ母は嫁ぎました。この武者は、私を自分の子のように可愛がってくれましたが、半年とたたぬ裡に、流れ玉に当って戦死。
とやかくするうちに天正十八年七月の、父甚右の椿事がもち上りました。私は母と共に、余類としてお召取りをうけ、父が、その後に契りを結んだとかいう次の新しい母や、その双児と下の赤児の弟三人と、初めて奉行所で逢うた位でした。
——女には、お構いなく、子供は剃髪をさせよ。との但し書つきの条件で、放免されましたが、母は動転して、私を置き去りにして美濃へ行ってしまいおったので、よるべのない私めは、異父弟どもの母に、そのまま一緒に育てられました。





新しい母が、出雲巫女の勧進宿に奉公して、私共を育ててくれましたので、幼ない時から神楽囃子など耳できき覚え、笛や太鼓がならせるもので、祭礼の人よせなどに働きに行っては、そこで、いくらかの銭を稼いで居ました。
その後、蛇皮をはった薩摩三味線を、私が用いるようになりましてから、その音色が珍しいと評判をとり、六条踊りの舞台へ出だしてからは、投げ銭の祝儀を下さる方も多くなり、これまで苦労させた二度目の母にも、やっと綿入り布子などを着せられるようになり喜んで居りまする。それなのに、昔、この私を棄てました母めが、
「父尾藤甚右の名跡を、ぜひ私に継がせたい」
とか、願い出ていると洩れききましたが、私としましては、今さら武者に取りたてて頂いて家名を起すよりは、これまで通り兄弟四人で芸を励み、年老いた今の母に孝養するのが、せい一杯の気持というところでありまする。

## 5

### 尾藤甚右後妻はる覚え書

わたしゃ馬鹿女ごだで、何んも判らんとです。
松風草の花は、黄色っぽくて小さな豆粒ぐれえだが、匂いは強うて鼻ん孔ん中が、つうんと突きあがるぐれえ噎せちまう。そこんとこへ押し倒されて、花の香へ顔をつきこまれたので、花の香に酔うて身動きもせんと、おとなしうとなったです。
「済まん」
立ち上った男がぺこりと頭を下げるもんだで、可笑しうなってしもうて、柔かな溝そばの葉むしって下腹を拭きながら、ついへらへら笑うたら、
「憤らんのか」
妙な顔を男にされてしまったので、綻ばせてしまった顔の締くりようがなく、そのまま歪めっ放しでいると、
「泣くのか」と今度は男にまた訊かれたとです。
「こんたらこと、誰だってするこったし、猫や馬だってする。そんたら事で泣いとれすかねえ」
と、わたしが、尻の上を払って立ち上ると、男は懐から、渋紙の巾着をだしたで、

「なんかね」と、きいてやると、
「借り賃だ、とっとけ」と、云うたとです。
「誰が貸した。そっちはそっち。こっちはこっち。もう二人とも離れとるではないか」
と、たしなめてやったら、髯男は、初めてニイッと白い歯をみせながら、わたしに、
「……何処へ行く」と聞かっせるから、
「小田原ちゅうとこが繁昌と聞くで、行く」
といってやったら、その髯男も、
「俺もだ」と、うなずいて側へきたとです。
「いやぁなこった」
わたしや吃驚りこいて、こんたち男と道づれになって、たえず道端の草蔭へねじ倒されていたんでは、道中に暇が掛って、いつ小田原へつけるか判りやあせんと想うたとです。それなのに、
「何しにゆく」
髯男は離れた所で声を又かけてきたとです。
「北条さま御家中に三年ほど奉公して、そんで嫁入り口を見つけて貰うだ」
つい馬鹿だもんで、わたしや本当のことを打ちあけてしまうたとです。すると、髯男は笑って、
「ほう、男と寝るために、今から三年もあくせく働くのか」と、こうきたとです。そんで、
「なにも嫁にゆくのは寝る為ではないわい。朝早ようから起きて、夫の為に尽してやる事じゃに」
と、わたしや叱ってやったとです。
すると髯男は、思案したように、
「夫の為に、そんなに勤められるんか」
と近よってきたとです。わたしや馬鹿だで、すぐ向っ腹をたてて、
「ひとを疑って、なんじゃい。その言草は……もし信んじんなら、ものは試しじゃ、このわたしの亭主になってみんか」と、きめつけてやったら、
「なったる」と、うけられてしまったとです。
わたしらは夫婦になったで、肩をならべて小田原の城下へ行ったとです。
男が云うにや「おりゃ太閤さまに叱られて追出された男だで、太閤さまの息の掛っとる国では、何処も相手にしてくれん。この小田原は、まあんだ太閤さまと仲良うしとらん所だで、きっと仕官できるじゃろ。そしたら、絹の小袖や山繭の被衣も買うたる」
顔に似合わんと、うめえことを、すらすら云う男で、それで、こっちも大きな気にされちまって暮すうちに、腹も釣られてでっかく脹らんで、馬の飼葉桶ぐらいに持ち上ったと思ったら、一遍に嬰児が二人もでてきて、すっかり吃驚したな、もう。ところが肝心な仕事の口は駄目。
徳川さまとかいう北条の殿さまの御親類が、
「……豊臣家にさし障りのある者を召抱え、ことさら事を構えるような直似はせんが良い」とか沙汰があったとかで、仕官どころか、小田原のお城下からも追放という目にあってしまったとです。
乳房は二つぶら下っとるで、赤児を左右から抱えこんで吸わせられる。だけど背負う方は、まさか振分け荷のように前後へ、ぶら提げられもできん。そこで男にも一人おぶわして、わたしら夫婦は酒匂川を渡り、馬入川をこえ、六郷の渡しをやっとこし荏原をすぎ、下総まで入ったとです。
古河公方さまの昔の御館のあとは、小山の殿さまの目代が入って居られて、そこへ小田原から貰ってきた添書をさしだすと、古びた長屋は、あけて貰えて貸して下されたが、さて勤口は、ここでも、なかなか決りやあせん。
わたしや、児を二人とも男に預けといて、他所へ働きに出たりして、そんで粟や稗を購うて稼いどるうちに、喰べもんのこなれが悪いのか、腹が張ってきて仕様がねえと思っとったら、また嬰児が、今度は一つだが、でてきたとです。
男も、よおこまめに子守りはしてくれたとですが、生れたばっかしの赤子には、男の父ちゃの乳では鼻くそみてえに小せえで、とても小さな口にや吸わせてやれんとです。というて、わたしが休んでしまやあ、稼ぎ手がないとです。
「なまじ他人の情けに頼って、ここ土地へ、北条さま家人の引き合せの手紙など持ってこずば、名も知られなんだゆえ、作男にでても、土方人夫をして働いても、妻子の糊口ぐらいは養えたのに」
などと難しいことを云いだすもんだで、
「父ちゃ、そう気にせんでもええよ。子なんちゅうもんは、すぐ育つで、まあ、いっときの苦労じゃがね。

赤児がヒイヒイ泣きだしたら、父ちゃがおぶって、わたいの働いとるとこへ連れてきなさったら、それでええとですね」

心配せんよう云ってやったに、父ちゃは、固く、

「済まん」四角く坐って、そんな返事するで、

「毎日さしても、ちいとも児をこさえん女ごも居るに、わたしや馬鹿だで次々と孕らんで、父ちゃにも世話かけて申訳ねえの。だが、その代り、みんな大きく育ってみいな。どれでも孝行息子だで、父ちゃも、あたいもきっと楽できる、とですよ」

と笑って元気づけてやったのに、天正十八年の七月。なんでも十二日に北条氏政さま御割腹。氏直さまは剃髪とかで、小田原城を落された太閤さまが、そこから鎌倉へ廻られ、江戸へも二日ほど逗留さっせたあと、この古河へも廻ってこりゃあすということに、なったとです。

さあ、そんたら話が耳へ入らしたら、父ちゃは、手をふり、足を舞わせて大喜び、

「お目もじしたら、これまで苦労をかけたお前らを、やっと幸せにしてやれるぞ。よかったなア」

と、そない云うてはしゃぐもんだで、

「父ちゃも、ええ人だが駄ぼら吹いて、大風呂敷を拡げさっせるで、いかんわネ」

と呆れて心配し、たしなめて居ったとです。

十八日の午近うなって、お行列が、江戸の方角ではのうて、あべこべの佐野の方から大沼べりを通って、大利根へ向ってこられたとです。そんで、どうしても、お迎えにと云わっしゃる父ちゃに、

「太閤さまのお行列は、目をあげ拝んだだけでも、眼くされになって、病んでしまうというに、阿呆なことして罰あたったら、どうするとです」

と必死にとめたが、てんで聞かっせんのです。

仕様がねえで、ついていったると、松の木んとこで土下座しとった父ちゃは、金ぴかな太閤さまの御駕籠が、丁度、眼ん前へ来たら、

「お懐かしゅうございます、甚右にございます」

と、まるで狗ころが主人を見つけたよう喜こんで、尻っ尾を振らんばかり駈けよってしまうたで、止めだてする隙もなかったとです。お籠は、ちょっと留って、何やら、側衆が話され、そんで父ちゃは連れて行





かれたとでしたが、心配してべそかくわたしに、さも嬉しそうに父ちゃは、にこにこのえびす顔で何度も、振返っとられたです。

へえ、それが見納めで、お仕置の屍体も下げ渡しは、なかったとです。父ちゃが昔は讃岐五万石の殿様だったなんて事、後で聞いたとですが、本気にァとても出来んとです。

それに父ちゃが、太閤さまに害を加えようと近よって、黒田官兵衛さまに討たれたとですが、父ちゃは刃物なんか何も持っとらなんだとです。

それに、あんなに嬉しがって、とんで行ったひとが、そんたら疑をうけるなんて、可笑しな事があっては、堪らんでしょうがねえ。

## 6

### 老中　土井甚三郎利勝沙汰書

尾藤甚右を、太閤が成敗したのは、

「下野那須の椿事」として古記録にある事が判明した。なにしろ事の起りは九州攻めの時に、羽柴秀長が黒田官兵衛と共謀し、日向から廻ってきた軍用米一万石を、秀吉には内緒で転売し、それを（秀吉気に入りの甚右）が密告するのを恨れ、追放してしまった。それが、のこのこ現れたから、黒田官兵衛が、秀吉に近づけぬようまく殺し、

「刺客であった」

などと云いふらし、罪をでっちあげたのであろう。今の黒田長政だが、彼奴ならやり兼ねぬ。

残された母子は不憫なものじゃろう。さて、去年の冬の陣につぎ、このたびの夏の陣にてめでたく大坂城落城、豊臣秀頼、淀君の徒党ことごとく死滅。

出先機関として、京都大使館の所司代のお役目、まこと見事であったと、大御所（家康）さまよりも、貴殿へは、お賞めの言葉があった。

ところで、其方の骨折りによって、京坂の上方武者に反戦士気を煽る為に流行させてくれた例の、

「ご馬前に命をなげだし忠義を尽すは、よいけれど、御用がすめば、尾藤のように殺される」

という唄は、もはや無用とはなった。

なにしろ、あの唄を歌って真似すると、若い娘共に、

# 生肌武者

〈毛利三郎太〉

よおもてるとか云いよって、関東下向の公儀の若侍共までが、すっかり大坂城攻めの時に覚えて参った。そこで目下、ご府内、駿府城の中でさえ口ずさむ馬鹿者さえも出る始末。

よって大御所さまより、

「あの唄で、大坂武者が弱くなったはよいが、わが徳川の奉公人に伝染しては、難儀である」

と仰せいだされて、来る七月七日付けをもって、江戸将軍家（秀忠）より、「いかなる事があっても、徳川家に、忠義を尽すべし」からなる〈武家法度〉十三条を公布することとなった。

そちらでも、

もはや用なしの尾藤留守武者の伜四人、並びに余類を召捕り、秘かに斬首するよう。と仰せなり。

二十余年たって、島原の乱がおきた。

京都所司代は、板倉勝重の長子重宗の代になっていた。重宗の弟の板倉重昌が討伐総督に任ぜられ伏見を通過したとき、兄重宗が面会にゆくと、三河額田一万一千石の弟は、僅か五十人の家来しか連れていなかった。あまりに貧弱だった。

見るにみかねて、兄重宗は京へとって返し、

「誰か弟を助けに行ってくれる者に居らぬか」

と決死隊を家臣の中で募り、それに足軽百名を率いさせて、応援に後を追わせてやった。

翌年正月元旦の原城総攻撃の日に、その弟重昌は先頭に進んで敵城の前で銃撃で即死をした。

このとき重昌を庇うように何人も討死していたが、兜の下が総髪の武者も三人倒れていた。

一人だけは、肌衣に名前が書いてあった。

板倉家の要請で同じ攻め場の細川陣屋に屍は移されたが、その者は、（薄紅の吹貫つけたる尾藤金右）と〔武蔵叢話〕にその名が伝えられている。つまり重昌や重宗の父だった板倉勝重は、斬首処分の命をうけたものの四人を秘かに助命し、そっと所司代屋敷へずっと匿っていたものらしい。だが、尾藤金右は四人の内の誰かは今だに判らない。

# 1

「――歴代重恩の尼子家を裏切り、もとの主家へ弓ひく、裏切者毛利元就のそっ首をば、いざ引き抜いてくれよう。不忠者、サア出あえ……」

尼子経久の兵が、ぐるりと取りかこみ大声はりあげ、怒涛が寄せるよう、ひたひた押しよせた。ミンミン蟬がうるさく木立から、がなりたてる享禄三年七月二十四日の安芸の山県合戦であった。

かねて、こうした来襲もあろうかと、毛利元就は、山口の大内義隆に助力をたのんであったから 海路厳島より、陶勢七百が応援にきていた。

三郎太も、その援軍七百の中にまじっていた。

窪地になっている羊歯崖にひそんでいたところ、(尼子勢を、挟み討ちにする戦機は、今だ)陶興房が、見てとったか無言のまま、すっくと立ち上った。そして采配がわりの宮島名物の大しゃもじを、頃合をみて、サーッとふった。そこで、命令一下。

「かかれじゃ」と小頭は怒鳴りつけた。

不意うちなので三郎太は周章てた。なにしろ持病の腹具合の悪いところへ、暑気あたりというか腹くだしをしていた。丁度、きつい胴鎧もはずし、さてホッとしようとしていたところである。突嗟のことで、どうしようもなかった。追い立てられるように、鎧なしのまま、槍をつかんで、

「オー」とばかり、群がる敵兵尼子方の中へ、目をつむって、唯まっすぐ突きこんでいった。

――なにしろ五年前に旧主尼子にそむき、大内家へついたとはいえ、毛利元就は まだ三十四歳の油断のならぬ評判な男である――

だから加勢の陶勢が弱腰なら、再度、昔に戻って尼子へ寝返りをうつかも知れぬ心配があった。そこで陶勢は、まっ先かけ前へ前へと押し進んだ。

困ったのは三郎太である。もう、次第に堪えきれなくなったが、さて後戻りもできない。

ただ、前へ駈けこんで何処かで用をたすか、他に残された途とてなかった。だから、三郎太は苦痛に顔を歪め、もうなんともならなくなった身体を転がすように前へもっていった。

口をぐっとひきしめ血走った目の玉をひからせ、槍





をかかえ、まっしぐらに駈けにかけこんだ。

当時の言葉で、戦傷などうけ鎧をはずしている武者のことを(生肌武者)とよぶのだが、これは陣頭に立って進む恰好ではない。それなのに、その鎧なしの三郎太が、脇目もふらず猛進してくるから、尼子の勇士たちも、みな驚かされた。手負い猪を見るように、たまげてしまった。

だが打ち掛ってくる気配もなかった。だからさえぎることもない。そこで、暴走してくる三郎太に、衝突をさけて、左右に別れ、通してやった。すると生肌武者は誰も人影のない叢へ、どんどん駆けこんで、桃色の花をつけたサルスベリの根もとへ、サーっとすべりこんで姿を隠した。

あっけにとられ、尼子の武者どもが、眺めているところを、横合いから毛利方が突き掛り、前から陶勢が押し包んで息つく隙もなく攻めてきた。

「生肌にて、まっ先かけて討ちこみし根性。まことに天晴れである。と、こちらの毛利元就どのもいたく、感心されとられる」

小頭につき添われ、呼び出されたとき、

(……戦は勝ったが、俺は叱られるじゃろ)

と覚悟していた三郎太は、意外な言葉をかけられ唖然とした。しかも三十貫扶持の恩賞である。

「――いっぺんに、ごつう出世したものよ。おらと五貫しか、もうお扶持が違わん」

小頭は妬んでいった。そして、

「われも二十と三だろ。もう嫁っこ貰え。ええのを世話しよう。吉見の娘で可愛いぞ」

と、とりもちをかってでた。三郎太は、首をふりたかったが、やっかみを露骨に顔にみせる小頭の口調に、さからってはまずかろうと、しようことなしに、うなずいてしまった。

それから四年たった。

「ちょっとこい」と呼ばれて三郎太がゆくと、

「この前に、われに話した時は まだ香代は十一じゃったが、もう十五でな、女になっとる」

小頭は、歯くそをほりつつ云った。

許嫁のとりきめというので、銭を五疋。つまり五十

文を組頭へ渡したことはあったが、それっきりで忘れていた話である。三郎太はどぎまぎした。

「どうせ下関から門司まで渡るのだ。娘のいる吉見とは、ほんの目と鼻よ。出てきてもろうて祝言したらええ。よい機会じゃ。早よ済ませえ」

頭ごなしに、押しかぶせるようにいった。

この天文三年三月。九州豊後の大友義鑑を討たんと、大内義隆が派兵した三千の中に、三郎太たちも加わっていたのである。

そこで出陣するに先だち「どうせ小船で関門海峡をこすのだから、船待ちに四五日は掛ろう。その間に娘をよんで盃事をせい」というのである。

(いやだ)と三郎太は思った。だが小頭はいったん口にしたからには、あくまで強引にねばった。

「―では、まあ、お頭のいいように…」

根気まけして、三郎太は説き伏せられた。

だが、さて下関まできてみると、三郎太たち陶勢は、杉長門守の先手衆に組みいれられた。

そこで、まっさきに九州へもってゆかれた。

「せっかく吉見へ使いをやって香代女を、呼びよせるになあ」と、船先にたちはだかって無念そうに小頭は舌うちした。どうも当にしていた礼が入り損ねたようである。しかし三郎太は、それどころでなかった。

うず潮にまきこまれて、船底が上りさがりするたびに、ひっきりなしに腹がさしこみ、胸さきまで苦しさが、こみあげて疼き通した。

まあ咽喉から、もどしてしまえば、すこしは楽になろうと、口をあけても、何も出てこずに、逆流するように痛みは下腹へ響いた。

なにしろ生れつきの胃弱で、喰べてしばらくすると、水落のあたりがいたみだし、それから臍のまわりが、いつも痛んだ。そのせいか すぐ水あたりもするし、船にのれば、この始末である。

三郎太は船板にかじりついたまま、陸を眺めると、厚狭の浜がのぞめた。昔、山県合戦の時に、素胴のままでとびだし、「大内の生肌武者」と評判をとったのは、その浜の奥手の山である。

それから後は、三郎太は横着にも、鎧も腹巻具足もつけずに戦に出ていた。なにしろ腹に、帯や紐をまいてさえ、うずくように痛みをもよおす具合だったから、





甲羅のような鉄板で胴をしめつけるのは、とても苦が手だったからである。

だが出陣すると、何も知らぬ相手はみな面喰い、「剛気なものよ、敵ながら天晴れ」と呆れた。

なにしろ三郎太のいでたちは、頭に鉄鍬うった前立の大兜をつけ、肝心な顎から下は、あけっ放しの異様ぶり。褌姿で人目をひいたのである。

「どうせ腹の病では、口から覗いて薬も塗れんし、長生きもしまい、苦しみ悶えて死ぬよりは、敵にぶち殺されるが、まあ極楽往生というもの」

と、いつも、その恰好で先駆けしたから、三郎太の名は、すっかり評判になってしまった。

## 2

下関から渡海した大内勢は、豊前の中津から、ひと息に糸口原まで出た。そして佐田峠をこえ、レンゲ草のまっ白な花畑の勢場ヶ原まで攻めよせた所で、ついに行手をはばまれた。

眼前の大群山に、敵の大友方の吉弘勢。

真横の鹿鳴越峠の砦にも、同じ敵の大友方の大神勢が、待ちかまえていたからである。

不意をうたれた交戦だが、大内方も力戦した。

敵将の吉弘を、矢ぶすまにかけ首をあげた。

が、それと交換のように 大内方の先手大将の杉長門守も、敵の大友勢に討ちとられてしまった。

しまいに双方いりまじって混戦になった。

あかね色から小豆色に空が暗くなると、地の理に明るい敵の大友勢と違って、遠征軍の大半は道にまよい、背たけよりのびた萱草で行手をあやまり、尾崎の崖から滑り落ちた。勢よく駆けまわった三郎太も、足ふみはずし谷底へ落ちた一人だが、幸い木こりの山小屋へ運ばれ介抱された。

さて、その頃、ぼんやり香代は波うち際にたたずんでいた。うず潮ごしに、九州の陸影を、じっとみつめていた。十五の乙女は、(鳥のように羽があったら、わたしとて、とんでゆけるものを)ただ恨めしく、蒼くはてしない空を仰いでいた。

「―婚礼をあげるのゆえ、早う仕度を…」

とせかされて、下関まで出てきたら、花婿になる三

郎太は、もう渡海してしまったあと。

「たいした戦ではないから、おっつけ引きあげて来られよう」となぐさめられ待っていると、四月六日に合戦があったとかで、九日十日と、高田から門司へたどりついた大内方の敗残兵が、次々と海をわたって、疲れきって戻ってきた。ひどい戦だったらしく、みな泥みたいに血汐を黒く顔や鎧に、かちかちにこびり付けていた。

「――なにせ、冑かぶりの武者だけでも三百うたれて、お味方は半分になって帰ってきたわ」

辛うじて生還した小頭は、憔悴を顔一杯にうかべ、

「まあ三郎太が、あの生肌武者も、今度ばかりは討死らしいが……なまじ式をあげなんだが、こうなっては、なにより目っけもの。まあ娘御を、うかつに傷もんにせんですんだというわけじゃ」

と香代を横目でみながら、その父親に、いいわけがましい笑い方をしてみせたりした。

「いかにも、せっかく仲へ入って世話してもらったが、こうなっては、なかった縁とあきらめましょうわい」

と香代の父もうなずき、その小頭に用意してもってきた、いくらかの仲だちの銭包みを握らせようとした。

「なにも役たたずなのに、礼は困る」

と小頭が、はげあがった額を掌でこすりあげ、ことわりをいったが、

「可愛い娘を、たった一日で、若後家にせなんだ内祝でござる」香代の父は首をふった。すると、

「なにしろ散々こない負け戦では、山口へ戻ったにしろ、恩賞も出んじゃろうから、槍や物具の手入れ代に、では有難く頂いてゆこう」

と、すでに懐へ入れた銭包みに云いわけして、小月街道の並木へ小頭は去って行った。

「……もう戻ってこんもんを、待っとっても仕様もねえ。さあ諦めて早う戻ってつかわせ」

と父は促したが娘の香代は返事もしなかった。

ぼんやり気落したように、彦島の方を向いて、舟つき場にたっていた。別に、三郎太などと云う男を、好きでも嫌いでもなかったが、(死んでしもうたか。そりゃ盃をあげん前で良かったのう)という、大人の話のやりとりが、十五の香代には、堪らなくいまいましく想えたからである。





だが、いくら意地になって、戻ってこぬ三郎太を待っても、なんの消息もつかめなかった。

しかし二日ほどたって、待ちくたびれた香代を見かねたのか、漕ぎよせてきた浦船の漁舟から、

「そないな若い武者なら、小倉あたりの百姓家に、傷で動けんと仰山ねとる。まあ行ってみて、自分の目で探してつかわせえ」

と親切に声がかかった。香代は歓んだ。

「……場所は、見つからんよう匿れてござるで、ちょいと判り難かろ、なんならすぐ、これに乗ってつかわせえ。六連島まわりで、これから小倉へ戻るところだ」

と、せかされたから、

「なら、願いまする」と香代はのりこんだ。

その浦舟は帆をあげて、響灘へでた。香代の住まっている吉見の浜も、入りくんで見えてきた。

(家が見えるじやろか)と、伸び上って足の踵を浮かしたとき、掬われるように引っくり返された。香代は、からかわれていると想った。

「冗談はよしてつかわせえ」

笑いながらクックッもがいた。だが他人の手がふれる筈もないところへ、厚い掌の感触を感じると、ドキッとさせられた。目をあけて見まわすと、何人もの汐やけした野卑な男の顔が、重なりあうように覗きこんでいた。だから悲鳴を、

「キャアーッ」とあげたが声にならなかった。

## 3

「酒の酌とりに、女をひとり呼んでくりゃ」

三郎太は案内された部屋の、庇にたれ下った屋根の萱草をひきちぎりながら、亭主にいった。

亀石山の杉木立が、すぐ眼のさきにつきでて薄暗く杖立川の渓流が、ひたひたわびしい音をひびかせて、ひとりで酒をくむには、なにか佗しすぎる宿だったからである。

「この五馬から馬原は、馬喰衆相手の女ばかりで、すこし馬ぐそ臭そうござりますがのう……」

と云いわけして出てゆく亭主といれ違いに、馬につく虻がぶうんと舞いこんできた。

それを掌で追い廻しつつ三郎太は、ぼんやり考えこんだ。あの木こり小屋へ担ぎこまれて助かったあと、三

郎太は敵だった大友の家来に抱えられた。

なにしろ（生肌武者）の名が　多少は九州にも聴こえていたのが幸いしたのだ。

しかし三郎太の腹は、やはり痛みつづけた。

だから相いかわらず胴鎧は、桶皮胴でさえ身につけられなかった。冬は温めた石を懐へ入れ、その儘やはり布衣のまま出陣した。知らぬ人々は、「剛の者よ」と感心し、扶持も六十貫と、大内に仕えていた頃の倍にもなった。

処がこの天文八年の七月九日に、肥後の国の隈庄で、菊池義宗の残党が騒動をひき起した。

そのため出陣してきた三郎太は凱旋の帰途、手頃な乗馬をもとめようと考え、馬の市がたつという湯平へ、単騎まわって寄り道をしたのである。

陽がくれて、軒さきの栃の古樹の葉ずえが、濃い灰色に塗りつぶされた頃になって、亭主にともなわれた女が、うつむきながら入ってきた。

「―なにせ　馬喰、馬方どもの相手ばかりしてます、ここらあたりの女ゆえ、お気にめしますかどうか…」

と、ためらいがちに口ごもりながら、柱に釣ってある仕手鉢に火をつけた。

松やにが、むうんと匂った。赤黒い焔が、黒光りする板の間を赤々と照らしだした。

「ひとつ、酌をして貰おうかい」

三郎太は盃をだした。この辺の地酒は、粟で作るから、こしてはあったが、舌のさきにやはり粒糟が残った。それを手の甲でしごきながら、女を見つめると思ったより若く二十前みたいだった。

腕のさきにも、肩のあたりにも、ふっくらした円味が、まだ残っていた。顔も、府内の女ごのように米の粉を白く塗りつけず、きじのままで陽やけし、山の女らしい草いきれが、すこし匂った。

「いつから、こういう勤めしてる」ときけば

「はいかれこれ五年になりましょうか……」

ひとごとのようにしずかに女はこたえた。

（五年…そういえば、おれも、この大友家へ奉公しだして丁度それ位だ）と三郎太も、口にはしなかったが、なんだか感懐めいたものが、酒にほてった胸のなかを、すうっとかすめていった。

「―言葉の、なまりをきいとると、この玖珠や日田のもんじゃない。周防灘の向うだな…」

じっと三郎太が、女の細い鼻をみつめると、

「……いろいろなお客がみえますので、つい言葉ぐせが、うつってしまうのでござりましょう」

さりげない調子で、女は横を向いたまま、ぼそっと、そんな返事をした。そして、仕手鉢の樹脂が燃えつきそうなのをみると、あわてて、隅に、ぐるぐる巻きにして積んであった寝莫座をひろげて、朴の木らしい枕を二つならべた。かわず蛙が、不意にうるさく鳴きだした。

――三郎太は、木こり小屋で、ゲンノショウコ草を煎じて呑まされてから、すこしは腹具合が、よくなったが、それでも、やはり喰えばすぐきりきり痛んだ。

だから夜中に苦しむのは辛いから、いつも晩飯はぬきだった。食するように女がすすめる食膳には手をつけず、そのまま莫座の上に腹ばった。側へ女がくると背を押えるようにいいつけた。軽く脊柱をもんで押させると、腹のほうへひびくから、胃からげっぷがでる。

そうすると、どうにか腹へ力がいれられる。それからなら女とねられる。いつものくせだった。

早瀬をながれる谷川の音が、まるで枕の下からひびくようにきこえた。かわずも相変らずうるさかった。しかし三郎太は、こころゆくばかり、背を押さえられて、げっぷを吐きつづけた。

女の押しかたが、下から上へ撫であげてゆき、とても巧みで三郎太はすっかり気にいった。朝になると、

「あなたさまは、まさかと思うたが、まんだひとりもので有りさるのう」

やはり昨夜よりは、すこしうちとけ気味に、女は眼をさました三郎太に、そんな声をかけた。

「どうしてわかる」怪訝そうに聞き返すと、

「男の衆は世帯もちでも、遊びにこられると、きまって、一人ものじゃと云わっせるが、共寝したると、そりゃ、よくわかりますッと」

山鳩のようにホウホウ女は笑いこけた。

「そうか……」

いったなり三郎太も顎の毛をつまんで、照れ臭さそうに、思わずにやりとした。おおかた寝そうが悪くて、女を板の間へつきだしてしまうたのだろうと、自分でも悟ったからである。

女は、まるめた寝莫座を手にもって、散らばった藁屑を、箒がわりに掃きおろしてから、
「よお暴れんさるで掃除が大変じゃ」と笑った。
板戸のよしず垂れから、斜めの雨がすいてみえた。浅黄色だった万年山の頂きも、すっかり紫紺にけむって、上流の大山川が溢れたのか、水かさのました渓流は、ごうごう音をたて聴えていた。
「―昨夜、かわずがうるさかったが、雨よびだったのか」と三郎太がつぶやくと、
「これでは今日は馬市はたちません。もう一泊なされて、待ってつかわせえ」といった。
その女の唇へ、雨に追われた青い蛾が、透きとおった翅を重たげに、吸われそうに近よった。
それを、そっと払って女は、また莫座をひろげ、横になった三郎太の側へいざりよった。
細い指さきだが、背柱をぐいぐいと、上から段々に押されてゆくと、小気味よく三郎太の裏側の腹にひびき、よい気持ちだった。
(こりゃ良い。腹の病に、この女は欠かせん)と三郎太は考えたから、翌朝、天気はあがったが、馬市のひらくのをまたず、その女を、駒のかわりに亭主から購って宿を出立した。だが次のつぎの晩、九重の里で、女は夜中に三郎太の許から、そっと姿を消してしまった。

4

山の秋は、里より早く訪れてくる。
リウノギクの白い花が、もう初雪でもきたように、びっしり山峡をうずめつくした日。
山で一緒になった樵夫の亭主は、薪をわって稗粥作りをしている香代の傍へやってくると、下の右田の里で耳にしてきた戦さ話を早口で教えた。
「まっこと。そないな噂をきかれたか」と愕けば、
「うん周防の守護代陶さまが、大内義隆さまに疑われて、攻めかけられなすったから、あべこべに富田若山城から出兵し防府から山口へ攻め入られたげな。そこで大内義隆さまは防ぎきれんと滝の法泉寺に逃げこまれ、仙崎の港から姉婿の三本松城吉見正頼さまを頼ろうと石見へ行こうとさしたが、逆風ですすめず、また上陸し深川の大寧寺へ入り七歳の和子義尊さまとも切腹されたげな。なんでも九月の一日のことだと……」





大内義隆父子が陶晴賢に攻殺された話である。
香代は鼻のあなをふくらませて、肩で息して話をきいた。父が三本松城吉見の家人で、菜切りの庄から吉見までの宰領をしていたからである。
(大内家の内輪争いでは巻き添えは免れまい。とんでもない事が出来したものだ)と狼狽した。
「山口の都は、西の京都とも云われるので、韓、明、南蛮人も多く住まわれて、一万戸も家のある御城下。そこが火の海じゃそうな。それに周防、長門から備後まで本土で五ヵ国。九州でも北部の筑前半国はもっとらせる大内義隆さまが、殺されたとあっては、こりゃ九州へも大きな戦さが拡がって、また男狩りが始まるじゃろうと、右田の里びとは、えろう騒いどったぞ」
うけうり話を得々とする亭主の、はみでた鼻毛を眺めながら香代はすっかり考えこんだ。
なんといっても気がかりは、吉見の父や弟のことである。三本松城が陶方に攻められたら吉見正頼の家人である父は、討死していんさるか。また降人しても、どんな酷い目にあうているやら、と気にかかった。
この青野山の麓。甘川木の人里はなれた部落へ香代が匿れてもう久しい。いまの亭主のもとへ、嫁として入りこんでから長い歳月がたっている。
なにしろ、壇の浦で敗れた平家の落武者が逃げこんだという、落武者山をかこんでの深緑の山脈である。吉見の家のことも親のことも、忘れることもなしに一切をすてていたが、薪売りに町まで行ってきた亭主の土産話に、十二年前を思出し香代は、すっかり狼狽えてしまった。
香代が、この山へ逃げこんだのは、大友の武者のせいである。たった二日だけの客なのに、「好き」とも何んとも云わんと、
「身受けじゃ」と銀を出されたときは、香代は嬉しいより、のぞけるくらいに驚かされてしまった。
そして亭主に送り出され、一緒に旅をかさねたところ、二た晩めに豊前へ伴れてゆかれると判った。
香代は縮みあがって驚いた。周防灘の豊前の対岸は山口である。門司と下関は、渡し船が日に何度も往復している。うっかりそんな所へ連れて行かれ、親兄弟に見つかるのも恥しいが、もっと気になるのは婿にな

るはずの三郎太だった。

死んだとは知らされていた。だが、一度も逢ったこともない許嫁である。それに、（何処でどんな具合に亡ったのか）のかも判らぬ相手だった。

せめて顔かたちだけでも聞いておれば、

（……こういう顔かたちをした三郎太という男は、死んでしもうた）と得心もせられるが、つかみどころもない、ただの名前だけの男では、何年たっても、まだ香代には（死んだ）と忘れもできかねた。

そこで、もし豊前へ連れて行かれて、三郎太が生きていて、めぐり逢いでもしたら大変とおそろしくなって、九重の里へ泊った夜。そっとこの山奥へ、香代は夢中で逃げこんでしまった。

嬶に死なれて、ひとり者になっていた、いまの亭主をあてがわれ、そのまま、ずるずるべったりに今日まできてしまったが、親兄弟に危難の迫った話を耳にしては、じっと、していられなかった。

すぐにも旅へ出たかった。だが、さきだつ銭がなかった。臍くりを作っているうちに、翌年の二月までかかった。豊津の中津まで出た香代は、十七年ぶりに、蒼くて白い、光った海をみた。

だが磯の香がプーンと鼻につくと　瞼が赤くかっともえ、吐きけを催してきた。

潮鳴を耳にすると、十五歳の日が、まるで昨日のように蘇ってきた。脇から腰がひりひり痛んできた。だから浦舟にのり対岸へ渡るのは厭やだった。だが、まさか海原を泳いでもゆけなかった。

だから、香代は思いきって覚悟し、浦舟にのった。しかし陽やけした三十女に、もう手をだしたり、売りとばすような、てあいもいなかった。

帆をあげたその浦舟に、あっけなく、渡し賃をとられ香代はその儘、向いの宇部へついてしまった。

（また船夫どもが悪るさをしたら、ただではおくまい。今度こそは目にものみせてくれよう）と、太い鉄釘を砥いで懐へ入れていたのが、すっかり無駄になって香代はなんだか張りあいぬけしたまま、街道すじへでた。するとすごい行列にゆきあった。道端の百姓をつかまえ、

「なんでしようかな」と尋ねると、

「知りなさらんか……豊後の大友義鎮さまの弟殿八郎





君が、亡くなった義隆さまの甥殿ゆえ、陶さまに迎えられ大内家の跡目入りなさる御行列だぞな。豊前、豊後、九州からの武者衆が、ほら、こないに美々しう装って、ついてきてござらっしゃるに」

仰いでみる行列の武者衆の中に、胴鎧をつけず、胸から腹をあけた異様な武者が混っていた。

だが兜を深くかむっていたし、それが誰だか香代に判ろう筈もなかった。

陽やけした山の女を一瞥した武者の方も、まさか九重の宿で、逃げ出された女とは、とんと気づかない様子だった。

あぜ道のスズシロの白い花に溜った黄色い砂塵を、香代は、はたいてやりながら行列を見送ると、反対の厚狭の方へ、せっせと気ぜわしく歩いていった。つまり二人は、どちらも振り向かなかった。唯、灰色の鰯雲だけが、丁度、その中間の空に、どっちつかずに漂っているだけだった。

――大友八郎が足利将軍義輝の使者から名を貰って「大内八郎義長」と改名し、迎えた隆房が、その旧名を貰って「陶晴賢」と名のりを改めたのが、天文二十一年三月三日のことと伝わるから、この二人のすれ違いは、三月一日あたりのことであろう。

5

弘治元年十月。毛利元就は「大内義隆の仇討ち」と称して、厳島で、陶晴賢の大軍を破った。こうなると、晴賢に迎えられて大内家の当主になっている大内義長の立場は危うくなった。

それで実兄の九州の大友義鎮へ救援を求めた。

しかし、すでに毛利元就は先に手を打っていた。つまり「出兵せず中立を守られたらば、旧大内家の九州領の、豊前、筑前の半国ずつ、そっくり進上つかまつる」と、すでに目付役とし、毛利家から小寺十郎左が府内の城へ滞在していた。

だから、いくら待っても、大内義長の許へは、一兵の援助もこなかった。それどころか、「吾々が義長さまのお伴して、九州から多良浜へ上陸して参ったのは、大友家から見送りにきたようなものであって、もう御役目は終ったらしい」

と、かつて白いスズシロの花を馬の藁沓の砂塵で黄

色くそめ、歩武堂々と山口入りをしてきた九州武者は、大内義長を放りだしさっさと隊伍をくんで引きあげて行ってしまった。

俄かに兵力が減った大内義長は、山口城は支えきれぬとみたか、津和野街道よりの渡川城へ移った。小さな山城なので、兵力はあまり要らぬと見てとったからである。

「……毛利は大内家の臣。決して逆意はありませぬ」

と、毛利元就から申入れはあった。

だが「石見津和野の吉見政頼が動きだした」と、義長の許へ知らせる者があった。

三本松城の吉見正頼は、天文八年に兄隆頼が死ぬと、興原寺の坊主だったのをやめ、大内義隆の出房りの姉を妻に迎え、それで城主になった。

そのくせ、大内義隆が陶勢に殺されると、仇討ちどころか陶と仲よくし、今度、毛利が陶を倒すと、またまた毛利と手を結んでいる。表裏のただならぬ男である。だから、

「これは剣呑である」と用心していると、案の定、まっさきに吉見正頼が、

「大内義長征伐」の軍勢をすすめてきた。

義長はそこで渡川城から小郡へ難をさけた。

だが宮野口から吉見勢。防府からは、毛利の先手の福原、桂勢という有様である。

「これではとてもいかぬ」と大内義長は小郡から又も、長府へ逃げこみ且山城へ入った。

しかし弘化二年三月二十八日、三ノ丸と二ノ丸が毛利方に攻め落され、四月三日、毛利方の福原貞俊が、残った本丸の城中へ降伏をすすめ、

「籠城中の周防右田嶽城主内藤隆世さえ切腹すれば、義長の殿にはお構いなしである」

と矢文で申しいれてきた。(事実上の指揮官の内藤に腹を切られては後が困る)と城内では、もめはした。が、義長さまさえ助かるのなら、大内家再興のためと内藤は割腹しそこで開城した。

ところが、義長の殿が、長府の長福院功山寺にひとまず入ると、そこも直ちに毛利方の兵で、やにわに包囲されてしまった。

「……話が違うではないか」

と大内義長の側近が顔色をかえて、掛合うと、





「戦に方便はつきものでござる。瞞す此方が悪いのか、うかつに乗られた其方さまが悪いのか、あの世へ行って、とっくり思案されよと、毛利元就の殿のお言葉であるぞ」

と追いかえされてしまった。そこで義長は、

「もう今後は、他人の云うことは、信ずまい」

と口惜しがり、屠腹。杉民部が介錯をした。

そこで、もはや助からぬと覚悟した大内家の武者は、本堂や縁側に並んで、差し違えたり、めいめい腹をかき咽喉を突いた。九州へ戻らず義長に従っていた三郎太も、同じようやるつもりで腹をひろげた。が打刀の切先をあてる段になって、迷いを生じてしまった。

といって命が惜しくなった訳けではない。

なにしろ三郎太の父は、腹が痛いといって、きりきり舞いして悶絶しているし、兄達も、みな腹の病いで苦しみ抜いて、揉みくちゃになって死んだのを三郎太は子供の頃にみている。

三郎太として、これまで死ぬ迄にはならなかったが、しょっちゅう腹いたでは難儀をしている。

だから初めは(いつも痛むところを、たち割って、中をよく覗いてくれよう)と好奇心をもち、(数十年にわたって苦しめた、土手っ腹に、いまこそ、恨みの刃で、思い知らせよう)と考えていたが、いざとなると、不安になったのだ。

次々と腹をわる者の表情をみると、みんな顔を歪めて、誰もが、さも苦しげである。ふつうの腹やみでない者でさえ、あんなに痛むのなら、胴鎧さえつけられぬ自分の腹などは、切先を押しこんだら どんなになるかと狼狽した。

地の底から、いつも熔岩をはじきとばしている肥後の阿蘇の山頂が瞼に浮かんできたからだ。

(おれの腹が、あないに大音をたて爆発したら、他人は噴きだす煙を、体に溜ったカスと思うだろう……それじゃ、恥かきに切腹するようなもんだ)

切羽つまってしまった。そこで三郎太は、こうなったら、やはり敵に殺してもらうしかあるまいと、寺の築土塀の上へあがった。もし大きな音がしても、敵にやられるのなら相手のせいにして胡魔化せるだろうと思ったからである。

「—ここを射るなり、突くなどせい」といった。

だが、やはり腹は、まずいと用心して、小さな乳首をひっぱって、

（出来ればこの辺を）と胸のところを指で示した。

しかしである。いくら喚めいて、場所まで指定しているのに矢を射かける者も、長柄をふりかぶってくる者もいなかった。ひっこみがつかず三郎太が、仁王だちになったまま、りきみ返っていると、築土塀に近よった敵の雑武者が、

「これ、これ、そなたが有名な生肌武者か……他の者は、本堂で、一人残らずめいめい生害しおったのに、最後まで吾らに挑むとは流石に立派である。だが、もう戦は終りよ。降りてきなせえ」

いわれて振りむくと、寺内は、入りこんだ毛利勢で埋っていた。これでは、此方がいくら気ばっても、誰も掛ってこなかった筈であった。三郎太は照れくさそうに塀の上から飛びおりた。

そこで大内義長や陶鶴寿丸の首と一緒に、三郎太も縛られて防府の毛利方本陣へと送られた。

防府は、その昔、周防国府の置かれた所だが、本陣は、西にある松ヶ崎天満宮におかれていた。

社の前を曳かれて行くと、宮市とよぶ賑やかな盛り場で、家がぎっしり立ち並んでいた。

その軒並から、びっこをひいた魚売りの老爺がのこのこ、駆けよって、縛られた傍へくると、

「一生肌武者というと、享禄三年の山県合戦で、毛利さま御軍勢の勝運ひらき、元就卿のお目得たまわった三郎太ではあるまいか」と呼ばわった。

よく視ると、姿かたちは変ったが、昔の小頭である。だそこで思わず、三郎太もなつかしく、

「一おう、おまえさまか」と返事をしたところ、

「一おりゃも、その時、毛利元就様よりお言葉を賜ったぞ」と、周囲に聴こえるように、がなりたててから、

「そうそう三郎太。わりや許嫁の香代を覚えとるかや。まんだ祝言をあげてやらんで、ずうっと、一人で今も吉見に待っとるぞな」

野放図もない大声なので、本陣の武者どもも、何事かと駆けよってきた。ずいぶん昔の話だが、山県合戦の三郎太の噂を知っている者もいた。

俄かに、丁重になって、縛めの荒縄もすぐ脱された。

そして本陣へ伴われると、





「……吉見政頼は今回さきに山口へ攻めこみ、大手柄であった。そこの家人の娘と許嫁づけであったとは、めでたい縁じゃ。まだ祝言をあげておらぬなら、助命の上、早々に計ってつかわせえ」という事になった。もとより毛利元就の指図である。

6

〈毛利家文書六七一〉によれば、

「弘治二年四月二十一日の夜、毛利元就は吉見政頼を招き、祝宴をはったとき肴をだしてみせた」

という。つまり香代と三郎太の盃固めである。

そこで一緒にされた二人は、阿知須へ、猫の額ほどの知行所を当てがわれて住む事になった。

「なにしろ男が二十三、女が十一の時に、許嫁の約束をして、それから離れば なれに西東。共に操を守って二十七年も一人身でいて、やっと夫婦の縁を結んだとは、こりゃぁたいしたことじゃ」

と、もっぱらな評判になって取り沙汰された。

だが、馬宿にいた遊女のように巧く背を揉んで、腹の痛みを押さえてくれる女がいないと、からっきし用のたせぬ儘、一人で過してきた三郎太は、そんな噂を耳にするたび妙な顔をしていた。

香代の方だって、前の亭主は遠い九州の山の中で木こりをしているのだから、もう別れたも同前ゆえ、ずうっと独身でいたように話のばつは合せていた。しかし婿の三郎太には、あまり良い顔は、てんで見せてはいなかった。

なにしろ陶勢謀反ときいて、吉見の浜の在所の事を心配して中津から船にのって戻ったところ、父は病気で死んでいたが、吉見政頼の殿さまが巧くたちまわって居られたので、家来の弟共も息災で、なんの気遣いとてなかった。

それどころか、久しぶりに戻ってきた香代を、

「神隠しにでもあったものと諦めて居ったに、よく無事で」と、その嫁と一緒になって、みんなが大切にしてくれた。そこで、

（これは下へも置かんもてなしで極楽なことよ）

と喜んで、すっかり好い気になっていたら、

「許嫁の三郎太が見つかったで、盃事をさせる」

と寝耳に水のような達しがきて、むりやりみたいに山口の城へつれてゆかれた。

（もう四十に手の届く女ごが、今さら花嫁衣裳など気恥しや）とは想うたが、吉見の殿さまの指図で、まるで白壁のように白粉をぬりたくられた。

だから、毛利や吉見の殿の前で祝言したとき（どない男かや）と覗こうと想うたが、顔の白粉が硬ばっていて、横眼など使えなかった。

おひらきになり、さて愉しみにしてたことも、

「……すまぬが背中から腹にきくよう揉んどくりゃ」

と云われて、がっかりさせられた。

よほど「遊女ではあるまいし」と云ってやろうと思ったが（口は禍の門）とも云うから、知らんふりしていたら、そのまま朝になってしまった。呆れはてた。

そこで明るくなった陽ざしで覗きこんでみたら、許嫁の三郎太は（確か二十三）ときいていたのに、どうみても、それにしては、とうの立ちすぎた、しょぼくれ親爺だった。

（こりゃ花婿でのうて、その父親の方ではあるまいか）と取り違えたものと想うていたが、

「わしが三郎太よ」と目をさました当人は、いけしゃあしゃあと云うのである。そこで香代は、

（瞞されてしもうた。もう止めてつかわせえ）と、肚をたてた。だが「なにしろ双方の殿さまの前でした盃固めゆえ、もう反古にはできん」と弟どもに諫められ、

「毛利の殿も、吉見の殿も、狐のように瞞くらかすのが巧い方ゆえ、もう諦めなされ」と、介添についてきた弟共の嫁達にも慰められてしまった。そこで口惜しさのあまり、

「わしが戻ったのを、あない心から喜んでいてくれたのも瞞しで、まことは、あない爺のところへでも、わしを追い出して厄介払いしたいが本心じゃったのかえ」と香代は、怨みごとを嫁たちにいってやった。だが、なんともならなかった。そこで泣く泣く三郎太について阿知須へ来たのである。

だから、夜になると、よく、

「背をもんでくださらぬかや」と三郎太は云うが、（客商売の勤め奉公のときなら、仕事ゆえ揉んでもやろうが、なにも今さら、そんな事までせいでも良いわい）と、一度も側へよって、揉んだり擦ったりはして





やらなかった。

そこで三郎太の方は、

（この頃の女は、なんと意地悪じゃろ。そこへゆくと、昔の女は優しかった。あの九重で居なくなった女などは、よお揉んでくれて、ちゃんと用をたさせてくれたもんだ）と懐しがった。

秋口になって寒くなった。

三郎太は苦しがって血を吐いた。

香代は、てっきり労咳、つまり肺病だろうと想った。だから気味悪がって近寄らなかった。

だが三郎太の血は喀血でなく、胃袋からの吐血だった。死んだ兄や父と同じように、やはり、のたうち廻って苦しがって死んで行った。

だが息をひきとる前に三郎太は喘ぎながら、

「……九重、ココノエ」と思い出の名を呼んだ。

今となっては、（まさか二十三年前に、自分が逃げだした所の地名が「九重」だった）などとは、てんで覚えてもない香代は、

「まあイヤらし。何処ぞの遊女の名じゃろうね」

と眉をしかめ、てんで好きでもなかった男なのに、やきもちをやいた。その亡骸に唾を吐かけた。

だが、その香代も冬になると風邪をこじらせ、それがもとで血を吐いた。これは労咳だった。

「……盃事をしてからも、あんな男とは一っぺんこっきりも体なんか合せとりゃせんに、なんで病気が移ったぞね。なんか間違えとるんよ。早よ治って、今度こそええ若衆でも探さないかんで、なんとか元気になってつかわせえ」

と香代は、よく自分の体に云いきかせはした。

だが聞きわけがなく、年が改まると早々に、無念そうな顔をしながら息を止めてしまった。

「……なんという仲のよい女夫じゃろう。死なば諸共と、嫁さまも、すぐ後を追ってゆかれたわ。偕老同穴とは、あないな二人の事を云うんじゃろ。まこと羨しや」と又しても評判は高まった。

だが埋められた土の中では、二人は背を向けあい、互いに知らぬ顔でものも云わなかった。それなのに縁結びの神と名高くなると、三郎太は百歳、香代も九十

九歳で蓬萊へ渡ったとデフオルメされ〈高砂〉と題づけされて、六道の辻の唱問師（しょうもんじ）の門付けからやがて謡曲にまで変った。今でも婚礼用に、「高砂やア」と二人のことは謡われている。つまり、〈ああ高砂や〉の故事来歴は、こう調べてみると、てんでめでたくない。困った話である……



# 猫飼武者

〈柴田勝家〉

# 1

「おっかしな伜よ。とうに三十もすぎ四十男に近いのに、猫をひろってきて夢中じゃ」

「……可愛がると、もうすよりも、縄でつないで、屋根の上まで、一緒に、よじ登りまで致します。まこと正気の沙汰とは思えませぬ。父親として、どないしてくだされまする」

「生れてくる男の児が、つぎつぎとみな死んで、六番目のあれだけが、どうにか育った——そんで、すこし野放図にさせすぎたかな」

「……お判りなら、つよく叱りなされえ」

妻の於春は、ぐっと夫の権蔵をにらんだ。

すると、その時、縁板の下から、

「——おれが、ことかい」と、蜘蛛の巣を髪にからませた大男の伜が、はいだしてきた。

肩を斜めに縄をかけられた白猫が、髭から耳へ媒をつけたまま、前肢を突っぱらせ、いやいや引っばられて出てきた。

「……親の話を盗みきくものがありますか」

うろたえ、於春が頭ごなしにきめつけた。

「おれが頭の上で、阿呆じゃ、とろいと勝手きままに悪口いっとったくせに——」

けろっとした貌つきで、逃げようとする猫と、懸命に縄引きをしている。

「放してやれ。狗ではあるまいし、どこに猫を結えて飼う者がある」

と権蔵が見かねた。

「そうはゆかん」

猫と睨みあったまま、伜はふりむきもしない。

「……これ権六。猫は女や子供の飼うもの。大の男が、いつくしむもんではないわ。おまえが従弟の土田の喜十殿をみい。まあんだ前髪だちなのに、もう懸命に馬のりに励んでいなさる」

と母がいえば、それについて、

「——うん。外聞が悪い。猫に縄つけて外へ出あるくのだけは、やめにせい。みな『柴田の権六は、いざ合戦となれば、猫に跨って出陣するじゃろ』とまで云うとる」と父もいった。

だが権六は、そしらぬ顔で、やっと猫をひきよせ抱えあげると、人間のくせに、鼻の下をふくらませ、

「アーギャアーゴ」と猫声をまねして、あばれる白猫を威嚇しながら、後脚をそろえて、ぐっと押え、離屋の方へ去ってしまった。

「——男の伜は父親の躾しだいじゃ。と、もうしますに……」とまた於春は、夫を責めて、

「たとえ何俵なりとも頂き、若殿さまお側衆として奉公してる身状。それを肝腎な親が『あれは出来損いよ』と放っておけまするか……なにせ、そなたが子供の頃に不熱心ゆえ、あないな者になったのです。——なぜ幼少の頃から、よその父親なみに、己が児の鍛練なさらなんだ。女が子を産んで乳離れしたあとは、男の児は、これひとえに男親の責任じゃぞえ」と眼尻をつりあげた。

「まあ待て……」と、さすがに権蔵も、むっとして

「幼ない頃は自分ひとりで可愛がり、成人して女手にあまると、あの権六の悪いことは、みな、わしがせいにするが、……夫には粟や稗をくわせ、伜にだけは米を内緒でくわせたから、見てみい。あない大男にふくれ育ったのよ」

「まあ、いやしいことを云わっしゃる。そないなことを、まだ、ひがんでいなさるのか……そもそも薬くいに米を与えたからこそ、権六だけは成人したのでござりますよ。それに今『内緒で——』と、人聞きの悪いことを仰せられたが、あれは、里の土田家や、妹からの合力米。そなたの扶持では、米どころか、粟さえも、まともには、ろくに口に入りませぬ……。ご自分の甲斐性なしをすこしは考えなされ」

「——判った。おれが能なしで出世できぬから、すまんこっちゃ」と権蔵は、

(これ以上は喧嘩になる。つかみあいもしとうは、ないわい)と、野草履をつっかけ、逃げるように下へおりた。

於春の父は土田下総守久安。

西尾張勝幡城の北、阿古井の豪族である。

末娘が、古渡城の織田信秀に望まれ男児を産んでからは、御守役として織田に随身。

土田の郎党だった柴田権蔵も、今は、その若君織田四郎信行に伜と共に奉公している。

だから土田の姉娘の於春は、五十路もこしているのに、まだ権蔵へ嫁いだ愚痴ばかりいう。

「……遅くうまれて妹と入れかわっていたら、私とて、お腹さま。土田御前と敬まわれる身分になれたのに、うっかり早よう産れて、しょむない」

夫と口喧嘩すると、すぐこれを云いだす。

土田は前の主筋。義妹の御前は、いまの主筋。

やりこめられるたびに、柴田権蔵は、畑へ入ってひとりで土いじりをする。

なにしろ、気をまぎらわせるには、大根や菜っ葉を相手にするしか、他には、なんの救いもない。まったく、やりきれもしない。

(自分は駄目だが、せめて伜の柴田権六だけは、人なみの武者に立身させたいもの)

と、これまで願ってきたに、それさえも、次々と出世の機会を逃がしてしまい、今では猫にしか相手にされていない伜の不運を、想うと、つい不覚にも権蔵は父親として泪がでる。

## 2

五年まえの天文二十年の三月だった。

三日の桃の節句に、大殿信秀が、酒の呑みすぎで、卒中でたおれた。

末森城から四郎信行君が、土田久安と駆けつけた時、もう信秀は、こときれていた。

一郎殿は小豆坂合戦で討死。

二郎殿は三河安祥の城で今川へ捕虜。

三郎殿は寺からも追われた名代のうつけ。

誰が考えても、お跡目は四郎君である。

だから、古渡城の重臣衆に礼あつく見送られ、末森城へ帰ってきた若殿には後光がさして見えた。

「喜べ。これで伜の権六も出世できる」

権蔵が戻ってきて、嬉しさに声をはずませると、

「四郎さまが八歳の時より、うちの権六は奉公して、もう足かけ十年。なんせ筆頭の家人のうえに、わたしが子ゆえ、これは若殿には従兄にもあたる血脈……」

さも当然のことのように於春はいった。

だが内心では、若殿が跡目をとれば、伜も立身すると大喜びして、餅などを祝った。

権六も当時は、三十になった男ざかり。





跡目ときまれば、すぐ古渡城へ移られる若殿について、いつでも、お供できるよう、弁当に焼米二食分ずつを携さえ、張りきって毎日、元気に出仕していた。

権蔵夫婦も、いつ何時でも那古町の里へ引越せるよう、家財には縄がけをした。

「——まあ古渡の本城へ移ったにしても、権六は、前殿の重臣衆のてまえもあって、初めの内こそ、まあ四十貫ほどじゃろが、血縁ゆえ、ゆくすえは百貫どりにもなれようもの」

日がな於春は、嬉しそうにくり返した。

夫の出世はもう諦めているらしく、伜だけが頼りだった。

「百貫といえば馬にのって、脇武者五人、小者の十人も召しつれる大将ではないか」

眼を細め、権蔵も吾児の出世をあてにした。

「——権六が、もし、なんぞ手柄をたてたら、すぐにも足軽大将にはして貰える。すりゃ、組下五十人を預かり、本扶持のほか御役米が三十俵も預けましょう……なにせ、殿さまの母というは、この私の血肉を分けた妹じゃもの、なあ」

せっかくの伜の立身を前に、喧嘩でもあるまいと思うのか、於春も日々、にこにこしていた。

美濃勢が、境目の木曽川べりに、何千と兵を出ばらしてきたと、伝わってきたが、権蔵夫婦は、伜の出世話に夢中になっていた。

(——古渡城の一重臣。つまり首席家老の林五郎佐渡守。その弟の美作守へも、美濃から、仰山な銭がとどいている)という噂もきこえてきたが、

「……四郎の殿が本城の跡目につけば、わが父の土田久安が、今度は一重臣になって仕置をなさる。それで林兄弟は、銭をもらって、あわれや美濃へ身売り……向うの与力にでも、なりなさるのじゃろ」と、於春は蔑すんで笑った。

「美濃から、風那者とよばれる蜂屋すっぱが、はいりこんで妙な噂をまきちらしている」

と、権六や権蔵が心配そうに話しても、

「——この尾張に四郎の殿のほか、お跡目などいようか」

於春は耳もかさず落着きはらっていた。

△三郎信長の君を狙って、遠矢が射かけられたとか…

…お命をとらんと刺客が現われた〉

と、見てきたような話がひろまっても、

「そんな、とろいことありゃあすか。あんな、うつけの馬鹿たれを誰が狙やぁす……」

於春は地言葉で、その噂を笑いとばした。だが、それを裏書きするように、

「三郎信長さま身辺警護」の名目で、三郎の妻の父、斎藤道三入道は、美濃三人衆の安東伊賀守を大将に、武辺の誉も名高い田宮、甲山、安斎、熊沢の武者共をそえ、那古野へのりこませ、志賀、因幡の両郷にも陣取りした。境目の木曽川には何千も美濃の軍勢が集合しているとも伝わってきた。

「……えっ、あの、おおたわけの三郎信長めが、お跡目にきまった……とな」

於春は、のけぞるように仰天した。

せっかく四郎の殿が、お跡目に坐ると思っていたのに、これで、すべてが水の泡になった。今まで権六の出世をたのしみに、仲よくしかけていた夫婦の仲も、これを汐にくずれた。

また面白なさをいつも顔にだし、すこしでも気に喰わねば、待ってたとばかり、喧嘩をすぐ始めだす、もとの於春にもどってしまった。

## 3

三年まえの不運は、天文二十三年の七月十二日からおきた。

当時まだ清洲城にあって、形ばかりではあったが、尾張を支配していた斯波管領家の岩竜丸さまが、近習をつれて五条川の上流へ泳ぎに出かけた水遊びの留守中、坂井大膳らの家来どもが、しめし合せて斯波家を裏切り謀反をくわだて、清洲城をまんまと乗っとってしまった。

織田家は、斯波の家老職にあたる家柄。

そこで末森城の四郎信行が、岩竜丸君を奉じて、清洲城を取り戻しに、信長の云いつけで出陣した。

「――ここで手柄をたてたら那古野にもきこえ、武辺の者として、お取立てもあろう」

と於春も権蔵も気をそろえて、三十三にもなる伜の武運を祈ってやった。





だが、柴田権六は足軽衆藤江九蔵らと共に、まっ先かけて清洲へ向ったが、山王口で敗れ、誓願寺前で敵に囲まれ、とうとう町口の大堀の中へ追い落されてしまった。

この中市場の負け戦で、四郎信行は那古野の三郎信長に、ひどく叱られた。だから、

「うぬが大きな図体しくさって、真先かけて駆けこみ、また真先になって、逃げだしたゆえ、わが軍勢は旗をまいて引きあげた……のだぞ」

遠慮のない従兄ゆえ、戻ってくると四郎信行は、権六を呼びつけて謹慎処分にした。

世間は「権六の意気地なし」と評判した。

「……あの合戦は、向うは三間槍。味方は二間槍。突きまくられて引き退ったのだが、権六とて、馬のりの武者だったら踏みとどまり、やみくもに後退はしなかったろうに、足軽衆にまざって徒走で進んだゆえ、それで浮足だった味方にまきこまれ……誤って大堀へ落っこちてしまったのよ」

と、権蔵が伜可愛さに立腹すれば於春も、

「――なにも負け戦は権六ひとりのせいではないのに、なりが大きゅうて、よく目だつだけに、あれは、いかい損をする」と泪ぐんだ。

つぎの不運は、昨年の弘治二年八月。

那古野の城代林佐渡兄弟が、信長を倒して信行をたてようとした。

正月の村木城攻めの時に、美濃勢が加勢にきたまま、那古野へ滞陣して動かぬから、林兄弟は、荒子城の前田与十郎のもとへ退き、

「このままでは、尾張の土地は、信長さま岳父の道三入道にとられ、美濃に併呑される」

と、とりあえず信長台所入りの知行地、篠木三郷を押えて、川辺に砦をきずいた。

だが兄の佐渡だけは間もなく変心して、信長に寝返って忠誠を誓った。

そこで好機とばかり信長は、佐久間大学を名塚まで先手にだし、八月二十四日、清洲をでて自分も川を渡って攻めよせた。

まえの不首尾で権六は遠ざけられ、津々木蔵人が末森城の仕置を今では一切していたが、信長来攻をきく

と、四郎信行の身代りに、土田御前は、
「そもじ、殿の名代せい」と権六を呼びだして命じた。
「……血肉をわけた、そなたの身内ゆえ、いいたくはないが『他人ではない縁者ゆえ、若君の身代が増すまでは堪えい』と足軽に毛のはえたぐらいの安扶持しか下さらん。そのくせ敗ければ咎をおわされ。わが子の四郎君可愛さに、あろうことか。うちの権六に身代りせよとは、土田御前さまもひどい」
と堪りかねて権蔵が、いまいましがると、
「何をいわれます……身内ゆえに理由なく加増しては他人がそねむ。そこで前には、権六に手柄さそうと、わざと足軽衆にまぜて先陣させ——今度は逆に駒にのせ兜をかむせ、功名させたがる土田御前の心、それが、おまえという、おひとには判らいでか」
妹の肩をもち、於春は夫を叱りつけた。
窮屈そうに借物の甲冑をつけ、出陣する倅をみかね、権蔵は馬の口取りとなって一緒につき従った。
南田までゆくと、此方の林美作勢七百が待ちうけていた。だから、それとあわせて千九百名。御台川を渡ってきた敵の信長勢は、その半数の千ぐらい。
「こりゃ勝てる……信長さえ倒して信行さまの世とすれば、倅も名代でなく、本物の大将になれる」と、父親の権蔵は勇みたった。
だが敵は、二手にわかれず、ただ権六の本隊のほうだけを目がけて、砂塵をまき上げ、
「——名代は、意気地なしの評判者の柴田権六と見うけたり。それ、うちとれ」と勢いこんで、調子づいて矢雨をふらせ、わっと一目散に突きこんできた。
あわれ権六は、人なみより図体が大きい。だから矢にあたる面積も、それだけ多い。みるまに雨後のねぎ畑みたいに、矢が刺さったから、はり鼠のようにされてしまった。
(これは、いかん。倅は殺されてしまう)
権蔵は狼狽した。敵武者山田次郎左の首を、倅に、合力してとってあるし、もはや手柄はこれくらいでよかろう。早やく助けださねば、権六が危ないと、馬の尻べたを思いきり叩いて、権六を戦場から落し自分も逃げ戻った。
だから、名代に逃げられた末森隊は総崩れ。





勝ちに乗じた清洲勢は、林美作守の隊をかこんで、信長みずから、その首をあげた。
散々な敗北で、また権六は謹慎になるところだったが、あちらこちらの矢傷が熱をもって痛み、権六のほうから出仕を休んだ。
次々と見舞う倅の不運に腹をたて、於春と権蔵は、あけくれ口汚くまた喧嘩ばかりしていた。

## 4

一年たつと、降参した弟の四郎へ、末森城から矢田川べりの竜泉寺砦へ移転するよう、清洲城の三郎信長から命令がでた。
同じ尾張でも、西端から東の隅へである。
「——いよいよ、息の根を止められる」
と四郎君の母、土田御前は嘆いた。
唯一の味方である里方の土田久安も、阿古井の所領を放ってまで、竜泉寺砦へは随行できかねた。だから四郎君は羽をむしられ、裸にされてしまうことになった。
だが、正面きって戦えば、去年の稲生合戦みたいに、また敗けそうである。今度は奇襲しょうと土田御前は、信長征伐を計画した。
なにしろ三郎信長一人さえ倒せば、それで良いのである。
清洲からも、美作の残党や美濃に恨みのある者共が、秘かに仲間入りしてきた。
「——成就すれば、今度こそ倅にも、陽の目があたろう」
権蔵は危険な密使の役をひきうけ、下織田の岩倉城へも、何度も打ち合せにいった。
「肝腎な時なのに、倅は、まだ放埒な猫狂い……このまえなどは、さかりのついた牡猫が群っている所へ、のこのこ屋根を登っていって、あろうことか、自分で猫の婿えらび、まるっきり、あれでは正気の沙汰ではありませぬ」
と眉をしかめる於春に、夫の権蔵は、
「——まだ矢傷の痛みが残っていて、倅はその傷養生のうさ晴し。大目にみてやんなされ」庇いながら、
「清洲の城へいって、その猫の仔を、三郎信長さまに

差上げたという話もある。……なんせ猫狂いと、われから異名をとり、敵も味方も油断させ、権六は、敵の清洲へ平気でもぐりこみ、時機を狙っとるものと……わしは睨んどる」

低い声だが、権蔵は力強くいいきった。

「機会とは……」

「わしの考えでは、三郎信長さまは、お強いとはもうせ、おやせ型。大男の権六は隙をみて飛びつき、首をねじ切る存念と思う」

「――まあ、では伜が一番手柄。こりゃ四郎の殿も気兼のう伜を、取立てきまするな」

「そこじゃ。猫を使って計略をたてるとは。権六も、なかなかの智恵者……見損っていたわい」と、権蔵が微笑めば、

「――あれは、私がうんだ児。頭がよいのは、生得、血の流れですわいな」

於春も、うすい鼻の肉をうごめかした。

夫婦が久しぶりに気をあわせ、伜の出世話に、うつつを抜かしていたやさき。突如、

〈竜泉寺への転居を拒み、四郎信行ご謀反〉

の企てが、どうして、いつ洩れたのか。

電光石火に清洲から押しよせられ、末森城は包囲されて、信行の殿は首をとられ、土田御前は、父の久安を頼って、阿古井まで落ちたが、追手に取りこめられて、父娘もろとも生害をとげた。

非番で畑仕事をしていた権蔵が、泡くって駆けつけた時は、もうすべてが終ってしまっていた。

夫婦喧嘩のたび、切り札のように使っていた、妹の土田御前と、実家の阿古井の里を、一度に両方とも失ってしまい、於春は気落ちして泣き暮した。

5

「――清洲のお城から、わしに出頭せいと、お差紙がきた……そなたも土田の姉娘。こうなっては、ただでは済むまい。きっと後から沙汰もあろう……人手に掛って酷う殺されるより、子まで なした長年の夫婦の縁。いっそ……二人で死のうではないか」

と権蔵はいった。だが、急に老けこんで白髪のめだつ於春は、放心したように黙りこくって何も答えなかった。





「だめか。俺とでは、死ぬもいやなのか――」

あきらめた権蔵は、水をかぶって身体をきよめ、死装束に肌着をかえ草鞋をはいた。

伜の権六が、やはり昨日から、お呼出しで、清洲のお城へ行っていた。

(なろうことなら、四郎の殿と権六は従兄弟の間柄でも、矢傷治療で休んでいた事ゆえ、今回の企てには係りあいなしとして、お咎のぶんは、自分一人で、ひっかむろう)と、権蔵は覚悟した。

つまり、伜の身代りに、自分が死にたい。たとえ身は八つ裂きにされても、権六を助けて貰おうと、夢中で七里の道のりを歩いたのだ。

あんな妻と死ぬよりも、伜のために、命が使えたら、なんぼか、そのほうが値うちものよと、肩いからせ権蔵は、清洲城の外濠につづく五条川の長者橋をわたり、大手門をくぐった。

「……わからん」権蔵は首をひねった。

狐にでも化かされたような、変てこりんな気持だった。わけがわからなかった。

なにしろ、城門を入ると、御槍奉行の詰間へ連れてゆかれ、そこで、

「――新知二十貫にしては特に広い、お槍組御小屋の五間もある厩つきが、あけてござる。早々に引越して来られい」と指図された。

すぐ断罪か土牢へでも放りこまれるつもりで来たのが、案に相違して、思いもかけぬ沙汰だった。

あまりの事に、ぼおっとして、伜の安否をきくのも忘れてしまった。

そこでまるで憑かれたように戻ってくると、於春は、まだ朝と同じ恰好で、ちょこんと、後ろむきに坐っていた。

「――おい」と背中から、声を けると、

「げっ――そなたという、おひとは……」

のけぞるように振返って眼を光らせた。

「どうしたのだ……このわしが戻ってきたが判らぬか」

笑顔をみせたが、於春は、きっとして、

「情けなや。おのが命ごいに、妻の私を売られました

かえ」と怨めしそうに、はったとばかり睨んだ。
「なんじゃ」
権蔵が、あっけにとられているのを尻目にかけ、仏壇の木箱を、於春は抱えこむと、
「……今はなき父者、妹。土田一門の衆――よう聞かれませ。うちの権蔵という人は、おのれの一身を助かりたいため、のこのこと、私の首うって、それを差出さんと戻ってきましたのじゃ。これが女夫か……鬼じゃ」と、わあっと泣き崩れた。
「うろたえな。詳しくは判らんが、どうも変てこりんじゃが、お咎はないらしいぞ。喜べや……」
と権蔵はいった。あやすように笑顔もつくって見せた。だが、
「――ええ騙されませぬ。出かける前から、この首を手土産にしょうと『ただでは済むまい。一緒に死のう』と、そなたはいった……もし粗忽に合点してたら思う壺じゃったろに、それが出来なんだばっかしに、また出直して、今度は『お咎なし』などと甘口たたいて油断させようとなさる――誰が、その手にのりまする……とはいえ、所詮、逃げられもしまい。さあ殺せ。斬るがよい……そのかわり、祟って、呪って、とりついてくれよう」
白髪をふりみだし於春は物凄い形相をした。
（無理もない）と権蔵も眼をつむった。

土田の家は、跡目の喜十郎はじめ、久安の娘や孫までが、みな首にされ、噂では、清洲城内で加担した武者共は、みな縛り首だという。権蔵が連絡にいっていた下織田本家の岩倉の領主の伊勢守さまさえ切腹だそうな。それなのに、なぜ、俺だけは　助けられ、おまけに向うへ、新知召抱えされるのか。
「……何が何やら判らんが、まあ、俺がいうこと、きききわけてくれ。夫がいうことぞ」
べったり坐りこんで、権蔵はいった。
（早死させたとはいえ、何人もの子をなした夫婦の仲ではないか――納得ゆく、ゆかぬは後にして、なぜ、せめて、話だけでも聞いてはくれぬかや）
怨めしそうに権蔵は、於春を見つめた。
「――夫、夫といわれるが、もともと別に、血のつながった親兄弟でも、子でもない。ただの合せもの……





ともに添い寝して男と女が、そない結びつくものなら、日に十人もの男とねる国府宮の遊び女などはまんじ巴と結びつき、まるで蜘蛛の巣みたいで、ござりまするな」ともいった。
（女も齢をとると、ここまでいうものか）
権蔵は突嗟に、かえす言葉も出なかった。

## 6

「わりゃ……生きとったと――よかったな……」
権蔵は身体ごと震わせ、吃ってしまった。
「うん」権六は懐から、赤い首輪をした白い仔猫を引きだすと、
「こいつ、せっかく清洲のお城へ献上したのに、また出もどりじゃ」
と、座敷へあがらず、そのまま、すたすた納屋の方へ廻ってしまった。
「――猫より、話のほうを先にせんかい」
もちの樹と八つ手の茂みを縫って、権蔵も泡をくって、伜のあとを追いかけた。
（自分ら夫婦が、思いもかけずに助かったのは、これは、どう考えても、伜の権六が命乞いをし、身代りに死んだからだろう）
としか想えなかったから、昨日からずっと夜っぴて燈明をあげ、冥福を祈っていた。
それなのに、ひょっこり大男の影がさした。
（まさか）と思ったし生霊かと想ったのである。
ところが、そんなに腰をぬかさんばかりに、親が仰天してるのも知らんぷりで、権六は小猫を抱えて納屋の中へ入った儘である。
そして、後を追ってきた父親の権蔵に、
「見なされ。ほら兄弟どもが『よう戻った』と、白猫をさかんに舐めてやっとりまする」
箱の中を指さした。云われて眺めると、なんの屈託もなく、白黒、黒の仔猫が、もどされた白猫をはさんで懐かしがっていた。
しかし権蔵は、仔猫より伜の方が気がかりで、その横顔を見つめていると、
「……先代の信秀さまが白かったから、いまの清洲の信長さま。五郎さま、於市さま、みな雪のようじゃ――土田のほうも、うちの阿袋にしろ、御前も、真っ

白じゃ。ところが、おらが旦那の四郎信行さまは幼少から真っ黒。ひと呼んで〈からすの勘十郎ぎみ〉……おやじさまは畑仕事しながら『瓜の木に茄子はならん』と、わしに教えなされた事がある。『なんせ親のいう事と茄子の蔕は、千に一つのむだもない』とも云うから、それでよう勘考すると、白い男と白い女がむつんで、なんで茄子みたいな黒いのができたのか。こりゃ合点がゆかんことになる……」

権六は仔猫をなぜつ、勝手にしゃべった。

「――まさか人間では捉えてきて、でけんから、真っ白な雌猫を補え、浮気せんよう縄でくくって、一番目に同じ白の雄猫。次は、真黒な雄と、順にかけてみた……」と権蔵の方を初めて振返った。

「……すると、そなたは、白と白をかけても黒はできぬ。黒をかけて、初めて、この白黒や黒の仔猫がとれたと云いたいのじゃろ。だが死んだとはいえ、土田御前は、そなたの母の妹ではないか」

「叔母どのゆえ、そりゃ悩んだ。だが曲ったことは好かん。といって、ご当人の四郎さまには云えんから、思いきって清洲の信長さまに白の仔猫をさしあげ、あ

りのままを言上した」

「――道理で」と権蔵は「隠密裡に運んでいた企てが、なぜ露見したか。それで、ようやくわかった」

と、情けないような困った顔をしつつ、

「――して御褒美は……」ともきいた。

「うん、四郎君さまの忘れ形見、和子さまのお命を、褒美に助けて頂いた……そうそう、この白い仔猫めも、五十貫の扶持つけて、信長さまから、また返されよったのだ」

「……なに、人間の権六でのうて、この猫めに、五十貫もの、お扶持じゃと」

権蔵がうめきながら小猫をつまみあげると、お産をすませ縄をとかれていた白い母猫が、天井の梁から心配そうに顔をだして、

「ミャーオ」――よしなされ、といった。

## 7

「四郎信行の殿を訴えて、それで扶持を頂いては、男がたたぬ」と柴田権蔵は、信長から沙汰のあるたびに、今はもう元服して津田信澄と名のっている四郎の





遺児の賄料に、それをまわしてもらい、自分は、やっと猫と同額の五十貫どりですごしていた。

ところが元亀元年夏。どうした風のふきまわしか、権六が、長光寺とよぶ砦の大将になったと聴こえてきた。

「……あの運なしも、それでは、やっと一人前になれたのか」

伜の出世を喜んで、晴れ姿を、是非ともひと目なりとも見ようと尾張から、権蔵が杖をついて江州へきてみると、砦といっても、皮つき丸太をつみあげた、小さな曲輪だった。

「――どない、なされた。こない所まで出てこられたは、また阿袋さまといさかいか……」

顎髯に白いものが目だつ伜が、眼を細くして、父親を迎えたが、具足も見すぼらしく、一向に晴れ姿ともいいかねるから、

「うん、業じゃな。於春めは婆になるほど、よけい口うるそうなって、難儀しとるぞ」

と権蔵はいわれるまま話をまぎらわせた。

「まあ倦きずと、よう喧嘩をなさる」

いたわるように権六が笑うのをみて、

(われら夫婦が仲違いを、童のときから見つけすぎたので、権六は、この齢になっても、まんだ嫁とりをしとらん)　権蔵は後悔しつつ、

「――なあ伜や、おまえも良い加減に身を固め、孫でも、こさえてくれろや」

頼むように云ってみた。すると、権六の方は、

「それが、おやじさま……」と、にっこりして、

「――猫を飼い馴れたら、もう女人は結構……なにせ猫というは、こっちが躰を動かせば、すぐ自分の為になにかしてくれるものと、あてにして、ついて廻り、思い通りにならぬと、すぐぷんとふくれまする――そして、こっちの気をひこうと側へきて甘えたりしますが、餌をえて満腹すれば、もう眼の前で呼んでも、耳を動かすくらいで知らぬ顔……そのくせ、とんと焼餅やきで、こうして、おやじ殿と仲良う話をしておると、それが気にいらず、むくれて何処ぞに匿れ、じっとこちらを睨んで居りまする」

と権六が云いさし「ごじゅう」とよぶと、

「アーアゴ」と白猫はこたえて出てきた。

だが見なれぬ権蔵を用心して、背を低く腹ばった姿勢で、遠まわりして権六の側へゆき、まず突き上げるように額をすりつけてから、身体ごと抱きつくように膝へのし上った。

「馴れておるな」と権蔵が眼を細めると、

「なあに、これは、見せかけでござる……こない仲が良いぞと思わせて、見かけぬお前さまより危害をうけるのを防ぐてだて、……なあに、わしとふたりきりの時は、冬でもなければ側へよりつきませぬ。寒い時は、わしを、あんかと心得てござる相手じゃ。なんせ、排泄する時に、孔を掘ってよく土をかけるのも、お行儀ではのうて、他猫に嗅ぎつけられ、襲われまいとの用心……女人そっくりに、よう気がききすぎ、とんと悋気で、もて余してござる」

口でけなしても、掌では撫ぜてくれる権六に、(わしは好かれとる)と白猫は、そり身になって(乾魚でも下されや)と甘えていた。

「――ところで、おやじ殿ここは剣呑。明日は帰られませ」と、伴は、真顔になった。

朝倉攻めの織田勢の背後から、信長の妹婿の浅井長政とその父久政が襲いかかった。

予期せぬことで信長は朽木越えに逃げた。

あと備えに、志賀宇佐山、永原の砦に、森、佐久間の手の者が残された。

それらの砦の前面に、小さな長光寺砦があった。櫟千本とよばれる見晴しはよい所だが、いざとなれば、まっ先に敵に占領される場所だから、初めは空けて捨ておく筈だった。

ところが、ここで半刻でも一刻でも支えられたら、宇佐山と永原の砦が好都合だということになって、兵を入れることになった。

引揚げの各隊から、放ってもよいような兵が供出されて三百ほど集ったが、大将に残す者がいない。初めから(捨て殺し)と判っていて、貧乏くじの、ひき手もなかった。そのとき。

「――人間僅か五十年……わしゃ後一年じゃ。よかったら、残り役をひきうけようぞ」

見かねて柴田権六が自分から名のりでた。

「猫扶持ともで百貫の男では、砦の大将には、身分が





軽すぎまいか」と信長名代の梁田正綱もためらったが、一刻を争う時である。

「まあ権六なら、まだひとり者で、死んだとて、歎き悲しむ妻子もいない」

と香典がわりに梁田は、口頭で五百貫格に昇進させ長光寺砦をまかせたのである。

8

「――この江州をさきに追払われた六角承禎が、信長さまが京へ退かれた今こそ、もっけの幸いと失地回復に、甲賀から三千余も率いて、今朝から、この砦をかこんでいる――さて俺もうぬらも、考えれば、頼もしがられて、ここへ残されたんじゃない。つまりは、鼻つまみ者ゆえ、捨て殺しに放ってゆかれた、あぶれ者の集りよ」

と降参せぬかと談合にきた六角方の使者を、ひとまず帰したあと、権六は、砦の兵を空地によび集めて、そこで話した。

「いま敵方より、手をあげて出てこぬかと誘いがきたが、よし降参したとても、こない人手のいる時に、郷里へも戻してはくれまい、恐らく矢玉よけの楯にされ、まあ命は助かるまい。それなら面倒くさいゆえ、このまま、じっとしていて敵に殺されたが楽というもの……といって、まだ死にとうない者がいたら、こりゃ生き抜くため、戦して向うを倒さにゃなるまいで」

と群がる一人ずつを権六は眺めまわした。

――兵たちは、初めは権六を嫌っていた。

(その昔、おのれの旦那の四郎信行の殿を訴えて殺した)という悪名がひびいてから、てんで誰ひとり心服していなかった。

だが、こうして眼の前で、自分から、

「俺は鼻つまみだ」と大男の権六に情けない顔をされてしまうと、

(おらたちと同じだ)と、すこし気の毒になって親しみも覚えた。

「――よし、こうなったら権六殿と力をあわせ、あわよくば敵を破り、捨て殺しに放りだした本隊の奴らの鼻をあかすべえ……」と、そんな気になった兵どもは互いにうなずきあい、「おー」「おー」景気よく鯨波をあげた。

さてそんなことは知らない寄手の六角勢は、
「降参もせず、しぶとく頑張っとるわい」
と、すっかり呆れながら、
「……この砦は、前は、わが六角方の物で、六枚橋から水車で飲料水をくみ上げていた。今も変りはあるまい。よし、それならば、樋で流しこむ水道を切って降参させよう」
と試みたが十日たっても、きき目がない。
「変だ。それに守将の柴田権六など聞いたこともない。談合のふりで、また探ってこい」
と敵将六角承禎が出鼻をくじかれ、奇怪に思って命令をだしたのは、元亀元年六月十八日。いまの暦なら七月二十四日。うだりそうに暑熱きびしい日だった。
砦へきた六角の使者が帰り際に、
「ひどう暑うござる——ちょっと顔を拭きたいが…」
額の汗をこすりつつ故意に水を所望した。
「——これは気のつかぬこと。お安いご用」
と年よりの武者が大桶に水をくんできて、
「新井戸を掘りあて、よう水が出まする」
笑いながら、使い残りは惜しげもなくザアッとぶちまけた。
白く乾いた地肌に、もの黒く吸いこむ水を、恨めしそうに振返り、がっかりした六角の使者は帰って行った。しかし、
「……なんたる事か」
その後、砦内は大騒ぎになった。
各隊から放りだされた、ひがみっぽい砦の兵たちだから、より集って喚きだした。
「吾々には辛抱せいと……水の手を切られてからは二人に一碗しか、呑み水は渡されぬ。それなのに柴田さまの父ご権蔵どのは、惜しげもなく桶一杯の水を放られた……これはきっと、われら兵には渇えさせておきながら、柴田さま父子だけは、内緒で水を、どんどん使い棄てになされ、その癖が、つい出たのじゃろ」
「——慮外千万な話よ。こうなったら遠慮はいらぬ。われらも思うざま水を呑もう」
わあわあ騒ぎながら、唇を白く腫らして乾かした兵どもが、糒庫の横へかけ集った。
そこの日蔭に、汲みだめの水瓶があった。
水の手を切られて十日、素焼の三斗瓶は、もうほとんど、空っぽで水が残ってるのは、壁際の八個ぐらいしかなかった。
「わーっ」と、砦の兵どもは群がると、てんでに夢中になって、水瓶をとりかこんだ。
「……待て、ちょっと離れい……ほら、後の水瓶に、ひび割れが入って、水が洩れ滲んどる。早よ他の瓶に汲みかえんことには、呑むより先に、地面に吸われてしまうぞ」
と足軽大将が、打刀をひっこぬいて、大声で喚いた。云われて覗きこむと、なるほど瓶の底がしめって、廻りの土が黒っぽい。
「——げっ」と愕いて蓋をとると、
「どれも半分もない」と、みな青ざめた。
「こりゃ、とんだことじゃ」と兵たちは、空いてる丈夫な瓶へ、残りの水を移しかえ、
「さて……こりゃ、どうしたというわけじゃ」
厚刃の打刀をつきつけたまま、足軽大将が、水番の小者につめよった。
「はあい。つい先刻、柴田さまの白猫が、このあたりで鼠を追いかけとりましたゆえ……」
と蒼ざめて、すっかり猫のせいにした。
「そうか。いくら日照り続きでも、瓶が割れて、ひびが入るわけはない。きっと猫めが暴れ、石を飛ばしたのが、壁にはねて、次々と瓶にあたり、それで傷ついたのよ」
と、足軽大将が唇をへの字にまげると、
「柴田さま父子が野放図なら、飼猫までが似くさって横着な。これは許せぬ。叩っ殺せ」
と兵たちは、すっかり昂奮して喚きちらした。
「……して、水の残りは」
騒ぎを聞きつけ権六が、大身の槍をかかえたまま走り出てきた。足軽大将は、
「瓶に半分ずつ四つとありませんわい」
むくれたように、首をねじって答えた。
「ふん。しめて五斗か。三百の兵が呑むには、もはや二日とあるまい……とはいえ、渇えて降人しては敵の六角勢は、『よくも今までたばかったな』と、おそらく一人も、命は許すまいな」
父親の権蔵は唇のまわりの白髭で、あまり目立ないが、権六は口髭がまだ黒いから、白く乾き腫れあがっ

た唇が、乾餅みたいに、ひび割れして見える。そしてその口から続けて、

「こうなったら俺も久しぶりに、思いきり呑む。うぬらも、あるだけ呑みほせ……咽喉を乾かして首うたれては、血もよう出んで莫迦にされる……どうせ殺されるなら、水気で元気づいたところで、ワアッとうって出ようぞ」

と、まず馬みたいに柄杓からガバガバ水をむさぼると、権六は、その残りを、

「これを、猫のごじゅうへ」といった。

自分らと同じように権六が渇えていたのを初めて見てとった兵らは、猫にやると云っても、もう誰も咎めはしなかった。

自分らも、争って残りの水を思い思いに呑みほした。

「もう、よいか」と念を押してから、

「エイッ」と権六は槍の石突きで、瓶をつぎつぎと壊し、さて三百の寄せ集めの兵に、

「――猫とはいえ、主君信長さま御目見得五十貫どりの白猫が、瓶をわったというは、これは殿さま御下知とも心得る……もはや砦には一滴の水もない。あとは敵を蹴散らし六枚橋へ出ねば、もはや水は呑めぬぞ……それッ、者ども続け……」

大音声に呼ばわって、権六は駆けだした。

9

「――なに、猫飼武者の柴田権六が六角勢へ討って出たと……長光寺砦の柴田勢が討たれては、その勢にのって、敵は此方へも、直ちに押寄せよう」

と織田方の佐久間勢は、敵を挟み討ちにしてしまえと、権六の加勢に永原から降りてきた。

ふいをうたれた敵の六角勢は混乱して、遺棄屍体だけでも七百八十も放りだして逃走。

その十日後の姉川合戦に六角勢は加われなかった。そのため朝倉、浅井の連合軍は、予定が狂って織田信長に大敗してしまった。

このこと以来、権六は〈瓶割り柴田〉〈鬼柴田〉と〈猫飼武者〉の異名より評判になった。

「――われらは捨て殺しに放ってゆかれた身。生き残っても、今さらおめおめと意地にも、もとの主家へは戻れ申せん。大瓶で水盃をしあった権六さまに、改めて〈旦那の殿〉として奉公したい」

と長光寺砦から出て戦った三百の内で生き残った二百名は、口をそろえ家来にと、申しこんできた。

「一度に、ごそっと二百人もの家臣を持ちましたが――」

と権六が信長へ報告すると、香典みたいに話だけだった五百貫を、気前よく信長は二千貫にまであげ、恩賞に長光寺砦まで賜った。

水でこりたから、砦を六枚橋まで拡げ、大増築して、権六は〈瓶割城〉と名づけた。

一城の主になり、信長の重臣に加えられたから、権六は柴田勝家と名のりも改めた。

だが、せっかくの晴れ姿を見てほしい、父の権蔵はもう、この世にはいなかった。

ろくに家来もいなかった伜のために、老いの身を従者のように仕え、六角の使者がきた時、敵に侮られぬよう、残りの水をあけたのが、疑い深い兵どもに騒がれて、権蔵は、

「――良かれと想ってしたことが、また仇になった。かくなる上からは、わしが、まっ先にかけて討死してやる……せっかく形だけでも、権六が砦を預かる身分になれやれ嬉しやと思うたら、水がのうなって切羽詰っての斬りこみとは、こりゃ四度目の不運。もう、これで仕舞じゃろが……よくせき、ふびんな伜よのう」

五十男の伜の頭を、童のときのように、やさしくなぜて、七十四歳の権蔵は壮烈に敵と戦って死んでのけていた。

その知らせをきくと妻の於春は、

「どうせ死ぬのなら、もそっと早くしてくれたら、私とて嫁の行き直しができたのに……もう六十八では、ちょっと、もらい手もない」

と肚をたて、それを種に喧嘩をまた売る気か、夫権蔵の後をいそいで翌月追いかけた。

だから瓶割城が落成した時も、見せたい両親に先立たれ、柴田勝家はとんと寂しく気落ちしていた。が、そのかわり白猫が尻っぽをおったて、

「おれが手柄よ」といわんばかりに新築の城内を、わがもの顔に検分して巡邏した。

# 続・猫飼武者

〈古田治平〉

そして他所猫が入りこまぬよう、のしのし歩きながら遠慮会釈なく、立ったままで、

「ここは、おれが縄張りぞ」

と新調の襖や磨柱に次々と、尻をひっかけ、それを嗅いでみては、

「アーオ」つまり満足じゃと頷いて廻っていた。

勝家が二千貫に昇進した時、今までの猫扶持五十貫は端数ゆえと、取消されていたが、

「五十、ごじゅう」と相変らず名を呼ばれていたから、白猫は扶持離れして自分が牢人したなどとは、とんと気づかぬ有様だった。

# 1

「何をして居られました」と声をかけられ、
「……猫の相手でござる」といいかけて見廻したが、虎猫の姿は、もう影も形もない。人の足音が響くと、素早く外へ逃げだし銀杏の樹のてっぺんか、しなって折れそうになる枝の端まで這い上って、葉隠れに身を潜めているらしい。治平は、猫がいなくては、末森どのに、まるで嘘でもついているような恰好になるので、ばつが悪く、大声を出し、まごまごしながら、
「とら、とら」と呼んだが、治平の他に人間がいては、そっと様子を窺いにきていても、返事をしたり入ってくるような猫ではない。
何処か、すぐ間近にはいるらしいが、ことりと物音ひとつ立てもしないのである。
「母屋にいる白猫は、誰が行っても平気で陽なたに寝そべり、顔見知りの私などが参りますと、脚許に背をなすりつけて甘えまするのに」と末森どのも、つんとして余り良い顔はしない。
「彼奴は、儂の外は虻が好きじゃで、何処ぞで鼻の下をウウウと痙攣させ、眼ん玉までピクピクさせて、夢中で草っ原を追い廻しているのでござろ」
治平は周章てて猫の為に云い訳けをした。
「私がきたゆえ、厭やがって行ったのではないか」と、まだ末森どのはこだわっていた。
というのは、彼女は鼠年なのか、初手から虎猫とはそりが合わない。治平が裏の沼へ投げこまれ溺れかけたのを、拾ってきてやった頃は、まだ掌にのるくらい小さな仔猫で、眼やにが黒いかさぶたになっていた。それが末森どのを見かけた時、俄然背を丸め大きく見せる為か、つま先で立って毛を逆だて、身体をよじって威嚇した。その場は呆気にとられ、人間の末森どのが嗤ってしまい喧嘩にはならなかっが、猫は心配して夜分は治平の木枕の端に両手をかけ、それに伸び上って顎をのせ、心細そうに寝る癖がつきだした。
だから末森どのが、この小屋へ初めて忍んでみえて、朝まで休んでゆかれたとき、明るくなって治平の方が先に眼をさまし、何気なく末森どのの顔をみて仰天してしまった。
鼻の下から唇へかけて、斜めに掻き傷が、もう黒糸





のようにはりつき乾いていた。
はっとして身体を起して見廻すと、その頃は、まだ小さかった虎猫は、天井の梁木から首をだし、
「イヤアゴ」と悲しげな声を出したものである。だから治平は、末森どのが目ざめて起きられると、おそるおそる己れの指先を見せながら、
「気がつきませなんだが、夢中になって、おみさまの顔に傷つけてしまい、とんだ不調法をしました咎、存分に折檻なされ」と自分で猫の罪を冠り、身代りにあやまってしまった。
顔のこととなると、さすがに末森どのも女ごゆえ、やにわに血相をかえて掌で撫でまわしながら、すっかり狼狽しきって、
「早よう水を……」とせかされた。そこで水を桶にはって陽なたへ持ってゆくと、腹這いになって丹念に覗きこまれたが、
「これ位なら白粉さえ濃くすれば判るまい」
と吻っとしたように戻ってゆかれた。
だが暫くたって、その引っ掻き傷が消えたころ、末森どのが泊りにみえると、また朝になって今度は頬に前より長い爪の痕があった。
たび重なっては、とても隠しおわせるものではない。末森どのも肚をたてられ、
「猫のくせに妬いて、悪戯するとはいやらしい、棄ててしまいなされ」と云いだした。
途方にくれて、せめて末森どのの目の前で、頭でも叩いて懲めようと呼んだが、何処へ匿れているのか、猫はでてこなかった。
そのくせ末森どのが、そっと小屋を出て行かれると、まるで入れ違いのように猫は、そうっと戻ってきて、治平の側へでんと手肢をのばして横になった。泪ぐんだような濡った眼で、じっと見返されると、拳固をふりあげた治平も撲るかわり、それで頭から背をぐいぐい擦るように撫ぜた。
やがて、いくら顔を引掻いても、それに懲りずにくる末森どのに、猫も諦めてしまったのか、手は出さなくなった。しかし、その代り、末森どのが戻ってゆかれると、小屋の入口に尿をするようになった。己れの体から出す自分の臭いで、この小屋は猫と治平の棲家ゆえ、他の者は入ってくるなと、縄張りをはっきりさ

せた積りだろうが、末森どのは鼻をつき出し嗅ぎながら訪ねてくるのではない。だから何時も藁草履で頓着なく、それを跨いで入ってくる。

すっかり匙をなげた虎猫は、見ぬもの清しとでも思うようになったのか、近頃は、末森どのの足音をききわけ、それと気づくと外へ駆け樹へ登って、上から監視するのか、戻って行くのを待ち佗びるようになっていた。

「……弟に気づかれ、きつい意見をされたぞえ」

暫くして、ぽつんと末森どのはいい出した。

「えっ、旦那さまに」

治平は真っ青になった。猫どころの騒ぎではなくなった。小刻みに膝頭が震えだした。

母屋でも、ずっと白猫を飼って、時には抱きながら話などもするから、旦那の柴田権六は、悪い人ではないと治平は頭から信用しているが、見るからに髯達磨の恐ろしげな顔をした大男である。

(憤らしたら、どんな目に逢わされるか)と思うと、生きた心地もしない。

「な、齢下のそなたに迷惑をかけては済まぬ。弟が何も云い出さぬ前に何処ぞへ逐電してくれぬか」と末森どのは、渋紙の巾着を懐から出すと、治平の掌へねじこんだ。それを、震えながら、

「いけませぬ」周章てて治平がつき返すと、

「私は武蔵守さまを忘れ形見の信澄さまの守り役で、城の名をとって、末森どのとも、人に呼ばれている身状、密通がばれても、まさか弟とて慮外な沙汰はしまい。それに比べ……」と云い澱んだ。

「はい、てまえは権六旦那の草履とりの奴……この空地に、勝手に小屋を建てさせて頂き、猫と住ませて貰って居ります小者の分際」

治平はなるようになれと言いきった。

「なにも、この尾張ばかりが人の住む所ではない……な、短気は出さんと、ひまず銭をもって他国へ落ちのび、そこで身の振り方をつけ、もし落着けそうな見通しがたったら、この私に、便りの一つも、お呉りゃぬか」

恥かしそうに頬を赫らめ、口さきまでは母親のような、きめつけかたで、末森どのは、急いで小屋を出て





行った。すると入れ違いに、

「ニァオ」と、尻っぽをたてた虎猫が、やっと戻ってゆきおったと、待ちかねていた顔で欠伸をしながら、両肢を突張り入ってきた。

「うぬがやめて置けと、鼻の下や頬を引掻き注意してくれた時……」と虎猫の頭を撫ぜながら、

「止めてしまえば良かったに、長続きしすぎ露見しおったわ……理非はどうであれ。草履取りと主人の姉が通じたとあっては唯では済むまい。これ虎、一緒に欠落すべえ」

治平は猫を抱えよせるととよく言いきかせ、手廻りの物を荷ごしらえしだした。

## 2

しかし、狗ならば呼びさえすれば、何処へでもついてくるのに、猫は始末が悪い。

治平が荷物を孤包みにして背中へくくりつけ、早く逃げ出さんことには、槍で突き殺されるかも知れぬと、必死になって、

「とらや、とらや」と呼んでいるのに、てんで姿を、またくらましている。

探し廻ると、なんの事はない、いつもの銀杏の樹の葉の茂みから、情けない声をだして、

「ウヤオ」とよびかけてくる。

つまり住みついた此処を離れるのは好かんと、心細がっているのである。

と云って、自分の他には人に懐かない虎猫を放りっぱなしで、治平は逃げもできない。

「こら一緒にこなくて、どうするのだ」

いくら呼んでも降りてこない虎猫に堪りかね、汗をたらして治平が木登りを始めると、

「おい、降りてこい」下から呼ばれた。

確かり木肌にしがみついたまま振返ると、権六の旦那が、まるで栗ぐらいもある目の玉ひんむいて怒鳴っていた。

「しまった、とうとう逃げ損こねた」

と治平は、降りるどころか、猫と一緒に梢まで這っていって、葉の茂みに隠れたい気持だった。

だが柴田権六は、お構いなしに、

「何をしとる、早ようこんかい」

今にも嚙みつきそうな権幕で喚めいた。

「仕方がない。こうなっては猫のことだけ願って、母屋で白猫と飼って頂こう。そうさえして貰えりゃ、別にこの世に心残りもない。ばっさり打ち首にされたとて、恨みに思うこともなかろう」

蟬みたいに幹に貼りついたまま、ぶつぶつ云ってから観念して治平は降りてきた。

「此方へこい」

襟首をつかまえて引立てるように、強力な権六は、治平の背を押しながら、母屋の庭さきへ連れてゆくと、垣根ごしにあたりを見廻してから、ぐっと声を落し、いきなり口早やに、

「うぬ、今日から武者になれ」といった。

「えっ」治平が面喰って思わず聞返すと、

「清洲のお城の武者帳には、新知二十貫で召抱えと、わしから届は出しとくが、儂が身代では、とてもそこ迄は出せん。まあ半分ぐらいの処で堪えておけや」権六は笑った。

「勿体ない」唯びっくりする治平に重ねて、

「……姉には子ができとる。二つ三つならいざ知らず十いくつも年上の女じゃ。さぞ辛気くさくもあろうが、あの年まで生娘じゃった。憐れな女ごじゃ、不憫をかけてやってくれ。末長う、よろしゅう、この権六からも頼む」

いわれて治平が、おろおろして赫くなりながら、庭石に両手をつき、

「ご主人さまの姉さまに、道ならぬ事をしでかしました咎、まず先に、打つなり蹴るなり存分になされ、それで、どうぞ御心をいやしなされ」とわびた。

(――これでは困る。激しく叱責されるか、せめて折檻をして貰って、なんとも始末のつきかねる今の自分を、そんな形で決着つけさせて欲しい……)

と治平は嘆願したのである。

だが権六は髯つらを左右にふって、

「どっちも生身の男と女じゃ。良いも悪いもない。唯、姉は末森城へご奉公の身で、信澄さまご成人までは宿さがりはできぬから、祝言はさせられぬ、それだけは諒承しておけ」

いい残したまま上へあがってしまった。

信澄さまというのは、先年謀反のかどで、信長さまに誅されたその弟君信行さまの、忘れ形身。

それを柴田権六が命乞いして末森城へ住まわせ、姉を守役につけているのである。

だが(守役の方が大切ゆえ、子が出来てるらしいが、祝言はさせてやれぬ)というのは、つまり裏を返せば、草履とりの男を、まさか晴れて義兄にするのは厭やだという根性だろうと、治平は命拾いした事や、武者にして貰えた事より、ぐっと胸につかえるものを感じ、

権六の背から腰を睨みすえるような心地で見送った。

だから五月あとに始った永禄七年八月二日の美濃攻めのとき、治平は、末森どのが苦面して届けてくれた桶皮胴の鎧を身につけ、権六が貸してくれた刀痕だらけの古槍を抱えこんで(くそ面白うもない、死んでこまそ)と肚をきめ出陣した。

猫にも、そこのところは良く云ってきかせ、

「俺も死ぬから、われも死ね……人も猫も生れたからには、いつかは死ぬものじゃ。儂は美濃、そちは尾張で死んだとて、また冥途で逢うたら、きっと飼うてやる」と固く約束してから出かけたものである。

だが世の中は、そうしてあべこべになるもので、死にたくない奴が流れ玉に当ったり、つかぶとのしし矢で咽喉を射抜かれて死んだのに、まっ先かけて瑞竜寺砦へ躍りこんだ治平は、かすり傷も受けず、反対に気息奄々としている敵武者を見つけ、生れて初めて首をとってきたところ、「もっけ首」つまり兜を冠った上等な首だからと、それが殿さまの首実検に入る部類に加えられることになった。

美濃一国を占領されて、身代が倍になった、信長さまは、家臣にも扶持の大盤振舞いをされた。治平も、美濃加納で新たに三十貫を貰える事になった。喜び勇んで尾張へ戻ると、

「キイキイ」はしゃいで虎猫が迎えにきた。

母屋の白猫の喰い余しか、田圃の蝗でも喰べていたらしく、すこし痩せてはいたが、夢中になって治平にまつわりつき、まだ泥まみれの足指を眼を細めながら、抱えこんではベロベロ舐めてくれた。

どうせ人間の言葉で話しかけてやっても、ろくに通じない相手なので、治平も、

「ウ、ウ、ウ」と口を噤んだまま上唇を動かして(ま

あ互いに生きとって良かったな）といった意味のことを語りあうと、猫も、
（そうだ、そうだ）と云わんばかりに、
「メウ、メウ」いっていたが、突然　背をまるめると、ぱっと跳ねおき飛んで逃げた。
（……末森どのだな）と思っていると、やがて人間の治平の耳にも足音が聞こえだした。
「ご無事で凱陣、何よりでござります」
と足付膳を両手で捧げながら、大儀そうに入ってくる末森どのに、
「身重な躰で無理せずとも良いに……」
と治平は中腰で膳をうけてやった。
「母屋に仕度をして、権六とも共、祝うつもりでいましたに、あちらへ見えられませぬで……」と末森どのは侘びしげに微笑んだ。
「遠慮というか、なにしろ板の間には上れぬ草履とりを、久しゅうしとった癖がついてなあ」と治平も膳にのっている稗酒で口をしめしつ、照れ隠しに笑ってみせた。そして、
「児も間もなく産れよう……今度じかに殿さまより美濃で三十貫頂いた。親子三人つましくやれば雑炊くらいは啜ってゆけよう……体が人目に付くようになってからは、末森城へ通うのをやめ、此方で養生しているが、いっそ、この際、暇を貰うて信澄さまの守役はやめ、儂や産れる児のお守りをしてくれぬか」
と治平に顔を覗きこまれと、末森どのも、
「嬉しゅうござりまする……」と袂に顔をおしあてて泪声をだし
「見知らぬ者ばかりの他国の美濃ならば、齢が違う二人が女夫で暮しても、後指さす者も居りますまい」
末森どのは治平との齢の違いばかりを、気にしているが、それより美濃へゆけば、もう草履とり上がりと人に見られんで済むと、その方が治平には有難かった。
「向うへ移る前に、せめて仮祝言だけでもあげられるよう……弟にいうてみねば」
いそいそと頬を赧らめて末森どのは母屋へ戻って行ったが、暫くすると真っ赤な眼をして帰ってきて、ワアッと大声だし泣き崩れた。
「やはり駄目といわれなさったか」ときく治平の膝にとり縋って末森どのは、





「わたしは此方に残り、若様に仕えにゃならぬと、権六め強いことを……」と啜り泣いた。

3

（愛するとは、大儀なことよ）と治平は、美濃まで抱えて連れてきた虎猫に手をやいた。
主家の権六の家で飼われている白猫などは、腹をすかした時だけニャアニャア餌ねだりに、甘えて寄ってくる、あとは知らぬ顔で勝手に午寝しているから、猫とは、そないな物と思うて、拾ってきて真似して飼ってみたのだが、この虎猫は、てんで違う。
のべつ幕なし寄りそって離れようとはしない。
餌をやってもよくせき腹がへらぬ限りは見向きもせず（それどころではない）と云わんばかりに治平について廻る。後架へ入れば、自分もついてきて、見よう見真似で尻をもちあげて同じような事をするし、川へ沐浴に行けば、やはりついてきて（そればかりは猫にはできぬから、早く止めてあがってこい）とギャアギャア催促し、治平の脱いだ衣服を張り番するように、上に蹲まって、時には汗ばんだ所をベロベロ舐めたりしている。
まあ、それは良いとしても、厄介なのは、
（可愛がってほしい）と頭を治平の顎のところへなすりつけることである。初めは手を延して頭を撫ぜてやったり、顎の下を掻いてやっていたが、それで承服しないのである。
（どうして呉れる）というのか判らず、もて余すと虎猫の方が、手本をみせるように噛んだり舐めたり、盛んに催促する。つまり猫仲間の可愛がり方を治平にもさせたいらしい。
（末森どのに男子出生、母子共健全とは、かねて治平も聞いていたが、柴田権六は呼びよせてもくれねば、尾張へ逢いに行かしてもくれない）
だから（児供が、可愛い盛りだろ）と思うと、つい虎猫を、その代りと思って、云いなりに舐めてやる事もあったが、春先からは抜毛が多く、二三度舌で擦ると、綿屑ぐらい歯の隙間に茶色の毛が溜った。
そんな間柄だったから、二月程して毒虫でも誤って食べたのか、虎猫に、ぽっくり死なれると、治平は、歎き悲しむより吻っとし、せいせいした（もう猫は二

度と飼うまい）とさえ想った。

その翌年、長光寺砦を預かった柴田権六は、よせくる六角勢を撃滅させたという大手柄をたて、一足とびに二千貫どりの大身になり、砦を増築し瓶割城と名づけた。そこで、

「柴田修理亮勝家」といかめしい名にかえたものだから、治平にも、自分同様に、

「在所の村の名をとった吉田の名のりは良いが、治平では重みがない、次兵衛にせい」

と、お節介をやいて改名させようとした。

（さては城主になられた事ゆえ、末森どのを此方へ引きとられ、われら親子一つ屋根の下に、住まわせて貰えるか）と当にした。すると思った通り、末森どのが、もう六歳になる伜の伊介を伴って、馬の背に揺られながら近江までやってきた。

「逢えて嬉しいぞ」と治平が出迎えると、伊介も駆けよってきて、両手をのばして襟のところに爪をかけ、だらんとぶら下った。

（こりゃ猫にそっくりじゃ）虎猫のことを想いだし、頭を撫ぜたり顎のところを触ってやると、ゴロゴロとはいわなかったが撲ったそうに、伊介もへらへら嬉しがった。

新築の三部屋ほどもある御長屋を貰ったし、世帯道具も何かと末森どのが揃えてくれたし、これで、どうにか人なみな暮しができると喜んでいたら、それも束の間だった。

「勝家は、あの齢になっても嫁とりをせず、まだ一人ぐらしの朴念仁ゆえ、とんと人の情けの判らぬ男……なんとかして下されや」

と、末森どのが血相をかえ、治平からも掛合いをしてくれと云いつけにきた。

なんでも話によると、勝家が「もう、ぼつぼつおみこしをあげて末森城へ戻って貰わねば、信澄さまが気にかかる」と、せっかく親子三人が、一つになって初めて暮しだしたばかりなのに、生木を裂くような無情なことを、いいだしたというのである。

「勝家さまは、もともと信澄さまの亡父織田武蔵守信行さまのご家来。弘治三年に勝家さまが訴人され信行さま成敗。信澄さまは遺児という因縁もある……吾ら親子の事より、向うの方が気掛りじゃろ、なんせ律義



な人柄でござるからのう」

と治平も内心は肚がたったが、そこは堪えて、そんな口をきいた。

「というて信澄さまは既に十六歳。もはや守りなどせいでも、大丈夫にござりましょう」

「それもそうだろうが、何分とも謀反された弟殿の忘れ形身ゆえ、信長さまも甥とは申せ、内心は危惧して居られようし、よしなき者の讒訴もあろう……いまが肝心な時と、勝家さまは心配していなさるのだ。なにしろ曲った事の嫌いな、忠義一徹のおひとじゃから」

と治平は、末森どのを慰めてみたものの、何やら割りきれぬものが心にわだかまった。

だから三日たって、いよいよ明朝は旅だちという別れの晩、親子三人が川の字になって横になりながら、治平は肚にあることを、

「事によったら勝家さまは、高望みをして居られるかも知れぬな」と思わず洩らした。

「……と云われますと」

末森どのが腹這いになってよってきた。

「うん、今だに吾らの仮祝言さえ許されぬ所をみると、勝家の殿は、この伊介を取りあげ、そなたを何処ぞ、豪い身分の衆の許へ、改めて嫁にやられる肚かも知れんぞよ」……

治平としては心底に思いつめた事柄だが、

「まさか、この姥桜を……」と末森どのは、子供が眼をさます程の高笑いをした。そして泪声までにじませ、笑いこけながら側へ入ってきた。

「女ごは俗に『氏なくしても玉の輿』と云うが、男は、そうはゆかん。戦場でたとえ良き首とったとて、十貫でも上扶持の者がきて、あくまで所望と云われたら、みすみす手柄をくれてやらねばならぬ事もある。だから身分の高い低いは肝心かなめのこと……勝家さまとて一城の主にまで出世されると、ますますもって、己が姉さまを、俺がような草履とり上がりには、惜しくて呉れたくないのじゃろ」と治平が不平を洩らすと、

「それはお前が僻みというもの……勝家が、あの齢をして、まだ独身ゆえ、世間ではきっと御大家の姫御寮でも貰おうと、理想が高すぎるゆえ、ああなったと蔭口叩いているのと、そりゃ同じ口うらよ……又もし、そない法外な話が持ち上がったとしても、そなたや伊

介と離れ、この身が何処へ行きまする」

よりそってきた末森どのは怨ずるように、治平の二の腕に、そっと歯型をつけた。そうされると、つい癖がでて、治平も虎猫を可愛がったように、末森どのの顔に舌をつけ舐め廻したりした。

4

幼ない時より姉の末森どのを附添わせ、なにくれと面倒をみてきた信澄さまが、明智光秀さの姫をめとり、近江大溝城主になった。勝家の殿も、ようやく肩の荷を卸し呟っとされたらしい。

天正二年三月、勝家の殿は、大和の守護代になって、五千の兵をひきいて奈良に入ると、春日神社の鹿から猿沢の池の魚まで、無断で盗みだし食する不逞の者を厳しく取締り、残飯をあつめて多聞城外の竹藪に、野良犬や猫のよせ場まで拵らえ、棄猫や棄犬の面倒をみられた。

やっと末森城の御役がとかれ、自由になって戻ってきた伊介の母は、相い変らず治平から、

「末森どの」と呼ばれながら、

「弟の勝家は、今では信長さまの御信任をうけ、えらい身分になられたのに、相い変らず猫には眼がなく、先日も『いい加減に嫁とりなされ』と申したら『なら猫好きな女ごを探して下され』と憎い云い条。そこで『猫好きの女は、余程の幼女か、さもなくば婆さまばかり……どこに女盛りの娘で猫好きがいまするか』と云ってやったので、ござりますよ」

自分も猫に顔を掻かれてから、虫が好かぬといった貌で、情けなそうに治平に訴えたりした。

「狗は己れに害を加えない人間なら、誰にでも尻っぽをふって甘えもする。だが猫は決った相手一人しか心底うちこまぬ。また、そうなると物凄く、やきもちやいて、その相手を一人じめしようとする。まあ悪女の深情より、言葉が通ぜぬだけに、いじらしくもあり厄介である。だから勝家の殿が、戦陣にも猫を伴れ、人間の女ごをよせつけぬは、まあ業のようなもの」と猫の弁解をした。

だが、事によると勝家の殿は（この姉が猫を目の敵にするのを内心は憎んでいて、その仕返しに冷たくされているのではあるまいか）と考え（あり得ること





だ）とも治平は想った。それだから、

「うちの伊介を養子にくれと、勝家が云うたが、滅相もないと断わっておいたら、佐久間どのの末弟の辰千代を、柴田勝政として、今度の根来出陣には、名代として出されるげな」

と末森どのが半日程して云いにきた時にも、

「そうか、そうか」とは云いはしたものの、

（末森どのの猫嫌いに禍され、伜の伊介までが、勝家の殿から遠ざけられるのか）と心中では情けなくさえ治平は思いつめた。

だから天正三年八月の越前攻めの時には、

「伜めは、まだ十一じゃし、勝家の殿の跡目を断わってしまった今となっては、儂の跡とり……この身代を継がせるのは不憫ゆえ、立身するようひと働き懸命にしてくれるぞ」と治平は出陣した。

美濃で三十貫扶持だった頃の事を思えば、今は五百貫どりの馬のりの身分。草履とりだった頃に比べれば、その草履とりの小者を五名、それに脇かためを護らせる二十貫扶持の端武者も抱えている。まあ出世してる事にはなろう。だが、伜はもっと出世させたかった。

それに、鍾馗様の生れ換わりみたいな柴田勝家の面構えを見ただけで、

「鬼柴田」などと世間では猛将扱いしているから、その蔭にかくれて、治平なんかは霞んでいた。

みな蔭では、

「あの方は、勝家さまの姉さまに児を産ませたによって、出世なされた」と、取り沙汰してるくらいである。勿論、ずっと前から治平も、それは耳にしていた。

（何も、子を産ませようと思って作らせた訳ではない。まだ貧乏ぐらしだった当時の勝家の殿の所には、奉公人は自分しかいなかった。だから末森どのが手近で間に合わせたいと思召されても、片や弟は鬼のような面構え。そこへゆくと自分の方が男前だから、御用を云いつけられたに過ぎぬ。奉公人が主人の云いつけ通りにするのは当り前のことで、何も乳繰り話ではないわい。ありゃ仕事でしたまでよ）

噂を耳にするたび治平は癇癪を起こした。

なにしろ非道な話になると、治平の方が士分に立身したいばかりに、十余歳も年上の末森どのに、付け文をして口説いたという噂まである。

「俺は自慢じゃないが、文字など書けんぞえ」
ひとりで憤っていた矢先なので、越前攻めの相手が、本願寺派の坊主共と聞くと、
（よし、目にものみせてやる）と出かけた。
八月十五日から織田勢に追われた敵は、鳥羽の城へ逃げこみ、そこで最後の一戦を試みかけた。
勝家は近江大溝城主になってからは、織田姓を遠慮され、今や津田七兵衛を名のる信澄さまに花をもたせようと十八日、柴田勢の全力をあげて、信澄を助け鳥羽を攻めたてた。
「武勇の誉れをとって、今までの口さがない噂を封じてのけよう」とばかり治平も、一番手に加わった。勿論、伴のための出世もしたかった。
「それ掛れ」と、ジャン ジャン二つ叩きの早鉦に、「時こそ来けり」と治平は馬を走らせ、とびくる矢玉も物ともせず、
「吉田治平とは、わがことなり」
恐らく敵は知らないだろうから大声をはりあげ、己が名を連呼しながら突入した。
「……仏敵いざ参れ」
平清盛みたいに墨染めの衣の下に大鎧をつけた入道が、太い樫棒をふりかぶって微塵になれとばかり、治平を目がけ打ち掛ってきた。そこで、
「坊主、地獄へゆけ」
と、槍の柄で樫棒を払い、返す槍先で突きこもうとしたら、馬が尻でも撲られたか竿立ちになった。
（しまった）と手綱を、ぐいっとひきしめたら、馬は、ますます愕いて、治平を背にしたまま、ぱいと跳ねとんでしまった。
そのはずみに、馬の前脚が思いきり坊主武者の面体を、バカッ、と蹴りあげひっくり返した。（しめた）と、すかさず脾腹に槍を入れた。
だが突き立てた時に、治平は腰を浮かせ鞍から重心を失っていた。馬も跳ねとんでいる最中である。その儘ドオッと治平は転げ落ち、叢の松葉牡丹の小さな花が、まるで掌くらいな大きさに、くるくる廻って視えたとこ迄しか、覚えがなかった。すうっと気が遠くなった。
落馬したときに打ち所が悪く、その儘、気を失ってしまったのである。運が悪かった。





## 5

「えっ越前丸岡城主にこの儂を……」
思いもかけぬ話に治平は啞然とした。
このたび占領した地域の中から、越前八郡を勝家が信長さまから頂いたのは聞き及んでいたが、その中から丸岡一郡を惜し気もなくくれ、そこの城主に自分が取立てられようとは、治平は、まさか夢にも想っていなかった。
「いや、今度の合戦も良うやられた。大声だして名を呼ばわりつ、まっ先かけて討ちこまれたのを、みな耳にしてござる」
勝家は眼を細めて猫でも労るような、やさしい声音でいってくれた。
（さては落馬した後は、すぐ家来の者が抱えあげて直ぐ連れ戻ってくれ、ぶざまな有様は人目につかず、恰好よい初めの個所だけを、皆に見られていたのか）と治平も安堵した。
そこで、早速、丸岡の城を受とると、せめてもの礼心に、七人の家来の中で小者の五人は武者に取りたて、二十貫の端武者二人には百貫ずつ当てがって喜ばせてやった。
迎えにやった末森どのと伊介は、先に勝家の許へ挨拶してから、丸岡へ廻ってきた。
（望外な出世ゆえ、さぞかし嬉しがって来たであろう）と思っていたが、治平は当がはずれた。
末森どのは眉皺よせ、今にも泣きだしそうな顔で不機嫌そのものだった。
「どうしたか。何か厭やな事でもあったか」
と治平が聴いても硬い表情で、おし黙ったままである。途方にくれて、慰めたり、すかしたりして、ようやく口を割らせると、
「……佐久間から養子に入っている辰千代めが、お跡目づらをして、この伊介に頭を下げさせ、そっくり返って居りまするが無念でなりませぬ」
袖の貝口から襦袢の袖をひきだし、噛み裂きそうに歯ぎしりの音をさせた。
「いいではないか。養子の口を断わったのは此方のしたこと……。伊介にしても行末は、この丸岡の城主になれるのだ。結構ではないか」

治平が取りなし撫めたが、末森どのは、

「向うは七郡のお跡目、此方の伊介は、たった一郡の世つぎ。それでは余り情ないと思いませぬか……もともと向うと違うて、伊介はこの私の産んだ児ゆえ、勝家にしてからが、一番近い血脈なのに、こんな不公平な話はありませぬ」と、よよと泣き崩れてしまった。

むかしは親子三人が、一つの家根の下で暮せる事が夢だった。その次は、倅に継がせてやる身代を、すこしでも良くしてやりたいのが、親の慈愛だった。丸岡一郡を貰って二万石の城主になれ、すべてが順調に、これで巧くいったと喜んでいたら、思いもかけぬ末森どのの心変りである。

「……伊介を養子にとられては、吾ら両人の仲を裂かれるもとになると、此方から断わってしまったものを、今になって、愚痴をいうても始まるまい」

治平はあけくれ諫意するように云いはしたが、一旦こう心を決めると、末森どのは唯無念そうに唇をきっと噛みしめ、ますます頑固になった。

「辰千代づれに遅れをとるでない」と、まだ子供の伊介に、素読や手習、弓矢に抜刀、宝蔵院流の槍稽古まで、休む暇も与えず仕込みつづけた。それでなくとも色白で華奢な倅は、疲れがひどいのか、頬をいつも桜色にしていた。見かねて治平が、

「それ程までに、せいでも」と窘めてみたが、

「この子が成人した暁、柴田勝政を名のる辰千代に劣ってみなされ『やはり素質が悪いゆえ、養子になれなんだ』と莫迦にされまする」

あくまで末森どのは、倅の教育方針をまげようとしなかった。

(そうか。この子が『草履とり上がりの男の種』と指さされるのが厭やで、それで躾けて居るのか)

吾が子の不憫さに治平も内心肚をたて、

(これというのも、勝家の殿が、儂の昔を馬鹿にしくさって、いまだに末森どのと表むき女夫にして下さらぬせいじゃ……まるで儂は、男めかけのような陽かげ者の分際に置かれとる。これでは伊介が憐れでも、末森どのに強くも云えぬ)と北の庄の勝家を怨んだ。

天正十年六月、織田信長さまが京の本能寺で、非業の死を遂げられた。当時、富山の魚津城を攻撃中だった勝家は、すぐさま京へ進軍すべく、前田利家と、その長子の利長の越前衆に先発を云いつけた。ところが何故か愚図ついて進撃せず、六月十三日の山崎円明寺川合戦で、羽柴秀吉に明智をうたれ、勝家は先を越されてしまった。だから丸岡の城で、

「これから、どうなるのじゃろ」と治平は先の事を心配しているのに、末森どのが、ある日

「弟めが、やっと嫁とりをしますぞ」

まるで娘みたいに紅潮させた頬で、わくわくしながら教えにきた。治平も、

「ほう」と面喰らい「して、いずこの女性」ときいたところ、末森どのは得意げに、

「於市御前さま……織田信長さまの妹御よ」

まるで一家の名誉のように云い放った。

「そうか」

うなずきながら治平は、これ迄の事が一切判ってきたような気がした。勝家の殿は、こういう思惑があればこそ、ずうっと独身を通されてきたのだろうし、草履とりの自分を晴れて義兄にしなかったのも頷ける。

と考えた。

(恐らく祝言の席に呼ばれても、どうせ家臣扱いであろう。それでは成人している倅の伊介が肩身の狭い想いをして切なかろう)

ひと晩、眠れぬままに治平は悩んだ。

「……己の頭の蠅は自分で追うしか途はあるまい、末森どのに相談しても詮なかろう」

と、治平は、ひとりで覚悟をつけた。

「前非を悔い末森どのも、伊介を養子に差出したき意向ゆえ、倅めに柴田姓を許されたく。その代り丸岡二万石を返上いたし申し候」

柴田勝家宛の書置きを残し、治平は、次の日、城から一人で姿を消してしまった。

一月程して、伊介は、治平の望み通りに、柴田姓を許され勝豊と改名、勝家の養子となった。

そして清洲会議の信長の遺領割当で、もと秀吉領だった近江長浜六万石が柴田家に割譲されると、勝家は、そこの城主に、治平の倅の勝豊をすえた。

## 6

「よかった。儂が二万石すてたのが、倅めに三倍にな

って戻ってきた。それに事によると、北の庄の八十万石も、伜がお跡目になれたら継げるかも知れんぞ」

（上村六左）と今は名を変えた治平は、伜の噂を耳にするたびに歓んで、また拾ってきた三毛猫に、盛んに話をして聞かせた。

猫にしてみれば、訳も判らぬ話だったろうが、拾われてきた手前、まんざら知らぬ顔もできないから、合槌をうつような恰好で、義理で、

「アゴ、アゴ」それに啼いてみた。

その内に、秀吉と勝家が談合を結ぶ事になって、伜の勝豊が名代役になり、前田利家らを山崎宝寺の秀吉の城へやったところ利家が秀吉から吉光の名刀や莫大な銀を貰ったとか、いろんな噂が、治平にも流れてきた。

すると、その翌日、和議が整っている筈なのに、突如として五万の大軍をもって、秀吉が長浜へ攻めこんできた。

もともと半年前までは秀吉の城で、その家来も長浜の土地者が多いから、越前から移ったばかりの勝豊や、その家臣共では防ぎようもなかった。頼みの綱の柴田勝家は、雪に閉じこめられて北の庄から救援には来られない状態である。万策つきはて勝豊は、秀吉に降伏したと、伝わってきた。

「……冬になったら長浜が孤立するのを、初めから承知の上で、わざと柴田に譲り、撒き餌で秀吉に釣り上げられたが、うちの伜の勝豊なのか」

と治平は、地団駄を踏んで口惜しがったが、身を匿している分際なので、何んとも仕様もなかった。その内に勝豊が病気とかで、秀吉が京から曲直瀬正度という天下一等の名医を、見舞いに往診させてくれたと聴えてきた。

「あの伜は、儂の若い頃に良く似て、ひとさまに好かれる顔かたちをしとるせいもあるが……秀吉も、伜に親切してくれる所をみると、世間でそう云う程は、悪くはないらしい」

安心していると、勝豊が入院加療のため医者に付添われて入洛したとも耳に入った。

「長浜あたりで養生しているよりは良い事だ。早よう本復し元気になって貰いたいものだ」

蔭ながら伜の具合を案じていると、その三日後、三月十二日、柴田勝家が、加賀衆の佐久間盛政を率いて北の庄から近江へ攻めこみ、秀吉側の天神山の砦を取りまいた。

「しまった。伜の勝豊を病気加療と京へ連れて行ったは、何も秀吉の親切心ではなく、あれは人質にさらってゆかれたのよ」

愕然として治平が気づいた時は遅かった。

四月二十日になって、佐久間盛政が大岩山を攻略すると、大垣にいた秀吉が取って返し、翌日これを賤ヶ岳に破った。

柴田勝家は止むなく北国街道を、越前北の庄へ向けて遁れた。

「儂は、勝家さまに、家来が一人しかない時からの御奉公。いっち古い郎党じゃ。御運の強い時には、儂の一人ぐらい身を隠して勝手に振舞うていても差支えないが、事ここに及んでは人手は一人でも必要じゃろ。今から儂も北の庄へ馳けつける……そちは拾ってきたばかりで、また牢人させるは不愍なれど、今度こそ、よき主取りをしてくれ」

かねて買ってあった乾魚（ほしか）の叺をあけ、三毛猫をつれてゆくと、牢浪に馴れている猫は、治平に別れを惜しむより、唸り声を、

「モガ、モガ」あげて、叭に首をさしこんだ。

「これでよい。前の虎猫のように、喰物にはろくに見向きもせんと、側へばかり纏りつかれては、なまじ別れが辛うなる」

黒皮胴の鎧をつけた治平は、自分で馬に鞍おくと、まだ残雪が固ったままの北国街道を、北の庄目がけて、ひた走りに駆けた。

「上村六左、着到」

と大手門で怒鳴ると、番衆に妙な顔をされたが、すぐ顔見知りの者が現れ、

「これは、丸岡の殿では、ござらぬか……」

と喜んで天守の勝家の許へ案内された。

「……長浜を預かりながら、伜めの不首尾、申わけありませぬ」

治平は、髪も髯も、真っ白になっている憔悴した勝家に、両手をついて詫びをいった。

もともと長浜城へ、勝豊につけられて行った武者共

は、治平が丸岡城で養っていた者や、勝家の家来共である。だから勝家の金の御幣の馬印が長浜へ進めば、城をあげて味方すべきなのに、彼らは秀吉側について逆に柴田勢へ攻めこんだ。なにしろ自分らの主人の勝豊が、まんまと人質に連れ去られているので、秀吉の云いなりにされたのである。だからそれを治平は詫びたのである。

「もう過ぎたことじゃ」と勝家は微笑みながら、盃をとると、「兄者」と差しだした。

「えっ」と治平が妙な顔をして受取ると、

「恐らく、われわれと冥途の旅を共にせん覚悟で、ここ迄きて下された……）とは思うが、遅まきながら、こうして兄弟固めの盃をしたからには、弟として、この勝家に無心がござる」

小犬程もある大きな白猫の頭を撫ぜながら、ゆっくり、そんな云い方をされた。

初めて、兄だ、弟だと名のられ、肝をつぶした治平は、盃を押し頂いてほしてから、

「なんなりと仰せられませ」というと、

「総攻めされ落城する前に、ここから落してやりたいものがある　頼まれてくれ……」

と大きな白猫を、両手で抱え上げたから、

「その猫でござるか」と、治平も手を伸すと、

「こやつも、そうさせたいが……儂からは死ぬ迄……とても離れんじゃろ」と寂しげに笑い、

「あれじゃ」と治平の斜め脇を勝家は指さした。

振返った治平の傍に、

「お懐かしや」と末森どのが寄りそってきた。

「もはや吾らは兄弟の盃をしたが、今度は、おぬしらが女夫の盃を交す番じゃ……今までさせなんだを、さぞ不服に想っていたろうが、なんせ戦国の世、いつどうなるか見当もつかなんだ……なまじ表向き縁組すれば、この勝家の兄弟として如何なる憂目にあうやも知れず、それを気遣って、わざと不粋して居ったが……計らずも今回、それが役立ってしもうたぞよ」

と勝家は暗然として声をのみ、

「……そこでな、これ兄者よ、われら二人は世間体では何の縁も、ゆかりも、ない赤の他人の間柄……ひとつだいぶとうのたった女ごじゃが、ここにいる儂の姉を、見知らぬ女として嫁に拾うて貰えんじゃろか……」





頭をたれ治平に頼みこむ横合から、勝家に、

「……知らなんだ。何も気づかんと、むごい弟よと、長年、怨みに恨んでいた……この姉は恥しいわえ。許しておくりょ、なあ、すまなんだんえ」

と末森どのが、その場に泣きになき崩れた。すると背後からも貰い泣きが重なってきた。

はてと治平が振向くと、綾絹を纏った女性だった。

（信長さまの妹姫の、これが於市さま……か）

と、周章てて、治平が両手をつき、ぺこりとお辞儀をしたとき、

「アオ、アオ」と、勝家の膝の上で、白の大猫が、その泣声に合せて悲しげに泣きだした。

すると勝家は大きな掌をのばし、

「そちまで泣かんでよい」

と、あやすように猫の頭を撫ぜつけてやった。

すると、於市さまは顔をあげ、疎ましげに、じっとそれを瞶めて居られた。

北国の雨がしとしとと音もなく降りだしていた。

# さいころ武者

〈三田村市左〉

# 1

「腰兵粮をこさえろといわれても、炊ぐ粟も稗も、なにも、ござりませぬわ」

「だが、夜中の陣立ちゆえ、やはり一食分は、持たずばなるまいが」

「なにを炊ぐのでござります。勝手になされませ」と、かさかさ髪を振って、ぷうっと横をむいて、知らぬ顔をしてみせた。

「まあ、そない憤らずに、機嫌をなおして、なんとかしてくれや」と肩に手をかけてきた。

「よしてくだされ」汚ならしそうに払いのけ、

「お腹が立つのなら、ぶつなり蹴るなり存分になされませ。いっそひと想いに殺して、やりくり上手な新しい嬶どのでも探してきなさるがよい」

「もう、よせ。板仕切りのお長屋じゃ、隣近所に聞えるではないか……そないに声は大きくせぬものぞ」

「生得にござります」憤らば怒れと振返って、

「左様に世間ていを気になさるなら、なぜひとなみに生計を考えなされませぬ」とにらみすえて、言葉をぐっと強めると、

「――もういわ」いつもの伝で、外へ逃げだそうと藁草履に足をのせかける。

「外へ出られるなら、ついでに喰べられるものを、なんぞ何処ぞで勘考してきなされや」

浴びせかけるように怒鳴りつけた。

とんでもない亭主である。いつも明け暮れに、

(なんとかしろや。どうとかしてくれろ)

お嬶がまるで打出の小槌でも持ってるげに、勘違いしておられる。時には粟の一升ぐらいは、自分の才覚で借りさせるが薬よ。といまいましさに土間まで追っていって、べえっと唾をはく。すると湿気が床に白い流紋を浮出し、なめくじが塊って蠢めいていた。

北むきで陽あたりが悪い上に、風がとおらぬ下曲輪は、水はけも悪いから、じめついている。

ご先代の頃に、馬小屋として建てられたが、窪地ゆえ蹄から馬脚がむくむと、かわりに床を張って、下衆のお長屋になったそうな。同じ間取りで十二戸に板仕切られているが、天井の梁も続いているから、二、三軒さきの乾魚を焼く煙まで入ってくる。暮し向きがみまする。おまえさま討死するなら、早ようなされませ。若後家なら、まだ、もらい手もござりましょうほどに」

房江は本気である。やりなおしをするのなら、一日も早うせんと、それだけ再縁が不利になる。

里の兄、太郎三郎は足軽大将で、組子を五十人預っている。独身ものが十人はいるそうな。その連中から次の夫を選んでもらえば、再婚にしろ大切に扱われるだろう。いまは足軽の身分でも、稼ぎさえよくすれば、二十貫や三十貫の身上にはすぐなれる。しっかりそのうえとも奉公してくれたら、南むきのお長屋に住めるくらいの出世もするだろう。

なにしろ、夫は扱い次第。というものの、いまの亭主、三田村市左には歯がたたぬ。いくら房江が口を酸っぱくして、時には甘え、叱りつけ、あの手この手でいさめてみても、とんとその甲斐もない男である。

持って生まれた病いというのか、賽ころいじりに眼がなさすぎる。お扶持の飯米さえ賭けにうばわれて、喰うや喰わずの暮しにも、あっけらかんとしてござる。何んとも手のつけようもない。





一切筒抜けである。

ご城内ではお長屋としては最低ゆえ、住まっているものも、士分になったばかりの者が多い。だから、お取立に与って、ここへ入るような者はすぐ出世して、西長屋か東曲輪へ移っていった。ひと呼んでここは五十貫長屋。又の名を腰掛け長屋と云われるくらいである。

「よい加減になされませ。昨日までは目下だった者が、出世して他所の長屋へかわり、その嬶どのにこっちから会釈せねばならぬはずかしさ。お考え下さったことがござりまするか」と房江が恨み言を口にしても、

「こないところに十年。北むきゆえ洗った布も乾きませぬぞ」とわめけばとて、

「後家小舎よりはましじゃろが……」と、ひとごとみたいにうそぶく亭主だった。

討死した者の後家で、行先のない者は、濠よりの土居下のお小屋へ移って、一人扶持をいただき、城内の雑用を手伝う。其処よりよかろうとは、つまり、

(戦死してやる)という脅しである。だが房江は内心それを待っていた。

「兄の家がありますゆえ、後家小屋へ行かないでもす

あろうことか、このまえの六角攻めの家棟川合戦のときなどは、家重代の黒革威の具足を、博奕でなくして死人の剝げた桶革胴をはずして着てかえった始末。

これでは、いくら我慢強い房江でもあきれはて、泪も湧いてこない。

「――度胸もあるし強力な武辺者。さぞ立身出世するだろうと嫁にやったは親の眼鏡違い。早よとりもどして他へ縁づけねば……娘が不憫」

と、鏡山で討死した里の亡父も、あけくれとても気にやんで愚痴をこぼされていたそうな。

兄の話では、近頃は何処でも賭け流行で、野立の陣場にしろ砦でも、賭博場はおおっぴらに開かれている由。だが集るのは小者や荒し子といった身分の卑しい者で、足軽衆から上つ方は、固く出入りはとめられている。それなのに掟を破って、ひとかどの武者づらした市左が、潜りこんで勝負しているのだから、情けないにも程がある。そのうえ恥をわきまえず、賭博の護符だと、胄の前立に一と六の数をかいた木札までつけている。だから、『一六武者』とか『骰子武者』とまで陰口をきかれて、房江は肩身も狭いおもいだった。

その癖、敵方には、市左は高名だと教えてくれる者もいる。琵琶湖沿岸で一六の胄は、鬼の角のように恐れられ、天晴れな武辺だともいう。噂にしても、それでは出世をしなさすぎる。うだつがてんであがらないのである。

「――戦場でも賽ころばかしと思ったら、敵を倒したこともあるそうな。誠のことかや」

と房江がききただせば、

「おれが槍先にかけた名ある敵侍をかぞえるには……まあ両方の足指まで使わな勘定できん」

問いつめられて、仕方なく市左も房江に白状したことがある。手柄をたてて、それをずっと連れそう嬶に内証にする男があるものかと、房江は肚をたて恥をしのんで、同じ長屋の嬶たちにそっと尋ねてみたら、みな気の毒そうな顔をしながら、そうらしいと頷いてくれた。

先日も、隣近所の長屋の衆に再三の無心も出来かねて、房江が里の嫂に粟五升を頼んだら、

「噂では、市左どのから手柄をもらってみんなが出世しとるげな。なら他人の面倒ばかりみずに、たまにはこっちの兄へも敵武者の首とったらまわすよう、よう頼んでくだされ」

粟袋とひきかえに、きつく念をおされた。

仕方がないから、そのままを夫の市左に話すと、

「そなたの兄の太郎三郎に、賭けの借はないぞえ」

と、にべもなく首をふった。

「ではいままでの数々の手柄を、みんな賭けのかたに取られていなさったか」と房江が愕くと、

「だって、負けこんだ分を、ほかに支払う当はないわな」と、さも当然そうに市左は、うらめしげな嬶の眼をみかえしたものである。

## 2

近江の国は南を観音寺城の六角。北を小谷城の浅井とわかれて、戦のくりかえしだった。

だが浅井家をおこした亮政の次の久政の代になると、年に二度三度におよぶ戦にあきて、越前の守護代朝倉の仲立ちで、その嫡男備前守に六角義賢の名を貰いうけて賢政と名をかえ、和平のとりきめをした。六角方から多恵姫が嫁いりしてきた。義賢の養女の名目だが、実父は六角の家老平井加賀守で、祝言には附きそってきた。そのとき供応の席で、

「――高名な三田村市左に、是非盃をさしたい」

と申しでて、居ならぶ家人どもをずっと見渡した。

「市左とは……」久政も花婿の賢政も互いに顔を見あわせて、当惑してしまった。

なにしろ市左は、敵の六角勢では多年にわたって有名だが、こっちの小谷の城では無名の武者である。だから殿さま父子も突嗟の名指しに面くらって、誰やらわからなかったのである。

「恐れながら」とみかねて、浅井の家老磯野伯耆守が「この大広間におりまするは、百貫取り以上のものにて、三田村ごとき軽輩は遠慮させておりまする」と言上した。

「ほう、あの三田村市左が軽輩でござるか」

六角家の名代は、眼玉がとびださんばかりの愕きようで、啞然としてロをつぐんだ。

まさか、目見得下の軽輩をわざわざ呼びだして、盃など与えては、礼を失すると思ってか、それで沙汰やみですんでしまった。

だが、知らずに恥をかいた久政父子は、旧敵の六角方に有名なのに、当家では聞いたこともないのを不審におもって、その翌日、

「三田村市左とかもうす軽輩ものは、なぜそのように評判なのか」と家老の伯耆守にきいた。

浅井の家でも、城を築いた先代亮政のころなら、家人一人ずつの働きも、主君がよく戦場で見しっていたろうが、二代目、三代目となると、そこまでは眼がゆきとどいていない。

それを好いことにして、伯耆守はこたえた。

「博奕ごのみで高名。知れわたった男にござりまする」

「そうか。骰子武者とかもうす輩か。なら耳にしたこともある。らちもない家の恥ぞ」

久政父子は、いやな顔をして横にむけあった。

本当のことをしゃべって今までの武辺を算えあげたら、市左の獲った首を貰って次々と出世している者が多いから、諸人の迷惑になる。好んで家中に騒ぎを起すことはあるまいと伯耆守は、賭好きのほうだけを報告したのである。ところが、これが飛んでもない方角にとび火をした。

「――三田村市左ごときに眼をかけ、盃までくれようとした平井加賀は、自分も賭ずきの博奕気違いじゃろ。表むきは六角の姫でも、まことは加賀の実の娘。よしなきものの血脈をひく。とんだ娘をば嫁にむかえたものである」

浅井の後嗣に賭博好きの血が入ってはと、永禄六年十二月、管領細川氏綱死去の伝達をもってきた六角の使者に、嫁いできたばかりの多恵姫が、まるで品物のように手軽くそのまま送りかえされる羽目になった。(六角も、多恵姫の実父平井も、黙ってはいまい。激怒して攻めよせてくるだろう)と、久政は、用心して尾張と手をむすんだ。伴の賢政を今度は浅井長政と改名させ、信長の異母妹お市をすぐ次の嫁にと迎えいれた。

そして、こっちから逆に尾張の織田勢と合体して攻めこもうというのが、今度の陣ぶれである。

だから競いたった男どもは、緊張して早々と馬出曲輪へもうつめかけていた。

激戦がまえもって予想されるだけに、長屋の嬶どもも、落着かぬまま露地口に集っていた。

「――おや三田村さまは、これからか……」

訝かしげな女どもの声を背に、もどってきた市左は、叺を肩からおろして房江に突きだすと、

「おう、米を借りてきた。早よう炊げや」

もっさりした口調でいった。粟、稗ならいざ知らず、米とは豪儀なと房江が眼を見張る。

「盗んできたんじゃないわい。一斗ちゃんと借りたが、途中で引かかって一升ずつ四遍とられてしもうたわ……が後はやめ持ち戻ったぞ」

と、市左は大の字に板の間の寝ころがってしまった。出陣間際のあわただしい最中に、借りた米で博奕をうち、半分近くもなくしてくるとは、なんたる性根のくさった男じゃろ。房江は余程、夫の傍へいって蹴飛してやりたかった。

だが露地の嬶どもに気がねして、今日はぐっと耐えた。

「返せる目途もなしにそんなに借りられて、あとはしりませぬぞえ」と房江はにらむだけで我慢した。

「かまわぬ。喜右からだ。もらったもおなじこと。返さえでもええ」うるさそうに夫はこたえた。

「昔は一軒おいての隣同士。この北むき長屋に住んでおられたが、いまは立身出世して五百貫どりのご大身。お槍奉行の遠藤喜右さまはお城の重役さまにわたらせられる。心やすう呼びすてなどして、他人の耳にはいったらなんとなされまする」

夫を責めながら、房江はあかぎれさせた頬に、しゃ熊みたいな赤毛をたらしていた喜右の嬶をおもいだした。

長屋ずまいのころは、海藻みたいなぼろ布子をきて、三人の幼な児をひいひい哭かせていた。それが連れそう亭主喜右の出世につれ、いまは都風に絹の被衣など冠って、婢女の二三人も従えて歩いている。昔は腹をへらして泣きどおしだった児らも、嘘みたいにまるまる肥って色小袖など着ている。

ひとの運はわからぬもの。といっても、わが身にひき比べたら、あまりにも雲泥の差。

「ようまあ恥かしゅうなく、借りにゆかれましたなあ」と皮肉のつもりで房江がいえば、「なあに昔は骰子仲間。いつも俺に勝って随分ともに利得しとるわ」

と市左はてんでこっちの怨みごとに感じていない。

こんな無神経では、さいころを弄んでも、相手にいつも負けとおしは当りまえである。

「まあ何処であれ、借りてこられたは才覚というもの」と房江が面倒くさいから賞めてやると、

「そうそう想いだした。〈敵の大将平井の首を獲ってまわしてくれたら、これまでのほかの借分をみな肩がわりして払ったうえに、別に賭の元手か、暮しのたしに、十貫文はずんでつけよう……〉こないな話を、喜右めがしおったぞ」

珍しく市左が、背をむけたままだが妻に打ちあけ話をした。

そういえば昔、この長屋にいたころの無精ひげだらけの喜右どのは、いつも夫と二人で骰子をもてあそんでいた仲よしである。

〈市左は喜右に、賭でしょっちゅう負けっぱなし。——その借りの穴埋めに、銭のない市左は合戦のたびごとに、必死になって敵を倒してまわり、賭けに勝っている喜右の方は悠々と、その後をついて廻って借銭とりのように、目星い屍からだけ首を叩きおとした……兜首を三つ四つと提げてくる喜右は戦のたびに出世して、お槍奉行にまで昇進。いまでは武辺の名も高い〉

この噂は房江の耳にも入っていたが、まさかと、そんなあざとい話は本気にしてなかった。

だが、こうして返済の見込もたたぬ市左に、米の一斗も持たせ、敵将の首をあげたら廻せというからには、いままでの陰口はどうやら誠らしいと、房江は夫の間抜けさに肚がたった。

「——過ぎたことは致し方もありませぬが、銭十貫の首。それ、よう取りまするか……」

間いただすと、亭主はかすかだが頷く。それならばなんの遠慮もいらぬこと。この際まとまった銭がはいれば暮しが助かる。そうなされませと、房江がせっかくよい話と思うのに、

「いやなことよ。昔と違って賭借りは喜右にはないわ。いま借りてる奴らが獲物ほしさに、金魚の糞みたいにつながってくるのを、お奉行の喜右に頼まれたと、大将首一つだけ追いまわせるかどうか、考えてみろや」と市左は手をふって、相手にもしない。

理窟はどうであれ、借分一切はお槍奉行の喜右どのが立替ばらいといえば、みんなも納得する話だろうに、てんでそれだけの才覚が頭にない市左である。

一つずつ借りの連中に、敵の首をとってわたし、それで帳消しにすまして片づけてゆかねば、市左には勘定ができんらしい。

〈勝手にするがよいわな〉と房江は米叺をかかえあげると、倉方へいって粟に交換してもらってきた。米一升を替えると粟八升になる。

そうでもせねば喰いのばせぬ家計であった。





## 3

露地から長屋の嬶どもの、ひっきりなしのしゃべり声がきこえる。戦は征く者より、残る方が辛いものらしい。どの嬶も亭主に手柄をあげさせ立身出世させたいし、さりとて死なれても困るらしい。後家小舎へ移されて、下働きの婢女みたいに落ちぶれるのは、みな身の毛がよだつくらい嫌がっている。

だから法螺貝ならして軍列が城門からでてしまうと、普段はろくすっぽ信心もしないのが、あわてて家のなかへ駆けこみ灯明皿をともして息災の祈願をする。

だが房江は、あべこべで、ここ七八年というもの、仏壇をおがむようなときには、いつも出陣したっきりで、市左がもどってこないようにとお祈りしていた。

昇進して嬶を果報にできぬ亭主は、生かしておくだけ無駄である。それに見栄も外聞もかまわぬ市左のような男は、早よう死ぬほうが、浅井のお家のお為でもある。

ようやく火力が強まって、粟が蒸しあがった。

荒塩の水になりかけたところを、すくって振りかけ、まるく団子にこねあげた。こしらえながら、

(ああ、いやだ)と、しみじみ房江は想った。

やる瀬なさが、ぐっと胸をかきむしり、溜息が背の骨をとおって、身体じゅうの毛孔から噴きこぼれた。もう二十五歳もあと三カ月。正月がきたら六の声をきいてしまう。今のうちになんとかせねばと想うと、せっかくまるめた団子を、ぐちゃと握りつぶしたくなる。

一日も早よう、市左に死んでもらって、ひとり身に

なって、里へ戻ろうとあせりが、おくびになって出る。

嫁入りのやりなおしを早くやらんと、女盛りがすぎてしまう。そんな心配が、胸のなかで渦をまく。

（――人形さまみたい）といわれた昔もあったのに、ここへ片づいてからは髪も艶を失くし、指先も、がさがさ荒れて、団子をまるめるにさえ引っかかる始末。

「――もう、こうなっては討死などと、敵に夫を殺して貰う、他力本願はやめにして、自分のことは己れでせねば……」

房江の口の中で、声が上顎から滲みでる。毒空木の紅実を、かわかして粉にしてあったのを、棚の奥から取りだした。

鼠とりに使っていたが、隣の赤狗に喰いつかれた仕返えしに、そっと水呑み椀に、ほんの一とつまみ投げこんだら、狗は舌をだしたまま、くんともいわず眼のまえで、四肢を伸してひっくり返った。

南天の実に似ているが毒空木は猛毒である。これを粟団子にまぶして、市左の腰兵粮に持たせてやろうと、房江は混ぜかけた。だが躊躇った。がぶっと一口に夫が頬張って、そのまま嚥みこんでしまってくれたらよいが、もし、すこしだけ噛って、変だと吐きだされたら、もとも子もない。せっかくの心づかいが無駄になる。

これは団子にまぶすより、やはり呑み水がよいと、房江は気づいた。

竹の一節をくりぬいた吸筒一本分を、いつも一と息に呑みほすのが、夫の癖である。房江は掛けてあった竹筒をおろすと、丹念に中をゆすいで、それに毒空木の粉を先にいれ、水をさすと融けこむように、何度も心をこめて揺ぶりつづけた。

井戸端に持ちだした砥石で、大身の槍の穂を、よく砥ぎすました市左は、鞘がわりに荒縄を捲きあげると、用意はおわったと、新しい武者草鞋をはいていた。

「はい」と房江から、腰兵粮と吸筒を渡されると、それを左の腰にゆわえつけた。

そしてのっそり一六の胄を手に提げて、黙々と出かけて行った。





## 4

房江はほっとした。うれしくて寝茣蓙にくるまっても、なかなか寝つかれもしなかった。

ぐてんと肢を突っぱって、舌をだらんとたらした赤狗の死顔が、夫の顔にみえて、躰じゅうがうずうず火照った。

あんなに効き目の早い毒ゆえ、もう今度こそは戻っては、ようこられまいと、浮々と頬がひとりでに綻びてきた。

なにしろ、市左は「杉の梢」と呼ばれてる男である。何処の戦でも杉の木の梢みたいに、まっ先かけて敵陣へ突入してゆく武者である。

だから吸筒から水をぐっと呑んで、ぶっ倒れたら、その途端、すかさず敵兵が雀躍りして、ただちに市左の首を引き抜いてゆく。味方が介抱したり見とる暇はないから、あやしむ者も不審がる者もいまい。合戦中の討死には、浅井の家のしきたりで、命代のご下賜がいただける。

五十貫扶持だから、五貫文も貰えそうだ。

夫が死んでしまえば、博奕の貸借など、知ったことではない。有難いくだされ銭がでたら、まず山崎の髪油の匂入りを購おう。

ここ何年も手入れしてない頭だから、二た瓶も塗りこまねば、烏の濡羽色にもどるまい。

荒れた手足や、ひび割れした踵は湯を湧かして、米糖でこすってみよう。顔の手入れは高値だが、京白粉、京紅で粧ってみたい。

古布屋を探しまわって、地は悪うてもよいから、派手な見ばえのする色小袖を是非手にしよう。身なりさえ揃えば、太郎三郎組下の足軽よりは、ぐっと身分のある者も見染めて、どうかと申込んでくるかも知れぬ。

きっと兄は、市左で懲りているから、安心できるおのれの組下足軽を勧めるだろうが、やはり身上のよいほうがこのもしい。だが申込まれて、「はい」とすぐ受けてしまっては、後で軽く見られて損をするし、はしたなく想われる。

やはり惜しくても、最初はそっと断わろう。

ここは難しい正念場。下手に断わろうものなら、年増のくせにと、かえって反感を買うから、迷って決断がつかないような素振りをみせるが肝要であろう。だが、小娘の時のように、甘えは許されないだろうから、口ではことわっても、眼には、ものをいわせて、後をひかねばならぬ。

だが相手がそれに気づかず、まっ正直にあきらめてしまっては、これはことである。

そのときは、うしろ指さされぬ程度に着飾って、紅白粉もつけ、相手の住居近くへさも用たしのように、行きあうまでは何度もでかけよう。満更こちらとて、気がないことはないと、よくみせておかねば都合が悪い。

ことわられると、余計に未練がでるのが人情ゆえ、きっとむこうはまた声をかけてくる。そしたら、

「兄の太郎三郎さえよろしければ」と慎しやかに返事を嬉しそうにする。

まあ嫁入りも二度目ともなれば、なにかにつけて馴れているから、今度は巧くやれるだろう。

しかしもし、そちらより扶持の多い衆から、またその上に口がかかってきたら、どうしよう。——やはりこれは急いではならない。

まあ落着いて、お扶持の多いのに決めるべきだ。そうせねば損をする。

百貫も頂いてる男なら、白髪の年よりでも構うまい。年齢が違えば、娘のようにいたわってくれるだろう。そしたら、まず絹地の被衣を求めさせ、それを頭に冠って、この五十貫長屋へ、しゃなりしゃなりと挨拶して廻ろう。

塩や菜を借りっ放しの家には、召連れてきた小者や下婢にいいつけて、倍にもしてかえして歩こう。するとみな魂消てしまって、

「あの方は、やはり尊い身分の生れつきよ。まえに市左のところで苦労されておったは、なにかの間違いよ」と口々にきっといいあうだろう。

次の日もまる一日、寝茣蓙の上に横たわったまま、うっとり色んなことを瞼に浮かべて、房江はにやにやひとり笑いをしてた。

暗くなっても灯もつけず、固くなった粟団子をしゃぶりながら、夢うつつに愉しんでいると、夜半すぎて表の板戸ががらりとあいた。びっくりして眼をさまし、起きあがった房江は、戸口のところで、

「ぎえーっ」と声あげてひっくりかえった。

死んだはずの三田村市左が、かえり血を泥ばねみたいに頭からこびりつかせて、それを爪でぼろぼろはがしながら、青い月光に浮かびたっていた。

うなされて夢でも見ているのかと、房江はそっとおのれの尻をつねってみたが、ちゃんと痛かった。

「床板がくさっとるから、暗いと危ないぞ」

市左は妻の房江を抱え起こしてやると、井戸端へ足をそそぎにいった。

這いつくばって灯皿を探すと、房江は震えながら、火打石をこすって家を明るくしたものの、動悸が烈しく、まだ肩ががくがくしていた。市左も家の中へ戻ってくると、

「まずいことをしでかしたわい」と、うめくようにひとり言を洩らした。房江はおろおろしながら夫の腰のあたりをみると、吸筒をつけていなかった。気になったから、思わず、ついロにだいてしまった。

「五文も出して買われたばかりの水呑みの竹筒、いかがなされましたか」

訊かれとる市左は、籠手を外しながら、

「それが、もとで、えらいことになった」

「えっ」房江の震えていた身体が硬直した。

「お味方の衆にでも、吸筒を貸されたのか」

ただごとではない。房江の身体中の血も、みな逆流して頭へのぼってきた。

味方の者があの吸筒から水を呑んで、赤狗みたいに即死したら、その場で市左が調べられたろうが、持たせたこっちにも咎めがくるのは必定である。

巧くいい抜けできねば、大切な味方の武者を失った罪は、この身一人ではすむまい。

兄の太郎三郎も、きっと捕えられて仕置きに逢おう。恨めしげな嫂の貌が眼に浮かぶ。

罪科を自分だけで背負ってしまうためには、お濠へ身投げするか、首でもすぐ吊すほかに手段はあるまい。浅墓なことをしでかした。と、房江は、おろおろした。

眼の前が直っ暗になって、すうっと頭の血の気が逆に汐引くのを房江は感じた。ふらふらと崩れるように倒れかけると、

「吝な女ごよ。高が五文の竹筒ではないか。いくら敵に貸して戻ってこんからと、眼を廻わすほどのこともあるまいに――」と呆れて市左は唸りながら、

「あの吸筒の水に、何が入っとったや」と憶いだしたように、不審そうに尋ねかけた。

どきっとしたが、まさか夫に（毒を入れました）とも打ちあけかねて房江は、

「――水当りするといけませぬゆえ、小さな梅干を一つ、頂き物がありましたので入れましたが」と、素知らぬ顔でとぼけてみせた。

「ほう。そうか。それで読めた」と市左は、膝を叩かんばかりに頷いた。

「――いかがなされました」おずおず怖いもの見たさに、房江はつつくように訊いた。

「加賀守は吸筒を一気にぐっと呑みこんで、その梅干を咽喉につかえさせ死んでしもた」

「えっ……加賀とは、お奉行の喜右さまに頼まれなった敵の大将首。では銭十貫文入りまするな」と、すっかり気を取直して喜ぶ房江に、

「そうはゆかん。まずいことになったと、さっきもいったろうに――」と市左は唇を曲げた。

5

箕作砦の搦手口を蹴破った市左は、槍を背にくくりつけて、板壁をよじ登っていった。

三層の矢狭間に手が届くと、そこから海老のようにもぐりこんだ。出あい頭に、青紺紐の勝色威の武者を、横合いからぐさりと突きたて倒してから、ひと息いれ、

「……三田村市左、見参、見参」と呼ばわると、白髯の武将が、伴もつれずに出てきた。

「此処まで、もう入ってきおったか」と、いまいましげに舌うちしつつ、倒れてる青紺具足の遺骸に気づくと、はっと顔色をくもらせ、

「伜の陸奥守を、一と刺しに仕くさったな。わりゃ名高い市左か」と槍をつけてきた。

陸奥守の親爺どのなら、これぞ目ざす砦の守将平井





加賀と、市左が勢いこんで、えいえいと激しく槍先きを突きたてると、

「待て」悠々せまらぬ態度で、相手は槍をひかせ、ふうっと大きく肩で息をしながら「噂に違わず、なかなかの手練。こりゃ伜の仇討ちどころか、この白髪首もとられるな」と笑いかけながら、掌で顔の汗をおさえた。

（もう良かろう）と間をとって、また無言のまま、市左が槍の柄を構えようとすると、

「どうせ槍錆にされ、わりゃが手柄首になるのなら、その前に末期の水を一杯所望。それくらいの親切は、はなむけにせい」

また笑いかけられ、市左は断わりも出来ず、片手をはずして腰の吸筒をむしって渡った。

「恭じけない」と加賀守は、左手で竹筒からぐっと一と息に水を飲みほしながら、右手で打太刀を抜き放ちざま、さあっと下から、いきなり横殴りに薙いできた。

鋭い一撃だった。

「ぜえっ」と市左も面喰って、眼前の刃をのけぞるように後ろへ飛んだ。ほんの髪毛ひとすじの間で、不覚をとるところだった。

「騙したな」市左がすかさず握り直した手槍ごと突当ると、加賀守は手ごたえもなくそのまま仰向けに倒れた。

面妖なと思いながらも、止め槍を刺し、首をばさりと叩き分けた。そして嬶に持たされてきた（お奉行遠藤喜右）の名札を、その首にくくりつけていると、背後から、

「――こらっ」と大声で、どやしつけられた。

吃驚りして市左が振返ると、浅井の家老磯野伯耆の嫡男、元気盛りの丹波が立っていた。

「槍奉行の名札をつけておるが、その遠藤喜右は何処におる」

嚙みつくようにいうと丹波は狭間まで市左を曳ずっていって、眼下を覗かせ、

「遠藤は、まだ砦へ入れず、外曲輪におろうが」

と散々に叱責された。

加賀守父子の首はその場で没収された。

「いつもは野戦ゆえ、何処で討取った首に、誰の名札をつけても、ばれなんだが、うかつにも、今度は砦という建物があって、へまを仕出かした。まだ入れんと外におる喜右の名札つけ見つかっては返答も出来なんだわ」市左は、すっかり脅えきって愚痴った。

「――戦場で盗み首は仕置されるが、他人に首を呉れてやるのも、騙りゆえ、お咎めかのう」と心配げに呟やき、「吸筒に何かいれたが悪いのじゃ、槍で突くまえに、加賀が死んでおらずば、たとえ二三合も突きあいして、手間ひまが掛った。すりゃ丹波どのが入ってこられても、まんだ名札を付けるところまでは、いってなんだ……」

未練くさく市左が絡んで話しかけてきたが、房江は知らん顔で寝たふりしていた。

戸板の割れ目から、白っぽい朝が覗きだすと、それを待ちかねていたように、一の丸から軍目付の衆が、番卒を伴って呼出しにやってきた。

「――三田村市左。すぐお召しじゃ。来ませえ」

うなずいて立ち上った市左は、桶革胴の具足をしたままのごろ寝ゆえ、むくんだ腫れぼったい寝不足な顔をしていた。

「――これまでひとにやった首のことが、ことごとく露見したら、殿様を騙してた罪で……まあ打首だな」

と諦めたように呟き、房江に、べこりと無言のまま頭をさげると、まだ小豆色の空の下を、とぼとぼ連れてゆかれた。見送った房江は、これで市左は、もう戻るまいと、肩の荷をおろしたようにホッとした。

## 6

「夜明けに呼出して、済まなんだ。実はわれらは、この小谷の城を下って、居城の佐和山へ戻らねばならん。それで帰る前にと思って、其方を呼出したのよ。よいか……今から殿の御前へ召連れてまいるが、賭けごと、博奕の大嫌いなお殿さまじゃ。われらの口から、三田村市左は改心して、近頃は骰子など振りませぬと申しあげて、お旗奉行三百貫にお取りたてを願いあげたところゆえ、心して伺候しろ。なおこれからさき、もう、この磯野丹波守を嘘つきにせぬためにも、骰子はもてあそぶなよ。うぬほどの武辺者は、天下広しといえども、そうざらには他にもおるまい。わが身をいとって





名を惜しめよ」

じっくりした丹波守の言葉に、市左の両眼から、涙がぽたぽたと落ちた。

思いがけぬ喜びに、お礼の言葉を申しあげたいにも、咽喉がつまって声がでなかった。

箕作砦でとんだ現場をみつかって、加賀守父子の首を、二つも召しあげられたとき、(きっと、こりゃ自分の手柄にしくさるんじゃろ)と思っていたのが、情けなくなった。

その首、二つとも市左の手柄にしてくれたばかりでなく、三百貫文のお旗奉行に推挙とは、考えてみたこともない望外の仕合せ。

あまり嬉しさに、市左はもう茫然として、夢をみているような心地だった。

「――さあ参ろう。ついて来るがよい」

丹波守にうながされて、拳固で頬の泪をこすりながら、市左はお供をしていった。

一の丸の大広間には正面に大殿久政さま、すこし脇に三の丸からこられたご当主長政さま。一段下ってご重役衆はじめおもな人々が、昨夜帰陣してから夜通しの後評定をされているところだった。市左を板戸のところへ残し、ずっと御前ていまで進んだ丹波守が、殿様父子に一礼してから向きをかえて坐りなおし、

「昨夜の箕作攻めにて、守将平井加賀、陸奥の親子もろとも、一番乗り、一番槍にて仕止めたる武辺を、おおいに殿は嘉され、ここにお旗奉行に、三田村市左を破格ながらお取りたてあそばされた」

披露された名前が、あまりに意外だったとみえて、腫れぼったい眼をした家人どもが、眼尻をあげて、俄かにざわめきだした。

「――お気づかいはご無用」と丹波は鉄扇をあげて制しながら、

「市左は、もうぴたりと骰子とは縁切りでござる。万一そのような物を持っておった節は、即刻お役ご免。またもとの五十貫の下衆に戻しまする」

はっきりと断言した。

みな納得したとみえて、しーんと静まった。

「さあ御前ていへでませい。お礼言上つかまつれ」

丹波に呼ばれて「はああっ」と、お受けしたものの、市左はあまりの面目におろおろした。

「早よう参れ。うぬがような豪傑でも、おのれが殿さまには、恐れおおて足が萎えたか」

丹波のとりもち言葉で、殿をはじめ一同の硬ばりかけた表情がほぐれかけた。

「――はあ只今」

面はゆさに照れながら、市左はかけこむように御前ていへ小走りに進んだ。

「――其処」と丹波さまが、扇子で指さした。

坐る位置と、突嗟に気づかず、

「えっ……」と市左が向きをかえた途端、脚さきが縺れて、すってんと前のめりに転げた。

(これは粗相)と慌てて起きあがろうとしたとき、

「――なんたる、不埒者ぞ」

雷のように久政の大殿が、きつく叫ばれた。

はっとして、眼の先をみると、ころころと見覚えのある骰子が転がりだして、殿さまのまえでくるくる舞っていた。

## 7

元亀元年六月の姉川合戦は、初めは佐和山の磯野丹波の奮戦で、お味方の大勝利だったが、横山城から敵の後詰に木下藤吉郎勢が駆けつけて情勢一変。朝倉方の敗走にまきこまれて、浅井勢もついに総ぐずれとなった。

三田村市左もしょんぼり槍を杖にして、引揚げの群れにまじっていた。

あの日、具足をとらずにごろ寝して、そのまま、着がえもせずに連れていかれたから、内懐に骰子を蔵い忘れていたのを、市左はとんと失念していた。だが転げた拍子に、殿様のまえに賽の目がならんでは、言いわけのしようもなかった。せっかく丹波さまが計ってくれた、三百貫も、お旗奉行も、ふいになった。

「そのほうほどの武辺者。これからの槍先の手柄を重ねれば、一足とびとはゆかずとも、二三百貫の身上はすぐ稼げるじゃろ」

と丹波さまに慰められ、今日はそのつもりで出陣してきたのだが、戦場へ出てみると、いつもとはてんで勝手が違っていた。

いままでは、槍一筋で賭博の借りをかえそうと、獅





子奮迅に敵中へ躍りこんでいた。

ところが、あの日をかぎりに骰子はぷっつりやめてるし、それに、これまでの借越は、丹波さまの指図で、お城の勘定差配が支払ってくれてる。

だから、いつものごとくに、

「早く首をとらせろや」と背後からせっつく連中も、今日はいなかった。

まるっきり様子が変ってしまって、てんで気乗りしないこと夥しい。

それに、相手の敵もこれまた悪かった。

これまでの敵は六角の軍勢といつも決っていたから、一六の冑を見れば、

(こりゃ高名な市左)と先方が気づいて逃げ腰になった。

それを(待った)と追掛けて、突きたて薙ぎたおして獲物にした。

つまり評判をとっている強味で、殆ど立ち合い勝ちの槍合せをして、武運を守ってきたのに、今日の相手は六角でなく、初めて勝負をする、尾張、美濃の東海衆。

だから、冑の前立をみても、愕く者もいないし、あわてて、

「……やあ、やあ、この三田村市左を知りおらぬか!」と大音声に呼ばわっても、とんと脅しにならなかった。

なにしろ呆れたことには、先方から市左に向って、槍をつけてくる始末である。

こんな無法なことは、長年の六角との対戦では、まったく覚えもない例だった。

相手に怖れられておればこそ、その気臆れに乗じて、ひるむところを串刺しに出来たが、真向から掛ってこられては、こっちは突きたてるより身をかわすが、せい一杯である。

だから首一つ取れなかった市左は、これではなんともならぬと、すっかり塞ぎこんで、しょぼくれて退却していた。すると其処へ人混みを縫って、遠藤喜右が近づいてきた。

「ずっと探し廻った。手をかせ。功名をあげようぞ」

と肩をたたいて囁かれた。

「――よし、やろう」すぐ立ちどまって承知した。

箕作砦で市左が一ま手をやり、名札を取りあげられて

から、喜右もすっかり面目を失い、お槍奉行罷免の噂さえあった。その矢先だから、どえらい手柄をたてんことには、喜右の恰好がつかんのはわかる。市左もやはり大きな功名を此処でせんことには、とても三百貫のお旗奉行の夢などは、たち消えに霞んでしまう。

「――ところで、なにを仕出かす肚じゃ」

「岐阜の上さまの御首頂戴して、この負け戦をどてん返しに、味方の勝ちにするのよ」

（えっ）と市左はいわれて口の中で魂消て叫んだ。

岐阜の上さまと呼び馴れているのは、殿様の室、お市御寮の兄さまの織田信長。今日の相手の総大将である。これは凄いと眼をむきながら、

「今から引返しても、敵の総本陣にどないして近づくかや」と、それを市左は気にした。

「手だてがある。だが命がけぞ。覚悟はできるか」と喜右は凄い眼をした。それに呑まれて、

「――うん」と市左が合点してみせると、

「なら教えよう。二人のどちらかが首だけになって、片方がそれを提げ（何々の首を獲り申した、見参、見参）と駆込めば、おれもそなたも浅井の家では、名の通った武辺。すぐさま、上さまの目通り許されて、首実検。そのときすばやく、すかさず斬りつけて、あべこべに向こうの御首級を頂いてしまうのよ」

「面白い」つられて市左も、にこにこしたが、

「どっちが首になり、誰が提げて行くのかや」気になるところを、聞きかえした。

「そりゃ、これで決めればよい」

喜右は骰子を振る手真似をしてみせた。

「駄目じゃ持っとらん。おれはやめとるで」

と市左が首を振ると、喜右の方が内懐から、骰子をつまみだして掌にのせて見せた。

「三回勝負。丁だ」また喜右が怖い顔をした。

仕方がないから市左は「半」とうけた。

続けざま二回とも偶数で、目は丁だった。

最後の一と振り。市左は逆振りで半をやめ丁に賭けようとした。すると機先を制して、

「次も丁」素早く喜右が叫んでしまった。

また目は丁と出ていた。喜右は昔から丁で、市左にはいつも半目しか振らせない。

それに、この骰子に見覚えがある。これで勝負を争





い、いつも喜右が勝ち通しだった。

（訝しい）と市左は、ふっと気がさした。

「悪いが、約束だ。首を出せ」と喜右が打ち太刀を、さあっと引っこ抜いた。

「まあまて、どうもこの骰子……変だわい」

市左が指を伸ばして骰子を摘みあげ、口へ持っていった瞬間、その延びきった頸へ、

「――やっ」と一声。喜右の打太刀は発止とばかり、拝み打ちに叩きおろされた。

まんまと信長の前まで出たはよいが、

「――慮外な。うぬ、敵の浅井が家来か……」

喜右は脇差を抜きかけた途端、それとなく油断せず見張っていた信長の近習衆に、あっという間もなく、その場にひしと捩じ伏せられた。

「まあ手荒にせず程々にせい。味方の首うってまで、此処へ逆戻りして参った剛の者。敵ながら天晴れな武辺……あとで命は許してとらせえ。奉公する気があるなら、召使ってもよいぞ」

と曳かれゆく遠藤喜右の背後から、たったいま、おのれが命を狙われたばかりの信長が、汗を拭いながら声をかけた。

白湯帷子に黒絽陣羽織をきて、見た目は涼しそうだが、朝からの酷暑に、汗をかきづめの信長は、眼前の生首を下げかける小姓に、

「ちょっと待て」と、睫毛をこすって汗をはらい、おのれが眼を疑うように声をかけた。

「うん。やっぱり、骰子が歯から覗いておるわ。面妖な。はずして調べてみい」

訝かしげに首をひねって云いつけた。

「――恐れながら、中に鉛が入っておりまする」と、口をこじあけ抜きだし二つ割にした骰子を、恭々しく小姓が信長に見せた。

「ほう。仕掛け賽か。すると、この首を提げてきた喜右とかもうす男は、功名したさに明輩と賽の目で命を賭け、まんまと騙して抜け駆けか――それでは許してもやれぬ。先刻の沙汰は取消して、不所存者は手討にせい。そのかわりだな、この賽をくわえた武者の遺族には、あわれじゃ不憫をかけてやれ」

三田村市左の遺族として、妻の房江が探しだされ

# 戦国女武者

〈立花ぎん〉

た。塩漬けの夫の生首を受取って、歎き悲しむかわりに、にこにこと笑顔さえみせた。

「ほう、涙の一雫もみせえでともうすか……そりゃまたまことか」噂にうたれ、

「けなげな女子ではある」と感心され、

「誠に天晴れ。これぞ武士の妻の亀鑑である」と信長が感心した。

だからその賞讃の詞がつたわると、

「是非、そのような殊勝なる妻をめとりたい」

と申しこみが殺到した。房江はそのなかから、二千貫取りの城持ち、中江備前守を選んで、その奥方さまに落着いた。祝儀が信長からもおびただしく贈られた。

## 1

「……夫というものは、持ってみる迄は何かと心が浮浮するものじゃが、さて連れ添うてしまうと、思うようにもならぬ厄介なものよのう……」と、ぎんはしきりに訴えていた。

相手は緋鯉である。立花川の水は蒼く、いつも澄んでいるから、筧でひいている本丸の泉水も清洌である。幼ない稚魚の頃からぎんに飼われている緋鯉たちは、話が判るのか、判らないのか、鰓をはってパクパク水面に顔をだし、合槌をうつように口をあけていた。

それを摑えてぎんは、

「……なんで男というは、夫となると我儘気儘になるもんじゃろのう」とまた続けていた。

雨がきた。泉水に。渦紋が拡がった。それでもぎんは話を止めようとはせず、

「なにも戦など、したくて行ったんでないわえ……」

口惜しさに泪をうかべては続けた。緋鯉たちも同情したのか、小さな稚魚までが、顔を濡らして側へよってきた。

「悪いのは、肥前佐賀の竜造寺隆信じゃ……境目の好吉山へなど新しく砦をつくり、こちらの糟屋へ兵をむけてきたゆえ合戦になったんじゃ……のう、そうであろうがの」と、ぎんは啜りあげて哭いた。

出陣の法螺貝がブオブオと鳴りつづけ、ドオンドンドンと陣太鼓が二挺ばちで乱打されていた。家来どもが武者長屋から槍を担いで集ってきた。まるで葉っぱのない竹藪のようだった。

父の立花道雪は若い頃に落雷にうたれ、脚を両方とも傷つけていた。だから馬には乗れない。いつも白木の御輿に坐りこんで、若者たちにエッサ、エッサと担がせてゆく。

いつものように、ぎんが白木の輿の側まで見送りに行くと、

「……一緒につれて行こうか」といわれた。

輿は畳半枚より広く、道雪が身体をよせると楽に一人分はあいていた。脇をみると、婿の宗茂が、これは馬だったが、鞍の上から、

「きたくば来い」とも眼顔でいっていた。





なにしろ盃事をあげてから、まだ十日あまりしかたっていない時である。もう自分というものが何処かへ消えてしまって、ぴったり婿の身体にくっついてしまっているような、そんな感じしか持てなかった矢先である。だから、ぎんは胸が疼くように、

(婿どのと離れとうはない。何処までなりと一緒に行きたい)

と思いをこめていたから、父の道雪に誘われるまま、

「うん」とそれにコックリ頷いてしまった。

すると、小袖の儘では怪我でもしたらと、小作りの胴鎧を着せられ、顔に傷でも受けてはと、お面のような鉄面頬をかぶせられた。

輿の上から、婿の宗茂の方ばかり眺めながら進んでゆくと、糟屋の原の雑木林で、「ワアッ」と匿れていた竜造寺勢に囲まれた。

味方が不意をうたれてひるみを見せると、

「エイ、エイ、トウ、トウ。この輿を敵中へ担ぎこめ」と縁を叩いて道雪は叱咤した。

そして輿の左右に縛りつけられた種ヶ島銃を、交互に「ドカン」「ドオン」と放った。

ぎんも脇から、鹿角の煙硝や硫黄、木灰を手早く混ぜて装填の手伝いをした。しかし輿の中は狭いから、左右の銃へ手が届かぬ。

そこでぎんも自分の脇の銃を、ひとりで構えだした。見よう見真似ではあるが、竜造寺方の騎馬武者の顎を狙ってズドンと一発。

撃鉄を引いた途端、初めての事なので、反動でぎんはのけぞったが、向うの敵武者は、「アッ」ともんどりうって落馬していた。

「しめた」と、ぎんは手を叩きたくなった。

そして、気になる婿の宗茂は如何かと、玉ごめをしながら振返ると、思わず、

「あッ」

と、びっくりした。太い鉄棒を振りかぶった敵武者が、今にも婿の宗茂の脳天めがけ、力まかせに殴りつけようとしている処。

キエッ。と驚いて、夢中でぎんは射った。

振りかぶっていた鉄棒がドサンと落ちた。

巧く命中したと、ぎんはグッと息をした。

が掠すったぐらいで当らなかったらしい。

いくら待っても馬の背から落ちなかった。
それでも気勢をそがれ敵は退いていった。
良かった。とやれやれ胸をなぜおろした。
その日、ぎんは竜造寺勢が柳川へ敗走するまで、かた時も、婿から目を放さず、近よってくる敵を見つけ次第、当る当らないは別にして、銃身が熱くなるくらい射ちまくった。
だから、「助かった」とはいってくれなくとも、せめて「ようやった」ぐらいは、言葉をかけてくれるものと想った。それなのに、戻ってきてからの婿は厭あな顔をして、それからずうっと碌にものさえいわずだった。

2

「小糠三合あったら、養子には行くな」と宗茂は聞いたことがある。何故なのかと気にしたこともなかったが、糟屋合戦から後は厭になるくらい沁々と身につまされてくる。
そこで実家からついて来ている伝右に、
「おりゃ、高橋の家へ戻りたい」といった。

なにも相談をしたのではない。逃げてゆけるように段取りをせいと命令したのだ。
ところが「ご辛抱を」「ご辛抱を」というだけで、伝右は何の段取りもしてくれない。
「……養子となると、連れてきた家来にまで舐められてしまうものか」と宗茂は情けなくなる。
なにしろ宗茂が此処へ貰われてきたのは、天正九年十月。数え十三歳のときである。
それまで実家の高橋鎮種も、ここの立花道雪も、同じ大友宗麟の家中なので、行きはあった。ここへよばれてくると、甘い乾柿を山もりに出して振舞ってくれた。宗茂は甘い物が大好物である。だから父の鎮種に、
「……立花の家で其方を所望じゃが行くか」
と聞かれたとき、毎日腹一杯に乾柿が喰えると思えばこそ、それに釣られて、
「うん」と承知をしてしまった。ところが、さてお客ではなくなってしまうと、前のように竹串に刺した乾柿などは一つもくれぬ。
それどころか山道を歩いていて、栗の毬を踏んづけ





てしまい「痛い」と叫んだら、
「あいや暫く」とここの家来が側へときた。
毬を抜いてくれるものと、その男の肩に手をかけて足をあげたら、あべこべに力まかせに、ぐいぐいっと押しこまれてしまった。
(無茶しおる)と戻ってきてから哭いたら、
「……道雪さまは、若殿を強い男になさろうため、仕込んでござらっしゃる」と伝右たちは、そんな慰めをいった。そして糟屋合戦のあった半月程前のことだが、
「盃事をなされませ。嫁とりでござる」
といわれた。「何処からか」ときくと、
「立花道雪さま一人娘のぎん姫さま……」
そこで「なんだ。有り合せか」といえば、
「滅相もないこと仰せられまするな」
伝右が尖った鼻先を突きつけるようにいった。
というのは、この春、立花道雪が家督を一切、その一人娘に譲っていたから、ぎんが今では女城主だったのである。
「相手が城主では、嫁にしたところで此方は家臣のようなものではないか」と拒んだが、
「何を仰せられまする。最初から決っていた事ではありませぬか」と実家からついてきた伝右や忠兵衛は諫める。が、そんな事を云われても、乾柿喰いたさに来た覚えはあるが、年上のぎん姫ほしさに、十三のときにくる筈もない。(情けなや)と泣きたくもなった。
なにしろ下々では(嫁に行った晩)とかいう諺もあるそうだが(婿にされる晩)ぐらい辛いものもない。宗茂にすれば、虎穴に入るような想いだったのである。

面白くもない事は数えきれない。だが、なんといっても癪なのは糟屋合戦の時だった。
出しゃばり女とは知っていたが、まさか道雪の木輿へ一緒にのってくるとは、思いもかけなかった。まあ、それも良いとして、伏兵に囲まれると、輿に据付けの銃をドンドン撃ちだした。時と場合、それも仕方がない。
しかし許せぬのは、せっかく此方が討取ってくれようとする獲物を、輿から狙っては先きに仕止めてしまうことだった。

といって何も全部に弾丸を当てるわけでもない。時時外れ玉が、此方へも逸れてくる。すんでのところで、敵の身代りに、此方が撃ち倒されかけたことも、何度もあった。

だから（この女め、敵を狙うと見せかけ、実は、この俺を殺そうとしているのでは、なかろうか）とさえ勘ぐった程である。

そこで危なかしくて、とてもうかつに敵と渡り合えもしなかった。その為、せっかく出陣したが兜首一つあげられずだった。

（妨害をされた）と宗茂がブン、ブンして引揚げてくると、立花道雪は、勝戦の祝宴の席上で、

「……ぎんは、さすがに吾が血をひく跡取り娘。今日の武者働きを見たか。撃ちも撃ったり仕留めたり。儂が算えただけでも、馬のりの武者十騎を倒したぞ」と大満悦。

そして「儂が、ぎんを当城の女城主にすえた時、危ぶむ者もあったが、今日の手並みを見ては、もはや案ずる向きもあるまい」

と、ますます上機嫌になって、その挙句。

「これからは、なんといっても鉄砲がものをいう世になろう。なにしろ、あれなら敵から離れていても操作できるから女ごで勤まる。どうじゃ、ぎんを頭分にして新しく立花の鉄砲隊を拵えよう。家中の女共で、ぎんの許にて鉄砲放ちをする望みのものは届け出い」

といいだした。他所と違って足萎えの道雪は女色を遠ざけていたから、その方で立身する目途のない城奉公の侍女共は、それを耳にするなり、勇ましくなって、われ勝ちに、「てまえを」「わたくしめを」と申しでた。おまけに道雪の機嫌とりか武者共までが、「うちの娘を」「妹を」と名のり出し、中には余程もて余しているのか「わたくしの嬶めを」と女房を差出す者さえ現れてきた。

——つまり、合戦の手柄は、ぎんの一人占めにされ、宗茂には声をかける者とてない。

だから霞んでしまった婿養子の自分に、宗茂は屈辱と劣等感の烈しい交錯を感じた。

## 3

天正十三年五月のことである。





筑後を切り従えるように大友宗麟から命令され、立花道雪は高良山の砦に布陣をした。

が、寄る年波で病になった。放っては置けないから、ぎんは鉄砲衆の女ご共を率いて駆けつけた。しかし「道雪倒れる」の知らせをきいた敵は、今こそ好機とばかり、高良山と立花城の中間の八幡森へ兵を入れてきた。

もちろん、ぎん達の脚が早ければ、先に高良山へつけたのだが、そこは女共の足弱のせいで、森の中で敵に追いつかれた。

それを撃ち払い、撃ちのけ、ようやくの事で、振りきるようにして、羊歯がびっしり生え茂った山の砦へ辿りついた。しかし看病どころではなかった。いきなり四方から敵の総攻めが始まってきた。とても一発ずつ鹿角の煙硝入れから出して、硫黄や木灰と混ぜて玉ごめなどはしていられない。

そこで、ぎんは砦中にある鍋や釜の尻墨を集めさせ、それを反古紙に湿気よけに塗らせ、小さく切り分けると弾薬を一発ずつ包ませた。が、紙包ではなんともならない。

「細竹を切り出してきや」と指図をした。

一発分の長さに竹筒を小さく切らせると、二つ割にして弾薬包みをいれ、いちびの樹皮でくくると、それを紐で繋いで女どもに襷がけにさせた。今でいう弾帯である。

こうなると次々と装填できるから、攻めよせる秋月や竜造寺勢の鉄砲放ちに比べ、三倍から四倍の手早さになった。だから、

「立花の早射ち女ご」と怖れられたが、肝心な道雪の容態は、すこしも快方に向わず、ついに十一日に永眠してしまった。

もう、こうなっては、高良山の砦を守ることもないから、ぎんは女銃隊に父道雪の棺を守らせ、全軍を率いて立花城へ引揚げた。

すると空になった砦を奪取した敵は、それに勢をえて、立花城の北にある宝満城と、南にある岩屋城へと押しよせてきた。そこで、「……頼む。出兵してくれ」と、普段はむっつりとして、ろくに口もきいてくれない婿の宗茂が、真剣な表情で膝詰談判にきた。というのは、岩屋城は婿の親の高橋紹運の城であるし、宝満に

は婿のすぐの弟の十五歳の統増と、婿の母の宗雲がいたからである。

肉親を想う情は誰しも同じである。ぎんは直ぐさま立花城の兵をさいて向けようと軍評定をひらいた。ところが高良山の砦で一年余も立て籠っていて、やっと戻ってきたばかりの家来どもは、滅相もないと渋った。

「……いくら御城主の婿殿とは申せ、宗茂さまは、数えの十七歳ではあるが遅生れゆえ満では十六歳……あない年弱な方を大将に仰いで、島津勢の後押しのある敵軍へ突入仕るのは、俗に申す、飛んで灯にいる夏の虫……」

と、みな首をふって出陣をこばんだ。

「なら頼まぬ……このぎんが、女鉄砲衆だけを率いて出向こう」とまで気色ばむと、

「何を仰せられまする……この立花城へだけ敵が攻め掛ってこんのは、ご城主さまの鉄砲隊を、向うが恐れをなし、そんで近寄らん為でござる……その早射ち女ご衆が、みな出払うてしまえば、それっと此処へも敵の大軍が攻撃してくるは、火をみるより瞭かなこと。ここが落城しましたら、亡き立花道雪さまに何んとお詫びをなされまする」

と父の名まで出され諫められてしまった。

4

「呆れはてたやつ」「云わば親の仇じゃ」

と宗茂は、ぎんの事をそう想うのである。

女城主の身分ゆえ、「出陣せい」とさえ布令を出せば兵を集められるのに、口先だけ、「なんとか致しましょうわい」などと空約束をしたままで、それっきりにされてしまい、とうとう七月二十七日の、岩屋城へ敵の総攻めの始った日も、宗茂としては四里（十六キロ）先の戦を、切歯扼腕して、此方の望楼から、「無念残念」と見ていたきりである。

落ちのびてきた岩屋城の兵の話では、

「まだ、宗茂の加勢はきてくれぬのか」

と父の紹運は、巽の矢倉で割腹する最後まで、口にしていたそうである。

それを聞かされては宗茂も、肉親の情やみがたく、（目と鼻の所に居ながら、実の父親をむざむざと死なせてしまったは、不覚千万。なんとも名状しがたい。これも一重に、ここへ婿にきたせい。あない情なし女の夫にされた為ではある）と、怨み骨髄に徹し呪った。

岩屋城を奪った島津軍は、次に宝満城をかこんだと伝わってきた。宗茂は蒼ざめて、

「……たった一人の弟と、生みの母を、また見殺しにしてしまうのか」と歎き悲しんだ。

また、ぎん姫に相談したところで、どうせ口先ばかりで胡魔化されてしまうと考えた。

そこで高橋家から婿入りの時についてきた、十時伝右と内田忠兵衛の二人をよび、

「これは主命である」と、まず反対されぬように、頭ごなしに怒鳴りつけておいてから、

「亡き父上が、俺を当城へ婿によこされたのは、もしもの時に役立てる為であったろう。それなのに、ここの女城主めは、岩屋城へも一兵も出してくれなんだ。今また宝満城が包囲されたが、加勢は出すまいと想う。よって、婿になっていても、これでは何の意味とてない。俺は、もう婿なぞという割りの合わんことは、止めにするぞ」と云い渡した。

「……して、それから、どうなされまする」

と心配する二人の者に、宗茂は、

「父を見殺しにし、ついで弟や母まで攻め殺されるのを、高見の見物をしていては『命惜しさの卑怯者よ』と、世の笑いものになるのは目にみえている。それでは男がすたる……婿さえやめたら自由の身じゃ。俺は一人で宝満城へかけこみ、生きるも死ぬも家族で命運を一つにしたい」頬を濡らしながら断固としていい放った。きっぱり性根をすえたのである。

「……尤もなる仰せ」と伝右も、貰い泣きをして

「なにしろ向うの城は、すっかり敵に包まれてござる。とても若殿一騎では、城内へ入れますまい。かくなる上は、伝右も男の端くれでござる。当城で家臣の端につらなって居ればこそ、今までは、お城の意向でお止めもしお諫めもしましたなれど、てまえも家来は廃業仕り、自由の身となって、お伴を仕る」

といった。忠兵衛も、

「……男は死に場所こそ肝要でござろう。よろしい。てまえも当城の家臣は止めにし、ご一緒に参ります

る。そして、伝右と二人で邪魔する敵は、突きに突きまくって立派に、われらの男道をたてまする。若殿は、われらの屍をのりこえ、なんとか城中へ入られ、弟君やご母堂と、家族並んで生害をなされますように」

と、やはり泪をこぼしてみせた。

「では、主従三騎揃うて、いざ死出の旅に出ん」

ということに話が決着。翌朝の未明に立花城を脱出。駈け落ちの手筈がきめられた。

が、その日の夕方であった。

慌しく物見の伝騎が、砂塵を輪にまいて戻ってきたと思うと、ぎん姫から呼出しがきた。

「何事か」と宗茂は想った。さては明朝秘かに抜け出すことが露見し、その為に押しこめられるのではあるまいか、と危んだ。

しかし城主に来いと指図されて、行かぬわけには参らなかった。しかしかくなる上は、「邪魔だてするにおいては、ぎん姫なりと容赦はせぬ」と宗茂は、万一の時には、暴れ廻って抵抗してでも、もう、女のいう事などきくまいと肚をすえ、表書院にみちびかれた。

大輪の夕顔の花にも似た白い顔が、上段の間に、じっと坐って待ちうけていた。

(いい女だ)とも想った。が、今日こそは、いくら何んと巧いことをいわれても、もう胡魔化されんぞ。女に嘘をつかれるのは懲りごりしとる。もし宝満城へ行くのを引き止めようとしたら(もう婿は廃業じゃ)とはっきり云ってやろうと覚悟をつけ近よって行った。

だが、宗茂が向きあって下段に坐ると、

「……済みませぬ」

意外や、ぎん姫はしおらしく頭を下げた。

(今度は逆手で、泣き落しか。もう、その手にものらんぞ)と、かたくなに顔を硬ばらせ、

「なんでござろう」と肩を怒らせると、

「……宝満城は今しがた既に落城。婿殿の母堂、弟殿は島津の虜になられ、連れ去られた由にござります」

と云いにくそうに教えられた。

## 5

「……命だにあらば、又いつか　逢えもしまする」とぎんが慰めたが、父を失い続けて母と弟を虜にされた宗茂は、もう口さえきかない。





いつも貝殻のように押し黙った儘である。

だからぎんとしては、何んとかして機嫌を直して貰おうと、自分から厨へたって、甘味を好む宗茂の為に、乾柿など刻みこんだ煮付けを、自分で調理して運ばせもした。

「ご城主さまが、お手づから……」

と宗茂付きの家来は、そういってくれた。

だが当人の宗茂は、箸さえつけてくれぬ。

そこでぎんは、怨めしさのあまり、つい、

「この身が女城主でなく唯の嫁であったら、もそっと痒い所へ手が届くよう面倒もみられるし、そうすりゃ宗茂殿の御心もとけ、すこしは優しゅうして下さるやも知れぬに……」

などと、ついついい愚痴が出てしまう。

そんな矢先、肥後の八代に本陣を設けた島津義久より「もはや周囲の諸城は陥落ゆえ、立花城も開城されよ。すれば筑前早良一郡と、そこの荒平城を代りに進上」と使者がきた。

へたな断わり方もできぬから丁重に、

「亡父道雪の頃より立花城を、一存でも明け渡せず、老職とも評議します間、ご猶予を」

と、ぎんが、その薩摩の使者に応対した。

すると先方は「早射ち女ごとして高名ゆえ、さぞ鬼瓦のような女ごかと思うたら、こりゃ仲々の美形、よろしい。お待ち申そう」

と、ひとまず引揚げてくれた。その後、ぎんがすぐさま評定をひらいたところ、

「この春に、大友宗麟さまが大坂表へ赴き、関白殿下にお願いをしたところ、殿下は承諾されて、近く毛利、吉川、小早川の三軍が島津征伐にくる筈。よって明け渡す事はない」

と重臣一同は開城に反対した。しかし相手の薩摩勢は十万の大軍である。世間から、

「最初は立花の早射ち女ご」からと喧伝されている、得意の戦法を用いたにしても、鉄砲の数は二百挺。とても戦端を開いては、薩摩勢に勝ち抜ける程の自信も持てなかった。

「如何しようぞ」「どうして太閤殿下の軍勢が到着するまで、もち堪えうるか」

という事になった。なんとか回答の引きのばし策を

計らねばならなくなった。

とりあえず、男よりは女がよかろうというので、侍女の中で眉目麗しい者を選びだし、

「……まだ家重代の老臣どもが反対し、開城の用意ができませぬゆえ、暫時お待ちを」

と、ぎん姫の封書をもたせ、密かに連絡する具合に使いにだしてみた。

が、それで、十日も半月も、時が稼げるものではなかった。八月に入ると、薩摩の使者が、また催促にきた。向うも怪しいと勘ぐってきたのか、今度は立花城へは直接にこずに、近くにある島津方の高鳥居城へ入り、そこの城主の星野鎮胤が、名代となって訪れ、

「談合の儀がござれば、当立花城主ぎん姫どのわれらと共に高鳥居城へお越しなされ」

と申しでてきた。迎えにきたのである。

「……女ごの身を、他所と呼びつけるとは、こりゃ、まさしく浅間しき魂胆。ぎんには、宗茂どのと申す夫がおじゃる。いやじゃ」

ぎんは哭いた。わっわと泣き崩れた。

しかし小野和泉を始め老臣どもは必死に、

「もし断られたら、敵は一挙に、この城を踏み潰しに掛りまするぞ……城内五千の命を、おみさまのお情けにて救うて下されませ」

と平身叩頭して頼んだ。だが他の事とは違う。いくら泣きつかれても承知できるわけはなかった。ぎんは半狂乱のように、

「そればっかりは堪忍してたも……婿どのに済まぬわいな」と嗚咽した。慟哭した。

それなのに、

その婿どの宗茂が、老臣共が退去すると、まるで入れ換りみたいに側へ寄ってきて、

「……頼む。行ってくれ」と囁きかけた。

「えッ……」と愕ろいて濡れた顔をあげると、

「ぎんが高鳥居城へ行かねば……虜にされている俺が母や弟は、懲しめのため磔にかけられ、殺されるそうじゃえ」と声を震わせた。

「……と、いわしゃっても」と泪をのめば、

「ぎんは俺が嫁じゃろ……嫁ならば、夫のいうことをきけや。……なあ、俺が母や弟は、ぎんにとっても母にも当たろう、弟にもなろう。なあ俺から頼む。行ってくれろ、なあ」

と肩を背後から、ひしと抱きしめられた。

「……おまえさまが云いつけなら、嫁じゃもの。妻じゃもの……たとえ血の池、針の山とて、行かざあ、なるまい、この身じゃわ」

とは答えた。返事はした。滅多にかけてくれたこともない夫の優しい言葉に酔いしれ、肩から胸と伸びてくる夫の手の甲に、自分も掌を重ね（嬉しや）とは思いながらも、泣けて、哭けて、なんともならなかった。

## 6

八月二十四日。

太閤殿下の先発隊として、小早川、吉川の軍勢が、赤間ヶ関から門司へあがってくると噂が伝わって、包囲していた島津方は動揺。

まず秋月種貞の軍勢が引揚げを開始した。

次に竜造寺の鍋島勢が消えるようにいなくなった。

次々と十万の寄手は、まるで朝陽に照りつけられた霜柱のようにいなくなった。

「今である。ぎん姫さまをお救い参らせよ」

と、ぎんに仕込まれていた城内の女ごの鉄砲隊共は、誰が音頭をとるともなく勢揃いをして、篠竹の弾帯を襷十字にかけ出陣をした。

そして山向うの高鳥居城へ肉薄すると、得意の早射ちで乱射乱撃。雨あられと弾丸をふりそそぎ、城門をうちやぶると、

「ワアッ」と黄色い喊声をはりあげて突入。

「姫さま」「おやかたさま」と口々に喚いて、本丸の二層に閉じこめ同然になっていたぎん姫を救いだし

「これが姫さまのお鉄砲と弾襷にござりまする」

と携えてきたのを差出すと、ぎん姫は、すぐさま銃をぐっと小脇にかかえ、

「城の四方をとり固め、一人も逃がすでない」

と下知した。まだ、まごまごしていた薩摩の使者を初め、城主星野鎮種、その弟の鎮元以下、男という男はみな弾丸の餌食にし、その数六百。つみあげた屍体の山に火を放ち、そこで打揃って引揚げた。

——この知らせは、先手の毛利軍にだけでなく、大

坂表の太閤殿下へも、大友家から早速、「緒戦の勝利」「先陣の血祭り」
として報告を出された。だから翌年三月、太閤殿下が九州へ渡ってくると四月四日に、
「……立花城主に拝謁を許す。すぐさま出頭するように」と通達されてきた。

「……若殿に、身代りになって参上するよう、そない申しきおりますが、如何なされまする」と伝右が心配そうに顔をみせた。
「赤ん坊でも、三年たてば三歳になる。この宗茂とて、満なら十八じゃが、もう算えでゆけば十九歳。案ずるでない。高鳥居城をぎん姫が仕返しに屠った手柄の褒美でも、代りに貰いに行くだけじゃろ。大事あるまい」
と胸をはって昂然と云い放ったところ、
「滅相もない」と忠兵衛に窘められた。
「何故なのか」怪訝な顔をして宗茂が聞き返すと、
「……太閤殿下というのは、四国征伐の時でも土地の大名を伺候させ、これを、ていのよい人質になさり、結局は土佐一国を長曽我部に残されたきりで、後は、仙石権兵衛とか黒田長政といった譜代衆に分ち与えられなすった前歴がござる。じゃによって、さも恩賞でも下さるように見せかけ、誘きだして取り籠めになさる気遣いでござる。じゃによって、女城主のぎん姫さまは己が身可愛さに、むごい話でおじゃりまするが、お年下の若殿を巧く身代りに立てよう所存」と教えられた。
「そうであったか。知らなんだ」
愕然として宗茂も唇をかみしめ、
「思い当る節もある」と口の中で低くうなずいた。
——高鳥居城から戻ってきてから、女夫のことゆえ、ぎん姫と床を並べてはいるが、宗茂はふれていなかった！　啜りなくような、もの悲しい咽び声も聴いた！　悶えるような息苦しい喘ぎも伝わってきた！　のたうち廻るせつなそうな呻きも耳にはした！　堪えがたいように這い寄る気配さえも感じた！　狂ったかと思う程の吼え喚きに目もさました！　それでも宗茂はいつも知らぬ振りをしていた！　背中を向けた儘、耳に蓋をしたままで過した！　暗闇の中で宗茂は唇を





かみしめ歯軋りをした！　堪えがたい時でも、汚らわしやと我慢をした！　他所で男に抱かれてきた女など触れて堪るか！
……すっかり宗茂は意地をはっていた。なにしろ戻ってきた時から、ぎんが、
「済みませぬ」とでも詫びたら、許すこともできたろうが、てんで何事もなかったよう、けろりとしているのが癪だったのである。
「よし、人質にされたとて、あない不潔な女ごと暮すより増しだ」と宗茂は四月五日、ぎん姫の身代りとなって柳川へ向った。
だが、さて、お目見得という事になると、
「ありゃ、わりゃ男か……九州立花城主は、若い良い女ごと訊いとったで、愉しみにしてまっ先によんだに、なんじゃい」と、秀吉は露骨に詰まらなそうな顔をみせ、せっかく敷かせてあった夜具を
「不用になったぞ」と、不機嫌そうにさっさと片づけさせてしまった。
だが暫く考えこんでから
「男じゃとて、せっかく来たんじゃ。他に使い道もあらず。まあ、こっちゃへ来う」と、大名たちの居並ぶ大広敷へ宗茂を伴ってゆき言葉を改め、
「見てみい。この十八九の少年を……余の為に立花の孤城を身一つで守り通し、十万の島津勢に屈することなく頑張り通した。あまつさえ毛利三軍が上陸して敵が動揺するや、戦機を逸せず、か弱き女共のみを率いて島津方の高鳥居城をせめ、城兵をみな殺しにして占領。これぞ（忠義、鎮西一）（剛勇は、これ日本一）じゃわえ」と口をきわめて賞めそやし、
「とりあえず、この少年に、立花城主として旧領安堵の墨付を渡してやる外、当座の引出物に、柳川一郡を城ともくれてやろうわい。汝らも、このたびの九州征伐は、この者に劣らぬよう励んでみい。恩賞は思いの儘ぞ」
諸国大名をけしかけるように煽動をした。

## 7

浮名というか、虚名というか。太閤殿下が、
「剛勇日本一」と、何を思い違いされたか太鼓判を諸国大名衆の前で押されたから、まだ肩あげのとれたば

かりの婿どのが、一躍、
「立花宗茂」という評判な豪傑にされた。
それに噂や評判は恐ろしいものである。
婿どのが太閤さまの手先として、その儘で出陣してゆくと、島津勢は戦うことをさけ、ついに薩摩の川内で降参をしてしまい、さきに虜にされていた弟御と母堂を救いだし、無事につれ戻って意気揚々と凱旋をしてきた。
（まだ世間知らずで、戦にも馴れとりんさらん夫のことゆえ、もし途中で、ひと戦でもあったら、どうであろうか）と、そればかりを案じていた。ぎんは、一戦も交えることなく無傷のまま戻ってきた夫を迎え、泪をうかべて嬉しがった。しかし表広敷へ通るなり、
「……場所が違う。そこのけ」
と頭ごなしに夫に怒鳴られた。そして、
「ぎんを始め城にて留守居の者に見せて遣わす……これなるは、太閤さま御墨付きぞ」
と宗茂は鎧の内懐から出した料紙をひろげ、
「よいか。もう城主は女ごのぎんではなく、この宗茂と変ったのだぞ……うぬらは、みな余が家来じゃ。不服を申す奴は太閤さまの思召にそむく謀叛人とし処断をするぞ」
丁度、声変り中のキンキン声で喚き散らし、これまではぎん姫の座所だった上段の間の円座に、どっかり胡坐をかき呟払いした。
そこで面喰った城の老臣どもは、後刻、
「えらい事にと、なり申した」と血相をかえぎん姫の居間へ伺候してきた。しかし姫は、
「良いではないか」と相手にせず、
「なにも他人が取って代ったわけではない。宗茂どのは、年若でも夫なるぞ」と微笑んでみせた。
太閤殿下から呼び出された時、ぎんは女癖の悪い秀吉の噂を心配した。なにしろ、自分の口から、母や弟を助けるために行ってくれと頼んでおきながら、さて高鳥居城から引揚げてくれば、口さえきかぬ夫の宗茂である。
また太閤殿下に呼ばれてゆけば、きっと烈しく悋気をやかれると思い二の足をふんだ。
――なにしろ高鳥居城のときは、夫に不快な想いを





残させまいと、迎えにきた鉄砲隊の女ごしゅを指揮して、男という男はみな口ふさぎに始末をつけてきた。だが今度は、まさか太閤殿下に何かされたとしても、その殿下や諸国大名衆を一人残らず、撃ち殺してくるわけにもゆくまい。ぎんは悩んでしまった。
そこで思いきって「……女ごというものは相手が好きでもない男なら、たとえ何度も身体を入れさせたとて、なんとも心に残りはせぬものぞ」と自分の体験を、よく話して安心しようとも想った。だが、その反面、
（こんなにまで、ひたむきに拗ねて嫉妬なさるというのは、よくせき自分を愛しての事であろう）とも考えると、
（太閤殿下に誘われたとて、ずうっと側室になる筈のものでもない。すぐ戻ります程に、安堵して待ちなされ）とも、ちょっと口にはしかねた。だから、（もう、あのひとを悲しませるような真似なぞ、繰返しとうはない）と秋月城へ出むくのを拒み通したのである。
――だから、夫が城主に代って戻ってきた時、初めはびっくり驚きもしたが、
（これで良いのじゃ……これからは政務などみんと、台所方へ入り浸って、夫の好物の乾柿の羹や甘味噌の和物など、毎日作って喰べさせられる）と、すっかり嬉しくなった。
なにしろ今迄はこちらは城主。夫は入り婿という立場なので劣等感を抱かれ、心では愛していなさる癖して、うわべは、さも無情にお振舞いをなされていたが、これからは天下晴れて世間なみの夫婦のように睦じゅうなれるじゃろと、浮きたつよう心は躍った。
そして、
「女ごの仕合せが、やっと自分にも恵まれてきた」と嬉し泣きにむせびもした。

## 8

前後七年にわたる長い戦だった。
太閤殿下の死によって、ようやく朝鮮征伐が終わり、慶長三年十二月四日に日本へ戻ってきた時は、立花宗茂も三十になっていた。
今では十三万二千石の柳川城主である宗茂は、帰る

なり、長年の懸案であった別居を、妻のぎんに直ぐさまいい渡した。

名目だけの夫婦で、体の交わりの絶えた男女が、同じ所に起居を共にするのは、苦痛だけしか、なかったからである。

「……好きな所を選べ。館はこさえてやる」

と宗茂はいったが、ぎん姫は城から四キロ程の宮永村の池の畔の古家へ引越した。

移る時に故立花道雪がのり廻していた古い木輿を、女どもに担がせて行った。宗茂は、面当てをされているのかと不快な顔をして、

「何をのせている」と天守閣から指さした。

「……立花城で飼われていなされた緋鯉を、この柳川のお城へ移されていましたが、また今度は、宮永の池へ担がせて行きなされます」

「あの昔からの鯉か……相変らず執念深い女ごじゃ」

宗茂は、ますます厭やな顔をし、

「……もう城へ出入りするなと云うてやれ」

と使いの者を、行列の後から追わせた。

やがて、一年おいて、慶長五年になった。

西軍に加担した宗茂は大津城を攻略した。

だが関ヶ原合戦で西軍が敗れたから、九州の柳川へ引きあげてきた。すると家康の命令をうけた鍋島勢が討伐におしよせてきた。

加藤清正の肥後勢も瀬高から攻めこんだ。

「……なに宮永村の堀割に伏兵があるのか」

長い顎鬚の先をつまみ上げた加藤清正は、

「あの辺りに砦などない筈じゃが」と不審そうに左右の武者共を振返った。すると、

「……恐れながら、あすこには立花道雪の忘れ形見のぎん姫の住いがござりまする。目下、八院の原にて鍋島勢と苦戦中の宗茂の許へこの肥後勢が押しよせ、挟み討ちにされては大変と、必死に喰い止めるものと想われまするが……」と一人が素早く、それに答えた。

「ほう……城から追い出された女房どのか。えてして世の女ごというは、別れた男など見向きもせんのが多いのに、命がけで、この清正を防ごうとは感心というか笑止千万。構わぬ。踏みつぶし八院へ進め」と下知した。

命令一下。宮永へ目がけ加藤清正の三千の兵が進発





しようとした時である。前方から、

「……あいや暫く」と大声をあげ、手を振りながら物見頭が駈け戻ってきた。

長い尾を曳いて砂塵が、まだ渦をまく背後を指さし

「お止り下され」と絶叫をあげた。

そして馬の鞍から飛びおりるなり清正に、

「はなは立花、早射ち女ご二百を一列に散開させ、紫紺おどしの大鎧をつけたぎん姫が、床几に腰かけ、朱房の采配を振うて居りまする」と早口に報告した。だが清正は苦笑し、

「もう存じ居る。たかが女どもじゃ。一息に駒をつきこみ、馬蹄に踏みにじってくれる」

と、鞭を馬の尻にピシリと当てかけた。

そこで物見頭は狼狽し、

「……てまえは筑前生れでよう存じて居りまするが、立花勢の音に聴えた早射ちの元祖は、男ではのうて、あのぎん姫さまの女ごしゅ。その千軍万馬の精鋭が、みな一同討死の覚悟にて、弾襷を三重にかけて、堀割や丘の窪みで狙い撃とうと構えて居りまする……一発必中の玉を続けて早射ちに五連射しますゆえ、千人は瞬く間に仕止められまする」と詳しく説明をした。

それをきいて「……早射ち女ご。とは耳にした事もある……」と清正が顔色を変えた時、

「……ご注進」と次の物見が戻ってきた。

「直答を許す。早くいえ」と、物見頭に耳打ちしかけるのを止めさせ、清正はせかした。

「――八院ヶ原にて合戦中の立花宗茂の軍勢より、家老小野和泉以下旧道雪子飼いの者共およそ千五百ほど『姫さまを、お守り申せ』と、これまた敢死の勢いで宮永へ駈けつけ、陣張りし居ります」と物見は一息にいった。

「うん。そうか……滅多に敵に背を見せぬこの加藤清正、じゃが、相手が悪い。女ごとやりあっては、ろくな事にならんじゃろ」

――這々のていで旗をまき白鳥へ退却した清正は、そこから隈本へ戻ったと『柳川史料』にある。

十一月九日。力つきて降参した立花宗茂は肥後に送られてきた。加藤清正は玉名郡高瀬の大きな邸へ迎え入れ、そこで宗茂に、

「……生命をすてて迄、夫に尽してくれるような女ごは滅多に居らぬもの……まあ仲違いは水に流され、新規まき直しに、ここで、ぎん殿と一緒に住まわれたら如何でござる」

敵ながら天晴れとぎんの戦さ度胸にほれこんだ加藤清正が、取りもち役をかってでた。

しかし宗茂は無言のままで答えなかった。

（いつかは縒りも戻ろう）と清正は、高瀬に近い赤腹村に、ぎん姫の仮寓をもうけ、

「……男とて、鬼でもなければ蛇でもない」

やがては宗茂が戻るであろうと慰めた。

しかし、

二年たった慶長七年四月十七日のこと。

宗茂は高瀬から姿を暗ました。といって、ぎんの居る赤腹村へきたのでもなかった。

「どこへ行かれたのやら」

ぎん姫は狼狽したが、沓として行方は判らなかった。げっそりやつれ憔悴しきった。

「……互いに離れていても、愛さえあれば、いつかは結ばれよう。夫婦とは、そない目にみえぬ心の糸で繋っているもの」

と伴ってきた侍女にもいってきかせ、

「夫立花宗茂の身が、無事息災でありますよう」と願をかけ、まず茶をたち、二カ月目には魚貝類をたって祈願した。四カ月目には「菜だち」といって、大根や人参の葉のつくものは一切たってしまった。もそもそと塩だけ掛けて粥を啜るぎん姫に、見かねて侍女が、

「……お身体にさわりまする」と諫めたら、

「この身など、よし、どないなったにしろ、心と心さえ、いつか確かと連なり合えば、それで夫婦の道は立つもの」とも返事をした。

そして六カ月目になった。

「今度は何をお断ちなさるのやら」と侍女が心配していたところ……

十月十七日の朝。冷たい骸に変っていた。

「ぎん姫さまは、夫宗茂さまの御無事に願をかけられ、今度は何に断ちをなされたか」

と居間をくまなく調べると、隅の床板がとれていた。覗くと、粥がみなこぼしてあった。

「いじらしや姫さまは断たれる物がなくなって、とう





とう食断ちされ餓死なされてか」

——あまりの事に侍女も気を喪い失神した。

それから二十年。無事息災に長生きをしたおかげで立花宗茂は、また筑後柳川十一万石の城主に返り咲くことができた。

すでに鬢髪に霜をおいた宗茂は、柳川へ戻った日から、きまって、

「懐しの山河よ」と、いつも供もつれずに野駈けに出かけた。日課になった。

ある日、沛然と俄か雨がふり出してきた。

「殿は、雨具など、ご持参なされてはおらぬ」

と近習の侍どもが、手に手に宗茂の蓑と笠をもって、土砂ぶりの中を探し廻った。

城から北へ四キロ程、離れた所まで見つけに行った者が、ずぶ濡れの乗馬を発見した。

「……はて、殿さまは」

と雨に煙る周囲を透かし見るように探し求めると、池のところに蹲っている影をみた。

そっと近よってゆくと、雨の中で蒸し粟をつかんで宗茂は水面に撒いた。

「ぎん」「ぎん」と殿さまが呼んでいなさるから、何か水中に居るのかと、侍が覗きこむと、雨の渦紋が幾重にも円をかき、その水の輪が繋がった蒼白い水面には、ぽっかり頭をだした鯉が、パクパクロをあけていた。

見れば、どれも真紅の緋鯉なのに、宗茂の殿は、お年をとられて、お目が不自由か。

銀鯉と見間違えていられるらしく、赤い鯉どもに、さも懐しげに、

「ぎん」「ぎん」と呼びかけて居られた。

——すこしおさまっていた雨が、また、ひとしきり強く降りだしてきた。

# 流れ流れて女武者

〈小野お通〉

# 1　はじめ……美女ありき

「小野お通」は、空前絶後の美女とされている。

「あまりにも美しすぎ、この世の者とも想えなかった」

そうで、

〈柳田国男・小野於通〉によると、「三勝半七の浄瑠璃に、その娘の幼女に、お通の名が出てくるのが唯一の例外で、尋常の親は、この名を憚って、明治期までは付けなかった」

と云われる。それなのに故吉川英治は、その宮本武蔵を慕う女性の名に「お通」を用いてしまった。

そこで、この名は一般化したが、それ迄は神秘に包まれ、

〈山州名跡志〉によれば「小野小町が艶書を集めて作った京の洛東の玉章地蔵堂の本尊を、手ずから修理彩色したのが北政所（ねね）の女祐筆のいま小野小町と宣伝されている於通にして、彼女も小野小町と同様にあな……なしという説あり」とあり、

〈望海毎談〉や〈尾州武論志〉になると、愕いたことに、

「小野於通は絶妙の美女にして、打ち太刀の技に冴え、その剣を伝えし者に小野姓を授く、これ、小野次郎右衛門といい、三百石を賜り、柳生但馬守と共に大公儀指南役」となる。

（……伊藤一刀斎が、その弟子の神子上典膳と小野善鬼を闘わせ、勝った典膳が、殺した善鬼の霊を慰めるため、その姓を継いだのが、小野次郎右衛門である）

というのが、今日伝わる通説である。しかしこれは〈武術流祖録〉という稗史から出たもので、小野の門人で梶流を創始した梶新左衛門正直の直話を伝えたという〈武叢閑談〉によれば、

「わが師小野二郎左衛門忠常は、武芸の人、父忠明に学ぶ。鐘巻自斎の門下伊藤一刀斎景久に学びたるという、上田七本槍の一人の神子上典膳なる者は、知らざる人なり」

と明言されている。つまり小野は当初から、小野姓だという。そして、これまでは「武芸の人」を「武芸の優れた人」と解明しているが、武芸は岐阜県下の地名でこの点は明らかに相違している。

そして、NHKの「歴史よもやま話」の最終回で池





島信平、海音寺潮五郎両人が「室町期の和寇から朝鮮征伐まで二刀をふるって力戦していた」という話を交されていたが、マカオ政庁図書館にも、元和時代に渡ってきた日本の武者が、楯の代りに左右の刀剣をふりまわしたという見聞録が残っている。つまり当時は二刀ふるうのが普通で、これで矢玉を防いでいたようである。つまりそれが一刀に変ったのは左右では重たいから、非力の女人がこれを始めたものかも知れない。

さて、これゆえ隠れた剣豪かと想うと、

〈八十翁寿物語〉になると、

「浄瑠璃の始めは、これ、小野のつうとよぶ遊女なり」

と、その名が出てくる。もちろん遊女といっても〈御伽草子〉に出てくる「和泉式部という遊女」と同じ用語法で、今でいうなら余裕をもち遊べる女、プレイ・ガールにもあたる。

この「浄瑠璃」が、薩摩三味線とよばれた蛇皮線を伴奏楽器として弘まったのは、秀吉の晩年の慶長期であるが、〈宗長日記〉〈種彦〉〈守武千句〉によれば、天正初期から四つ竹や、鉦叩きを伴奏に流行していたらしい。

そして浄瑠璃の最初の型である十二段ものというのは、これは、

「薬師如来の十二因縁」が起りとされている。

……この薬師とは、西方極楽浄土思想をもちこんできた仏教の宣撫班が、あく迄も排仏反攻にでる原住民族に手をやきその懐柔策にと、東方でも光明はあるという「東方瑠璃光如来仏」を「お薬師さま」として輸入し、国ごとに国分寺をたてて祀らせ、

「これならば仏教に転向しても良かろう、おおいに改宗しろ」と宣伝したものである。勿論、神信心の多い土地では気兼ねして神社として「国府宮」とも呼ばせていた。

……そして、この大祭が例年五月五日。従来は「端午の節句」とか「尚武の祝い」というのは中国から伝承のものとされているが、中国から伝わってきたのは、「五月五日を曲水の宴」といって、宮中で、庭の泉水に飾物を流して、それを眺めて五言絶句をする唐の行事の真似であって、いわゆる「勝負の節句」とは前述した五月五日の石合戦の原住系と外来との戦いであって、まだ転向しないで頑張っている

さて「小野姓」が神官に多い事は〈柳田国男著〉にも詳細に出ているが、「こけし」や「白神さま」を作る木地師たちさえも、「小野宮惟喬」を祖師と仰いで「小野姓」が多い。そして伝承説話の主人公は「おのが姿を影とみて」と氾濫している。

「小野の小町」だけでなく名文家の「小野の篁」遣唐使の「小野の妹子」蛙のジャンプ説で努力哲学をうんだ「小野の道風」と実際にいたかどうかは別として小野が多い。いまの「忠臣蔵」では悪役だから「斧」と変えられているが、初演の頃は勘平の友人としての「小野の定九郎」という儲け役の善人も最初の内は作られている。

何故「小野」というのは、こんなに普及されていたかというと、これはマスコミならぬ往年のクチコミの宣伝のせいらしい。

これの立証として〈類聚三代格〉の〈延暦四年太政官符〉に、こういう挿話がある。

「小野族の族長小野野主が奏上していうには、最近わが一族の男性共が、女尊族系（原住日本系）の猿女族の女性にハズ・ハントで引掛けられ、次々とみ





原住民の捕虜収容所へ、大陸渡来系が石を投げこみにゆき、濠ごえに届くように笹の葉や菖蒲をまきつけて擲弾にしたのが「ちまき石」であり、また、「鍾馗さま」というのは、中国の厄病神を追払う神で、八世紀に国連軍司令官として、そのまま住みついた百済王俊哲の画像という。

さて、原住民系も守勢では負けるからと、石や礫の転がっている川原までくりだしてきて、血塗れになって争ったから、これが世に伝わる「川原の石合戦」。つまりスポーツ的民族抗争である。

なにしろ昔は砂利トラのダンプカーなどなかったから、五月五日の一日きりの石合戦とはいえ、純日本民族勝利の為、投石する砂利を確保するべく、ずうっと派遣されていた連中がここに簡易住宅を作って住みついたのが、のちの「河原者」

しかし、石ころの番人で他に用事がないから、ここで踊ったり歌ったり、はねたり芝居などしてみせ資金のカンパしていたのが、そのうちにプロ化してしまって今日の芸能タレントの草分けとなったのである。

んな彼女らと縁組みをなし、連れて行かれて今や小野一族は絶滅し、猿女族が取って換ろうとしている。もともと彼女らの部族は吾らとは民族が違う。故に古来、異姓（この時代から苗字によって民族の区別がされていた……〈**八切姓の方則**〉）部族の貢進は厳禁の筈である。よって、すぐさま猿女族の女共を追放するなり厳罰にしてわが同族の男性をば救って頂きたいと、乞い願い奉る」という項目が出ている。

これをみると、現代でも積極的にボーイ・ハントする女の子は、姓の上の発音さえきけば、すぐ判別できるが、既に千二百年の前の時点から、彼女らは男を征服するため、当時のハント・バーに屯していたようである。昔から恐い女はいたものらしい。

そして当時「語部」として〈日本後紀〉などに、その名を残している「さるめ」という女尊族は、当局の弾圧に追われたのか、この時点から、伴った男共の「小野姓」を用い、指名手配の網をくぐって各地に散らばっていることになる。

もとより女尊民族である彼ら日本原住民系は、神徒であるから、小野姓に神官が多いのも判るし、「語部」という歌姫兼物語屋だから、つい喋舌って廻る話の一人称に「オノ」の呼び方をつけてしまいこれが「小野」という姓を弘めたのも事実であろう。また、「小野於通」が浄瑠璃の元祖という説も、語部部族の末裔だから、当然と見られているし、また彼女が「剣豪」であったという事も、なにしろ女将が剣をふるって外来民族を悩ました純日本女性サルメの血脈ゆえ、これまた、強くても遺伝によるものらしい。

さて、

サルメが小野姓に変った八世紀から星霜改まって一五世紀の末、応仁の乱が終った頃から、この小野サルメの女群が、いま仏法僧で有名な東三河の鳳来寺山に巣くい、彼女らは、「山の神」として、近在の男をハントしてきて、これを夫という名の許に、酷使していたのは、〈柳田国男・和泉式部の足袋〉〈愛知県豊橋史稿〉にも出ている。当然彼女らは神徒ではあるが、住みついている鳳来寺の薬師信仰も、また持っていた。

「……徳川家康は、その生母お大が、鳳来寺を信仰し、その十二神将の一人が生まれ変ったものである。つまり家康こそ、純日本系民族のホープである」と各地を宣伝して廻って、ついに家康に天下を取らせた女子遊説行動隊の、ここが本拠である。〈史疑徳川家康〉によると、その生母の於大も、やはりサルメの一人らしい。そうなると現在のPTAの「母の会」のようでもあるらしい。だからサルメの「小野お通」が駿府城で家康と暮し、その衣冠装束の画像などをかき、元和二年（一六一六）三月五日没という〈累世優婦附録〉や〈掃聚雑誌〉の記載も否定はできない。話に合理性があるからである。

サルメというと、この時代の古文献には、「サルメモノ」「サルメ冠者」という用語がある。「サルメ族の男。女に擯られている男」の意味らしい。だが、これを取り違えたのが、江戸後期の〈絵本太閤記〉で、木下藤吉郎を、「猿面冠者」となし、顔が似ていたと称し、心やすく信長あたりから「サルめ」と呼ばせているが、これは「猿め」ではなく「サルメ」という。この部族の呼称を誤ったものであろう。なにしろ原住民系では、猿は馬や人間の病を治す霊獣とされ、キャッキャッと騒ぐ相似点からか、「女」と同じように「山の神」とも尊ばれていたものである。

享和二年（一八〇二）に記念碑が建てられた津山の地侍岸本彦兵衛の娘つうと云うのがある。母方の小野姓を名のり、「美女の誉れたかく宮中に入って、十二の壇に水桶をならべ帝の病気を折伏したから、恐れ多くも、帝より〈白神大明神〉の神号を賜って後宮に入り二十八歳で昇天」

と、山本北山が碑文をかき、それが〈東作誌〉に伝わり、続く文化文政の木版出版ブームに、黄表紙や絵草紙で、弁天さまの生まれ変りにまで讃えられ、おおいに世に広まった。これが吉川宮本武蔵の「お通」の原型であるが、どうも感心しない。なにしろ昭和二十年代まで純日本系は家系調査を厳重にし他系とは通婚しない厳しい鉄則があるのに、オ姓の女が、キ姓の岸本彦兵衛に嫁ぐ筈とてない。それに御所では忌み嫌う





「白神」の称号を賜るなど、これは信じ難い。

さて〈真田稔所蔵文書〉の中に〈金葉集〉というのがある。

その終りに、「天正十一年（一八五三）みのとひつじの歳、四月二十二日に書き終る。みのの国北方の里、小野まさ秀が娘小野つう筆」とある。於通の真筆とされている。

また同文書の中の〈紫野前大徳天祐書簡〉にも「通の父は小野政秀にして」とこれにも出ている。

だから〈玉露証話〉にある「播州産れの説」や〈東作誌〉の「作州産れ」より信頼性がある。

しかしである。

ただ、この天正十一年四月二十二日という日は……

信長に林佐渡守らと共に追放処分をされた美濃三人衆の安藤守就（〈信長公記〉では安東伊賀）が、本能寺の変後旧領の北方城を奪還して、これに立て籠り、稲葉一鉄と戦ったが破れて、この北方の里は当時は織田信孝の領分であり、

「正月八日付で信孝は、旧伊賀守領分から三千貫を城をあくまで守りぬいた岡本次兵衛へ与えた」

という古記録がある。そして〈吉田兼見卿記〉の四月二十二日の条には「神戸城主小島民部とその異父弟の織田信孝の母である板御前は、孫娘と共に秀吉のため磔刑にさる」とあるように、この辺り一帯は混乱しきった戦火渦巻く時点である。

ふつうの女人なら筆をとる事など思いもよらぬ時であろうが、小野派一刀流の開祖とも云われる彼女のことゆえ、鎧に身をかためながら、矢立の筆をとって静かに書いていたのであろう。なにしろ純日本系の女性には、何歳になっても美しい人が多いが、小野お通は美女中の美女。さぞかし鎧姿もあでやかであったであろう。とも想像されている。

が物語は天正三年、お通十七歳の夏。織田信長の軍勢に、美濃衆の氏家勢、稲葉勢と共に、安藤勢の北方党も加わって、敦賀へ雪崩をうって乱入した八月十五日に始まる。

## 2　そして……強かりき

「……わ、わりゃ女ごかや」と、まだ激しい息づかいが余震にも似て揺れる唇から、呻きのように洩れ、指

さきがのび、
「なあ、こりゃ女ごじゃろうがのう」と掠れた声が喘えぎ、
「ここは何じゃえ」と弓だこに塊った固い掌で押さえられた。
しまいには、じれったそうに、つうの胸をばつまみあげ、
「なんとか申せ」と肚だたしそうに、背中から叱りつけた。
背後から羽交締めの恰好の儘だった。つうは、もがくに藻掻けず、のたうつように身を縮め、やっとの想いで信長に、
「すみませぬ」ふるえて詫びた。すると背中から躰を離し、
「仕様がないわえ。知らんともう過ごしてしもうたぞえ……」と、ばつが悪そうに、今つうに触れた掌を、掛布でこすり、
「それにしても、よおも若衆にまんまと成りおわせていたものよ」と舌うちし「……うぬが女とは、ちいとも気づかなんだわえ」と、吐きだすよう云った。キンキンとした声だった。
(稚児と間違われ床御用を仰せつけられ、それが済んでしまった後で、初めて女体と気づかれ、立腹されていなさる)とは、つうにも、はっきり呑みこめた。だから如何なる咎めにあうかと恐ろしく、息もひそめて隙を窺い肢体をねじって、
「……恐れいりまする」と抜け出ようとした。
すると、
「待て」気配を察した信長に、背後から覆いかぶさるように押さえられた。動けもしなくなった。信長も照れ臭さそうに、
「なんで……若衆姿で物具をつけ、戦には出てきたのぞ」
ねとりとした粘っこい息吹きを、つうの耳朶へ吐きかけ、生温い唾を、蛛蜘の巣みたいに絲になってひかせた。
だが、つうは信長が恐ろしく、ゼイゼイ声で背を震わせていた。(ここで殺されては、何の為に越前くんだりまでついてきて、武者をしたのか判らなくなる。それでは美濃で待っていなさる阿袋さまが憐れじゃが……)
と口惜しさに止めどなく泪が溢れだした。
引っ掻いたように肉の削がれた痕のある、信長の手先が眼の前にきた。襟首でも締めつけられるかと、つうは、どきりとした。
だが、その指先は顎のところで止って撫ぜ廻し、
「うん。やはり女ごじゃ、すべすべしとるのう」といった。
だが、吻っとする間もなく抱えこまれたつうは、向きをかえられた。華奢なつうの躰は、弓なりにそったままで、信長の腕の中で撓った。男髷に結ってある髪がとけかけてきた。
「……泣かんと此方を向けやぁ、話となると、やっぱし顔が合うとらんと、どうも口がききにくい。な、そうじゃろ」
掌で、つうの顔を挟みこみながら、信長は白い歯をみせ、それから少し眼に角をたて、まるで見据えるように、
「……うぬは北方衆。安藤伊賀守の家人じゃが……伊賀は其方を女ごと知っとるんかの」とすこし強い声をきかせた。
「御内聞に」と、愕いたつうは、けたたましい声をはりあげ、三角に陽やけした信長の胸に、突きこむように顔をねじこみ、……内緒にして下さらねば、困りまする」と懇願した。
男の児じゃから女の児じゃからと、美濃の山奥などでは、着る物に区別とてない。藤の蔓で織った裾短な黒っぽい物を着せられていた。つうも子供の頃には気にしてなかった。
だが、やはり物心がついてくると、自分でも何か、そぐわない心地はしてきた。だから母親に口籠りつつ、そっと、
「うちは阿袋さまがように女ごか。阿父のような男かや」
と聞いてみた事があった。すると気のよい母は泪をみせ、
「不憫やのう」と頭をなぜ「……なんせ、お前が親爺さまは、長い間、子がのうて初めての身籠りゆえ、わしに男を産めえと、あけくれ矢の催促。が、いくら責められたとて子は天からの授かりもの…」と、また眼

頭を押さえて泪ぐんだ。
「そんで、どないしたと」
せきこんで、つうが畳みかけるように訊けば、
「産まれた子が、そなたなのに、親爺さまは……こりゃ男じゃ。きっと儂の念力で男の児にして見せようぞと、頑固な無茶をこかれて、小さいときからのう、楡の枝にいちびの樹皮をはった弓をもたせたり、小刀をささせて、日に百遍も抜かせる稽古。それに近頃は馬のりまでもさせられて……」
阿袋さまは言葉も続かず、袂で顔を包みこんでしまった。
ふいに不憫がられて泣かれ、つうはかえって妙な気がした。
幼い頃から色々と父に躾されて育っていたから、左程まで自分では苦しく想っていなかったからである。それなのに阿袋さまは、目くじらをたて、つうを犇と抱きしめ、
「今に待つがよい。そなたに女ごのしるしがきたら、親爺さまが何んと吐うと、わしが赤まんまで祝うて女ごに戻したるわい、なあ待ちや……」と唇をかんで固く約束をしてくれた。
もちろん童だったつうに、意味なぞ呑みこめもしない。
なにを阿袋さまは一人でやきもきしてなさるかと想った。
それより阿袋さまの話の、女ごのしるしなぞ、まだないから自分は男じゃと、つうは思いこみ、打ち太刀の稽古に、うき身をやつし、サアッと早抜きの修練にいそしんだ。
……初めて、それがあったのは、
永禄十二年（一五七〇）正月のことだった。
丁度、馬を乗り廻しているところだった。
生温かいぬくもりと腥さが匂った。だから馬の背の皮でも傷つけたのかと狼狽した。おどろき下へ飛び降りた。
だが馬の肢体は何ともなかった。腥い香いに誘われ、鴉がカアカア舞ってきた。その鴉が自分に啼いているし、脚許の残雪に茱萸みたいな紅いのが散っていたから、自分かとつうは想った。だが裾を上まで、たくしあげてみたが、何処にも擦り傷もなかった。そこ





で家へ戻るなり「あまり馬っこ乗り廻したで、赤いしじが出たぞね」と告げた。すると阿袋は、
「呆れたこっちゃ。しょっちゅう刀を振り廻わして怪我ばっかりしとるで、このこは血を流すを何とも思うとらんとね」
と汲み井戸から水をもってきて、つうの体を拭き清めると、とっておきの小豆を叺からだして水にふやかした。
「何にするん」と、悪戯をして見つかった後のように、神妙に、つうが上り框に腰をすえた儘で、そっと訊ねたところ、
「しょむない……つうが一人前の娘になった祝いに、赤飯をたくんじゃがね」と気忙しげに、かまどの火を吹いた。
「なんで祝うとね」しつこく母親に話をねだると、
「そんな事はええ……それよか冷たかろうが髪や顔も洗うて、すこし身綺麗にしとけや。赤まんまが出来たら芋の葉にくるんで、組頭のお嬶さまの許へ、ご挨拶しに行くんじゃぞえ」
といった。どうして挨拶しに行くのかと、又きけば、
「もう子がはらめる一人前の女ごになったと、婿探しの肝煎をして貰う為じゃろに……」と、自分の方が顔を赧くした。
「いやらし」
つうが大きく首をふって、むきになって唇を尖らせたとき、ギシギシと表戸が軋んだ。まるで外すように揺さぶられて、やっとあいた。粉雪がサアッと灰神楽のように舞いこんできた。曇っていたが、また降りだしたようである。
「おまえがとこの親爺どの……京の六条河原の戦で死なせたそうな……だで」と、その使者の男は、つうの方へ顎をしゃくり、せわしそうに、
「早よ跡目つぎの手続き、すぐせないかんぞや」といった。
「……へえ、京で、戦がありましたんかえ」
おろおろして、阿袋さまは、うわずった声を震わせた。
「信長さまに追い落された先の美濃国主の斎藤右兵衛大輔竜興さまが、ご家老の長井隼人さま始め美濃牢人衆をひきつれ、仇をしようと、信長さまがお守りして

いる公方さまの御座所へ、ふいに焼き討ちをかけてきたんじゃ。そして此方の美濃者を見つけると『おのれ裏切者め、よくも敵の信長づれに仕えおったな』と顔見知りゆえに追い廻し、首をあげて持ってったそうな……えらい災難に逢われたもんじゃなあ」

気の毒そうに手短にひといきに話をした。

そして使番の男は、

「去る六日に、信長さまがご自身で京へ向われ、加賀の越前門徒と一緒になって打ちこんできた斎藤勢を追いまくり、おまえがたの死んだ親爺どのの、葬い合戦はして下されたぞ」

と云いたし、掌をまるめ息を吐きかけ戻って行った。

かたびしの戸口を、送って行ったつうが閉め直し、戻ってくると、阿袋は、かまどの前にへたりこんで、放心したようにぼんやり坐りこんでしまっていた。つうが見かねて、

「確かりなされや」と抱えるように肩に手をやると、

「……せっかく、つうは女ごになったが、それは忘れて、また今迄通りの男になっとくりょ……でないと扶持が頂けぬ。くらしに掛ってくるぞな」と眼を据えたままで口走った。

豪い身分の衆なら女ごでも城もちにもなれ、殿様にもなれるが、つうの親爺さまづれの端武者の家では、戦働きの槍ふせぎが仕事ゆえ、男でないと跡目は許されなかった。

そこで二十貫扶持のお手当と、お長屋に住まわせて貰うため、その後のつうは、男になり切った。合戦にも出て働いた。

永禄十三年が四月から元亀元年(一五七〇)になり、その元亀も四年の七月から改って天正元年になった八月のこと。北近江の阿辻淡路守が叛旗を翻えし、突如として、加賀門徒の中心になっている平泉寺の玉泉坊らの僧兵と共に、信長さまを討とうとして攻めてきた。

織田勢の陣くばりは、いつも美濃衆が先陣におかれている。だからこの時も、まっ先に安藤伊賀の備えが襲われた。

「敵だ」「ふい討ちじゃ」

と周章ふためいた時は、揃いの墨染めの衣に鎧をつ





けた僧兵が、怒濤のごとくワアッとばかり押寄せていた。

大和の宝蔵院と並んで加賀の平泉寺も、槍術で知られた寺である。美濃者は槍をふるって、ぶん殴るか、はたきつけ叩くしか能がないのに、向うは急所を狙って、

「ズブリ」と刺し貫き「エイッ」とひねって突き上げる。

だから伊賀守の陣所は、見る間に屍の山に変ってきた。

つうも追いつめられ、主人の伊賀守の幔幕にまで逃げこんでいたが、やがて勝ち誇った僧兵共は群れをなして押寄せ、

「南無、大慈大悲の観音菩薩」とさきに引導を大声で渡しながら、槍を、まるで竹藪のように揃えウオッと迫ってきた。

(ここで死んだら、お扶持が貰えなくなって残る阿袋さまが難儀するじゃろ)と、つうが身構えていると、僧兵共は、

「伊賀守どの、御首頂戴」「われらの手にかかれば成仏すること疑いなし」

「さあ安心して死になされ」と口々に呼ばわって、安藤伊賀守一人を目掛けて殺到していった。

つうは、自分が先槍に狙われているのではないと判ったから、吻っとはしたものの、よく考えてみれば、扶持を出してくれるのは伊賀守である。だから、主人を殺させては後で困ると、

「……おのれ」と駆けよりざま、下から掬い上げるように、まず近いところの一人に抜き打ちを浴びせかけた。すると、

「こらッ、坊主殺せば、七代祟るぞ」

次の坊主が突き掛った。それを文字通り袈裟掛けにした。

その返す刃で、躍り掛ってくる大坊主の槍のけら首を叩き斬り、踏みこみざま鉢巻の上から頭のてっぺんを、

「ヤアッ」とひと声、たたき割った。西瓜のように赤かった。

夢中だったから、つうは何人斬ったか覚えもしなかった。

打ち刀が刃こぼれして曲がり、もう鞘に戻らなくなった。

（これは難儀な、阿袋さまに戻ったら叱られるじゃろ）

と胸を痛め、どうしようかと泣きべそをかいていると、

「まだ前髪だちの小童のくせ、ようやった。うぬの働きに肝をつぶし、僧兵どもは退散しくさったわ。加増してやるぞ」

命拾いした安藤伊賀守が、予備の打ち刀を一本くれた上に、五十貫に取立て留守武者として旗本にも加えてくれた。

それから足かけ二年、つうは、いつも伊賀守の身辺に、戦いのときはついた。護衛の役目である。今度の越前攻めにもついてきて、大塩の円強寺の僧兵が打ち鉦ならして攻め寄せてきたとき、やはり刀を抜いて右へ左へと斬り払った。

それを、御本陣から馬をのり出してきた信長さまがじっと見つめて居られやがて、

「あの若衆をよべ」との沙汰が掛ってきたのである。

主人の伊賀守は「当節は、弓を調度、槍を道具とよんで、刀は、てんで問題にされとらん代物じゃ。つまり槍を失った時の防ぎに使うか、又は腹を割る時の用ぐらいにしか皆は考えとらんが、其方の太刀さばきには、槍にも優るものがある……そこで、あの信長さまは御眼識のある方ゆえ、さだめし、其方の刀術についての御下問を、なさるじゃろ」と呼出しの話をしながら、あれこれと注意もされた。

つうにしてみれば、今は亡き父から手ほどきをうけ、幼ない頃から引き抜き打ち合いしてきた太刀筋を、認められたのは嬉しかった。取るものもとりあえず、いそいそと赴いた処、「こちらへ」と案内されたのは寝所だった。

つうは初めは不審に想ったが、子供の頃、「槍は合戦の時、つまり野外には向くが、家の中では、梁や天井の鴨居つかえて振り廻わせなど出来ぬて」といっていた生前の阿父の言葉を想い出し、さては、ここで試めされるのかと思案した。するとその内に、

「お成り」と警蹕の声がした。信長が近づく跫音がした。

はっとして手をつき伏すると、甲高いキンキン声





で、「まだ物具などつけたまんまか……不粋な若衆よな。早よ脱いで、こっちへ入ってこんかえ」と気忙しく我鳴りたてた。

おそるおそる言われる儘に寄ってゆくと、

「愛しい若衆よ」と、うむを云わさず背後から組敷かれた。つうは、

（刀術を見て頂こう）と刀の鯉口は切り弛めていたが、まさか軀は弛めはしてなかった。だから狼狽し声も出ずだった。

### 3　されど……夢ありき

「なにも恥ずかしがらんでもええ、もそっと此方へこんかえ」脂で、てかてか光らせた貌を紙燭の脇からつきだし、

「……この秀吉はな、亡くなられた信長さまとは違うて、そもじを男のように愛そうと云うんじゃない。ちゃんと、女ごとして可愛がってやろうと、申して居るのじゃえ、判るかや」ぐっと肩をひきよせられ、のしかかるように抱かれた。

「……もう、とっくに二十代になっとるに、若衆髷で男姿も辛気くさかろ。髪をのばし有りの儘の女ごの姿に戻ったら、ええんじゃ……自分でも今の儘では、難儀しとろうがのう」

耳許に囁かれると、つうも、かねて胸を痛めた事だけに、それには思わず、コクリとうなずいてしまった。すると、

「よし、よし、この秀吉が女にしてやろうぞ、委せろや」

言われてしまうと、むげに断わりきれぬ立場だった。

なにしろ、つうは本能寺で信長さまが死なれた後、さきに佐久間や林佐渡らと一緒に追放されていた旧主の安藤守就が、その伜の尚就を陣頭に旧領の北方城を取り戻すとき、

「昔馴染じゃ、手をかしてくれろや」と懇望されると、今では織田家直参の身でも、親代々旧主の事ゆえ、

「承って……」と美濃関の剛刀を三本も予備に運ばせ出陣したつうは目釘の続く限り刀身の折れ散るまで、斬って斬って切りまくった。

北方城を取り戻したあと、安八郡曽根の城主稲葉一鉄が、

「信長さまの死後すぐに北方に拠るとは、明智方と覚えたり」と軍勢を催して「謀叛退治」と押し寄せて来た時も、

「われに続け」とばかり、つうは厚刃の刀を振りまわし安藤勢の先手となって、稲葉方へ何度も斬りこみをかけた。

「北方の小野……」といえば、美濃では鬼神のごとくに恐れられていたから、つうが駒に跨って現れると、近よる前に、

「それッ」とばかり稲葉勢は浮き足だって逃げ腰になった。

しかし六月十三日の山崎円明寺川の戦いで、明智方が破れ、勝った秀吉が織田信孝を奉じて美濃入りしてくると、情勢は、すっかり一変して、安藤方は不利になってしまった。

「もはや力づくでは、天下の大軍を相手には、こない小城では抗しきれぬ。そもじは故信長さまのお側近く仕え、秀吉とも親しかったもの、ひとつ談合の使者に立ってくりゃ」

と伊賀守に頼まれた。秀吉は長松からもう大垣まで迫っていた。そこで早速、つうが馬をかけさせて出かけた後、まるで留守を狙っていたように、稲葉勢が四方から攻めたてた。

既に戦意を失いかけていた北方城は、防ぎ切れずに落城。

ようやく、つうが秀吉に目見得を許された時には、既に、もうなにもかも終っていた。なにしろ

「見てみい」と、安藤伊賀守父子の首が、塩漬けになって、もう届けられていたのである。

つうは、まるで自分から、捕えられる為に秀吉の許へ訪れたような結果になってしまった。

だから、つうとしては、秀吉に引き寄せられ、ねとねと脂の浮く鼻をすりつけられても、逃げも拒みもできなかった。

「……そもじの太刀捌き絶妙にて、水も洩さぬ早さで一刀にて叩き伏せるとかで……世間の奴輩は、みな男と間違えて居るがのう。儂ゃ前から腰のふくらみに、はてと目をつけて居ったのじゃぞえ」と、抱えるように撫ぜまわされた。

（いやだ）と瘧のように、つうは震えがきた。吐き気





が、グイグイこみ上げるように催おしてきた。それを噛みこもうとすると痙攣がきた。ピクピク眉まで動くのが自分にも判った。

つうはワッと哭きだしたかったし、キャッと遁げ出したかった。いくら下唇を噛みしめたところで、嫌いと肌で感じてしまうと、もう女の身はどうにも辛抱のしようもない。

蚯蚓のように這いまわる指先の感触が、まるで布地越しに肌に溝を削ってゆくよう、つうはそそけだってきた。

「……震えとるは恥ずかしいのかや。まんだ初心じゃのう」ひき蛙のように粘っこい唇が、つうの項に蛭みたいに吸いついてきた。もう堪かりね、のけぞるように軀を撓わせ、

「……お許しを」と喘えぎに訴えた。

そして床の間の刀架に立てかけてある秀吉の佩刀に、眼がいった。突きとばし、あの刀の柄にさえ掌をあてれば、真っ向唐竹割りに、この男を今でも二分できる。とは想った。

（だが秀吉を斬り倒せば、自分も殺される。それに、好きな男だったら……もし今は憎くても、かつて心を許した男なら、女は、それを殺して自分も共に死ねもしよう……しかし好きでもない男を、どうして斬り殺して、それで死のうと想える女がいるものか……いやな男など殺せるものか）

と云って、小娘みたいに泣き叫けんだとて、もう齢のすぎた女には、索めたくたって、甘えさせてくれる期待はない。

（みじめな）とは考える。だが諦めしかないようである。

だから、つうは疼く心を鎮めながらも（おのれ）と歯軋りをした。己れの体内に入ってくる秀吉を、切ないまでの肚立たしさと、口惜しまぎれの物狂おしさで、これでもかこれでもかと、馬の背を挟みこんで責めたてるように締めあげた。

せめてもの仕返し。それが怨みをはらす存念でもあった。

「……其方が信長さまに仕込まれたのは前尻ではなかった筈じゃに、さすが刀捌きの妙手だけあって見事な

ものよ、よお小気味よく巾着のごとしめおったのう」

と秀吉は賞めちぎって、身柄を放ってくれた。

そして、

「……糸貫川にそった北方一万貫は、今は信孝さまの御所領になっとるので、其方の親爺が在所、武儀川沿い二千貫を呉れてやらす。励んで勤めおった枕金じゃぞえ」

と褒美までくれた。つうにすれば、さっぱり理解に苦しむ沙汰だった。が、おおかた締めつけ痛めつけられた秀吉が、怖毛をふるっての処置でもあろうと、自分なりに判断した。

武儀という土地は、郡上と山県に挟まれ、現在でも北武芸村から始って、上野街道は西武芸村。御鉢神社からは東武芸村。関の孫六で名高い鍛冶の関までは、四分された広大な地域で、鎌倉時代に武芸でなり響いていたので、武芸村の名があったのである。

つうの父の政秀は伊賀守に奉公していて身分は端武者だが、この武芸村四ヵ村では、名のある武芸者だった。そこで、その跡目が、ところの館主になって戻ってきたというので、

「是非とも、一手御伝授を……」と、次々と地侍が争い詰めかけた。

だが、つうは、この山中に引籠ったのを潮に、髪をのばそう。女人に戻ろうと、心を決めて戻ってきたのである。だから伸ばしかけの髪に頭巾を冠って、一々応対するのも煩わしい。そこで、面会はさけ一室にこもって筆をとった。

と云うのは、この武儀川べりは山地で作物がとれない。

その代り、山には桑に似た葉をつける楮の樹が密生していて、春になれば薄黄、薄緑の花が山肌をそめ、夏になると甘い実が赤く色づく。土地の者は、この樹の皮を枯枝で煮つめて、川へもっていって海苔を作るように晒すのである。

つまり美濃紙の産地である。よその土地で買えば高価な物だが、つうの許へは年貢として山になって積みこまれてくる。

紙買いが舟できたり、連雀板をしょって、夏には仕入れにくるが、すこしでも端の汚れている物は引取ってゆかない。





百枚に一枚のはね出しでも、武芸四ヵ村からの分量となると、夥しい数になる。そこで勿体ないと、つうは文字を、それに書きだした。初めは岐阜城や安土の城で耳にした、「浄瑠璃姫が牛若丸の花嫁御寮になる」という話を纏めてみた。

なにしろはねだしの紙が余っているから、村内で文字のかける女共に、これを写しとらせた。

……これが今日の〈別記浄瑠璃〉の始まりだと言うし、これから現代の製紙会社や印刷屋で、はねだしの屑紙を「ベッキ」とよび、書き損じを男共が胡麻化していないと高々と、長い槍にさし集め戻しにきた武芸村の故事から、印刷のすり損いを「刷りヤリ」と言うと〈本朝紙漉考〉にはある。

しまいに書くことがなくなって、つうは自分のことをかいた。当時は、女体のそこを「玉葉」と美しく形容するのが、みやびだったが、信長を偲び「金葉」と題をつけたのらしい。

彼女の自筆の奥書によれば、それを脱稿したのが、天正十一年四月二十二日であるとは前述した。

「なに陣ぶれが参ったと……」

一年たって肩まで伸び揃った髪毛をふりながら、つうは眼を伏せた。そして、すぐさま部屋へ戻ると、心しずかに最後の奥書をしたため、傍の侍女に絲で綴じつけさせた。

「明後日の夜あけまでには出陣の仕度をしや」と集めた者共に云いつけ、倉から、かねて美濃紙をうった銭で買い求めてある米俵を担ぎ出させた。兵粮の腰弁当を揃えてやる為である。

武芸村から岐阜へ出るのは、陸路なら美濃街道を高富へで、そこから三田洞と出るのだが、つうは武儀川で加野まで下り犬山街道の渡しから、合流する長良川へ出ようとした。

だが不意の事なので、三、四人しかのれぬ紙すき舟が二十隻しか集らなかった。それなのに夜が白んでくると、槍を担ぎ刀をさした武芸自慢が、次々と二百余も集ってきた。

戦に出かけるとなると、人間ばかりを連れてゆけるものではない。米俵も舟にのせねばならぬし、鍋釜や薪木。味噌、塩の叭もいる。つうの乗馬を一頭のせる

だけでも大変だった。

だから集った中から三十名だけ舟にのせ、残りは後から陸路で追わせることにした。しかし手順が遅れて、どうにか出陣できたのは昼すぎになった。

だから津保川、長良川、武儀川の三つ又あたり迄きた頃には、とっぷり陽は落ちてしまった。

新月の淡い月影を頼りに舟をすすめ、もし川岸の岩にでも当ったら災難と、川洲の保戸島へ上陸した。

昔、一向門徒の坊門砦のあった跡である。

腐りかけの板屋根だが、そこで夜露をしのいで朝をまち、一日分の腰弁当を拵えようと、枯木を集め火をもやしていると、ド、ドン、ドンと烈しく銃砲玉がうちこまれてきた。

面喰ったつうが、島の中では足場が悪いと、背よりも高い葦の葉を刈らせ、それで舟を隠して対岸の保明へでると、

「ワアッ」と番場山から駈け出してきた軍勢に囲まれた。

「……陣ぶれの知らせをうけ、岐阜城へ駈けつける武芸二千貫の小野於通ぞ。周章くさって味方うちをすんな……うろたえるな」

と曳きだした馬に跨がり、紅緑おどしの女鎧の胸板を陽に光らせ、つうが、はったと睨みつけると、向うは驚かず、

「さては、いま噂に高い女武者か……それにしても、今頃寝呆けくさって山の中から出てくるとは、笑止千万」

と声を揃えて囃したてられた。そして、そのあげく、

「知らずば教えて遣わすが、四日前、大垣城にござった秀吉どのが、木ノ本へ駈けてゆかれた賤ガ岳合戦はお味方の大勝利。うぬらが今から赴こうとする岐阜城も、たった今しがた落城の烽火が、あがったところじゃぞえ」と怒鳴られた。

「えッ」とばかり、つうも愕き馬上で息を大きく呑んだ。

一年前までは何があっても「信長さま」「上さま」と、あけくれ口にしていた秀吉が、まさか信長の血肉を分けた伜殿の織田信孝を、無惨や攻め滅ぼそうなどとは、つうは夢にも考えていなかったからである。

ただもう呆気にとられてしまった。





すると、である。

「さあ降人せい。秀吉さま御陣中へ召し連れようぞ」

つうの一行が僅か三十人なので、見縊ったのであろうか。

「これッ女武者、神妙にせい」

と大音声で呼ばわって、栗毛の駒を走らせてきたのがいる。近づくにつれ、大兜の白銀の前立がピカピカ陽に輝やいた。鎧は厚重ねの黒糸威し。胸板の黒漆も陽に照って、金箔おいた上り藤の紋章がチカチカ眼を射ってきた。

物頭役か、武者奉行らしく、脇武者とみえるのが槍を構えて四人。鉄砲の筒を抱えた足軽が五人。駒脚に遅れまいと、ひた走りに駆けよってきた。つうの伴ってきた武芸の者も、

「引返しなされませ」

周章て、つうの駒の轡をつかもうとした。

が、その時、早く、向うの栗毛の駒の長い鼻づらが、つうの頬にふれんばかりに近よっていた。ぐっと籠手がのび、

「こう来なされ」と、つうの腰を抱えこもうとした。

「不埒な」

と、つうが叫けんだとき、向うの武者の口から、

「あッ」と、唯ひとこと。言葉が洩れたようにも聴えたが、

「ダアッ」と音させ、上へ噴き上げる血の迸りに声は消された。そして白銀の前立を、自分の血のりで朱にそめ、

「ドッ」とばかり、もんどりうって鞍から落ちた。

が、鐙から武者草鞋の爪先が離れず、その儘、血の奔流をふり撒くように、駒の尻尾にひきずられ走っていった。

「……おのれッ」

と一足おくれて駈けよった家来の脇武者共が、てんでに、

「思い知れッ」と突きだす槍を、血刀ふるって、つうは、

「おう」と一声。

掛け声もろとも宙に向けカッと斬りとばすと、横から繰りこんできた槍のけら首を、腕で押さえ抱えこみ、たぐり寄せるや、返す刀で、ものをも云わず、ズ

ッテンドウと叩き割り。
頭を切られた味方の脇武者に気をとられ、筒先の狙いの定まらぬ足軽に、次に眼をやれば、つうは、いきなり手綱をひきしめ、ガバッと駒脚を、飛びこむように乗り入れざま、
「観念せいや」
と右に左に斬り伏せる。すると、それに勢いを得て、
「鉄砲じゃ。玉薬諸共、分捕れや」と、武芸村の三十人も、ひと塊りになって、鉄砲足軽を包みこみ、まだ生きているのは滅多打ちにぶん殴って蜂の巣にしてしまい、さて、
「ここは……この取り上げた鉄砲五挺で喰い止めまする」
「……おやかたは早よう、サア舟で引きあげなされませ」
とロ々に何とか逃がそうと必死に庇いだてる。がつうは、
「いやじゃ。かくなるうえは一緒じゃ」と、返り血をべったりと浴びて塊った黒髪をふり、刃のかけた刀を新しく取替えると、
「いざ、突きこみ、斬り崩すべし」と声をはりあげた。
てんでに血のりのついた掌を、蔓のような紅い小花をつけた水引草の、柔かな大きな葉でごしごし擦りながら、
「ならば……」と分捕った鉄砲を構えた五人を先頭にたて、
「オウ」「オウ」勇み声をあげて進んだ。だが、途中で、
「……俺たち男は皆、斬り死にしてもええ。何としても、女ごの、おつうさまは落し参らせよ」と互いに頷きあい、
「さて撃つべし」とドンと硝煙の幕をはりめぐらし、
「それッ」と関の声をあげると早咲きの躑躅が、まるで鮮血のように赤く映る叢をかきわけ、男共は左右に刀をふりまわしながら、一斉に敵陣へと斬りこんで行った。

4　終わりに……恋ありき

「これ、おつう……わりゃ、なんで、そのとき、向う





の物頭を、ばっさり斬って、男共三十人を率い暴れこんだのか」家康は眼を細くして、にやにやし、それから声を落し、
「お蔭げで其後のつうは、もう武儀の武芸村へも戻れんと、諸国を流れ、流れての女武者……終には浄瑠璃語りを鉦叩きの女共とも、やって廻ったそうではないか」ともいった。
「はあ……」つうも照れて恥ずかしそうに頬を赤く染めると、
そもそも「うん、つうを最初に女ごにしたのはあの太閤じゃと、本人の口から聴いて居るぞよ……儂が伏見城にいた頃も、余程、おつうが良かったとみえ、女の話になると、いつも、小野の於通の名がまっ先じゃ、そんでな太閤が懐かしさのあまりか『於通こそ天下一等の美人じゃった』と盛んに吹聴されたで、見てみい。今では『小野の小町か、小野の於通か』と綺麗な女ごの世間の通り相場になっとる位じゃそうな」
「……済みませぬ」つうは頭を伏せた。が、ばつ悪そうに含み笑いをした。
「何も可笑しいことはないわえ……この家康じゃとて、そもじを初めて見る迄は、そない天下一品の美女が、この世に居るならば、男と産まれた命冥加に、一度は、この腕で抱きしめたいと……見ぬ恋に、胸をときめかしたものぞ。まことじゃ」
「……大御所さまのお口の悪さ……あまり、おなぶり遊ばされるものでは、ござりませぬえ」と怨めしげに云えば、
「いや、いや男心とは、そないなものじゃ。酒か、女ごか、何ぞ励みになる愉しみがない事にゃ、働く詮方とてないものよ。じゃによって、鳳来寺のさるめの女共に云いつけ、於通という天下一の美形を、やっとの事で探しあてたのぞ」
「……それが本当なら、噂まけして、なんとも済みませぬ」
「いや詫びいでもいい。昔は、さぞかしと思い居るでのう」
「まあ、大御所様には、苦しゅうござりまするな……」
つうは小娘のように、のびのびと笑い声をたてた。
「まあ、そう笑いものにすんな……それより、あれだけ太閤が、草の根わけて探していた時、なんで戻って

やらなんだ。太閤は熱にうなされて息をひきとるまで『つう、つう、れろれろ、連れろ。つう連れろ』と譫されて、謡うように譫言をいい、淀や松の丸の側室衆はもとより、今は高台院とよばれとる北の政所も、あの気性ゆえ、カンカンじゃったそうなぞ……さだめし、あれでは魂魄、宙に迷って成仏できず、今に『つう連れろ』と化けてくるじゃろうな……覚悟しとけ」

と家康も子供をからかうように、真面目くさって嚇かした。

そして暫く考えこんでから、「……何も初めての男と云うではなし、既に契りを結んだ男女の仲で、なんで、つうは太閤の側へ行かなんだ。行ってやれば、あれだけ先方は執心じゃったから、さぞ太閤も大喜びしたろうし、つうも、何も好んで苦労して流れ歩かんでも、何処ぞの女城主にして貰えて栄耀栄華は思いの儘じゃったろうになあ」と首を傾げた。

「そこで、ござりまする……」

うらぶれ流れ歩いた頃でも想い出したか、つうは、うっすら泪を浮かべ「……殿方は、一度でも枕をかわした女ごは、もう自分のものと……馬の尻っぺたに焼印でも押したよう思うてござらっしゃる……それでな、女ごは最初だけ無理強いしても抱いておけば、あとは如何ようでも、思いの儘になるものと勝手に思いきめてござる……」と声を湿らせた。

「違うと、申すのか」

つられて家康も、声を落して尋ねかけた。

「はい」つうは大きく頷くと「女ごにとって、肌身を許すは、一回ごと、の勝負のようなものにござりまする。今日は契ったとて、明日また契るやどうやら、そりゃ、その場にならねば判りませぬ。いやと思う時には、たとえ夫と名のつく者でも、あく迄拒みもしまする。なんせ、女ごは堪え性のないもの……よし千回、万回枕を交した昔があったとて、心に染まぬことが起きますれば、側へ寄られただけでも、肌に粟粒がたちまする。うっかり肩に触られでもしてみなされ、唯それだけでも、すうっと肌に冷水を浴びせられたみたいに、ゾクッと致しまするが……」と声をひそめて教えたところ、

やにわに家康は、むんずと両手をひろげ、いきなり、「どうじゃ……」とつうを抱えこみ、これでもかとい





った具合に押えこみ「如何ぞ」と耳許へ囁きかけた。

「何がで、ござりましょう、のう」

そこで、顔を上気させたつうが、気まり悪げに犇と抱き締められた腕の中から、かぼそい声で尋ね返したところ、

「……この家康でも、やはり鳥肌がたつかや」といわれた。

つうは庭先の植込みに、真赤に花をひらいた牡丹へ眼を移しながら、じっと自分の肌を確かめるよう、息はずませつつ、厭ではないと、やがて微かに頸をふると、そっと指をのばし、まさぐるように、

「う、う」と声にもならぬ呻きを洩らし、家康の黒縮子の肩あたりに摑まると、爪をたてるように掻きむしり、ただぐうっと愉しそうに息をのんだ。

大坂城夏の陣の合戦が終った翌元和二年の三月。

風邪をこじらせ寝ついたきり、つうは、なかなか起きだせず、ずうっと病の床についていた。むうっとする薬湯を煎じる匂いの中で、うつらうつらして瞼も重い日がつづいた。だから、枕許で、その日、

「これ、つう」と呼ばれても、耳には届いたが、「はい」とは眼もあかなかったし、声も出なかった。

だが、家康が、わざわざ本丸から見舞いにきてくれたとは判った。嬉しかった。もう一度、抱いてほしいとも想った。

「不憫や……」そんな声も聴えてきた。そして、

「……この家康が死ねば、きっと供して死にまするぞと云うとった、つうが、先きにゆこうとは、なんじゃえ」

と掛夜具を揺られた。つうは何か云いわけをしたかったが、咽喉が詰って、声にはならなかった。それなのに家康は、

「……男も女も若いときは、互いに、すぐ後釜の良き代りも見つかろうかと迷いもでて、とかく本腰いれて、とことん庇い合おう、慈しみあおうと迄は出来ぬものじゃが、……年をとると、別のを探すのも臆劫になる。そんで、死なば諸共。来世へも、同行二人でゆける相手が、いとしゅうて愛しいもんじゃにのう……なあ、つうやもそっと生きろや」

と愚痴っぽく、洟水すする音さえも聴えてきた。

(そうかもしれない)つうも胸の中で低い動悸に合せ

て、それに頷いた。（愛している。好いたらしいと想うたとて、日がたち、時がすぎれば、うたかたの夢のようにも、忘れさっては消え散ってゆく。やはり、女と男の結びつきは、肌すりよせ睦みあう気ばらしでのうて、もうこない手も取れんようになって、そんで通いあう心の琴糸かも知れぬ。この、つうは、大御所さまに、ごつう好かれとるが、わたしかて、家康の殿がいとしいのぞえ）と、抉るようにも胸にひびかせた。

三つ巴みたいに、くるくる廻っていた男の貌の中から、まず秀吉が消え、次に青白い信長がふり落され、大御所家康の安らいだ顔だけがいつまでもつうの閉じた瞼に翳を残した。

そこで、つうは、自分も思いのたけを家康に、告げたかったし、聴いても欲しかった。せめて、ひとこと。何か口にしたかった。だが焦って胸をはずませると、「……か、た、な、」つい、口からいってしまった。「よし、よし魔除けに抱いてゆけや」と、すぐ侍女が袂で捧げてきた関の孫六銘の、つうの愛刀を、家康が自分で、もう平べったく薄くなった胸の谷間へ差し渡しにのせてくれた。

その重味に、つうは馬の鞍にうつ伏さったまま、抜身の刀を肩にあて、敵陣目がけて走りこむ、若き日の自分を蘇らせた。華やかな女武者ぶりに、噎せる血の匂いを嗅いだ。だが、

「確かりせい」と、家康の声をきくと、今度は急に佗びしくなって、流れ、流れて落ちゆく先は、と泪がぽつんとふきだし、堪らなくなってしまい、

「さ、み、し、い」最後の気力を搾っていった。すると家康は夜具の中の痩せおとろえた手の甲を、上からなぜ、

「いったる。わしもすぐ行ったる。つう一人はやらぬ」ぐっと握りしめ、声震わせて、滂沱と、ひからびた頬に泪をたらした。

この日、三月五日。

約束を違えず、翌月の四月十七日。同じ駿府城で、徳川家康も、あとを追って逝った。そして息を引き取る間際、しきりに、

「つう」「つう」と慕って名をよんだという。

……その後、三百五十年。誰いい出したのか。今でも、心と心が固く繋りあうことを「つう、つう」などと人はいう。これに、やはり因縁があるのであろう。



昭和46年7月15日　初版発行

検印省略

乱世武者列伝　¥390

著者　©1971　八切止夫
発行者　秋田貞夫
印刷所　中越印刷製紙株式会社

発行所　株式会社 秋田書店
郵便番号　101
東京都千代田区三崎町三丁目10番8号
振替東京 99353　電話（261）5151～5

乱丁、落丁がありましたら、本社でお取り替えいたします。

福島正美編

## SFエロチックミステリー

¥290 〒60

星新一、小松左京、筒井康隆、眉村卓、矢野徹、福島正美、豊田有恒など、現代のSF小説を代表する十人の競作。新鮮奇抜なエロティシズムと爽快なセンシビリティ横溢するSFのエッセンス！

福島正美編

## SFエロチックの夜

¥300 〒60

SFのウィット、残酷さ、ロマンチシズム、風刺など、SFのすべてを結集したSF作家十二人の競作集。星新一、小松左京、筒井康隆、眉村卓など、好評だったSFエロチックミステリー続刊！

福島正美編

## SFエロチックあらかると

¥300 〒60

星新一、小松左京等、現代を代表するSF作家のSFでしか扱えないエロチックなもの、グロテスクなもの、エキセントリックなものを集めてSFの魅力のすべてを結集したアンソロジー決定版！

五味康祐

## 暗い金曜日の麻雀

¥300 〒60

賭け麻雀の最中に喀血した中原の死因は、絶体絶命のイカサマ高等技術だったのか？　麻雀のダイゴ味を味わいながら読める、一刀斎麻雀の意外なイカサマ麻雀、芸術的？実践的麻雀を公開する！



藤島泰輔

## 男の契約

¥300 〒60

呼び屋の世界はきびしい。虚々実々のかけひきと特殊社会に生きる男達の競争、それに戦後のジャズ界の喧騒と哀歓を描いて、男の世界のすさまじい活力とむんむんする体臭を醸しだす長編傑作。

田宮虎彦

## 別れて生きる時も

¥260 〒60

これは、美智という平凡な一女性の半生を描いた悲しい記録である。愛情が純粋なかたちで、流麗な情感の美しさを示している作品が、他にないほどの感動を呼ぶ力作である。

笹沢左保

## 冷えた孤独

¥340 〒60

結婚して十四年、平凡な日々をおくっていた江美子が夫に疑いをもったのは、夫がいつもかかさず見ていたテレビのホームドラマを急に見なくなったからだった。孤独と人間不信を衝く傑作推理！

佐賀潜

## 非情の顔

¥340 〒60

大洋製糖の社長鳴海仙太郎は伊豆山の海辺を散歩中、何者かに崖から突き落とされる。顧問弁護士本庄五郎は犯人追及に乗り出すが……。複雑な現代社会に巣喰う悪の黒幕の実体を暴く産業推理！

大藪春彦
## 銃は知っている
¥340 〒60

愛する妻を殺した奴に復讐するため、オレは再び戻ってきた。血に飢えたルーガーが死を嗅ぎつけた時、オレの執念に燃えた復讐がはじまるのだ。硝煙と血の臭いただよう酷烈ハードボイルド！

大藪春彦
## 拳銃天使
¥340 〒60

兄を殺し、ガールフレンドを誘拐したヤツは絶対に許せない。オレの復讐の相手はチンピラヤクザではなく、殺し屋を操る冷酷な黒幕野郎なのだ。鮮烈な感覚と非情を謳う傑作ハードボイルド！

藤原審爾
## 殺しの手順
¥340 〒60

三億円の密輸代金のもつれから中国人ボス暗殺を依頼されたプロフェッショナル殺し屋の奇想天外な侵入作戦とは？　謀略と罠をめぐらす殺し屋の非情な世界を描く、痛快無比の異色アクション！

福本和也
## 暴発の罠
¥340 〒60

シャープな頭脳、クールな感覚、果敢な行動力を駆使して、一匹狼となって巨大な外国資本の謀略に敢然と挑戦する知的アウトローの痛快な活躍を描く、スリルとサスペンス溢れる産業推理傑作。



梶山季之
## 白い廃液
¥340 〒60

当代の人気作家が、非情・辣腕の産業スパイを主人公に、企業戦争の冷酷さ、その渦中にうごめく人間の狡猾さ、残忍性、男女愛欲の妖しさを、非情なタッチで展開する異色の産業ミステリー！

梶山季之
## 甘い樹液
¥340 〒60

映画スターばりの容姿と非情な行動力で企業戦力の秘密をかぎつけ、その醜い裏面をあばく辣腕の産業スパイ〝津村公〟。恐るべき産業スパイ事件に取材したドキュメントタッチの異色産業推理。

梶山季之
## 離婚請負業
¥300 〒60

新鮮な女体に酔い痴れた淫蕩な中年社長をめぐって企てられた、世にも奇妙な離婚請負業とは…。官能の世界を描いては当代随一の著者が、人妻、学生、処女を登場させて多彩に描く夜の愛欲図！

佐賀潜
## 殺意の蔭に
¥340 〒60

殺伐とした大都会の片隅で、次々と起こる複雑な犯罪――頼りになる海野漣子を助手に、絶望の底に喘ぐ被疑者を救うため、敢然と悪の世界に挑む正義派弁護士丹下千里。佐賀潜会心の推理小説。

佐賀潜
## 黒い策謀
¥340 〒60

社長の急死に乗じて専務一派は会社乗っ取りの黒い策謀をめぐらす。社長の息子は会社を追われるが、復讐を狙う息子と専務一派には思いがけない陥穽が待ちうけていた……。

佐賀潜
## 黒の追跡者
¥350 〒60

美貌の女社長をめぐって起る連続殺人事件の謎はどこに？　彼らは女を知りすぎたのか、あるいは欲望の挫折なのか。欲が欲を生み悪が悪を生む黒い影を追求する巨匠会心の長編推理小説！

藤田五郎
## 姐（あねご）御
¥340 〒60

姐御と呼ばれたその日から、暗い影を背負って生きてゆくように宿命づけられた女〝愛〟がたどる仁侠の道を、「無頼」「無頼詩集」の著者が凄艶に描く仁侠小説の真髄！

川上宗薫
## 魅惑の罠
¥350 〒60

激しい官能の充足を求めて愛の頂きに失神を夢みる女、倒錯した性にのみ燃えあがる女、孤独な愛につまずく女、さまざまな女のさまざまな愛の姿を強烈に描きつくす宗薫傑作小説集！



富島健夫
## 歪められた初夜
¥340 〒60

婚約者が友人に犯された——甘美な夢を無惨に砕かれた青年は憎悪と苦悩の果てについに殺意を抱く。そして復讐はとげられたのだが——青春小説の鬼才が放つ書きおろし長編！

八切止夫
## 戦国武者列伝
¥390 〒60

勇ましくも哀れで、ユーモア漂う戦国時代の武者群像を、武者を描いては追随をゆるさぬ著者が、その本領を発揮して捉えた傑作選！　八切文学の醍醐味が横溢する武者シリーズ第一弾！

八切止夫
## 乱世武者列伝
¥390 〒60

狂乱渦巻く乱世を強烈に生きた武者たちの生態を八切氏一流の天衣無縫の筆が捉える傑作小説集！好評の「戦国武者列伝」に続いて放つ、八切止夫武者シリーズの第二集！

## 現代推理小説選集 全13巻

第一線推理作家の代表作を集大成

❶有馬頼義 四万人の目撃者
❷黒岩重吾 休日の断崖
❸佐賀潜 黒の構図
❹結城昌治 ゴメスの名はゴメス
❺鮎川哲也 リラ荘殺人事件
❻佐野洋 秘密パーティ
❼多岐川恭 私の愛した悪党
❽島田一男 上を見るな
❾邦光史郎 黒の商標
❿戸川昌子 大いなる幻影
⓫三好徹 海の沈黙
⓬笹沢左保 招かれざる客

◆堂々完結！ 各巻¥340(〒60) ❷のみ¥390

## 時代推理小説選集 全12巻

香り高い名作の粋を廉価版で贈る

[1]柴田錬三郎 御存じ眠狂四郎
[2]南條範夫 素浪人月影兵庫
[3]野村胡堂 銭形平次捕物控
[4]久生十蘭 顎十郎捕物帳
[5]土師清二 おかく捕物帖
[6]高木彬光 振袖夜叉
[7]山手樹一郎 地獄ごよみ
[8]城昌幸 若さま侍捕物手帖
[9]横溝正史 人形佐七捕物文庫
[10]角田喜久雄 葵の花太郎行状記
[11]佐々木味津三 右門捕物帖
[12]村上元三 捕物そば屋

◆堂々全巻完結！ 各巻¥340(〒60)